

奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



8月

奇譚クラブ



8

奇譚クラブ
昭和三十一年八月一日創刊
編集者 八木 浩二
発行所 阿高堂出版
〒542 大阪市東区南船場二丁目二番地
電話 542-1111
定価 二〇〇円



新しい風俗文献誌

雑誌 2805-8

¥400

極彩色のカラーで描く
五人のM女の美しき生態

全裸開股開陳縛り
カラー三枚一組 一〇〇〇円
深田 菊子 略号△ある▽
思いきり両股をひらいて開陳する可憐で美しい女体も、縛られてこんなあどけない表情なのです。

白肌と赤白斑ら紐
カラー三枚一組 一〇〇〇円
深田 菊子 略号△あり▽
真白い肌をぐつとくびる斑ら紐の美しいコントラストは惨虐のなかに甘いムードを盛りあげる。

浣腸と緊縛と弄戯
カラー三枚一組 一〇〇〇円
福井 桃子 略号△あや▽
各種の浣腸器を前にして大の字に正面開股したマダムと後手高小手に縛られた。

縛りの羞恥に喘ぐ
カラー三枚一組 一〇〇〇円
笠井奈保子 略号△あむ▽
すぐ赤面する恥かしがり屋の奈保子が大好きな縄で縛られるというナマナマしい色彩の中の羞恥。

羞らしいの坩堝の中
大手札三枚一組 一〇〇〇円
笠井奈保子 略号△あも▽
原色のな配色の中心に全裸の肌に腋毛もあらわに練り展げられる緊縛と羞恥のかもしれない饗宴。

笠井奈保子 略号／あめ＼
細にくびられた乳房の先のグミ
のような乳首もピンク色に染まり

全裸を晒して縛られた美麗な女体
猿轡に悶える女体
カラ一三枚一組 一〇〇〇円
笠井奈保子 略号△あみ▽
嗤まされた豆絞りの猿轡にうめ
き思わず開股する女体の息づまる
ような迫真的な色美しきシーン。
全裸で見せる狂態
カラ一三枚一組 一〇〇〇円
松本 たえ 略号△あき▽
芸者福竜が全裸にひん割かれて
三種三様の縄にて変った縛りをさ
れ、そのM性を露呈してゆく。
強烈後手縛り展開
カラ一三枚一組 一〇〇〇円
松本 たえ 略号△あい▽
如何なる強烈な責めにも耐える
というM女の後細な裸身を嚴重に
縛りあげて執拗にいたぶり抜く。
臨月腹緊縛の発端
カラ一三枚一組 一〇〇〇円
福井 桃子 略号△ある▽
覚悟はしていても出産予定日が
目前に迫つてくれば躊躇するのだ
が、それを払いのけて緊縛する
便々たる太鼓腹を
カラ一三枚一組 一〇〇〇円
福井 桃子 略号△あね▽

拘束された臨月腹

丸々と極めて美しい線を見せた
妊孕腹をツンと突き出させて非情
な縄は妊婦の裸身からみつく

蛙腹にも強烈縄目

カラー三枚一組 一〇〇〇円
福井 桃子 略号△あよ▽

出産間際の便々たる蛙腹でも苦
しいのに、更に縄目も凄う後手高
手小手縛りが肌を痛めつける。

海老責め後手吊り

カラー二枚一組 八〇〇円
江口 淑子 略号△あお▽

強烈な海老責めと伸した後手を
逆に吊り上げた姿態のなかに、あ
られもないM女の秘密があった。

苦痛と喜悦の交錯

カラー二枚一組 八〇〇円
江口 淑子 略号△あわ▽

厳しい縄目で裸身をさいなまれ
る苦痛も彼女にとつては、身のお
きどころない甘い喜悦であった。

◎お申込みは前金にて、大阪市阿
倍野郵便局私書箱第14号天星社へ
略号記入の上、御注文下さい。送
料当方負担にて急送いたします。

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者
数多くの告白の投稿やモデルの風俗文
献誌としての純粋な研究熱心な本誌読者
の方々の期待に、どうも御遠慮なく勇気を出し
て御応募下さるようお願いしております。
○本誌愛読の女性の方で、国籍、遠近
に拘らず、年齢など一切問はず、採用さ
した方には、謝金として一回につき壹万円
拾万円まで、即金にてお払い致します。
○応募された方々の個人的な秘密の漏洩
は、御本人の許しがない限り絶対致し
故にお書き下さった方には、謝金に原稿料を、告白文
提供下さった方には、謝金に原稿料を、告白文
致します。尚、お申込みの節、お好み
などを出来るだけ詳しくお書き添え下されば
幸甚に存じます。

○撮影いたしました写真は、誌上掲載を原則
とはしていませんが、若し御都合以下に
表を望まれない場合は、その旨添記下さ
改めまして打ち合わせしたいと思います。助
介添えとしての出演、若しくは編纂部資料作
成について、プレイ出演などの役に任じて頂
きたいと思ひます。その際の報酬は、改め
個々に御相談に、応じたいと思ひます。

○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体
重などは必ずお書き添え願ひます。写真が
れば、同封下されば好都合ですが、お手元に適
当なものがないければ結構です。

申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第41号
桃出版株式会社 編集部

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

一、形式は、小説、創作、読物などのフィクションでも、告白、体験、手記のようなノ

著者の一方は登壇門として試みて下さい。作家を輩出させる新本誌の誌面を野心的に下さい。くまで野心的な新作の誌面を野心的に下さい。一、模倣とか垂流は絶対の排して下さい。な、模倣とか垂流は絶対の排して下さい。なども、如何を選んで御式の筆下でも最も得意とさる。それ、感想、形式紙、随筆、シナリオ、戯曲、ツ、の求めに就けば、すばらしいです。戻れば、添布下すれば、幸いです。欲ば、致しませう。写真、画、参考資料など大いに、見聞記、実、談やレポート、写真、画、参考資料など大いに、見聞記、

原稿は必ず二百字
御利用願います。

三、各校に制限を設ける。入選と同時に規定の賞金と贈呈料を掲載し、掲載の際に発表支障ありと思われれば削除するものとする。返戻は申請書上御承願を要する。故て原稿は原則として返戻は申請書上御承願を要する。懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿と区別するため、第一頁に「懸賞」とお書き下さい。ペンネーム、匿名は自由ですが、住所又は連絡先は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開しない故に、御安心下さい。性のある奇巧な作品を発表して下さいます。手腕をどうか發揮して下さい。郵送（第一号）出版株式会社編集部宛、私書箱第四十番一、大阪市住吉区直接の訪問

ムチ打ちの女王の麗姿

＜関谷富佐子＞



妊婦惨酷譜

△南 加津子▽



晒しもの二題

△深田 菊子▽



着衣とヌードの縛り



△西条紀代▽



△南 加津子▽





＜江口淑子＞



白人娘を
縛しめる

＜シーラ・ケニー＞

パイプ責めに耐える

△松本たえ▽





羞恥に悶ゆ

<笠井 奈保子>



徐々に吊られる片足



剃毛されざるもの

△荒尾慶子▽



△福井桃子▽

浣腸後の襲いくるもの



△南加津子▽

膨隆の乳房と腹部

棒責めのワンカット

△深田菊子▽



後手縛りの極意

△西条紀代▽





伸びやかな肢体

<深田 菊子>



ふくよかな肢体

<荒尾 慶子>



縄にとけ込む肢体

<笠井 奈保子>



空想のなかの現実

<中 河 恵 子>



背後で責める

<西 条 紀 代>

紅毛碧眼の女

ハシーラ・ケニー



貞淑なる豆絞り

猿ぐつわ
に呻く

<高村浩子>

<三浦純子>



惑溺のひととき

△玉木章子▽

恍惚と叫喚と

△鈴木千鶴子▽



哀歎漂う股間縛り



△前田 真知子▽





憧れの永遠のM女
モデル……梨花悠紀子

何故に斯くまでこの女性が私の心を奪うのであろうか。彼女が類稀なる洗練された、M女だからであろうか。荒縄に、裸身をひしひしと縛しめられて、息苦しいばかりの猿ぐつわの下で、観念の眼を閉じている麗しの悠紀子。私はその裸身の中に巣喰っているM心の謎を、この一葉のプロマイドの中から探り掴みたいと願っている。

このようなファン願いを汲んで、どうか悠紀子よ。貴女の自由な時間の寸暇をさいて、一筆の告白を物して頂けまいか。悠紀子を、永遠の憧れのM女として敬愛している私の、これは切なる懇望である。

(植村甲子一・記)

奇

譚

ク

ラ

ブ

昭和四十八年 八月号

第二十七卷 第八号
通刊 第三〇六号



—「ペン」と「カメラ」のルポルタージュ—

同棲時代の甘い優雅なSM生活

塚

本

鉄

三

“通信”と“サロン”のキミ

ミナミカズコ—。

その発音を耳にしたとき、私は、ハテナ、どこかで聞いた名前だなと思った。

だが、それをメモの上に、南加津子——と書いて、視覚を通して確認してみると、ハハ、奇クの読者通信で見たことのある名前だったナ、と思いだした。

とは言っても、毎月、送られてくる奇クは比較的良好目を通してあるつもりの私でも、そのハ南加津子Vという活字を、いつ頃、目にしたかという点になると、はっきりとした記憶はなかった。

住所は、兵庫県西宮市広田町。

名前は、南加津子。

電話番号は、〇七九八——二二——。

「本人が責めのモデルになってもよい、と言ってくるんだが、なんでも妊娠してるんだそう。実は、以前にモデル志願してきたことのある女性なんだが、余りにも遠方だったんで、そのままになっていったんだ。それが今度、西宮へ移ってきたんで、是非、キミに撮ってほしいと思ってね。彼女についての詳しいことは、奇譚クラブの旧号を見てくれたら、よくわかると思うヨ。連絡はキミから直接、電話をしてくれるか。僕からは、彼女にそう話してあるから。それから、これは僕のカンだがね、彼女は今の彼と結ばれたのは、どうやら読者通信かららしいんだ。でも、彼氏というのがね、妊娠中はモデルになってはいけないって言うてるそうなので、その点はよく含んでおいて呉れ給え」

奇ク編集長から、そう電話を聞いた私は、早速、書棚から奇クの旧号を取り出して、繰ってみた。あった、あった。南加津子の名前が。初めて、彼女が誌上に顔を出したのは、昭和46年11月号の『読者通信』であった。

念のため、最近三年間位の奇クを読み返し

てみると、彼女の投稿が奇ク誌上に載ったのは、『読者通信』が五回、『奇クサロン』が三回の多きに達している。

即ち、46年11月号、47年2月号、47年3月号、47年7月号、47年11月号——と、一年間に亘って五回の『読者通信』。そして、47年5月号と47年7月号の二回に亘っての『奇クサロン』への投稿である。

うら若い女性としては、まことに目の瞠るようなSMに対する執心ぶりである。

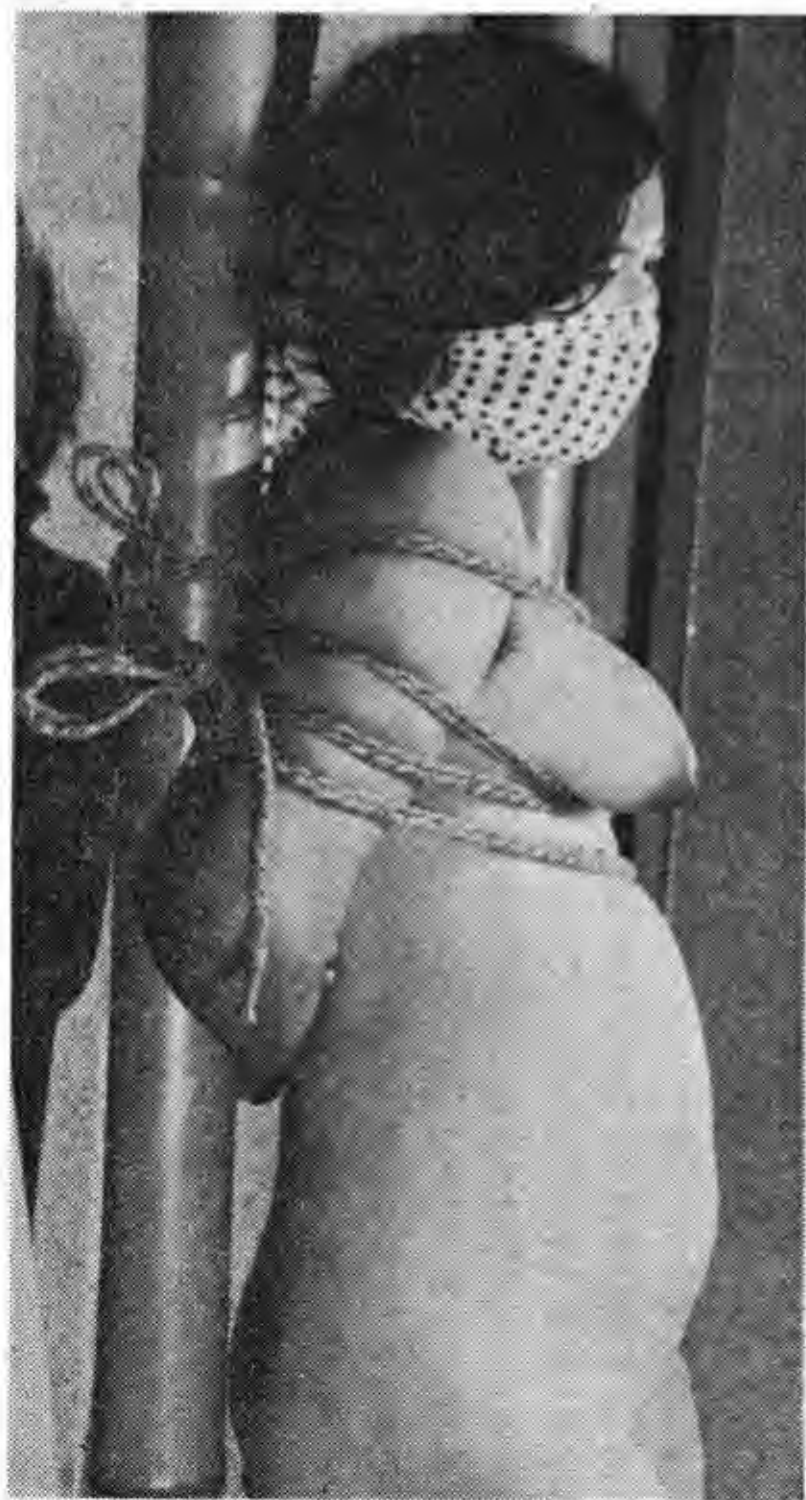
47年11月号の『読者通信』の文章を最後と

して、南加津子の投稿が、ばったりと、とだえているのは、何を意味するものか。

普通——、『読者通信』で、自分にぴったりの友達を獲得してしまったら、もう、あとは、『通信』なんて用なしだ——という風になるのが常套らしい。

彼女も、適当な男性を、この辺で見つけたに違いないと考えてよいだろう。

因みに、彼女の投稿に対する反響としては誌上で見る限りでは、名古屋市の子三宅具隆氏が、『読者通信』で、47年1月号、47年4月





号、47年9月号、47年12月号
48年3月号の都合、五回、出
している。まだ、私の見落と
しもあるかも知れないし、直
接の文通については、わから
ない。

その△南加津子▽が妊娠し
たという。

私にはショックだった。

しかし――。

「妊娠した身体でもよければ
写真に撮ってほしい。そして
責められてもみたい」という
のだから食指も動いてくる。

文通で知り合った奇ク愛読
の好青年と結ばれたという幸
福な彼女である。

私は、早速、彼女に対して
電話すべく、電話の受話器を
手にした。

その詳しいルポを書く前に
私は読者の皆さんが、奇クの
旧号を繙ひもとかれる繁を省くため
に、手元の雑誌から、南加津
子投稿の文だけを抜き書きし

てみよう。

☆

〔昭和46年11月号、二五二頁、読者通信〕

○

奇クをみはじめてから、まだ半年足らずの
二十三才になる女性です。それまで、このよ
うな本があるなんて夢にも思ってみませんで
した。本好きな私、つと立ち寄った店で読ん
だ印象が強烈で、隠れてたびたび、ひとりど
りだして読みました。もうその時は、胸がど
きどきして、ひとりで興奮しました。実は
その前に、そういう悪い(?)癖があったの
です。でも、この本を読んで私ひとりじゃな
くてホッとした次第です。趣味は読書。部屋
にとじこもって、いろいろの本を読むのが大
好きです。半年ほど前、一度モデルに応募し
ましたが、お返事がなく駄目だったらしいの
です。今、私のお勤めしているところはアル
バイトで時間の余裕はありますけど、こん
な私に、おつき合いして下さる真面目な方っ
て、いらっしやらないでしょうか。

(中津市・南加津子)

☆

これが、南加津子が投稿した文が初めて誌
上に載ったものであるが、平易な文章で要を

得ており、彼女の全貌がイキイキと描写されている。読者の皆さんも、きっと、この八南加津子Vという名前を御記憶の方も多いことと思う。多分、彼女は46年の春頃から奇クを読みはじめたのではないか。

47年1月号には、早速、彼女の読者通信に対する反響として、『奇クサロン』の八短信往来Vに、『東京とおるより、南加津子さまへ』という投稿が載っているのと、名古屋市の三宅具隆氏からの読者通信も載っている。

尚、この三宅具隆氏という人は、南加津子に対しては、非常に熱心で、47年1月号をはじめとして、48年3月号に至るまで、南加津子の読者通信に匹敵する五回に亘って、すべて、彼女を対象に投稿している。

☆

〔昭和47年2月号、二五八頁、読者通信〕

○

たくさんのお便り、ありがとうございます。勇気を出して通信を書いてよかったと思います。よいお友達とおつきあい出来るようになりましたことを厚く御礼申し上げます。

(大分県中津市・南加津子)

☆

〔昭和47年3月号、二五九頁、読者通信〕



○

名古屋の三宅具隆様。私の呼びかけに勇をふるって、お手紙を出すことになったことを読み、感激しました。私は地味な性格で、自分の方から、つきあって下さいと男の方に呼びかけるのは始めてです。ふだんの私なら、好きな人がいても退いてしまうんですが、こ

の本を読んでいると、この本に出ている人は気楽に話せそうで好きです。三宅様から声をかけられ、よろこんで、お友達になりたいと思います。ハレンチなことをいえないし、できもしません。そうしむけるのは三宅様、貴方の腕次第です。純情みたいに書きましたが私は古い女です。独身なので人目につくこと

はしたくありません。S的な傾向を好むとのこと、話があいそうですね。

(中津市・南加津子)

この投稿の中には、複雑な乙女心の屈折と彼女の苦悩が、にじみ出ているように思う。

☆

(昭和47年5月号、二四一頁、奇クサロン)

△私がモデルに志願したことなど▽

中津市 南加津子

「貴女は真面目で優しい感じ」とか、「おとなしい感じ」と友達から、よく言われます。「純情だから、からかうのが面白い。気にならない人にからかう人はいない」などと男の人に言われます。でも、恥かしそうにうつむ



く私が、心の底で何を考えているかわからず、きつとびっくりすることでしょう。

私は大分で生まれました。四人姉妹の二番目として。小さい時から、なぜか私はひがみっぽく、高二的春、女友達の部屋で彼女の友人の男三人によって経験しました。悪い女と知っていたながら、心を許してつき合った私が一番いけなかったのです。高校でまじめだったのは一年のときだけ。その時でも近所の中学二年の男の子を誘ってからかったり、病気をしていた私のふとんに入れて身体にさわらせたり吸わせたりしました。

学校では遅刻、早退の常習犯。三年になると別府へ移り大分の高校へ電車を通うようになり、電車の中で、いろんなことを想像しました。エッチな本ばかり読みました。授業中に読んでいてとりあげられ、数学の先生に凄く怒られ一週間、返してくれませんでした。「こんな本を読んでいいと思ってるのか」と言われ、あっ読んだな、自分だってスケベーだって心の中でした。小説なので読まなければ意味はわかりません。

三年の夏、親に叱られて家を飛び出し、雨の中を歩いていきますと変な中年の男に誘われて旅館へ行きました。裸にさせられ、いろん

なポーズをとらされました。もちろん電灯をつけてです。

社会人となってから表面はおとなしく真面目にしましたが心の中では、激しくますますいやらしくなったようです。風呂場で誰もいないとき蛇口に身体をもっていき、勢いよく水を出して、その感触を楽しみました。又、お湯をかきまぜる太い棒を熱い湯の中にひたして、それで………するのです。

興奮がさめると湯から上がり鏡の前で、いろんなポーズをしました。

二階の自分の部屋では裸になると足を別々にひもでくくっておいて、はじめはローをたらしいていましたが、あきたらなくなつて入れてしまいました。一回そんなことをしているとき、家の人が帰ってきて、ひもをとりたり鏡をかたづけたり、道具を汗だくでかたづけたりして服を着ました。顔が真赤になっているのがわかりますが、何げない風で階段を下りて、カギをはずしました。カギをかけてなかつ

たら、どんなことになったかと思うと、ゾッとしました。

最近、中津に越してきて、始めて奇クを知って驚きました。その本をみながら、ひもを身体にまとうとて勤めにいったことや、コートの下に、ろくに服を着てないで、そわそわしたことなどを思い出します。

はじめて買ったときは逃げるようにして出

ましたが、最近は堂々として図々しいと思います。私が本屋へ行っただけで店の人は本を包んでくれるのです。

モデルに応募したのは、この本に慣れる前でしたが、返事がこないのに半分ホッとしたものです。でも、すぐあきたらなくなって、お友達をほしいと思いました。三人から、お返事があり、本当は三人ともつきあいたいと

図々しく思ったのです。でも他にもお友達を求めている女の人がいるかもしれないと思うと、そんなことはできません。

三月号をみて高村浩子さんはなんと可愛いらしい書き方をされるのだろうと感心しました。これほどの方だったら、きっとお友達がたくさんできると思います。私も浩子さんのように、写真入りで誌上に載せて欲しいと思います。そして私、浩子さんともつき合いたいのですが、女の子じゃ駄目でしょうかしら彼女を凄く優しく残酷に痛めつけてみたいのです。あれ私、Mだと思ったのだけど、S気もあ



るのかしら。

☆

うまい文章である。名文といってもよい。

私は八南加津子Vという女性の
ことを知りたくて、読み返して
いて、感心した。なんと、うま
い文章なのだろうか――。

名文というものは、決して、
むつかしい字を用いたり、もっ
てまわった言い方をするのでは
ないということは、この南加津
子の文章が、お手本のように示
しているではないか。この平易
で簡潔な文章の中に、彼女の
人となりや生活が、イキイキと、
まるで目の前で眺めるかのよう
に描写されている。

これほどの名文を書かれる人
だから、南加津子という女性は
きっと、素直で、真面目な人に
違いない。

☆

〔昭和47年7月号、二三六頁、

奇クサロン〕

△編集部の皆様まいるV



南 加津子

編集部の皆様には、大変お忙しい日々を送
っておられることと思います。とにかく、五

月号には、私のハレンチな告白がのってしま
い、我ながら、おろおろしてしまいました。
あの時は夢中で書いてしまいました。まさ
か、のるとは思いませんでした。

お逢いできることのない編集部の人だか
らこそ、図々しくも私のいやらしさを恥ず
かし気もなく書いたのです。それがのって
しまい自分のことを、みんなに知られたと
いうことは、とても怖ろしく感じました。
この次からもうこの本は買うまいと思った
ものです。

自分がどんな風になるか、これからが、
とても怖いのです。でも、人前では真面目
さを装いながら、ひとりでいるときは世に
も怖ろしいことを考え、ひとりで悶え、悩
んでいます。いつの間に、こんなに私は、
いやらしくなったのかしら。私は編集部の
方々を信頼しています。私は人前には出た
くない。浩子さんのように誌面にのるなん
て、まるで駄目です。時期がくれば、考え
方も変わるかもしれません。でも、今のと
ころは自分のことを、しられたくないので
す。普通の平凡な娘さんでいたいのです。
でも、誌面にのらないで、おつきあいでき
るなら、どんなことでもしたいと思っています。

ます。

勝手なことばかり書いてしまいました。どうぞ、お怒りにならないで下さい。

中津市 南加津子

編集部の皆様へ

追伸——おわびのしるしに、へたな絵を書きました。

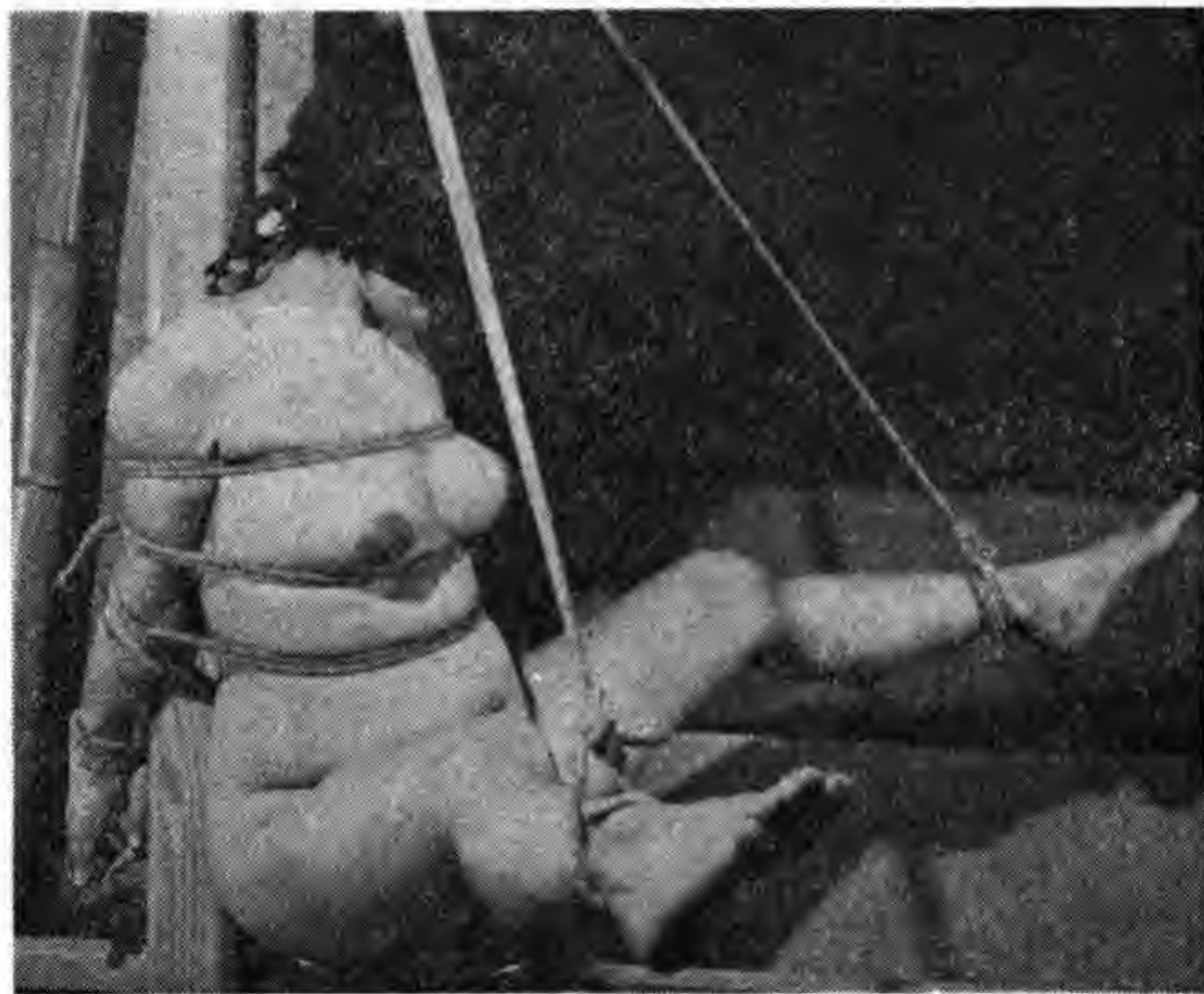
☆

後手に縛られた可愛い乙女の絵が、きれいなタッチで描かれている。複雑な乙女の心理が、よく現われた文章で、ほほえましい。

〔昭和47年11月号、二七三頁、読者通信〕

○

三宅様。お手紙ありがとうございます。貴方の文章を読んで本当に、こわいくらい胸がドキドキしました。自分の裸を男の人に恥かしい格好で想像されていると思うと身体中が燃え上がってくるような気がします。でも自分の身体が、いたぶられているのを想像するだけです。今は私一人にいる時間が全然ないのです。だから、お風呂の中で自分を見つめるぐらいです。三宅様のお便りを読んで、二人きりでどこかにいて、責めつくされてみたい気がします。



(南 加津子)

☆

この47年11月号の「読者通信」を以て、彼

女の投稿は、ばったりと杜絶している。昨年十一月号の掲載であるから、投稿したのは、多分、昨年の七月前後になるものと思う。それ以後、彼女の身の上に、どのような変化が、あったのだろうか。

私は南加津子に対してのこれだけの予備知識を頭に入れておいて、電話器のダイヤルを回した。

大阪府と兵庫県。県は違い、十数キロの距離があっても、ダイヤルを回し終わると、直ちにジーンジーンという軽い呼び出し音が私の耳に伝わってきた。だが、いくら待っても、先方は出る気配がない。

二人きりの新居。彼は会社へ出勤中で彼女も、きっと不在に違いない。

私は諦めて受話器を置いた。

これこそ

正真正銘のマゾだ

私は地図を拡げてみた。



兵庫県西宮市広田町。

この辺は、私は行ったことがない。
完全に土地カンのない場所である。
私は目標になる所がないかと、地図で、そ

が……

「とにかく、貴女の今までの通信を拝見しま
してね、とっても、お逢いたくって、たま
らなくなりましたよ。今の彼は、読者通信

の附近を見てみると、広田
神社という相当、大きいら
しい神社があった。

それを頭に、再び受話器
をとった。

「はいはい、ミナミですけ
ど……」

若い女の声が出た。

「もしもし、加津子さんで
すか？ 私は塚本って言う
んですが、奇譚クラブの編
集長から伺って、お電話し
ました。一度、お逢いた
いと思ってるんですが御都
合、如何ですか？」

「ああ、お伺いしておりま
す。でも、私、今、妊娠し
ていますのよ。ですから、
出産後に、もし、彼の許し
があったらって、編集長に
お返事、しておいたんです

を通じて結ばれたんでしょう？」

「さあ、どうでしょうかしら？ 私、一人の
時は、通信にも書いていましたようにモデル
になりたいって、むしろに思ったこともあ
りましたけど、今は世帯を持っていますし、
それに妊娠していますものだから……」

「私なんかにとっては、その妊娠中という
のは、貴重なチャンスなんです。是非、撮
らして欲しいと思いますが、それはそれとし
て、とにかく、一度お逢いして、いろいろと
話だけでも、お伺いしたいですナ」

「そんなに、おっしゃるんですしたら、彼には
内緒ですけど、お話だけでしたら……」

「じゃ、日は、いつがいいですか？」

「私の方は、いつでも。日中でしたら……」

「それでは明日の午後一時に、そちらへお伺
いしましょうか。地図で見ますと、広田神社
というお宮さんがあるでしょう。その境内で
午後一時に、お待ちしましょうか」

「広田神社でしたら、家から歩いて五分ぐら
いのところですよ。さっきも、市場へ行った帰
りに、その前を通ってきました。それで、目
じるしなんかは？」

「さあ、目じるしね。そんなもの、なくても
多分わかるでしょう。私の方から、先に言葉

をかけます。では、明日の午後一時、広田神社の境内まで来て下さいね」

受話器を置いてから、私は少し不安になってきた。一面識もなく、お互いに初対面である。それに、私は、その広田神社という所へは一度も行ったことがなく、どんな所か、さっぱりわからない。

一抹の不安から、もう少し詳しく打ち合わせをしておいた方がよかったと後悔したが、ええい、なんとかなるさ——と、例によって楽天的に気分を転換した。

さて、その翌日——。

私は少し早い目に、家を出た。

私は、南加津子が、過去七回に亘って、奇クの『読者通信』と『奇クサロンに』載せていた文章を思いうかべて、自分なりの彼女のイメージを形づくって、胸をわくわくさせていた。

地図をたよりに一七一号線を南下していると、道路沿いに、△広田神社△という大きな標識が出ていた。その案内に従って右折して暫く走ると、何百年も経ったかと思われる松の大木が両側に亭々と聳えた立派な参道が目に入った。ああ、ここだナ——と、近寄ったが、どうしたことか、車は侵入禁止である。

遠回りをして、広田神社の正面に出る。

広い駐車場があったのでそこに車を駐めて、石段を登っていった。

約束の一時には、まだ十五分もある。

私は石段の最上段の真ん中に腰を下ろして頬杖をつきながら、南加津子を待った。

子供が三人、砂遊びをしている。赤い自転車に乗った郵便配達が通って行く。買物籠を提げた中年の婦人二人が声高に話しながら歩いている。

樹立ちに囲まれた境内は至って静かであった。附近が住宅街である、せいかもしれない。

私は、ぼんやりと下の方を眺めていた。

と、石段の遥か彼方、鳥居をくぐって一人の若い女



性が、こちらへ向かってくる。南加津子に違いない。

そう確信して、私は腰を上げると、石段をゆっくりと降りていった。

鳥居を、くぐったその女性は、砂利を敷きつめた参道を静かに歩いてくる。

石段の丁度、中程、踊り場になったところで、二人は、ばったりと出会った。

丁度、午後一時であった。

「南加津子さんですね」

私の方が先に声を掛けた。

「は、はい」

何か凄く固くなっているような答え方であった。洋服の上から見ても、お腹の大きいことは、すぐにわかった。

「車が駐車場にありますから、あちらへ行きましょう」

私は親愛の情をこめて、彼女の肩へ軽く手を回して促した。

緊張で肩が小刻みにふるえていた。

「約束の時間にきっちり、来て下さったのですネ」

「ええ、家が近いものですから、御飯を食べて、すぐ参りましたものですか

ら……」

「何時頃までに、此处へ帰ってくればいいのですか？」

「四時半から五時頃までに。夕食の仕度がございますものですから、それくらいに帰ってきて頂ければ結構ですわ」

「三時間以上は、たっぷりありますね。それでは、どこか、ゆっくり出来るところを探しましょうか」

私は彼女を助手席に乗せて走り出した。

右へ曲がり左へ曲がり、附近一帯を走り回ったが、一向にそれらしき建物は目につかない。住宅街なので、ひっそりと静まりかえっていて、一軒の喫茶店すらない。時間は徒らに経ってゆく。

私はジリジリとしてきた。

「このあたりは、住宅街ですから、少し離れてみましょうか。私は西宮市というと初めてなので地理に詳しくないんですよ」

「私も、こちらへ来て間なしでしょう。それに、余り外出しませんでしたから、西も東もわかりませんわ。でも、こうしていると、ドライブしてるみたいで、楽しい」

「それでしたら、広い道へ出て、少し走ってみましょうか」

私は国道一七一号線へ出て、伊丹市方向へ向けて走り出した。たしか国道沿いに、スミレとかタンポポとかいうような名前のモーターがあっ



た筈である。

交通量は比較的、少なく、快適な疾走を続ける。

一七一号線は所謂、西国街道と呼ばれて海岸線とは離れて内陸へ向かっているの、次第に沿線にも緑を増し、山脈も迫ってくる。

高架の道路を下りて左折、目ざすモーターの駐車場へ車を入れる。ウィークデーとあってか、一台の車も停めていない。

二階の部屋へ入ると山小屋風のテーブルと椅子があって襖を隔てたその奥は例の通りマットレスに蒲団を重ねた安易なベッドルームに、なっている。

「掛けませんか」

私が言葉をかけても、南加津子は部屋の隅に、じっと立ったままで、身体を固くしている。

身体を固くしているばかりではない。ガタガタと肩をふるわせているのが、離れている私にも、はっきりと判るの

である。

私は白い小型のバッグの中に、カメラ一台とストロボ、縄など、最少限のSMプレイ用の撮影道具を忍ばせてきていた。

うまくゆけば、この南加津子の第一回の撮影をやりたい。たとえ、それが無理としても奇巧の投稿欄を読んで得た予備知識をもとに

して、彼女と、いろいろ話してみたい——とそう考えていた。

それが、この部屋へ入った途端、彼女は急に無口になってしまつて、両腕で胸を抱えて部屋の隅っこで立ったままである。

「遠慮しないで、こちらへおいで。お茶でも飲みましょうや」

私は気軽に、そう言つて椅子から立ち上がり彼女に近づいて、軽く肩に手をかけた。

私は、はっと驚いた。

彼女の全身がオコリのよう、ガクガクと、激しくふるえているのである。

もう、立っているのさえ、おぼつかなくて部屋の隅に身体をもたせかけて、やっと倒れかかるのを、防いでいるのだ。

私は反射的に、彼女の上半身を両腕で抱きしめていた。

豊かで温かい感触の女体がブルブルと激しく躍動しているのが、私の胸に、両腕に、痺れるように快く伝わって





る。

私は、いとしくて、たまらなくなった。

この可憐な女性が、これほどまでに、被虐の想念に、心を昂まらせているとは――。

心をこめて、ぎゅっと、抱きしめた。

百万遍の会話を交すよりも、私には、彼女の心が、よくわかった。

やはり、あの、奇クに載っていた彼女の投稿は、嘘ではなかったのだ。

と、次の瞬間、私は彼女を抱えたまま、足で襖を開けて、奥の部屋へ運んでいた。

蒲団の上に仰向けに倒して洋服を脱がしにかかる。

「貴女のハダカが見てみたい――」

「いや、いや、こんなお腹の大きな女のハダカなんか見たって、よくありませんわ」

「だから、見たいんだよ」

「かんにんして。脱がすのは、許して……」

彼女は口では、そうは言っているも、服を脱がそうとする私の手に、協力するように、袖から腕を抜いていった。

豊かな肉づきの

白い膚が、あらわれた。それから、もう観念したように、彼女はじっと、私のするがままになっていた。

やがて、一糸もまとわぬ南加津子の裸身が蒲団の上に、ごろりところがつっていた。

相当の茂みを見せた部分以外は、青白く静脈を浮かべて膨らんだ腹部を中心にして、均斉のとれた白い女体が、輝くように私の目の中に飛び込んできた。

私は、凄く美しい――と、思った。

彼女が、素直に、あの山小屋風のテーブルの前の椅子に腰をかけていたら、今頃は、奇クに投稿した文の内容なんかについて、くどくど話し合っていたかもしれない。

それが、今、南加津子は全裸となって、私の目の前に横たわっているのである。

猫の前の鰐節のように――。

私は、立ったまま、じっと眺めていた。

彼女は、私が何をするのか、と、おびえた目で、不安そうに見つめている。

だが、女というものは、一旦、こうして素裸にされてみると、却って落着くらしい。

さっきの身体のふるえは、止まっている。私はバッグから縄を取り出して手にした。

彼女のおびえきった目が、一瞬、うるんだ

ように見えたが、電燈の光に、きらきらと妖しく輝いた。私は、口の中がねばり、唇がからからに乾いてきた。

SとMの視線が、空中で発止と火花を散らして交叉し、やがて、それがからみ合った。

私は舌で乾ききった唇を湿しておいて、素早く彼女の左手首に、縄の環をはめ込んだ。

更に、その縄を右手首にも絡ませていった横坐りに引き起こしたとき、フーフーと、私の頬に彼女の熱い吐息が触れた。

身体中が、燃えているように熱かった。

それは妊娠している、せいなのか。

私は両の手首を合わせて背中中で縛り、縄止めしてから、彼女を立たした。

よろよろ……と、よろけて、もう、自分で立っているのがやっと、という有様だった。

私は、二の腕に力瘤が出来るくらい、両手首を背中中で引きあげておいてから、縄を胸の方へ回していった。

妊婦特有の盛り上がったように豊かな乳房が縄を回すたびに、私の手にさわった。

「あああ、あ、あ……」

吐息とも、溜息ともつかぬ熱い呼吸が、彼女の口から、とめどもなく洩れている。

「どうだ、縄はきついかな？」

縛り終えてから、私は、彼女の顔をのぞき込んで言った。額から頬にかけて、じっとり汗ばみ、おくれ毛が、その汗の浮かんだコメカミに、べったりと、くっついていてる。

「いえ、そんなことは、ありません。でも」

「でも——なんだって言うんだ？」

「あの、ああ、恥かしくって、そんなこと、私の口からは、言えませんわ」

彼女は、膝を少し曲げ、腰を引いた中腰のような格好で、よろよろと、よろめいた。

「何が言えないんだ。さあ言ってみろ」

私は髪の毛を驚づかみにして、彼女の顔を引き起こし仰向かせた。顔は濡れたように汗にまみれている。

「フーム、お願い。オネガイ、オネガイ」

私は髪の毛から手を離し背後へまわって盛り上がった

たような臀部を見た。如何にも皮下脂肪の、たっぷりといっているような、豊かな肉の盛り上がり様である。

と、視線を下げると、私は、そこに、太股





の内側に、明らかな筋をひいて流れる、はつきりとした、ある痕跡を見つけた。

そうだったのか――。

私は、縄尻を引いて彼女を歩かせた。

「いや、いや、いやいや……」

腰を引いて拒むのを、無理に歩かせて、青

竹の並べて立ててある所へ連れてきて、その

間に立たせ、縄尻を竹にくくりつけた。

「これから、南加津子のハダカを、ゆっくり拝ませて貰うからナ、そこで晒しものになっているのだゾ。いいな」

彼女は無言のまま、ハアハアと肩で大きな息をしている。

私は彼女の目の前でアグラを組み、バッグ

からカメラを取り出してフィルムを詰めた。

爪先を揃えて、すっと立った彼女は、上半身をきっちりと縛られて縄尻を竹に止められているので逃げも隠れもならず、顔を天井の方へ向けて私から視線を、そらしている。

足の爪が、きれいに切り整えられているのが、如何にも清潔である。ぴたりと内股気味に、足の拇指と拇指とが、重なりあうほどに揃えられて、爪先立ち気味に立っている。

可愛い膝小僧が二つ、悪戯っぽい顔つきで、仲良くお互いに頬を寄せ合って、喰い込むように、くっついていてる。

胫にも、太股にも、ウブ毛一つないくらいスベスベした白い肌なのに、ふっくらと膨らんだ腹部の下端にだけ、黒くて濃い茂みが、盛り上がったように見えている。

私は愉しくなってきた。

思わずカメラを置いて立ち上がると豊かな肉づきの肌に掌を滑らせていった。それは心をなごませる柔らかくて温い感触であった。

「ああ、貴女が妊娠する前に、縛って、いじめてみたかったなア」

「いやいや、さわらないで、お願い」

お腹、乳房の下、お臀、太股……へと、私は掌を執拗に這わせてゆく。

「貴女が、はじめてモデル志願してきたとき何故、すぐ飛んで行かなかったのかなア。今になって、悔まれてならないよ。こんな素晴らしいM女が、折角、志願してきたって言うのに、何故、知らせてくれなかったのかなア」
私は、いしおしむように、彼女の全身を撫でまわした。

「あああ、ああ、そんなに触らないで、お願い。私、もう、たまらないわ」

「そうか、こんなことだけじゃ、物足りないって言うんだナ。よしそれだったら、こうしてやる。覚悟はいいナ」

私は、彼女の上半身を括っている縄を解き放つと、柱の前に連れてきて、その前に立たせ、柱ごと縛り上げてしまった。

私は彼女の右足を持って抱え上げた。

「あら、あら、そんなこと、いやッ」

私の悪魔的な意図を察した彼女は左足一本で立ったまま、持ち上げられた右足を何とか逃がれよう



と、もがく。私は以前に、松本たえを責めたとき、こうして、女体を柱縛りにしたまま、両足を頭よりも上に挙げさせて二つ折りになるよう縛ったことがあった。

あのときは、軽量で柔軟な肢体の松本たえだったから成功したが、このボテの入った妊婦、南加津子では無理だった。柱を伝って、

ズルズルと滑り落ちてきて、とても、両方の脚を浮かすことなんて出来ない。

やむを得ず、腰掛けを柱の前へ置いておいて、足首に縄を掛けると、尻餅をつくような格好で椅子に尻をつけた。鴨居に縄止めしておいて、更に残りの足首にも縄を掛けて、足いっぱい、引っぱった。

もう、のっけからの羞恥責めである。

脚を開こうと縄を引く私に対して、彼女の抵抗は強かった。懸命に膝を合わせようとするとする力は、私が両手に力をこめて引っぱっても縄止めしようとして、力を抜くとすぐに元に戻ってしまうほどだった。

一回、二回、三回……。

それを繰り返していると、観念したのか彼女の抵抗は急速に弱まって、やがて、ずるずると、素直に脚をひろげた。

両方の脚を、左右に一直線になるくらい、思いきり開かせてから私は縄止めした。

股を合わせようとする必死の努

力も、一直線に思いつき開いた左右の脚が僅かに、八の字に、なるくらいで、それ以上は、いくらもがいても狭くならない。

閉めきった密室は、いやに暑い。

ムンムンとする熱気が、どこからともなく忍び寄ってきて、私の額には汗がにじみ、頬を伝って顎のところで水滴となって落ちる。

私は、彼女の真正面に跪いて、先ず、女体の中心部へ向かって視線をやった。

「ううう、ムムムム……」

さっき施した猿ぐつわの中で彼女の、たえきれないといった呻き声が洩れる。

左右に開いた両足が、ブルブルと小刻みにふるえているのが、よくわかる。

彼女は顔面を真赤に紅潮させて、ハアハアと、肩で大きな息をしている。

私は、ゆっくりと彼女の全身に目をやってから、再び、中心点を見つめた。

おお、それは、なんという美しさであろうか。私は、今までに、こんな美しい生き物を見たことがなかった。

神の造り給うた最大の傑作が、そこに、いきいきと息づいていた。

色といい、形といい、匂いといい、全く、私の心を完全に奪い去ってしまった。

二十四才になる初産婦の美しい生命が、造物主の造った芸術品が、まるで珠玉のようにそこに、輝いていた。

私は、衝動的に、それに唇を寄せていた。

それは、狂ったような……ひととき。

長い長い時間であった。

色、形、匂い――。

それは、もう、私の五官を完全に麻痺させてしまうに足る魅力を持っていた。

そして、私は、今、その上に更に、えもいえぬ味覚をもさえ、貪るように、味わったのであった。

宙に浮いた彼女の左右の脚が、どのように揺れうごき、猿ぐつわの下から、どんな喘ぎや呻き声が、激しく洩れたことか。

羞恥責めの祭壇へ

長くて、短い時間が過ぎた。



緊張のあとの快い弛緩が、二人の間に、物懶い、ひとときを醸しだしていた。

さっきの、南加津子の咆哮するような悦虐の狂態は、まるで嘘のようである。

縄を解かれた彼女は、私の膝の上に、ぐっ



たりと、のびていた。
「私、単なるセックスより、いじめられてい
るときの方が、よっぽど興奮するのよ。ヘン
な女の子でしょ」

「それで、彼は、いじめてくれるの？」
「ええ、最初は、わからなかったらしいの。
でも、この頃は、そうしたら、私がスゴク燃
えるでしょ。だから、わかってきたらしいの
よ。時々、いじめてくれ
るわ」

「じゃあ、さっきみたいな
ことも？」

「まだ、同棲して、一年足
らずでしょ。だから、縛る
なんてことも、たまにしか
やらないの。彼はセックス
の方が珍しくって、興味が
あるみたい」

「フン、すると、甘い甘い
同棲時代って、わけなんだ
ね。羨ましいナ」

「そんなんじゃ、ないんで
す。そりゃ、お互いに好き
合っではいましたけど……」
「まあ、あまりプライベ
ートなことを詮索する必要も
ないし、その興味もないが
さっきのプレイについて、
もっと話してみたいな」

「いやン、いやン。恥かしい、そんなこと。
顔が赤くなるじゃないの。あんなとこ、見せ
てしまつて——」

「それは、お互いさまだよ。さっきは、何か
セックスよりも、いじめられる方がいいって
言つてたけど、それ本当？」

「いえ、セックスは嫌いじゃないんです。で
も、犯されるといふような、いじめられ方
でのセックスが大好きなんです。エッチな女
子でしょう、私って。ですから、彼との時も
いつも、そんなことを想像してるんですわ」

「フーン、これは、いよいよ、本格的なMだ
ナ。物凄いSMプレイをやってみたナ。責
めて、責めて、責めまくって、最後は暴漢の
ように犯すってわけだ。今、妊娠してるから
妊娠の心配もないわけだ」

「そういうことに、なりますわね」

「妊娠した若妻が、団地の部屋で一人で留守
番しているところへ、押し売りが来て、話し
ているうち、余りの美しさに、急に痴漢に早
変わりして、襲いかかってくる——と、いつ
た趣向は、どうだい？ こうして、手首を握
って、あり合わせの縄で縛って、それから、
こう、正面から抱きついて、唇を合わせてく
るんだナ。痴漢の常套手段だ」



「ムムム、ウ、ウ、ユ、許して……」

彼女の身体は、抱きしめても、強く抱きしめても、止まらない程、ガクガクとふるえている。それがまた、私にはたまらない魅力であった。抱きしめた両腕の中に、はつきりと感ずる彼女の肉体のふるえは、私の嗜虐心を一段と、あふりたてた。

彼女の哀願も、ものかわ、私は狂ったように縄を掛けていった。

「いや、いや、縛るのは、いやッ。縛らなくても言うこと聞くから縛るのはやめて」

彼女は、口では、そう言っていたが、私が縛り易いように、身をこなし、私は彼女の豊かに盛り上がった乳房を中心に、忽ちのうちに縄を柔肌に喰い込ませていった。

私の身体の中には、まだ、さっきの熱情の余韻が、爆発

寸前の、くすぶりを続けていた。

ひとたび、禁断の木の実を味わってしまうと更に、次の甘美なものへの期待に、胸をわくわくさせてしまうのだった。

自分の欲するものへ責めV——を、思いのまま彼女に与えて、果たして彼女は、どのような狂態を、私の目の前で演ずるだろうか。

縄と縄との間に、むっくりと飛び出すように盛り上がった双つの乳房。その中心には大きく黒ずんだ乳暈が、ふつふつと盛り上がり乳首の先からは、今にも乳汁が噴き出そうである。

何をされるのかと、彼女は、おどおどとした視線で、私の方を顧みながら躊躇しているのを、縄の余ったのを束にしたので、尻を叩いて追い立て、カーペットの敷いてある別室へと連れ込んだ。

「さあ、そこへ坐るんだ。おとなしく、しておいたら、命だけは助けてやる」

「あああ、何をやるのよお」

「やかましく言わずに、言うことを聞けッ」私は豆絞りの手拭いをとって、彼女の歯と歯の間に噛ました。

へたへた——と、くずれるように坐り込んで尻餅をついた彼女の左足の膝頭へ、余って

いた縄尻を、ぐるぐると巻きつけていった。

このダンダラ模様の縄は極めて長い。一卷き買ってきたのを十本ほどに切ったのだが、それでも一本が二十米以上もあるので、それを二つに折って使っているが、それでも余ってきき仕方がないほど、長い。

膝頭へ幾重にも巻きつけておいて、その縄を後手首の結び目に連繋して、ぐい、ぐい、ぐいと締めつけた。さっきの甘い悦楽の余燼が彼女の身体に残っているのか、余り抵抗することなく、左足は引きつけられて開いていった。正面へ回った私は、今度は彼女の右足にとりついて開かせ、その膝頭にも幾重に、縄を掛けていった。

ハの字に両脚を開かせられた南加津子が、恥かしげに頬を染めてうつむいている。

両膝頭のところで、縄を掛けられて背後に引っ張られているので私の視線をかくそうにも、かくしようがない。僅かに膝のところの内側に曲がった脛が、前をかくそうとして必死になっている。奇麗



に切り整えられた足の指の爪が、私の目の前でチラリと輝く。

私は彼女の正面で腹這いになって、両手で左右の彼女の足の裏を擦る。

「うう、ううう……。ム、ムムム……」

たまらない擦ったさに、足の指は反りかえりながら、私の指から逃げだそうとして、更

に大きく足を開いていくことになる。

私は腹這いのまま、にじり寄って、太股に両手をかけながら、鼻先を近づけていった。

ついさっきの、あの狂態――。

私はまだ、よく、その観音様を拝んでいないことに気がついた。

秘仏は御開帳によってこそ、陽の目を見ることが出来る。妊娠中のそれは

まことに得難い秘仏である。

今度こそは、この秘仏をフィルム面いっぱいアップで撮影したいと思った。

私の淫らな意図を察した彼女は逃がれようとして後ずさりするが、それは、はかない努力でしかなかった。後ずさりしただけ、私は這いながら近寄ってゆくだけだ。

カメラのピントグラスいっばいに、その秘仏が麗しくも神々しい姿を、総天然色で正方形にトリミングされている。

私はピントを合わせてから、実物の方へ目をやった。さっきよりも、更に一段と美しさを増

していた。なんという美しさ。なんという複雑な美しさであろうか。

私は、ゆっくりと観察しながら、手を触れてみた。

その美しさと感触に酔いながら、目を彼方へやると、小山のような腹部の盛り上がり、青白い静脈を浮かせながら、神秘的な高まりで激しく上下に息づいていた。

カメラは彼女の肉体のあらゆる個所を、アップで撮りまくった。膝頭の裏に、深く深く喰い込んだ縄目や、反りかえった足の指の爪や、いろいろな形の肉体の部分部分が、フィルムと実物大になるまでレンズを近接させてシャッターを切った。

私の目は、今や、只、眺めているだけでは満足できなくなってきた。

シミ一つない真白な内股。水々しい水蜜桃のような肌に唇を寄せると歯を当てていた。歯を伝って、統のように柔らかくて温い膚の感触が、たまらないほどの美味しさで、私の口中に^{びまん}に瀰漫してゆく。

軽く歯を当て、そして唇で吸ってみる。

場所を変えると、また味も当然、変わる。

M女の膚の味というものは、このように美味なものなのであろうか。

私は狂ったように、噛み舐め、吸い、そして、再び歯を当てていった。

彼女は、顔をのけぞらして、「ううう」と呻いている。上半身をのけぞらすと両方の膝頭が縄で左右に引っ張られて、いやでも太股が更に大きく開いてゆくのだ。

私はカメラを背後へころがすと、今日持参した唯一の責道具である小型パイプを取り出した。この悪魔的な責めの小道具が、M女南加津子に対して、果たしてどのような衝撃を与えるか私は大いに興味があった。

ブーン——という軽い振動音を発した小さな生き物が……次第に、近づいていった。

「ムウ、ムムム、ムウウ」

猿ぐつわの下で呻き声が唸るように聞こえたかと思うと、彼女は、のけぞった。



腹這いになっている私の視線から、彼女の上半身が消え、大きく盛り上がった腹部が、



激しく上下へ波打っている。

膝頭を括った縄は、左右いずれも後手首の縄に連繫してあるため、仰向けにのけぞることによって、強く引きつけられ、今までの八の字の開股から、もう、これ以上は開ききれないというところまで足が開いた。

膝頭に対する強烈な縄の引きつけは、勿論あっただろうが、パイプを片手で操作しながら坐り直した私の目には、彼女が、自分の意志で、自分から、そのように、殊更、足を思いきりひろげているようにしか、思えない開股ぶりであった。

上半身は縄で支えられていたが、首は、がっくりと後へ折れるように曲がり、のけぞった顔は、殆ど背後を見るように反っている。

私は微妙な毛ほどの動きも見逃がすまいと彼女の部分を

じっと凝視し続けた。

内股の白い膚が、ピクピクとケイレンしている。膝頭のところで、二つに折れた胫と足先が、ピンと一直線に伸びたかと思うと、また、内側へ思いきり曲がる。

お臀が、モジモジと回転するように蠢くと彼女は耐えきれなくなって、とうとう、仰向けにドタリと倒れてしまった。

膝頭是一段と左右へ引きつけられて、豊かな肉づきの内股と臀部とが、私の目の前に、むくれ上がったように展開した。

私は歯を、ぐっと噛みしめながら、パイプの操作は、依然として止めない。

今や、南加津子は全身、汗みどろだ。

ムンムンとした熱気が、この狭い密室の中に充満してきた。

なんとという奇麗な肌であろうか。

女性は妊娠すると、このように美しい肌に変化するのだろうか。

シミ一つない白い肌が、しっとり潤いを帯びて、絨のように光っている。皮下脂肪の白さが、そのまま、表面の皮膚にあらわれているような肌の白さであった。

彼女は完全に仰向けに倒れていた。

縛られた後手首を背中の下敷きにして、お

尻の穴までも、天井に向けるような格好で、そっくり返っている。アヌスが、まるで、イソギンチャクのように、きゅうと口をつむったり、息を吐くように口元を弛めたりしているのを、不思議な生き物を見るような気持ちで眺めていた。

と、そのとき――。

突然、彼女の全身が激しくケイレンした。縄をふりちぎってしまいうような勢いで、上半身を悶え、下半身を捻じった。

私は冷ややかな目で、彼女の、そんな没我の境地を、じっと眺めていた。

M女を完全に屈服させて、自分の手中に納めたという満足感が、たまらない快感となって、私の身体の中にひろがっていった。

☆

やがて――。

そんな狂乱のひとときが過ぎると、彼女の全身に弛緩が訪れてきた。甘く、やるせない気分が私の鼻先に漂ってきて、そこはかとな



い哀欲が私の胸をしめつけた。ぐったりと伸びた彼女は、じっと動こうとしなかった。私は、浣腸器と、蠟燭を持ってこなかったのを悔んだ。

堅く、ぐっと口をつぐんだ格好のよい菊花が、朝露に濡れそぼつ可憐な姿さながらに上品に、ほほえみかけている。

「この次には、妊婦の浣腸とローソク責めとをやってみたいナ」
私は、誰に言うともなく、そんな独り言を言っ、やおら立ち上がった。

妊婦の激情

私は、そんな南加津子の姿を、何枚もカメラに収めてから猿ぐつわと縄を解いた。

「今日のプレイは、本当に素晴しかったヨ。あんな凄いのは、最近にはなかったナ。こんなだったら、もっと早く、逢いたかった。見ていて、たまらなくなっただもんネ。貴女もよかっただろう？」

「いやいや、そんなことおっしゃっちゃ。恥かしいじゃないの。あんなところを、お見せしてしまって。私ね、なんでもないとき、そんなお話、聞くの嫌なの。恥かしくて」

「でも、素晴しかったよ。あの、膝を括った縄が、よく効いたもんナ」
「ホラ、そのせいで、こんなんよ」
彼女が身にとったバスタオルを、めくっ

て見せた。伸ばした脚の、その膝の裏に目をやった私は、思わず目をそらしてしまった。

柔らかい肌の皮膚が縄で擦れて、血がにじんだように赤くなっている。

「これは、ヒドイことになったね。こんなに、きつく締めつけていたとは、知らなかった。痛くはないですか？」

「ええ、いいんです。見えないところですから、これ位だったら、辛抱します」

彼女は、そそくさと脚をすっ込めた。

「私は、どうも、この頃は、縄できつく縛るくせがついてしまって、この間も、玉木章子さんを、初めて縛ったのに、凄く縄のアトを二の腕や胸につけてしまって、怒まりましたよ。貴女にも、次からは、白い晒の布を使うとかして、工夫してみましようかね」

「玉木章子さんって、言ったら、箕面におられるとかいう方でしょう。何月号でしたかにカメラで載っていましたわね。きれいな方でしたわ、あの方——。私も、あんな責め方をされてみたいと、思っていましたの」

「しかし、今日の貴女の責められっぷりは、



凄かったですよ。見ていて私も、たまらなかったナ。実に素晴らしい眺めだった——」

「あんまり、そんなことばかり、言わないで頂戴。穴があったら、入りたくなるわ」

「そう、それだったら、こうして、もう一度

縛り直してみるか。今度は変わった縛りだぞ」

私は再び、縄を手にして彼女に迫っていった。たゆたゆとした豊かな乳房が、上下を縄で締めつけられて洋梨のように垂れている。

両足をアグラに組ませて、その揃えた足首に縄を掛け、縄尻を背後の手首に結んだ。

かつて、高村浩子が、私に私信で「坐禅ころがし」にしてほしい——と、言ってきたことがある。私は、そのとき、彼女が、そんな言葉を、どこで知ったのか不思議に思ったが、ついで、彼女に対してそんな責め方をする機会がなかった。

今、南加津子に対して、妊娠した大きなお腹の彼女を、アグラ縛りから、坐禅ころがしのような格好にしてみたいと考えた。

すでに胎動を感じているという大きなお腹を圧迫して、前屈みになった彼女は、いかにも苦しそうであるが、浴衣の紐を口に噛まされて呻き声一つ洩らさず、必死に耐えている。

そんな彼女を仰向けに倒す。



足首を括った縄が引きつけられて足首がグググ……と盛り上がり、後手首が背中の下敷きになって、如何にも痛そうである。

足首が挙がるにつれて彼女の羞恥の部分が坐禪ころがしきながらに、いみ割れたように私の眼前に姿を現わした。

彼女が仰向けに倒れれば倒れるほど、足首は上へ上へと上がってゆく。この海老型の縛りは、普通でも時間が経つに従って苦しさが増す責め方なのだが、今、彼女は、すでに七カ月の胎児を、お腹に宿している身なのだ。

その苦しさは、言語に絶するものがあるだろう。次第に、彼女の額に脂汗が浮かんでくる。淀んだような空気の部屋の暑さもあるだろう。じっとりと、脂汗が

不気味に、額からコメカミにかけて、にじんできくる。

私は、足を挙げて、彼女をコロリと、横にころがす。

「ううう、ううう、うう……」

二の腕に縄が恐ろしいように喰い込み、足首を縛った縄がピーンと緊張する。

息づまるような一瞬――。

彼女の顔に、悦虐の表情が、よぎる。

そして、あからさまに露呈した羞恥の部分にも、悦楽の兆しが、あきらかに、私の目に映じた。

肉体的な苦痛と羞恥が、限らない愉悦と快楽に、すり変わる、ひとときであった。

私は、その微妙な変化を、飽くことなく眺めていた。パッチリとした目が閉じられると顎を突き出し気味にした顔が、のけぞった。

張りきった太股の筋肉がピクピクとケイレ

ンし、足の指が、きゅっと反りかえっているのが私の目に入った。両膝を左右に張って縄で引きつけられた足首を伸ばそうとして、はかない努力を続けている彼女であった。

「奇クサロンに載っていた貴女の文章を読むと、お風呂場で蛇口から水を身体の中へ入れたり蠟燭のローを身にたらしたりしたことを

書いていたね。それを、今から、この格好のまま、やってやろうか？」

猿ぐつわを噛まされているので、口のきけない彼女は、「うううううう」と呻くような声を出して首を左右に振った。

私は胎児への影響を慮って縄を解いた。彼女は自分で猿ぐつわの紐をはずして、「フーウッ」と、深い呼吸をした。

「ああ、苦しかったわ、とっても。胸とお腹が圧迫されるものだから、苦しくて——」

そう言いながらも彼女は解いた縄のもつれを直して、束にしている。その腕の脇から狸の腹鼓のような太鼓腹が顔を覗かしていた。

正直いって、最初、私は「妊婦Vの蛙腹の美しさについては、理解できなかった。」

奇クの誌上を見ても、相当数の「妊婦マニア」という人達がいる。何故、女性の妊娠した腹部に、そんなに魅力があるのだろうか、不思議にさえ思っていた。

それが、初めて、児玉昌子——という若い妊婦の大きな、まんまるいお腹

を見たとき、えもいえぬ魅力を感じた。セックス・アップルさえ覚えたものだ。妊婦のお腹って、美しいなあ——と、思った。昨年、福井桃子の、あの素晴しく巨大な妊娠した腹部を見た。妊娠ということ自体、女性の一生の中で、そう何度も経験することのない異常美の世界である。

胎児を宿して、腹部だけが、あのように膨隆することは、まさに異常であるが、そこには、妊娠という生理的現象を持った女性にだけ得られる不可思議な美しさがある。

以来、私は、福井桃子をはじめとして、中河恵子、富田由美子、増田みゆき、金原加奈子、木戸悦子——と、数多くの若い妊婦を、

この手で撮影してきたが、いずれも、その膨隆した腹部の美しさには心を奪われ、女性生理の不可思議さに魅了された。

羽村京子が、いみじくも誌上で言い放った「蛙腹V」という言葉そっくりの、むくれ上がって、まるでお臍がなくなってしまうような臨月腹を見た。また、「妊孕美V」という言葉そのままの、まん丸くて見事に膨らんだ、芸術品のように惚々とする太鼓腹も見た。

新しい生命を、これから生み出そうとする若々しいエネルギーを全身に漲らせた妊婦の全裸は、まさに素晴らしい芸術品だ。ましてや、そのポイントになる太鼓腹はまさに鑑賞するに足る躍動美を持



っている。

今、私の目の前に身体を横たえている南加津子もまた、七カ月の大きなお腹を晒している。青白く膨らんだ腹部は、如何にも堅そうで、言葉には言えぬ性的な魅力が宿っている。うな微かな、うごめきで息づいている。

「ツワリはなかったですか？」

「ええ、一日か二日、物が食べられなかったときがありましたけど、今じゃ、毎日もりもり食べていますの。だから、こんなに肥ってしまつて。妊娠する前は、もう少しスマートだったんですけれど……」

「なんでも好き嫌い言わずに、どんどん食べられる方がいいですよ。もう、これだけ大きくなったら、赤ちゃんの動きは、よくわかるでしょう」

「足だか手だか、わからないんだけど、時々お腹の皮が、つっぱるように動きますわ。そんなときは、ああ丈夫なんだなあと、嬉しくって、たまりませんの」

「今、彼とは二人っきりなんですか？」

「彼は一人っ子なんですけど、両親はまだ若くて、豊中に住んでいますの。だから、会社の寮に使っていた西宮の家を借りて、二人で同棲したって、わけですよ」

「それだったら、蜜のように甘い、二人っきりの『同棲時代』ってわけですナ。若い人は、自由に振舞えて羨ましいな」

「そんなことはありませんのよ。いろいろと見えない苦労が多くって。でも、毎日、誰にも気兼ねせずに、思いきってプレイ出来るのは楽しいですわ。赤ちゃんが生まれたら、そうも言っておれませんでしょうけれど」

「せいぜい、今のうちに、二人っきりで、思いっきり、プレイでも何でも、楽しんでおくことですナ。それはそうと出産されたあとも、モデルになつて貰えますか？」

「そりゃ赤ちゃんの手が離れましたらネ。私の方から、お願いしたい位ですわ。でも、今日は、彼には内緒で来ましたのよ。まさか、こんなことになるとは思いませんもの」



「私も、最初は話でも伺えたら——という気持ちだったんですが、どうも、貴女に誘発され



てしまっ、妙なことになる
てしまいましたね。いや、と
んだハプニングだ」

「あら、いやだわ。それだっ
たら、私の方から、お誘いし
たみたいで。貴方こそ、ちゃ
んと縄やカメラも準備してこ
られたじゃありませんか。私
あんまり手際がいいのであつ
気にとられていましたのよ」
「いいや、貴女が部屋の隅で
身体をガタガタと、ふるわし
ていたでしょ。それを見て、
私はたまらなくなっちゃっ
たんですよ」

「あーら、恥かしい。私、テ
レビで若い女の人が犯された
りするような場面を見てても
あんな風になりますの。ヘン
でしょ」

「ヘンでも何でもありません
よ。私達にとっては、素晴し
いことです。貴女は、本当に
得難い女性です。私達のアイ
ドルっていうところかな。奇

譚クラブに、あれだけの読者通信や奇クサロ
ンを投稿されるなんて、貴女は貴重な存在で
す。こうして、お逢い出来るなんて、実にう
れしいですナ」

「そんなこと言われたら、穴へでも入りたい
わ。本当は、投稿はもっとしましたの。載っ
たのは、あれだけですけれど。私って、読書
好きなんですのね。別府のお土産物店に勤め
ていたときなんか、三軒ほど先に書店があつ
て、いつも立ち読みですの。週刊誌なんか、
立ち読みで結構、間に合ったわ。奇クだけは
電車に乗って、隣の街まで行って買ってまし
たけど……」

「奇譚クラブに載っていた貴女のあの文章、
あれ、みんな本当のこと？」

「ええ、そうよ。なぜ？」

「いやネ、余り大胆なことが書いてあるんで
作り話かと思ったりして少しは疑いの目を持
ったりしましたよ。家出をしたとか中年の男
の人に誘われて一緒に——とか。それに水道
の蛇口から直接、水を入れたとか、ローソク
のローを落としたとかね。読んでいて、思わ
ず、むくむくっと来るくらい素晴しかった」
「みんな、ホントのことよ」

「だったら、次は何がなんでも、浣腸と排泄

責め、それにローソク責めだナ。縛るのは身体を痛めつけると言うより、手足の自由を奪うのが目的だから、絹紐でも木綿の晒でも、いいわけだ。そのかわり、思いっきり羞恥責めを加えるからナ」

「まあ、怖ろしいこと。私、そんな責めに辛抱出来るかしら」

「辛抱出来るどころの騒ぎじゃない。それこそ、天国へ昇る十三階段ならぬ五十段ぐらいの悦虐が待っているかもしれないよ。SMプレイも、そのくらいにならないと本格的とは言えないものね。貴女だったら、きっと、そこまで行けると思うよ。実際、今日の貴女って、素晴しかったものナ」

「私が今日、こんな責められ方をしたって、聞いたら、彼もハッスルして、私をうんと責めるかも知れないわ。今まではプレイといっても、ほんの真似事みたいなものばかりだったのよ。彼にしても、責める相手が、いつもそばに居たんじゃ、いつでも出来ると思ってズルズルとなってしまうらしいのよ」

「勿体ないね。こんな素晴らしいMの恋人があるたら、手を変え品を変えして、責めまくり汲めども尽きぬ悦楽の泉を味わってみることだね。それはそうと、貴女は筆が立つのだから彼との同棲生活の甘い体験を告白として書いてたら、どうなの？ 奇クサロンに、あれだけの文章を書いたんだから、きっと、奇クの読者から受けると思うがナ。私からも、編集長に言っとくから、是非書いてみたら——」

「そうね。私、今、彼を勤めに送りだしたらで妊娠っていうのだから愛の生活も昨年あたりは相当、凄かっただろうね、きっと——」

「それでもないのよ、見た目ほどには。想像されるのは勝手だけれど……」

「もう時間も余りないんだけど、最後に、こう、大きな乳房とお腹を強調した縛り方をしてみたいんだ。やらして呉れるね」

「いやだと言ったって、やる気なんですよ。縄を持って立っているんだもの」



あとは、家の中でたった一人きりなの。時間の方は、いやというほどあるんだけど、私なんか、うまく書けそうにもないわ。昨年なんでも、暑い日に引っ越してきて、それから、あの森に囲まれた家で夢のように過ごしただけ。なんだか、まだ実感が湧かないわ。ピンと、こないのよ」

「愛の巣の甘い甘いSM生活ってわけだね。同棲して、すぐ第一発

「こんな大人しい縛り方だったら、物足りな
いって駄々をこねると思って、一応、断わっ
てみたんだが、こうした縛り方は写真にした
ら案外きれいなもんだよ。殊に貴女のように
肉づきのよい肌に、こんな風に縄を掛けて、
側面からライトを当てると、乳房、お臍、腹
部という風に起伏が、はっきりして、それは
それは素晴らしいものだよ」

「そうかしら？ とか
何とか言って、また転
がしておいて、ヘンな
責め方をするんじゃないの。何だか、ヘンな
ことをするって、顔に
書いてあるようよ」
「それが、お望みなら
ば、敢て辞しませんか
ね。どうやら、時間の
方が、もう予定数に、
達しかけていますので
残念ながら、この辺で
今日のSMプレイは終
わりにしなきゃ、なら
ないようですナ」
「次には、いつ逢って



下さるの？ 私、月末から六日の日曜までは
ちよっと留守にしますけど、連休明けからは
ずっと家におりますので、いつでも結構です
わ」

「でしたら、貴女のお話を伺いがてら、五月
中に大阪近辺でも、御案内しましょうか」

彼女が入浴している間、私はあわてて後片
付けをやった。なにしろ、四時半から五時に

は帰宅したいと言っていたのが、今や、すで
に、四時三十分を五分ばかり過ぎてている。

洋服を着るのも、もどかしく、あわてて車
に飛び乗ると、直ちに発進した。

緑濃き森に囲まれた広田神社の鳥居前に着
いたのが、五時に僅か前だった。

「今日は本当に楽しかった。じゃ、また来月
になったら電話します。私は五月は十五日以
外だったら、大体あいていますから」

私は、このときになって、五月十五
日に西条紀代と約束していたことを思
い出した。

「今日は大変いそがせまして申し訳あ
りませんでした。では、次にお逢い出
来る日を楽しみに待っていますわ。是
非お電話下さいね。お昼からじゃなく
ても、私、午前中からでも出られます
から、御都合で、十時頃からでも構い
ませんわ。では、さようなら」
「さようなら。お元気で——」

私は車のドアを閉めて、窓から手を
出して振った。樟の太木が掩いかぶさ
るように茂る小道を次第に消えてゆく
南加津子の後姿を見送ってから、私は
車をUターンさせた。
(おわり)

〔体 験 告 白〕

パ ラ の 窓

— < A 感覚に魅せられた夫婦の告白 > —

松 本 芳 夫

はじめに「バラの窓」とは、肛門の内側を外側に押し出して、肛門を、バラの花べんのように開くことです。

私は、偶然なことから、このバラの窓を実際に体験し、また、自分の経験をもとに妻にも実行してみました。これは、その時の告白です。

私は、妻のアヌスを、お湯で洗滌した上バラの窓を、口で愛撫したのです。しかし

(1)

謝国権の著書『性生活の智慧』が、爆発的な売れゆきを示して以来、書店の棚には、亜流の同じようなセックス態位の本が、たくさん、並ぶようになった。

内容は、いずれも大同小異であるが、『性生活の智慧』の木製の人形が、水着女性のモデルに変わり、カラー写真の豪華な装幀になって、露出度も次第に大きくなって来たようだ。しかし、現在のうるさい規制の前には、しよせん、露出にも限度があり、また、男性と女性とは別々の写真になっている。

欧米諸国で、すでに自由売買を認められているポルノグラフィが、日本で許可されたあかつきには、これ等セックス態位の本も、オールヌードの男女のモデルが交わった写真

場所が場所だけに、わいせつと取られる恐れがあつて、肝心な所は詳細に発表できず主に、その過程——浣腸、洗腸などについて書く結果になってしまいました。

なお、私がバラの窓を知ったのは『オーラルセックス入門』という本を読んだためですが、この本の内容や、バラの窓というものを知って貰うために、はじめに、本文引用などで、この本を紹介しました。

になるのではあるまいか。それにしても、同じ人間でありながら、外国人には許されて、日本人に許されないということに、何か割り切れないものを感じるのは、私一人だけであろうか？——そんなことを考えながら、書店の棚に並べられたそれらの夥しい本を見ている中に、私は、「オーラルセックス入門」という一風変わった本を見つけて買い求めた。池田書店発行、Gレグマン著、斯波五郎訳、B六判三一七頁の本である。

一風変わったという意味は、この種の他のすべての本が、普通のセックス態位を扱っているのに対して、「第三の手の愛撫とテクニック」という副題のついたこの本には、第三の手——つまり、口を用いたテクニックだけが書かれていたからである。すなわち、カニリングス（性器接吻）、アニリングス（肛



カット・マエダヒオミ

門接吻)、ポスティリオン(肛門への指の挿入)、また、フェラチオやイラマチオ、はてはスアサントヌフ(いわゆる69)等に至るまで、そのテクニクが、たくさんの図解を用いて詳細に述べられていたのである。

イラマチオというのは、大体の点ではフェラチオと同じであるが、男性がより支配的、能動的な態位での口腔性交のことである。そして、種々なイラマチオの態位や、あるいは射精の直前までは普通であるが、最後の瞬間には女性の口の中に射精をするイラマチオに

適した態位などが、図解入りで詳述されていた。これは、ある事情のため産児調節の必要な私達にとって、大変、参考になった態位であった。

オーラル——すなわち「口」を用いた、いろいろなテクニクの中でも、特に強い刺激をうけた個所があったので、参考までに、次に原文のまま紹介してみよう。



一見、精液をはなやかに受け入れるようにみえて、その実、精液拒否と考えられるのは前に紹介した西欧の性技指導書『肉の楽園』の最後にでている「エロ遊び」をあげることが出来ます。著者は女性の読者に、いきなりつぎのように話しかけています。

「ああなたの恋人に(それは、わたしでも彼氏でもあなたの好きな人をお選びになればよいが)、正義の王ソロモンが発明したより、はるかに残忍さの少ない方法で、わたしが赤ん坊を半分に切るのを見たくありませんか」ときいてごらんなさい。そういわれた恋人がわたしでなければきっと、そんなことを考えるのは気がいだというでしょう。しかし恋人はたいへんな感違いをしているのです。つぎにその証拠をお目にかきましょう。

彼の肛門に深く指を入れて、いじりながらできるだけ上手にそれを吸ってやりなさい。あなたの恋人は、あなたをきっと捕えて、やがて射精します。そうしたら、あなたは精液の最後の一滴までをのどの奥まで入れるのですが、飲みこんでしまったはいけません。

さて、これがむずかしいところですが、あなたは、まだ生あたたかいこの精液を両方の鼻の穴から、宙に吹きあげるのです。オルガスムのうちに、あなたの中に注ぎこまれた恋人の「生命の液」が、あなたに与えたいといってもいい赤ん坊は、こうして二つ鼻の穴を通して、きれいに、半分にされてしまうわけです。V

これは、今でもフランスの淫売婦が、冗談半分に、あるいは「特技」として行なっているもので、彼女たちは、さらにこの二つにされた精液を舌で捕えようとさえします……。(以下略)



この他、三十人の男性が順次、肛門性交をして作る「エロチックな人間くさり」の話や外国の、フェラチオを職業とする女性の、高度なテクニク等、興味のある話が数多く載せられているので、読者の皆さんも、ぜひ購

読されるよう、おすすめる次第である。

この本の中で、私が最も興味をもったのは「アニリングス」や「ポステイリオン」等の肛門愛撫の項目であった。次に本文の一部を引用してみよう。



バラの花べん——どんな位置でもよい。女性の足を大きくひろげ、尻を両側に開いて押しつけ、舌が肛門をあらくなめられるようにする。これは、もっとも簡単な型であり、肛門の敏感な組織に対して舌の面がうける感覚を中心としたものである。

靴——肛門がある程度ゆるんだとき、舌先を中に押し入れその内面をマッサージする。四本の指か親指で外面をさすりながら舌を円く動かす。

煙突——尻が両側へ十分開いたとき女性は肛門の内部の筋肉をゆるめたり、しめたりして舌先を押し入れたり押し出したりする。

バラの窓（ロゼット）——尻が両側に十分に開き、下腹にそりを入れて肛門筋を下へ押すと、肛門がバラのように開く。肛門の入口の内面が、外にむくれ出て、いくつにも分れたロゼットのように、四つの小さな乳首のような形になる。これはアニリングス愛好者に

とって非常に刺激的なものであって、女性にとっても、めずらしい感覚を与える。こうすれば肛門をかるくかむこともできる。

ポステイリオニング——

1. 一本の指で……を激しくくすぐりながら、同時に肛門をなめる。
2. 親指（二本の指を使ってもよい）……に出し入れしながら肛門をなめる。
3. ……をなめたり、吸いながら肛門に指を入れる。
4. 親指と人さし指を腔と肛門に入れ、その中間部を強く押して……を吸う。そのとき親指と人さし指は出し入れする必要はないが、会陰部の肉を強く刺激するように前後にゆする。これは、ボウリングのボールを握るのに似ているため「ボウリング握り」とも呼ぶ。……（以下略）

(2)

さて、私は、はからずも偶然なことから、この「バラの窓」を実際に体験する、はめになったのである。

『オーラルセックス入門』を読んで、すぐ後私は入浴をした。体じゅうに石鹸の泡を塗りながら、先程、読んだ刺激的な文章を悩まし

く想い返している中に、フト、肛門に指を入れてみたい衝動に駆られたのである。恐る恐る試みてみると、石鹸の泡が恰好な潤滑剤となって、何の苦もなかった。

私はこれまで、肛門の内側には、すぐには便があるものと思っていた。しかし、このオーラルセックス入門には、「便意を催す時以外は、直腸には、まったく便がないのが普通で便意は、便が直腸にさがって行く時に、直腸神経に作用して起るものである」と、述べられている。成程その通りで、指先には便は、まったく触れず、ただ、肛門内部の分厚い筋肉の層が、ギュッと締めつけるばかりであった。

指を、軽く動かしてみた。何ともいえない異様な感触があり、妖しい戦慄が、全身に走り抜けるのを覚えた。

しかし、この時には「バラの窓」を試してみよう等という考えはなく、数回、異様な感触を試してみただけで、指先を洗い清め、ついで体を洗いはじめた。ところが間もなく、強い便意が襲って来たのである。

（弱ったぞ、どうしよう）

私は迷った。

最近の家屋は、浴室とトイレは同じ場所か

又は隣接して設けられている場合が多い。しかし、私の家は古いので、トイレは廊下を通り抜けて、反対側の一番はずれまで行かなければならない。今から体を拭いて浴衣を、はおり、トイレに行くのは面倒であるし、その上、到底、間に合いそうもない。

(エイ、ままよ)

私は覚悟を決めた。このまま浴室で処理して、排泄物は排水口に流してしまおうと考えたのである。下のタイルに落としては、後の始末が厄介なので、汚い話で大変、恐縮であるが、石鹼の泡をつけた掌に直接、受けて捨てようとした。

ところが、出ないのである。強い便意はありながら、いくらいきんでも、便は一向に出ようとしなかったのであった。私は、催促するようになり、肛門を、まさぐりながら尚も、いきんでみた。すると——驚くべきことが起こった。肛門の内側が、むくれ出して、大きく、外側に出はじめたのである。

「オオ！　これが、あのバラの窓か！」

私は、秘密を探り当てた思いであった。

若しも、私があの本を読んでいなかったとしたら、異常な刺激を加えたり、無理にイキんだりした事から、脱肛にでもなったか？

と、心配したことであろうが、その方の知識があったので別に心配はしなかった。もっとも、『オーラルセックス入門』を読まなかったとしたら、肛門を刺激する等ということもしなかったであろうが。

私は尚も、いきんでみた。肛門は、内側から完全に、むくれ出して、まるで満開のバラの花弁のようになつた。大きさは、ちょうどピンポンの球を半分にした位である。石鹼の泡をつけた指で調べていると、不思議な快感が全身に走るのを感じた——。

石鹼を、よく洗い流して、内側に押し込むように、指でソツと押えると、すっかり元のようになり収まっていった。

結局、便意だけで便は、まったく出なかったのであつた。

便意というのは、便が直腸にさがってゆく動きが、直腸神経に作用して起こるもののようだが、石鹼をつけた指先で、直腸を刺激したために、便がないにもかかわらず、便意だけが起きたものである。また、石鹼の水溶液は、浣腸用として使われている位なので、指先に石鹼をつけていたことが、便意を、より一層、強くしたのかもしれない。

こうして、フットしたことから『バラの窓』の秘密を知った私は、その後、入浴の時に、何度かバラの窓を試みている中に、何時しかその妖しい感覚に、すっかり魅了されてしまったのである。

それは、私にとって、体じゅうがジーンと痺れるような不思議な悦楽であつた。私は、その悦楽のとりこになって、A感覚の世界に感嘆していったのであるが、やがて妻にも、このA感覚の快感を知らしめ、そのよろこびを分かち合えたら——と、考えるようになったのである。それは妻をよろこばすと同時に私自身のよろこびでもあり、熾烈な願望でもあつた。大きく飛び出した妻のバラの窓を、口で愛撫することができたら、どんなに素晴らしいだろうと思つた。

もっとも、私にはコプロ趣味はないので、妻のバラの窓を愛撫するためには、事前に浣腸を施して腸内を空にさせる必要があつた。その上、腸内に微温湯を送りこみ、排泄、注入を何回も繰り返して、よく洗うのだ。

お湯が透明になるまで、完全に洗腸を行なえば、妻のバラの窓を口の中に吸いこんで、愛撫することも可能であろうし、舌を、アヌスの中に深くさし込んでも、少しも不潔では

イメージギャラリー 『美容術』 岡たかし



ないと思ったのである。

私達夫婦は、すでにSMプレイを行っており、妻もそのプレイの中に、ひそかに被虐の悦びを感じはじめているようだ。後手高小手に縛りあげ、股間縄をかけた上、乳房を

責めぬいたり、また、縛ったまま浣腸責めなども行なっているのだ、洗腸をして、バラの窓を愛撫することも、そう困難ではないと思つた。そして私は、とうとう、この計画を実行したのである。

(3)

寝室の敷布団の上に、妻は、一糸も纏わな
い生まれたままの姿をさらして、浣腸ポーズ
をとっている。

俯伏せになって、両腿を大きく開き、両膝
と胸で体を支えて、お尻を高く突き出して
いる。両腕は後ろに回されて背中を手首を一つ
に縛られ、縄は、乳房の上と下に、二巻きず
つ掛けられて、後ろ手の結び目と、固く一つ
にされている——。見るも無惨な、羞恥の姿
だ。

首を横に曲げて、顔をこちらに向けていた
が口はパンソウコウの猿ぐつわで封じられて
いる。このパンソウコウは、幅七厘もある荷
造り用のもので、鼻の下から、あごの下まで
顔半分をピッタリと覆いつくして、発声の自
由を完全に奪っている。もう、すっかり観念
しているのであろうか。妻の眼は、静かに閉
じられたままである。

私は、妻の後ろに回った。

五十ccガラス製浣腸器に、五十%グリセリ
ン液を、いっぱい吸いあげて、一気に注入
した。

「よし、そのままの姿勢で、五分間、辛抱を

するんだ」

注入したあとに、小さなバンソウコウを貼りつけながら、私は命じた。

しばらくすると、ゴロゴロと、かすかに腸が鳴り出した。

「ム、ム、ム……」

妻は、鼻孔から切ない呻き声を洩らし、尻を、モジモジと動かしている。いっばいに見開かれた眼がこちらを見て、しきりに、何かを訴えているようだ。多分（もう苦しくて、我慢できないわ、早くトイレに行かせて）と訴えているのであろう。

「まだまだ……二分しか、たっていないじゃないか。あと三分！」

腕時計を見ながら、私は、冷たく突き放すように言った。

——それから、秒針が二回、廻った。呻き声が急に高くなり、私を見つめて哀願を続けている眼の色が、必死になって来た。

「よし、もういいだろう」

後手に縛ったまま歩かせて、トイレに引き立て、菊に貼りつけてあったバンソウコウをはがしてやる。

すでに限度に達していたのであろう。妻は便器を跨ぐや否や、ドツとばかりに排泄を始

めた。夥しい量の排泄物と共に、特有の臭気、あたり一面に充満する。羞恥にまみれた後手の掌は、固く握られていた。

ペーパーで深めてやったあと、そのまま体を押して、こんどは浴室へ引き立てる。ヒヤリとした廊下を、妻は俯向き加減に、シオシオと引き立てられてゆく。

浴室に連れこむと、自分も裸になり、縛めのままの妻の全身に、石鹼の泡を塗って、ていねいに洗った。タオルは使わず、石鹼の泡に包まれた肌を直接、掌でこするのである。マシユマロのように、フワフワと弾力のある肌理の細かい肌は、石鹼の泡のため、いっそう滑らかになり、快い感触が、掌に伝わって来る。

くすぐったいのであろうか。妻は、しきりに体をくねらせて、悩ましそうに身悶えをしている。

「もっと、脚を開いて——」

跪かせた両膝を、大きく開かせて、浣腸で汚れた部分を、特に念入りに洗う。さり気なくアヌスを刺激してやると、ビクン、と、電気に打たれたように体を震わせた。

洗い桶にお湯を汲んで、ザブザブとかけ、

石鹼を流し去ったあと、妻の体を泡きあげて浴槽に入れ、一緒にお湯に漬かった。

私のすぐ眼の前に、妻の乳房がある。

上と下に掛けられた縄のために、乳房は、無惨に絞りあげられて、ポッコリと、大きく飛び出している。いつも使い慣れている柔らかい綿ロープであるが、お湯を吸って固くなり、指も入らない程、きつく、柔肌に喰いこんでいる。

私は、その飛び出した乳房を、両手で鷲づかみにして、激しく揉みあげ、指先で乳首をいたぶってやった。

「どうだ、感じは？」

「ム、ム、ム……」

猿ぐつわで覆われた顔を、大きくのけ反らせて、妻は悶えた。ヒクヒクと動く鼻孔が官能的である。浴槽のお湯で温められた上、乳房をいたぶられて、体の芯から噴きあげる熱い疼きに、妻は、すっかり上気しているのであらう。きびしい猿ぐつわの中で、切なそうに喘いでいる。

妻の体を抱いて浴槽から出し、タイルの上に横たえた。滑らかな肌は、すっかり、ゆであがって、美しいピンク色に染まっている。いつもは、浣腸と、それに伴う排泄だけで、

おしまいなのであるが、今日は、これから、腸内の清掃を行なわなければならないのだ。

真赤な布を、シェードの代りにして、浴室の電灯を覆った。

たちまち、浴室は幻想的な赤い部屋になった。妻の体も真紅に染まって、一種異様な雰囲気がかもしだされる。これから始まる悪魔的なプレイに、ふさわしいムードだ。

SMプレイは、ムードが大切である。特に浣腸責めなどの場合、天然色では、あまりにも生々しすぎるが、照明を変えることによって雰囲気を変え、夢幻的なムードを作りあげるのである。

(4)

「これから、お湯で腸の中を洗うから、浣腸ポーズをとりなさい」

サイケ調の色彩に、羞恥心も麻痺したのかあるいは抵抗しても無駄と諦めたか、妻は従順に跪いて、浣腸ポーズをとった。両手を後手に縛られたまま、大きく開いた両膝と胸で体を支え、尻を高く上げる、いつもの浣腸ポーズだ。

プラスチック製の洗い桶に、お湯をいっぱい汲みあげた。千ccは楽にあると思われる。

エネマシリンジのゴム管の端を、ポリ容器の中に投げ入れ、私は、中間の球を押した。

ポリ容器のお湯は、みるみる中に減ってゆきやがて全部、妻の腹中に納まっていった。横から見ると、ポツリとふくれた腹が、重たげに下に垂れ下がっている。

よほど苦しいのであろう。妻は、眉をひそめ、鼻孔を大きく開いて、苦しそうに呼吸をしている。

「さあ、この中に出すんだ」

妻の体を引き起こして、ポリ容器の上に、しゃがませ、直経一、五種、長さ十種ほどの短いゴム製パイプを、嘴管同様に使ってやった。つまり妻の括約筋は、自分の意志とは無関係に、全開にさせられた訳である。パイプを通った液体は一本の水柱となって、激しい勢いで落下し、間もなく、注入した量と殆ど同じ量の液体が、ポリ容器の中に溜まった。

浣腸責めは、かなり前から行なっているのだ、相当の回数になるが、排泄時の羞恥は、何回、繰り返しても慣れるということはないようだ。妻は何時か、せいぜい排泄を我慢してしまうのである。妻が我慢できなくなるまで待つてはられないので、パイプを使って、いや応なしに、強制的に排出させてし

まったという訳である。

電灯のシェードを外して、排泄された液体を調べてみる。

液体は、濃い黄色に染められているが、先ほど浣腸をしているので固形物は殆どない。わずかに、小さな塊が二、三浮遊している程度である。

「ホラ、こんなに色がついている」

ポリ容器を眼の前に差し出してやると、妻は羞恥に全身を染め、慌てて眼を外らす。

ポリ容器の液を排水口に捨て、お湯をザブザブと流してタイルを清め、また、ポリ容器に新しいお湯を汲みあげた。電灯に、シェードの布をかけ、再度エネマを使って、せっせと注入をはじめめる。

「ムム、ム、ム」

パンソウコウの猿ぐつわのために、声は出せないが、苦しそうな呻き声が、絶え間なく鼻孔から洩れる。

お湯を全量、注入し終わったあと、また、パイプで排出させる。シェードを外して色を見ると、ごく薄い色になっており、固形物も全くない。

「大分きれいになって来た。もう一回、洗えば完全にきれいになるだろう」

エネマの球を押すのは手が疲れるので、こんどは水道の蛇口に連結したゴムホースで、直接、送り込むことにした。

ググツという手ごたえがあり、水が奔流と成って、腸内に流れ込んでゆくのがわかる。そのまま手に力を籠めて、私は、ゴムホースを、しっかりと押えていた。グーンというゴム管を流れる水の音が、かすかに聞こえる。四十秒、五十秒――、妻の腸内には、相当の量の水が入った筈である。

呻き声が、ひととき高くなって、妻の体が激しく揺れた。もう限界のようだ。ゴムホースをはずすと、アヌスから、ピュツと小さく水が噴き出した。

グツタリとなった妻の体を抱き起こして、三度、ポリ容器の上に、しゃがませた。下から突きあげるようにした例のパイプから激しく水が迸って、ポリ容器に溢れた。二千cc以上は確実にあると思われる。色は全くなく、きれいに透きとおった水であった。

もう、大丈夫である。この位、完全に洗腸をすれば妻のアヌスは少しも不潔ではない。こうして、すっかりきれいになった妻のアヌスに対して、私は前に紹介したようなバラの花べん、靴、煙突、あるいは、ポステイリ

オン等を、順次、行なっていたのである。

妻は、はじめは城門を固く閉ざして、はかない抵抗を続けていたが、私の、舌と唇と指の執拗な攻撃に、城門は、次第にゆるんでいった。そして、遂に全面的降伏――開城をするに至った。私は、妻を完全に征服し『バラの窓』を開かせることに成功したのである。

丸く、可愛らしく飛び出した『バラの窓』は赤い照明のため真紅に染められて、ちょうど、熟れたイチゴのようであった。私は、この悩ましくも甘美な果実を、口いっぱい、ほおばり、吸い込み、舌と唇とを使って心ゆくまで賞味したのであった。

アヌスをなめるなどという事は、考えてみれば、すこぶる被虐的な行為である。かりに強制的になめさせられるとしたら、これ以上の屈辱は、あるまいと思う。

しかし私は、自分のプライドを損うことな^{そこな}く、この行為を実行した。すなわち、妻を縛って、自由を奪った上、私の方から強制的に『バラの窓』を開かせ、愛撫したのである。

この上ない屈辱的、被虐的な行為を、妻を縛りあげ、自由を奪って加えることによって、被虐行為を、加虐行為にと、すり換えたのである。妻も、自由を奪われてのことだからこ

そ、マゾヒスティックな精神的快感と、肉体的快感を同時に味わい、恍惚として、夢見心地の陶酔境に浸っているようであった。

このプレイの後、妻は、恥かしそうに、次のように述べた。

「はじめは、とてもショックでしたけれど、慣れると、すごくいい気持ちになったの。それは、もう何というか、背髄がとろけてしまいそうな気が遠くなるような気持ちなんです」「そうかい。それじゃ、これから度々やってあげようか」

「でも、あなたに、あんな所をなめさせるなんて……何だか悪くて、とても申し訳ないという気持ちがするんです。けれども、縛られてムリヤリにされると、私は縛られてしまつて、もう、どうにもならないんだわ」と、諦めがついて、受け入れ易いんです。それに、お乳を可愛がって貰う時もそうですけれど、縛られてされた方が、身体がギュツと締めつけられて、いっそう気持ちがいいんです。ですから、これからはプレイの時には、縛ったまままで可愛がってちょうだい」

苦勞した甲斐があつて、どうやら、妻はアヌスの悦楽に開眼したようである。

その後、妻の『バラの窓』を愛撫するとき

は、何時も、体の自由を奪って行なった。後ろ手に縛りあげ、猿ぐつわをかませたまま洗腸を行ない、アヌスを充分にきれいにしたら、口で愛撫したのである。

括約筋の、ゆるめ方が分かり、A感覚の快楽を知った妻は、プレイの度に、何の抵抗もみせず、むしろ、すすんで「バラの窓」を開くようになった。括約筋を、たくみに動かして、満開のバラの花べんのように、肛門のへりを外に押し出すのである。

それは、すごく強烈な刺激があった。ムクムクと、うごめき、みるみる中に内側から、むくれ出すバラの窓——それは何か不思議な得体の知れない別の、いきものようであった。私達は、めくるめくようなA感覚の快楽に、官能をばげしく揺さぶられて、恍惚と陶醉の桃源郷に引きこまれていった——素晴しきかなA感覚！素晴しきかなバラの窓！バラの窓の愉悦を知って私達の夫婦生活も、文字通りバラ色になっていったのである。

△後記▽

新宿駅東口から、甲州街道を西へ十分ほど歩いた所に、ポルノ・セックスの用品を売る店があるのを、週刊誌の広告で知り、数日前に行ってみた。



(洗腸記)
洗手

私は今年二十一才になる女子学生です。二年程前に、お友達から洗腸を教えられてから、便秘するのが楽しい気持ちになってしまいました。

でも、独りで秘かに洗腸するのは、つまりません。だから、とっても羞かしかったのですが、やはりお友達に教えてもらい、街の診療所へも行くようになりました。

ほんの数回しか洗腸をしてもらっていたのですが、夢のような気持ちで洗腸を受けたのです。

四月中旬の小雨の降っている日でした。ひっそりとした住宅街の中に建っているT医院です。入口に掲げてある看板に「女医」と替ってありました。出来ることなら女の先生の方が、と思って、このT医院を選んだのです。

「お腹が張って、苦しいんです」

「そう、便秘なのね。何日位？」

小肥りの色の白い、やさしい女医さんでした。

「六日ほどです」

「ああ、六日だと、普通の洗腸じゃダメだ

診療所通い

松田恵子

わね。高圧洗腸しないと。ここでは高圧洗腸は出来ないのよ。この先のK医院へ行つて、洗腸してもらいなさい」

「あのおう、普通の洗腸で……」

「普通の洗腸じゃ効かないわよ。あそこは外科をやっていますから、高圧洗腸も出来ますよ。高圧洗腸してもらったら……」

「高圧洗腸って言いますと？」

「手術前に使う洗腸なの。でもこれ位の長い洗腸器でする時もあるわ。道順を書いてあげるから洗腸してもらってらっしゃい」

私はK医院へ行つて、念願の洗腸をしてもらいました。男の先生から、六日間もお通じがなくて放っておくなんて、と叱られました。ベッドのある別室で看護婦さんから、お尻へカテーテルを入れて洗腸されました。

大量の排便があつて、嬉しいような羞かしいような気持ちでした。

翌日、洗腸のお友達の林初子さんに、そつと告げました。

「私、きのう、されたのよ」

「あら、洗腸されちゃったの、誰に？」

ホモ、レズ、S M等に関する書籍や写真、小道具類が、店内いっぱい並べられているのに眼をみはってしまった。奇巧誌のバックナンバーも、抜け目なく揃えてある。

商品の一部を紹介すると、スポンジ製コケシ、女装用の衣類、縛り用ロープ、さまざまな種類の皮むち、皮製の乳カセや貞操帯もある。また、イルリガートルやエネマシリンジあるいは、ガラス製の浣腸器から、開口器、額帯鏡、子宮鏡、腔鏡、導尿管等の医療器具もあった。マニヤにとっては、誠に嬉しい店である。特に私の興味をそったのは、肛門鏡、肛門拡張器、括約筋検査鏡、アナルバンド、アナルスポイト等の肛門用器具であった。この時は、様子を見に行っただけなので品物は買わずに帰って来たのであるが、私の夢は、大きくふくらんで、すっかり楽しくなってしまった。私の願望は、これらの肛門用器具を使って妻のアヌスを、思う存分、責めてみたい——ということである。最近、妻は責められることに悦びを感じはじめているようなので、妻も多分、このプレイに協力してくれるものと思う。このプレイが首尾よく成功した場合、その結果については、また、稿を改めて報告したいと思っている（おわり）

「いや、内緒よ。お医者さんへ行ったの」「そう、楽しかったでしょう。私も恵子と一緒にいったら、よかったわ」「学校の医務室でも、浣腸してくれるかしら？」

「してくれるわ」

「本当？」

「うん、多分ね。私も、してもらったことがあるもの」

「初子さん、保健婦さんに、どんな浣腸されたの？」

「グリセリンよ。普通のガラスので。たいてい、そうよ」

「やっぱり、便器、入れられるの」

「ううん。そりゃ、おトイレへ行かせてくれるわよ」

そんな雑談をして、私は初子さんと別れました。

A医院でのことでした。

便秘だと告げたので、私は浣腸をされるのだとばかり思って訪れたのです。

「便秘だったわね。便秘は病気ではありませんから、余り気になさらない方がいいですよ。松田さんの便は、細い方ですか、太い方ですか？」

「わかりませんけど……」

「じゃ、誰も入ってこないと思いますが、

こちらのベッドに、横になって下さい」私は、生まれて初めて座薬というものを使用されました。

「今は、あなたみたいな体質の人に、よく効く薬があります。痔のある人にも使うのです。肛門から入れて十五分ぐらいするとお通じがあります。浣腸と同じぐらいの効果がありません」

やはり私には、座薬を肛門に挿入されるよりも浣腸される方が楽しいです。

学校の帰りに立ち寄ったY医院でのことです。

「一週間ぐらい、お通じがありませんの」

「浣腸しましょう。そこに横になって、お腹を出してみして下さい。張っていますね。お薬は飲みましたか？」

「いいえ」

「では、向こうむきになって、お口をあけて、楽にしていして下さい」

私は初めてイルリガートルでの浣腸を受けました。そして、診療室で便器の中へ排便させられ、お医者さんに、その便を検査されました。勿論、何も病気はなかったのですけど、あんな恥かしかったことはありませんでした。もう二度と、Y医院へは足を向ける気はしません。でも私は、また新しい診療所通いをしようと思っています。

カット・岡 たち



腰のあたりを誰かに棒切れか何かで小突かれていた夢を見ているうちに、体が揺れはじめて、仙太郎は次第に、うたた寝から覚めていった。

公園の水飲み場で、たらふく、水を飲んでひもじさをごまかし、人目につきにくい場所を選んで芝生に寝ころんでいたのだが、いつの間にか眠ってしまっていたらしかった。

薄目を開けてみると、顔が触れそうな近さに、皮製らしい黒いパントロンの裾と朱いハイヒールが見えた。一瞬、妻に見つかったのか、とギクツとしたが、あの陰気な四十近い妻が、朱い靴など履くはずもなかった。

「やっ、お目覚めのようね」

聞き憶えのない声に話しかけられて、片手で陽の光を遮りながら

マゾストーリー

天国への途

沖 圭 介

女の姿を見上げてみたが、仙太郎は直ぐに起き上がるだけの元気はなかった。

棒切れで腰を小突かれる夢を見たのは、朱いハイヒールの爪先で蹴られていたのかも知れないと気がついて、腹を立てる気力も失っていた。ただ、相当な値で売れるはずの、まだ新しい洋服が、女の靴で、売値にひびくほど、汚されてしまったのではないか。それだけが気がかりだった。

「とにかく、起きなさいよ。犬のよう寝そべってちゃ、話も出来やしないじゃないの」

「それもそうだね」

相手が自分を探しに来た者ではないらしい気配に、ひとまず安堵すると、仙太郎は面倒くさそうに、モソモソと立ち上がったが、洋

服の、蹴られていたらしい処を何度も手で払ってから、改めて女を見直して驚いた。寝そべったまま見上げていたのでは判らなかつたが、まともに向き合ってみると、何処となく妖艶な雰囲気漂う美しい女性だった。

どう見ても三十を越しているとは思えず、吊り気味の切れ長な目と、細く通った鼻すじに冷たい感じがないでもないが、銀ラメのセーターと黒のパンタロンが、その美貌に、よく似合っていた。やはりパンタロンは光沢のある黒の表皮で仕立てた物で、オーダーなのだろう。腰まわりから膝の少し上のあたりまで、身に合いすぎるほどに、ぴったり貼りつき、熱れきったヒップの丸味を、そのまま現わしているのが、艶めかしかった。

ミニスカートを片隅に追いやるように、街を闊歩するパンタロン姿の女性が殖えたとき、仙太郎も軽い失望を感じた男共の中の一人であったが、腰から下股へかけての惱ましい線を堪能出来るのはやはりパンタロンならではあった。見まいとしても、黒皮に包まれた女の腰のあたりに視線を吸い寄せられてしまう、仙太郎の目の前に、

「皮に興味をお持ちなのかしら？ 井波仙太郎氏は」

女は手にしていた新聞を突きつけてきた。

「――」

出し抜けに自分の名前を口に昇されて、ギョツとしたが、まるで訳が判らず、仙太郎が顔を見返すと、

「驚いたようね」

「――」

「フッフ。種明かしは、此处よ」

女は可笑しそうに含み笑いをしながら、新聞記事の一カ所を指さしてみせた。

それは尋ね人の欄であった。

ご存知の方は、ご連絡を乞う。と、妻の住所氏名が記され、不鮮明な彼の写真と、容貌体格や服装の特徴が、指名手配書よろしく書きならべられていた。

「ぼくじゃない、なんて、いくらシラを切ったって駄目よ。眠っている間に充分、観察していたんだから……。でも、写真より実物の方が、ずうっとイカスじゃない。ハンサムだし、四十五才とは、とても見えなくてよ」

「そ、それで、家内の方へは、もう連絡なさってしまったのでしょうか」

目の前に立って、じっと自分を見据えている美しい女性の存在が急に恐ろしくなり、仙太郎は自然と言葉つきまで改まっていた。少し誇張していえば、自分の運命を握られてしまっているような気さえたのである。

「さあ、どうだか」

うろたえる仙太郎に、女は意地悪く片頬で、ほほえんでみせるだけであった。

「もしまだなのなら、どうか連絡しないで下さい。温泉町で、ゆっくり体を休め、今朝この街へ着いた途端、駅の雑沓で有金全部に手荷物のチッキまで拘られてしまって直ぐにはお礼のしようもありませんが、その代り、ぼくに出来ることならなんでもやります。どうしても口止め料を出せとおっしゃるなら、働いて、たとえ少しづつでもお払いします」

仙太郎は思わず彼女の足もとに土下座すると、芝生に額を、こすりつけてしまった。

家つきの娘と結婚して、二十年の間、働き蟻のように洋服の仕立職に励んできたが、妻と妻の両親に、未だに養子扱いを受けねばならないのが情なかった。男盛りの四十代の半ばになってまでも……と思ったとき、ふと魔に見入られたように家を出る気になった。ふだんから、子種もない甲斐性なしと姑に陰口を叩かれていたのを耳にしていたが、蒸発するつもりになってみると、妻との間に子供のなかったことが、彼の気持を軽くした。日雇い人夫になっても、二度と帰りたくはない妻の家であった。

女は、そんな仙太郎の心を見透かすように、急に傲慢な態度に変わった。自分の足もとにひれ伏している仙太郎の頸にハイヒールの爪先を掛けて、顔を仰向かせると、

「仮に、わたしが奥さんに連絡しなくっても、そんな調子で街をウロウロしてたら、この新聞を見た誰かが気づいて、知らせるかも知れなくってよ」

半ば脅かすように言った。

地ベタに土下座して、女に靴で顔を上げさせられている自分の情ない姿を嘆きながらも、仙太郎は初めて気がついたように、目だけを動かして、辺りを見まわしてみたが、幸い附近に人影はないようだった。

「なによ、今更、急に慌てて……。馬鹿ねえ。いまは誰も見てやしないわよ。わたしが言ってるのは、これから先のことよ。スラム街へ身を隠したって、お金が貰えるとなれば、誰だって奥さんのところへ連絡するわよ」

「じゃ、一体どうすれば、いいのです」

年甲斐もなく、心もとなげに女の顔を見上げて、助けを乞う表情になった仙太郎に、

「さっき、なんでもしますって言ったわね。もし、それが本当ならどうやら、あなたが気に入るそうだから、わたしが飼ったげてもいいわよ。丁度、一寸、不自由してるところだから」

彼女は冷たい笑みを浮かべて言った。

「いま、なんと言われました？ 飼うとおっしゃったように聞こえたのですが」

「そうよ。たしかに飼ったげると言ったわ。そうねえ、あなたの常識に合わせて言えば、わたしのマンションで使ったげることになるのかしら」

「ほ、ほんとですか？ 世間の人に顔を見られないで済むのなら、どんなことでもやります。四十は越していますが、体力には、まだまだ自信がありますから、どうぞマンションに置いてやって下さいお願いします」

女の家庭が、どのようなものかは判らなかったが、全責任を負わされながら養子として冷遇されるより、仙太郎には住み込みの使用人になる方が、いっそ気楽に思えた。しかも相手は、妻など較べものにならぬ肉感的な美人なのである。

「ご家族は何人ほどいらっしゃるのでしょうか。ご主人は気難しい方じゃありませんか」

「働く気があるのなら、そんなこと問題じゃない筈よ。マンションへ来れば判るじゃないの。それより、わたしは人使いが荒い方だから、テストしてみなければ、いけないわね。あなたが堪えられるか

「どうか」

「大丈夫ですよ。これでも軍隊で、こき使われて、さんざん苦勞してきたのですから」

芝生の上に坐り直して仙太郎が胸を張ってみせると、

「じゃ、テストの第一として、いま直ぐ、わたしのハイヒールに接吻してごらん」

彼女は仙太郎の頭に手を置いて体を支えながら、左足を彼の顔の前に差しのべてきた。

「……」

男を男と思わぬような馬鹿げた注文に彼がためらっていると、

「どうなのよ。するの、しないの」

じれったそうに、ぴくりと持ち上げられたハイヒールの爪先が、仙太郎の鼻を、ぐいっと押した。

「やります」

女が履いたままのハイヒールを、両手に捧げ持つようにして、目をつぶると、仙太郎は思いきって、その朱い靴の甲のあたりに唇を押しつけた。

そんな彼の動作を満足げに眺め降ろしていた女は、

「いいわ。じゃ、わたしに従っておいで」

自分の靴に接吻させることが、契約書にサインする代りでもあるかのように、言葉つきまで変わってしまい、振り向きもせず、先に立って歩きはじめるのだった。

女のあとにしたがいながら、仙太郎は気づかれぬように幾度も唾を吐いたが、いつまでも口のなかに砂か土が残っているような気がしてならなかった。だが、黒皮の光沢に包まれた豊満なヒップが、

左右に揺れ動くのに目を惹きつけられて歩いてゆくうちには、いつか屈辱感は薄らいで、この蠱惑的な女性と一つ家で暮すことに、ある種の好奇心が芽生えはじめていた。

— ○ — ○ —

彼女の住居は、マンションの最上階の十一階にあった。

ドアを開けて中へ入ると、半畳ほどの玄関に突っ立ったまま、女は仙太郎に何か命じるように目くばせした。

「どうするのですか？」

「靴を脱がせるのに、決まってるじゃないのよ。初めてだから教えとくけど、わたしが外出するときは、必ず足もとに跪いて靴を履かせ、帰ってくれば脱がせるのが、お前の役目よ。そして、わたしがいつ、どの靴でも履けるように、日ごろから充分に手入れ、しなくては駄目よ」

言われた通り、彼女の足もとに片膝をついて、まるで女王さまに仕えるようにハイヒールを脱がせてから、仙太郎が手についた土埃を払っていると、

「なによ、汚なそうに。いやなら、いいんだよ。飼うのやめるだけだから。直ぐ出てお行き！」

女は本当に追い出しかねない剣幕で睨み据えた。

「いやじゃありませんよ、決して」

仙太郎は慌てて自分も靴を脱ぐと、乱暴に脱ぎ棄てられてあったスリッパを両の掌に捧げて、また跪き、彼女が足を入れるのを待った。一文なしの身の上で、夕方近い時刻になってから、空き腹をかかえて追い出されては、たまらなかった。高慢な女の機嫌を取り結

ナミオM画廊

『最好の位置』

春川 ナミオ



誰も出てくる気配はなく、どうやら彼女はこのマンションに、一人住まいのようであった。

応接セットの置かれた洋間の前の廊下に仙太郎を待たせて、女は洋間の隣の寝室らしい部屋へ入っていったが、彼がまだ見たこともないような妙なものを手にして洋間へ戻ってくると、

「これが、今日からのお前のユニホームだから早く着更えておしまい」

四枚の厚地の白布を廊下にいる仙太郎の方へ放り投げてきた。

なんのことやら判らなかったが、その布ぎれを手に取ってよく見ると、ファスナーがついていて、二枚ずつ縫えば、半袖のシャツとショーツパンツになるように出来ていた。そのときになって初めて気がついたのだが、分譲マンションの唱い文句によくある、温度調節が働いているらしく、そんな軽装が快適なほどの、爽やかな室内の温度だった。

「あの、奥さんの見ておられる前ですか？」

「そうよ。下着も全部、脱いで、そのユニホームだけになるの。それから、わたしを呼ぶときは、亜紀子さまとお言い。女王さまは芝居がかってるし、奥さまとか、ご主人さまは、年寄りみて、いやだから。まだ結婚の経験はなくてよ」

亜紀子はソファに腰も降ろさず、犬か猫でも眺めるような無感動な目を仙太郎に向けながら、立ったまま煙草に火を点けた。

ぼうと懸命だった。

「そういうふうにすればいいのよ。そのままめめしい忠実さを忘れないことね。やっぱりわたしの目に狂いはなかったわ。お前は、わたしに献身的に仕えられる素質がありそうだから、あまり痛い目にあわさなくても、調教出来そうよ」

女は上機嫌で仙太郎が捧げ持つスリッパに足を入れてくれた。

彼女に背を向けて仙太郎が手早く昔の日本海軍の防暑服のような服装に着替え終わると亜紀子は今度は、四十糎ほどの革紐の両端に同じく革製の環がついた物を二つ、投げてよこした。

「その手枷と足枷を、お付け。なによ、変な顔して。お前が妙な気を起こすといけなから、用心のため、付けさせるのよ。もしいやなら、いまからでも遅くないから、とっとと出て行くがいいわ」

「妙な気を起こさないと判れば、はずしてもらえるのでしょうね」
ためらいながらも、仙太郎が手枷と足枷を付け終わったのを見定めてから、

「さ、次の仕事が持ってるわ。早く、こちらへ来るのよ」

亜紀子はビロードの布切れをヒラヒラさせて手招きした。

応接室へ入ろうとして、足枷のために足の自由を半減されているのを忘れて、仙太郎は深紅の絨緞の上に倒れてしまったが、

「早くしないと、いつまでも着替えられないじゃないの」

急ぎたてられると、そのまま亜紀子の足もとまで転がっていった。どうにでもなれ、そんな気持であった。

亜紀子は、横たわったまま彼女を見上げる仙太郎の顔を跨ぐように、両足をひろげて立ちはだかると、ビロードの布で黒皮のパンタロンの埃を拭き取るよう命じた。

「あらかじめ、手を触れてはいけない箇所を言っておいてもらえませんか」

漸く上体を起こした仙太郎に、
「拭くためになら何処に触ってもいいわよ。上から下へ全部、拭くのよ、全部」

彼女が、こともなげに言った。

この女は羞恥心などないのだろう。それとも、このごろの若い女は全て、こうなのか？ 半ば呆れながら、仙太郎は亜紀子の前に膝立ちすると、腹のあたりから拭きはじめて、足のつけ根から膝の少し上まで丹念に拭き降りていったが、彼女の破廉恥さを軽蔑しつつも、やはり虚心では、いられなかった。むっちりとした中にも掌を押し返してくる弾力を秘めた太腿の感触に、手が震えた。邪怪な妻は彼が足に触れることも許さなかったし、皮のパンタロンを隔てるとはいえ、若い女性のそのような部分に手を触れるなど、勿論、初めての経験だった。

「うしろを向いてもらえませんか」

「馬鹿。自分が動けば、いいじゃないのよ。わたしの股を、おくぐり」

女の股を、くぐらされる羽目になるとは思いもしなかったが、今更、ためらったところで仕方ない。四つん這いになって亜紀子の足の間を、くぐり抜けた仙太郎は、パンタロンの後ろ側を拭きだしかけたが、つややかな黒皮を、これ以上は伸びないと思われるほどに張りきらせた、豊満な亜紀子のヒップを目の前になると、直ぐには手を触れかねた。ちかぢかと眺めるだけで、気が遠くなりそうな心地であった。彼は今日まで、黒皮の光沢に包みこまれた女の臀部の丸味が、これほどまでに自分を魅了し尽すものとは知らなかった。それは、裸の尻を目にするよりも魅惑的でさえあった。顔を押しつけたい思いを泳えるのが精一杯で、しばらくは身動きも出来なかった。結局、ヒップと股の最上部だけは最後まで手を出し兼ねた。

仙太郎がパンタロンを拭き続けていた間、亜紀子は何も言わなかったが、また彼に股をくぐらせて前へ出させると、

「全部と言ったのに、どうして、股とヒップを拭かなかったのよ」

吊り気味の目を一層、吊り上げた。

「それがその……」

「命令に叛いたのだから、はっきり理由を言い」

「……股の処は、どうも気が咎めて拭きかねますし、ヒップは圧倒されてしまって手が出せなかったのです」

「中年男にしては、意外とウブなこと言うじゃないの。二十年の間、一体どんな夫婦生活をしてきたのよ」

仙太郎の返事に好奇心を、そそられたらしく、亜紀子は彼と妻との間を問いただしはじめた。

彼を種付けの道具のように扱い、受胎期しか体を許さなかった妻が、子供を孕むことを諦めてからは、寝室も別にしてしまったことや、それまでも、直接行為以外には、体の何処にも手を触れさせなかったことなどを、訊かれるまま、仙太郎は詳しく話した。

「家出した気持も解るけど、それでもお前、一人前の男なのかねえまあいいわ、これからは、わたしがお前に、びったりの別な悦びを教えこんでやるわよ」

亜紀子は呆れ果てたふうだったが、足もとで黙って正座し続けている仙太郎に目をやると、縄飛びするように手枷の革紐を跨ぎ越すように言いつけた。

命じられた通り、しゃがみ直して革紐が体のうしろへまわる姿勢をとった途端、亜紀子の左足が彼の顔に延びて、仙太郎はそのまま仰向けに絨緞の上へ踏み倒されてしまった。

「なにをするんです——」

思わず声を上ずらせる彼に、冷たい笑みで応えただけで、亜紀子は、仰向きに横たわった仙太郎の顔を跨いで、パンタロンの足をひらいた。

手枷の革紐が体の下になって手の自由が利かぬ仙太郎が、不安げに彼女の股を見上げていると、

「そんなに心配そうな顔することないわよ。お前が寝そべって休憩している間に、まだ拭いてない処を綺麗にするだけよ」

仙太郎の胸に馬乗りになった亜紀子は、でたらめに腰を動かしてはじめて。

ひとしきり、彼の半袖シャツの胸で、パンタロンの股や尻のあたりを拭いてから、彼女は心持ち、腰を浮かせたが、

「わたしの命令に叛いた罰に、これからお仕置きするから、覚悟するがいいわ」

皮の匂いを吸いこんだと思う間もなく、仙太郎は、生温かに弾みきった豊満そのもののような亜紀子のパンタロンの尻に、忽ち目も鼻も口も塞がれてしまっていた。顔を女性の尻の下に敷かれるのは初めてだったが、彼女のヒップが特に柔軟な弾力に富んでいるからなのか、これほど一分の隙間もなく顔に密着するものとは思ひもかけなかった。

手の自由を奪われているところへ、顔をはちきれそうなヒップに圧えつけられて、身動きも出来なかったが、仙太郎は呼吸を止められた苦しさ堪え続けた。さきほど、頬をすりつけた衝動に駆られた亜紀子の豊艶なヒップを心ゆくまで顔の上に頂いていられるのだという思いが、彼をかつて経験したこともない恍惚状態に誘ってくれるようであった。

美しい亜紀子の尻に敷かれてなら、このまま窒息してしまってもいい……、苦悶のなかで、そんな想いに取り憑かれかけたとき、

「わたしも、しばらく横になりたいから、膝をお立て」

彼女の声が聞こえてきた。

直ぐさま、その姿勢をとると、腰から斜め上方へ折れ曲がった彼の大腿部のあたりを枕代りに、後頭部をあてがい、亜紀子は仙太郎の体の上で長々と寝そべった。鼻の先がパンタロンの服の縫目の処に僅かに出て、仙太郎も漸く呼吸が可能になった。飾りにつけてある金属性の前ボタンが、ちかぢかと眺められた。

「こんなお仕置きを受けるのは初めてらしいけど、お前、まんざらじゃなさそうね」

亜紀子が声に出して笑うと、目から十種と離れていない処で黒皮に包まれた、ふくらみが波打っていたが、依然としてヒップの圧力に口を封じられたままなので、返事も出来ず、仙太郎はパンタロンの縫目に鼻の先を、こすりつけるようにしながら、むさぼるように皮の匂いを嗅ぎ続けた。

「くすぐったいじゃないの。顔を動かすんじゃない——」

片足の踵で仙太郎の頭を蹴りつけると、亜紀子は口の利けぬ彼を相手に、独り話を、しはじめるのだった。

仙太郎が想像した通り、亜紀子は彼女が以前、勤めていた会社の会長をしていた老人の囲い者であったそうである。亜紀子にマンションを買い与えて勤めを退かせたその老人は、男としてはもう不能に近く、会社では全社員の上に君臨し、天皇と呼ばれていながら、一步、彼女のマンションの部屋へ入ると、喜々として亜紀子の下僕となった。浴室で彼女の背中を流すのはおろか、下着の洗濯から、

足の爪の手入れまでしたそうである。老人が一寸した不注意でパンティストッキングを伝線させてしまったとき、大袈裟に詫びてみせる彼の態度に吊りこまれて亜紀子が、ふざけ半分に老人の頬を平手打ちしたことがあった。それがはじまりで、老人は彼女に女主人としての冷酷さを求め、美しい亜紀子から体罰を加えられることを望んだ。単に踏まれたり蹴られたりするだけでは飽き足りなくなった果てに、いろんな変わった道具類をマンションへ運びこんできたが一度も使用せぬうちに、心臓の発作で、あっけなく亡くなっていた。

仙太郎が附けられている手枷や足枷も、手枷足枷を附けたまま、脱いだり着たり出来る半袖シャツとショートパンツも、老人が持ってきた物の一部だった。仙太郎が革製だとばかり思っていた手枷と足枷は、そのまま入浴も可能な材質で、造られているのだそうである。

どうやら亜紀子は、その老人によって、男を虐いたげる悦びを目覚めさせられたらしかった。

「わたしも着更えなくっちゃ……」

思い出したようにつぶやきながら、やっと亜紀子は仙太郎の上から体を起こしたが、テーブルの煙草に手を伸ばして火を点けると、彼の顔に腰かけて、ゆっくり喫いはじめた。今度は上手い具合に、ヒップの縫い目に鼻が、すっぽり納まるかたちになり、押しひしがれて真っ暗になった目の奥が、彼女の重みで疼くようだったが、仙太郎も呼吸だけは口で楽に出来た。

漸く煙草を喫い終わった亜紀子は、洗濯の傍の汚れ物を入れる籠の中から、比較的、不透明な生地のパンティを選んで持ってくるよ

イメージギャラリー 『至福の一夜』 岡たかし



う、命じた。
足枷を付けられた、おぼつかない足取りで、仙太郎が彼女のビキニ型のパンティを持って応接室へ戻ってくると、亜紀子は鞭を手にして待っていた。

亜紀子の近づく気配がして、目隠しのパンティが取り除かれた。両手を腰にあてがい、女王然と立ちはだかっている亜紀子の姿を、ひと目、見て、仙太郎は思わず息を呑んだ。
セーターとパンタロンを身につけていたときも、彼女の体の見事

「不心得を起こして、わたしが着更えるのを盗み見ようとしたらしたら、これで百叩きの目にあわせるわよ」

仙太郎を正座させると、鼻先でヒュッと鞭を鳴らせてみせてから、前へ傾き加減に彼の頭にビキニパンティをかぶせて、目隠しの代りにした。

洗うのが面倒で何日も取り換えなかったのかビキニパンティから異臭が匂った。汚れた女の下着をかぶせられて、会社の会長だったという老人のように陶醉感に浸ることは出来なかったが、男の面目にかかわるといったふうな、大袈裟な憤りは仙太郎には、もうなかった。以前なら、表面に怒りを現わすことは小心にためらっても、口惜しさで顔色まで変わってしまったっていただろうと思うと、亜紀子と知り合って数時間ほどの間に、何かが変化しつつあるらしい自分が、われながら不思議でもあった。ただし亜紀子にはなく妻から、こんな仕打ちを受けたのなら、いまでも激しい怒りをおぼえるだろうことは、容易に想像出来た。

さは充分、察しられていたのだが、惜しげもなく肌を露出したその姿は、正視するのが、はばかられるほどの、眩しいばかりな豊艶さであった。パンタロンと同じ黒の表皮で造られたブラジャーとホットパンツが、豊かな肉づきを、しめつけるように小麦色の肌に、くいこんでいた。黒皮の光沢が、胸と腰の素晴らしい丸味を、より一層誇張してみせるようだった。

「どう、一寸イカスでしょ。わたしとお前は、好みが合うのじゃないかしら」

亜紀子は、正座したままの仙太郎の目の前へ、縫目もほころびるのではないかと危ぶまれるようなホットパンツのヒップを、突き出してみせた。

「いつも、こんな姿でいられるのですか？」

声を上ずらせた彼が、眺め入るふうを装って鼻が触れそうなほどに顔を近づけると、

「今日から、わたしのお尻にお仕えさせたいから、よーく拝んどくといいわ。念のため、言っとくけど、いくらお尻の下僕だからって、わたしの許可なしに触ったりしたら、承知しなくてよ」

亜紀子は一度、真っ直ぐ伸ばした腰を、弾みをつけて勢いよく折り曲げ、上体を乗り出すようにして見とれていた仙太郎の顔を、ヒップで思いきり突き飛ばした。

「判ったわね。勝手な真似をしたら容赦しないから」

「はい。充分、気をつけます」

顔面一杯に、ヒップのストレートパンチを受けた痛みを泳いで姿勢を正すと、仙太郎は亜紀子のはちきれそうなヒップを伏し拝むように、絨緞に額を、こすりつけた。

その夜、決して不心得は起こさないからと頼んだが、許されず、仙太郎は犬のように首輪を付けさせられ、鎖でトイレのドアのノブに繋がれて寝た。トイレの前であることが、せめてもの亜紀子の配慮であった。

〇—〇—

仙太郎の新しい生活が始まった。

舅・姑・妻の三人の目に監視されながら、朝早くから夜遅くまで洋服の仕立仕事に働き続けた以前の暮しと較べれば、亜紀子の下男として、どんな扱いを受けても堪えられそうだった。たとえ、手枷足枷を付けられた、みじめな姿ではあっても、彼女に下僕として仕えている限り、衣食住の心配は要らぬはずである。亜紀子の表現にしたがえば、彼女に飼われて日を送ることは、自殺する勇氣こそないものの、一度は自分の人生を棄てる決心をした仙太郎にとって、相応しい生活といえるのかも知れなかった。

亜紀子は、男の同居者がいることを堅く外部に隠しているらしく仙太郎は電話に出ることは一際、禁じられた。また、たとえ相手が何処かの御用聞きであっても、応対に出ることは許されなかった。

亜紀子のマンションに住むようになって三日目だった。彼女が入浴中に電話のベルが鳴り、以前の習慣から仙太郎は、うっかり受話器を取ってしまったが、浴室までベルが聞こえたのだろう。バスタオルを体に巻きつけただけで出て来た亜紀子に、忽ち受話器を引いたくられた。

わたしが手が離せなかったので、御用聞きに來合わせていたクリーニング屋の店員が、代りに電話口に出たのだと言いつて通話

を切った亜紀子は、ゆっくり仙太郎の方へ向き直ると、いきなり平手打ちを、くわせた。

「罪のつぐないをさせるから、覚悟おし。これから、わたしが命じることにも少しでも反抗的な態度を示したら、直ぐ奥さんの処へ連絡するわよ」

長い革紐を持ってきた亜紀子は、体に巻いたバスタオルを落とさぬよう気を配りながら、手枷を附けたままの仙太郎を後ろ手に縛り上げ、革紐のもう一方の端で足首を、くくりつけた。革紐を力一杯引きしぼったため、彼の体は反り身になったきり、腰を曲げることも出来なかった。

半袖シャツを剥ぎ取られ、鞭で、めった打ちにされるのではないかと、怯えていた仙太郎は、どうやらそうではないらしいのにホッとしたが、亜紀子の思いついた処刑は、時間の経つほど苦痛の強まる性質のものであった。

「わたしがいいと言うまで、犬のように、これをくわえておいで。もし落したりしたら、たっぷり鞭を見舞ってやるから——」

亜紀子は履き古したハイヒールを仙太郎の口にくわえさせると、「いい気味。そうしてるところは犬より、しまらないわよ。言っとくけど、当然お夕飯は食べられないわね」

彼の顔に唾を吐きかけて、浴室へ入ってしまった。

額にかけられた唾が、眉間から鼻のわきへ、したたり降りて、こそばゆくてならなかったが、仙太郎には、靴を口から落とさぬよう注意しつつ、顔の筋肉を動かして、まぎらわせるぐらい以外には、方法は、なさそうだった。

さほど苦痛ではないようにみえながら、とても長時間を堪えきれ

る姿勢ではなかった。亜紀子が言った夕食時間までだけでも、一時間は、たっぷりある。いつになったら許してもらえるのかと思うと仙太郎は気が遠くなりそうであった。

ゆっくり時間をかけて浴室から出てきた亜紀子は、脂汗を浮かべて彼女の処刑に耐えている仙太郎を、満足げに眺めたが、

「頑張ってるわね。その調子だと相当、長続きしそうだから、もう少し苦しくさせてやろうかしらね」

何処まで冷酷なのか、大型の洗濯ばさみで、彼の鼻を挟んでしまった。

ハイヒールをくわえた齒の隙間からだけでしか呼吸出来なくなると、仙太郎の口の中は忽ちカラカラに渴ききっていった。

……仙太郎オ、せんたろうオ、と、誰かに呼ばれているようであった。姿こそ見えないが、よく耳をすますと、それは母の声のようだった。母は数年前に亡くなっているはずなのに不思議に思いはじめたとき、仙太郎は夢から覚めた。

苦痛に堪えかねて、いつの間にか気を失ってしまっていたらしかった。目を開けると、思いがけない近さで、亜紀子が不安げに彼の顔を覗きこんでいた。ハイヒールをくわえていないのに気がつき、おそろおそろ彼女の表情をうかがってみたが、亜紀子の顔は、初めて見るような優しさを浮かべてさえた。手枷足枷こそ附いたままだが、手も足も自由に動いた。仰向きに寝そべった頭の下に柔らかな温かさがあり、どうやら、絨緞の上に横坐りになった亜紀子に、膝枕させてもらっているようであった。

「流石は戦中派ね。気を失うまで、よく頑張ったものだわ。敢

斗精神に免じて、今日はもう、勘弁してあげるわ。仙太郎の前にも二人、飼ってみたことがあるけど、いまだきの青年はみんな、一寸したお仕置きにも直ぐ悲鳴を上げて、だらしないたらありゃしない。本当に涙をこぼして泣くんだから」

夢の中で母と思ったのは、彼を正気に返らせようと、亜紀子が呼び続けていた声だったのである。

「いいえ。戦中派だから頑張れたというわけではありません。亜紀子さまから頂戴するお仕置きだからこそ、気を失うまで堪えられたのだと思います。これが他の人にされたのなら、直ぐへこたれてしまっていたでしょう」

嘘を言っているつもりはなかった。失神する前までは彼女の残酷さを恨めしく感じていたが、気を失っている間に変身でもしてしまったかのように、いまでは亜紀子に責められることに、淡い悦びさえ、おぼえるようであった。

「そうらしいわね。明日から、もっと可愛いがったげるから、とにかく、体の汚れをお風呂で洗ってくるといいわ。ショートパンツをよく洗濯しとかなくては駄目よ」

亜紀子に言われて、仙太郎は夢のなかでショートパンツを汚してしまっていたのに初めて気がついた。そんなことまで検べられていたのかと思うと、羞かしくて彼女を正視出来なかった。

「いやだわ、いい年した小父さんのくせに赤くなったりして。仙太郎って、本当にウブなのね」

亜紀子は堪えきれなくなったように、彼の上に馬乗りになると、仙太郎の頸を股に挟んで絞め上げるのだった。

— ○ —

亜紀子は、美しく着飾って三日にあげず外出したが、外に勤めを持っている様子はなかった。心臓の発作で急死した老人が遺してくれたものを元手に、高利貸しでもしているふうであった。

彼女が留守の間、念入りに掃除を済ませてから、仙太郎は洗濯やつくりものに精を出した。手枷足枷の不自由さも、馴れればそれほど苦にもならず、歩幅も自然に小さくなり、もう転ぶようなこともなかった。

彼がマンションへ来て以来、亜紀子は自分から、すすんで下着を着替えようとしなくなっていった。彼女が入浴している間に仙太郎が脱ぎ棄てられた汚れた下着を洗濯した物と取換えておくのである。なにかの都合で換えるのを忘れても、亜紀子は平気で汚れているのを、また身につけた。亜紀子の下着類の整理も仙太郎の仕事の一つだったが、一番、最初は驚いた。押入れの隅に置かれた、かなり大きな段ボールの函に汚れたパンティやストッキングからブラジャーやスリッパまで、蓋を開けただけで異臭が鼻をつくほど、ぎっしり詰めこまれていたのである。伝線したストッキングは、どうにも仕方なかったが、それ以外は、手入れさえすれば、まだまだ着られそうだった。汚れのひどいものは丁寧に手で、もみ洗いするなどしてすっかり綺麗に洗濯すると、ほころびのある物を取り分け、仙太郎はミシンを踏んだり縫針を使ったりして、手枷を付けられた手で修理ははじめた。

「そんなもの、棄てればいいわよ」

「直せばお召しになれる物を、もったいないですから」

ナミオM画廊 『雨乞い儀式』 春川 ナオミ



「やっぱり昭和のひと柄生まれは、心がけがいいのね。けど、いくら一生懸命に縫ってくれたって、破れをつくらったパンティなんてみじめったらしくて穿けやしないわよ」

亜紀子はソファに腰を降ろして、自分の足もとに坐りこんで、破れた下着の修理に余念のない仙太郎を、冷笑するように眺めていたが、流石に洋服の仕立職らしく、到底つくろい物とは思えない出来栄えを見ると、縫目がほころびたために、そのまま放ってあった、

った。

どれほど彼が忠勤を励んでも、ねぎらいの言葉一つ、かけてくれぬばかりか、下僕というより、自分の加虐的な性向を満たすための動物に等しい扱いをする亜紀子であるのに、彼女の帰りが遅れると仙太郎は堪えられない淋しさにおそわれるのだった。

亜紀子の外出が度重なり、淋しい日が続くと、おのずとそれに対処する智恵が芽生えた。

ワンピースやブラウスを取り出して、彼に直させたものだった。

掃除、洗濯、つくろいものに、靴の手入れと下男としての仕事を全て済ませても、亜紀子の帰宅まで時間は充分あった。その余った時間を仙太郎はバルコニーで存分に日光を浴びた。人目につかぬよう注意してではあるが……。一歩も外へ出られぬ身であってみれば、日光浴は欠かせなかった。

生きることへの執着が薄かったからなのだろうか、妻のもとで暮していたころは、好んで不摂生をする訳ではないが、殊更に自分の健康に留意したことなど、一度としてなかった。それが、亜紀子のもとに飼われはじめてからは、マンションの一室に閉じこめられたきりの、手枷や足枷まで付けられた囚人同様の身であるにもかかわらず、健康には充分、注意を払うようになっていた。われながら意外な気持の変化であ

彼女が入浴中に洗濯した下着を用意しておく習慣を利用して、亜紀子のビキニパンティを一週間、取り換えないことにした。亜紀子は下着の汚れに無頓着な方で、先ず気づかれる心配はなかった。一週間たつて、漸く綺麗なものを取換えると、汚れたのを直ぐには洗濯せず、その次ぎに穿き汚されたパンティが出来るまで、そのままにしておいた。一週間のあいだ亜紀子が肌につけていたビキニパンティが、絶えず仙太郎の手もとに残っているようにしたのである。

マンションの窓の外に夕闇が迫っても亜紀子が帰宅しないと、仙太郎はいつも、宝物のように大切に保存している汚れたビキニのパンティを取り出してみるのであった。

彼女の体温をとどめていてはくれないのが物足りなかったが、両の掌の上にひろげて鮮やかな色彩の中に顔を埋めると、香ぐわしい亜紀子の体臭が匂うようだった。むさぼるように芳香を嗅ぎ求めれば嗅ぎ求めるだけ、一層、物狂おしさに駆られ、それ以上、もうどうすればよいのか自分でも判らず、面のようにパンティを顔にかぶると、床の上を転げまわった。

妻のパンティが洗濯して干してあるのを見てさえ、けがらわしく思ったのに、同じ女の下着でありながら、亜紀子のものなら、汚れているほど貴重に思えるのも不思議だった。そればかりか、亜紀子のパンティに変わりはないはずなのに、マンションへ来た最初の日に、彼女に頭から、かぶせられたときには、異臭と感じたその匂いが、いまでは芳香とさえ思われるのである。

そんなある日、いつものようにビキニパンティを顔にかぶっているところを、亜紀子に見つかってしまった。ドアを開ける鍵の音にも気づかず、その上、運の悪いことに、玄関から見通せる処へ転げ

出してしまっていたのだった。

「わたしの留守をよいことに、なにをふざけているのよ！ そのまま、此処まで出ておいで」

亜紀子に怒鳴りつけられて、靴も脱がずに玄関に突っ立っている彼女の前に平伏すると、

「なによ！ そのザマは——」

仙太郎が、かぶっていたパンティを、むしり取るなり、ミニスカートの脚を高々と上げた亜紀子は、ハイヒールの踵で、思いきり仙太郎の後頭部を踏みにじった。

「もう二度と致しませんから、どうぞお許し下さい」

頭を踏みつけられたまま、詫び続ける仙太郎を、

「そんなにわたしのパンティが有難いのなら、こうしてやるわ！」
ハイヒールで蹴り転がして、仰向きに倒すと、顔の真上で、やにわにミニスカートを、まくり上げ、

「よく拜んでおくがいいわ」

言い終わりもせぬうちに、ドシンと仙太郎の顔に腰を落とした。

一瞬、仙太郎は鼻が折れたかと思ったが、激痛が走っただけで、どうやら骨に異常はなかったようだった。蒸れるような温気に顔を覆われてしまったが、どこかに隙間があるらしく、どうにか呼吸は出来た。彼を圧迫し尽すように、亜紀子が、しゃがみこむかたちで立ち膝になっていた姿勢を、正座した尻の下に仙太郎の顔を敷きひしぐように変えた。圧迫感が、ぐっと、強まり、呼吸しにくくなったが、それでも窒息するほどのことはなかった。この前、亜紀子に顔の上へ坐りこまれたとき、全く呼吸出来なかったのは、今日とは逆に、彼女が仙太郎の足の方へ背を向けて坐ったからだろうかと思

ったが、それは違っているようだった。どちらを向いて坐られても皮のパンタロンを穿いたビップの下に顔を敷かれては、息のしようがないものらしかった。

パンティストッキングは穿いていず、透き通るように薄いビキニパンティを着けただけの、ゴムまりのように弾みきった亜紀子のヒップを顔の上に頂いて、濃密な彼女の芳香を胸の奥深くまで幾度も幾度も吸いこんでいるうちに、脚がだるくなったのか、亜紀子の方から腰を上げてしまった。

「よくない考えを起こすのは、運動不足だからだわ、きっと。これからみっちり運動させたげるから、四つん這いにおなり」

仙太郎が四つん這いの姿勢をとるのを待ちかねたように、どっしりと、その背にまたがると、

「さあ、速く走るのよ。ノロノロしてると、痛い目を見るわよ」

亜紀子はハイヒールも脱がず、踵で後の脇腹のあたりを蹴り上げてみせた。

馬として亜紀子に仕えるのは初めてだったが、いくら脇腹を蹴られても、手枷と足枷が邪魔になって、思うようには速く這えなかった。馬乗りになられたときはそれほど重いと感じなかった亜紀子の体重も、ダイニングキッチンを、あちこち乗りまわされるうちには、かなり負担になりだしてきた。その上、手の方はともかくとして、ショートパンツのためにむき出しになっている膝は、いつまでも彼女の重みを支えて這い続けられるものでもなかった。

疲労と膝の痛みに堪えかねて、仙太郎が少しでも前進するのをためらうと、一歩でも二歩でも動き出すまで、亜紀子の踵は容赦なく脇腹を蹴り上げ続けた。それでも、彼の膝の皮膚が破れ、ダイニン

グキッチンの床が血で濡れはじめると、漸く亜紀子は仙太郎の背から降りた。

「意気地なし！ 床が汚れるから、早くお拭き！」

足もとに、うずくまったままの仙太郎を見降ろして命令したが、彼が身動きもしないのを見て取ると、

「わたしの言いつけに従わないつもりなのね」

初めての反抗に、忽ち眉を逆立てた亜紀子は、肩といわず頭といわず仙太郎を足蹴にしはじめた。

蹴られても踏まれても、仙太郎は起き上がろうとしなかった。自分で自分の体がどうにもならないこともあったが、亜紀子のハイヒールの足に折檻される悦びに陶然としてしまっていたのだ。踏みにじられ、ハイヒールの踵が体にめりこむごとに、電流にうたれるように快さが全身を走った。

— ○ — ○ —

仙太郎を仰臥で立膝させ、その上に寝そべって寝椅子代りにしたり、食事のとき食卓の前に、うずくまらせて椅子にしたり、隣の部屋へ物を取りに立つときも一歩も自分の足で歩こうとせず、いつも彼を馬代りに乗りまわしたり、好んで仙太郎を尻の下にした亜紀子が、どうしたわけか、ここ数日、全くそうしたことをしなくなってしまうていた。

仙太郎は、それとなく亜紀子の動きに注意をはらっていたが、何処か体を悪くしているふうで、ときどきは苦しげに美しい顔をゆがめることすらあった。極端に不機嫌になってしまっている彼女は、何一つ、落度のない仙太郎を、それまでは脅しに使っていただけの

鞭で打ちさえした。

「お体を悪くなさっているのではありませんか？ かまわなければお聞かせ願いたいです。亜紀子さまがお元気がないと、私まで気が滅入ってしまいますので」

珍しく亜紀子が、おだやかな表情でいるときを見計らって訊ねてみたが、

「どうもしてやしないわよ」

亜紀子は笑ってみせるだけだったが、沈みきった仙太郎の面持ちを見ると、

「実はね、お尻に腫れ物が出来ちゃって、とっても痛いよ」

やっと不機嫌の原因を話してくれた。

そういえば、最近の亜紀子はミニスカートの姿が多かった。ヒップを締めつけるような皮製のホットパンツやパンタロンでは、腫れ物が圧えられて痛むのだろう。

「それで、医者に見せられたのですか？」

「おっくうで、まだ行ってないのよ。切られたりして痕が残ったら取り返しがつかないし、いくら相手がお医者さまだって、お尻を見せるなんて、いやだよ」

「それはそうですが……」

メスを入れられるのを怖れるのはともかくとして、仙太郎に対してなら顔の上へでも平気で坐る亜紀子が、医者に見せるだけのことを羞かしがるのが、不思議なような気もした。もっとも、他人には、いざしらず、彼には羞恥心など無用なのであろうが。

「で、どんなになっているか、ご自分で、ご覧になったのでしょうか、鏡に写すとかして……」

「馬鹿。そんなみっともないことを、このわたしが出来るとでも思っているの」

一言のもとに否定したが、鏡に写して見てみたくても、そんなことを仙太郎に知られたくはない、亜紀子の虚勢のようであった。

「私にお見せになるのも、いいえ、代りにお見せになるのも、おいやでしょうか。いつもおヒップの下にお敷きになる私になら、お羞かしがりになる必要は少しもないと思いますが」

「当たり前よ。座蒲団代りみたいな、お前に、どうして羞かしがらねばならないのよ」

亜紀子も、どのような腫れ物なのか、彼に見させることに、心が動いた様子だった。

「じゃ、お見せになって下さい。亜紀子さまのおヒップに、もしものことがあったら、私はもう、どうしてよいかわかりません」

「なによ、大袈裟なこと言って……。でも、そんなにまで言うのなら、見させてやることにするわ。その代り、腫れ物が癒ったら、いままで以上に、わたしの尻に忠勤を励むのよ」

「はい。どのようにしてでもお仕え致します」

ご神体でも拝するように、居住まいを正して絨緞の上に正座する仙太郎に、尻を向けると、亜紀子は、ゆっくりスカートのファスナーを降ろした。スカートが足もとに落ち、彼女の手がスリッパの裾を持ち上げると、仙太郎の目の前に豊満なヒップが露わになった。

少しの垂れ下がりもないどころか、水平というより、斜め上方へ向けて盛り上がるかのような、見事に張りきったヒップであった。そしてその豊艶そのもののような丸味に、膜のように薄い布地がよく裂けないものだと思われるほどに、肌が透けて見える黒のビキニ

のパンティが、くいこんでいた。ほどよく脂の乗ったシミ一つない小麦色の肌は、輝くばかりの美しさだったが、それも左側の盛り上がりだけで、右の方はヒップラインを醜くゆがめて、薄赤く腫れ上がっていたのだ。腫れの中央が黄緑色に膿を持っていて、白い芯らしいものさえ窺えた。腫れ具合も、いまが頂点に思われた。

「これは、ひどい。これじゃア、顔の上におヒップを頂くことなどとても出来そうにありません」

仙太郎が声をひそめると、

「そうなのよ。坐ると、丁度、一番、痛いところが押されるの」

亜紀子も、訴えるような口ぶりになってしまっていた。

「一度ご覧になりますか？ 鏡を持ってきましたから」

「そうね……」

多分に見てみたい誘惑を、おぼえている様子であった。

鏡を取ってきた仙太郎が、もと通りに坐ると、待ちかねたように亜紀子は脚をひらいて股の間から鏡を覗きこむ姿勢になったが、腰を曲げると、勢いヒップを後ろに突き出すことになり、腫れ物の表面が引き吊れるのだろう、痛そうに眉を寄せた。

仙太郎に鏡の位置と角度を、いろいろ変えさせた末に、やっと腫れ物の実体を自分の目で確かめることが出来たのだろう、しばらく亜紀子は黙りこんでしまっていた。

「膿さえ出してしまえば、いいように思うのですが」

腰を曲げているせいで、腫れ物は内側から押し出されるかたちになり、ちょっと圧すだけで膿を吹き出しそうだった。

「どうでしょう、私に委せてもらえませんか。多分、痛くないはずですが、少しぐらいの辛抱はなさいますね」

仙太郎は、どんなことをしてでも、亜紀子から一刻も早く苦痛を取り除きたかった。

「委せるのはいいけど、あんまり手荒なことしちゃ、いやよ」

いつになく、きびしい彼の口調に、亜紀子は、もう哀願するような調子になってしまっていた。

「ほんの二、三秒ですから、おヒップを引っこめたりなさっては駄目ですよ」

逆さになった顔でうなずいてみせるだけの亜紀子を見極めると、仙太郎は手枷の紐が許す限り両手で彼女の太腿をかかえこむようにしながら、亜紀子の腫れものに唇をつけて膿を吸った。彼の手を遁れようと、太腿のものがくのが感じられた。

亜紀子の体の外に出た瞬間から熱っぽさは退いてしまうのか、仙太郎の口の中で、膿は、さほど熱いものでもなかった。舌の先に病芯の柔軟な固さを感じつつ、味というほどのものもない生温かな膿を、高貴な薬物でもあるかのように、仙太郎は夢心地に飲み降くだしていた。

口で膿を吸い取るなど、勿論、初めての経験だったが、汚いという感覚は、まるでなかった。亜紀子のための役に立てるのなら、いと易いことであった。そして、亜紀子のものである限り、膿ですらもが、吐き棄てるには、あまりに貴重であったのである。

仙太郎が腫れものから唇を離すと、亜紀子が振り返った。

「なんだか、とっても沢山に膿が出たように思えたけど、どうだった？ 一寸、見せてよ」

「それが、無断で申し訳ありませんが、頂だいしてしまいました」
「頂だいしたって、お前、膿を飲んじゃったの？」

「はい。お叱りを受けるかとは思ったのですが、たとえ膿でも亜紀子さまのものと考えると、もったいなくて、つい……」

亜紀子は、しばらく無言で彼の顔を見据えていたが、

「ふうん。わたしの許可なしに勝手なことしたのは以ての外だけど、痛みも消えたことだし、今日のところは特別に許してやるわ。」

早く傷口の消毒をおし。お前の口が触れたのだと思うと、気持が悪い」

仙太郎の目の前に尻を突きつけた。

「はい。直ぐ致します」

痛みが取れたと聞かされて、仙太郎は喜々として消毒にとりかか

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文庫味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

ったが、小さく穴が開いたようになってる腫れものの中央に、幾度も消毒液を塗りながら、膿を飲んだことで、霧が霽れるように新たな世界が、目の前に展けてゆくのおぼえていた。

亜紀子のヒップに奉仕することの出来る悦びが、かつてない感動をもって彼を埋め尽していたのである。

「お前、ほんとに……」

顔を捻じ向けるようにして、仙太郎の手当てぶりを窺っていた亜紀子が、何か言いかけて途中で、ふっと言葉を切った。

「ハア？」

仙太郎が、ヒップの蔭から顔をのぞかせて聞き返すと、亜紀子は慌てたようにソッポを向きながら言った。

「うん、いや、ほんとに、ずっと、ここに置いて欲しいのかい？」

という声と共に、仙太郎の頬が、亜紀子の尻で軽く小突かれた。

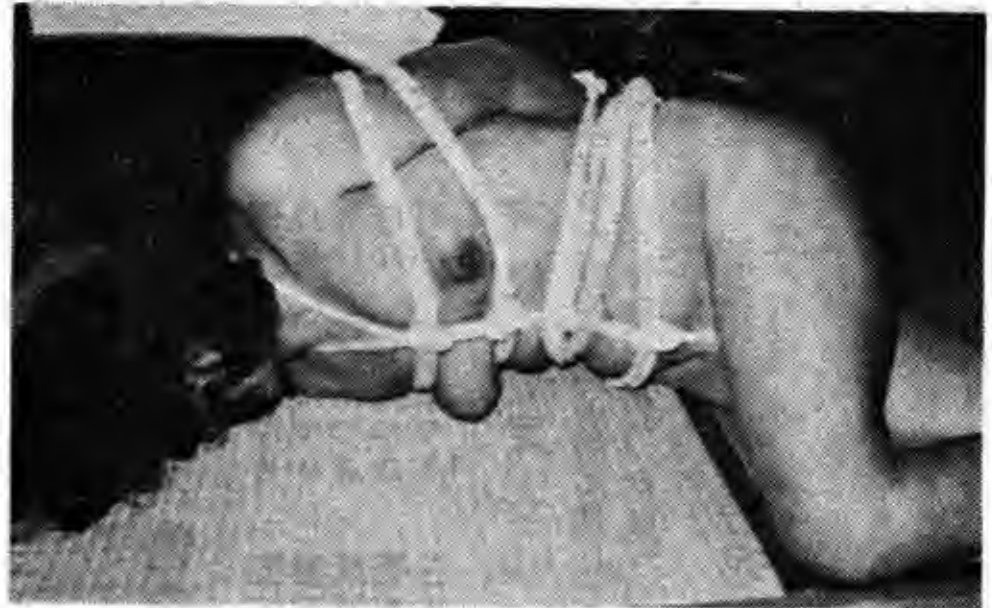
「も、もちろんです」

仙太郎が、よろけながら答える声は、感激の慄えを帯びていた。

「もっと苛められてもいい？」

「どうぞ、いつまでも亜紀子さまのおヒップにお仕えさせてやって下さいませ」

美しい亜紀子の豊かなヒップの下に敷きひしがれて生き続けることにこそ、仙太郎にとっての天国が、あるのかも知れなかった。



「夫婦プレイの近況報告」

井 上 浩

かおうか迷いましたが結局、奈良を訪れることにして国道43号線を東に出掛けました。

普段のドライブでは、お互いによく喋るのですが、後部座席に置いた責め道具一式が気掛かりなのか、話題も時折、途切れてしまうのは、おかしなものです。

この無言の空気で思ひ出す事があります。それは、もう数年も以前のことでした。あるホテルでの出来事です。妻は、よく肩を凝らす性分なので、マッサージを頼んでやりまし

た。我々男性としてはマッサージと言え、美しい、然も、うら若き女性をと思いますが、それではなく、わざわざ男性を指名しました。そして、その男に、何がしかのチップを、そっと渡しておきます。

体には、下着は一切、着用させないで、腹巻だけを着せておきました。

普通、上下揉み終わるのに一時間程、かかるようですが、三十分も経った頃、私はビールを持参しその男とグラスを交歓しながら、そろそろと寝巻の紐を解き始めて行きました。

今迄、寝巻の上から筋肉を揉みほぐして来た男の手は、あらわになり始めた妻の柔らかい部分に、自然らしくに移行しているのが分かるのです。

夫の酒の肴にされながら、しかも夫以外の男性にタッチされることによって呼び覚まされる妻の欲喜。全裸にされた肉体に、はつきりと羞恥が、みなぎりながらも、喘ぐような吐息が聞こえ始める頃には、知らず知らずの中に私の手も参加し、果ては、無意識に覆い隠そうとする妻の手を、先程解い

た寝巻の紐で縛りました。

妻が恍惚の境を、さ迷う頃、私は、びっしりかいた汗を流すべく静かにバスに向かいました。然しどこ迄も追いかけて来るように聞こえる妻の吐息に、私は汗を流すどころか、何か恐ろしい情景を見て来た時のように、もうすでに湯気も立たない寒々としたバスの中で、いつまでも、つつ立っているばかりでした。

そして、チャタレー夫人のヒロインか、果てはアル中の性的不能者の心理は、こんなものだろうか、と、あらぬところで変な錯覚に陥るのでした。

この始めての経験から、その後、数人の男性マッサージに妻の裸身をタッチさせてやりました。

人間、顔かたちが違う如く、経験豊富な年輩のベテランから昨今覚え始めた経験浅き男性まで種々あり、又、すぐ行動に移すのもあ

少し曇っているようでしたが、私達夫婦は、久し振りにSMPドライブに、出掛けることにしました。昨秋に予定して居りましたのが、私が暫く入院生活に入った事情もあって、延び延びになり、今日の日曜日を選びました。

少し霞が掛かったような六甲の山並みを仰ぎながら、どちらに向

れば、到頭じれったくなつて私の方から行なうような場合もありましたが、その中には、ずば抜けて素晴らしいフィンガーテクニシャンにも、めぐり逢いました。

なんでも、聞けば、彼の女性のお得意は二十人を越すそうで、自分の身体がもたないと言つて居りました。

その男の手に掛かった時の妻は最後のセックスまで、自ら進んで求めて行きました。そしてその日は、妻はもとより、私までも全身の力が抜けてしまい、唯の一言も喋らず無言の帰路であつた事を覚えて居ります。

相も変わらず、どんよりと曇つた空。古都奈良は流石、国際観光都市だけあって、シーズンに関係なく、多くの人々が訪れて居りました。一二〇〇年の歴史と、建築美術、彫刻、絵画等、多くの古き文化財を誇っているこの都は、七一〇年、元明天皇が飛鳥の藤原京から、この地に移し、平城京とした事に始まると聞きます。奈良公園は、東大寺、興福寺、春日神社等が点在する社寺公園で、大仏殿



正倉院、二月堂、五重塔を始め、多くの古建築が自然と美しく調和して居ります。

午後になって今迄少し照りかけていた日差しも、又怪しくなり始め、散策も早々に引揚げるに限ると思ひ、早速、近くのモーテルに向かいました。

日曜日の為か、いずこも満室と

断わられ、四軒目を見つけた時は、とても辺鄙の所、しかも俄作りのようなワンルーム、ワンガレージは、都心で見られるような豪華な雰囲気とは、およそ縁の遠いものでした。

然し、責め道具一式が誰に気兼ねもせず、すぐ運べる便利さも手伝い、早速、バスの湯を満たしながらもプレイに入る事にしました。

最近、特に肉付きが目立ち始めた妻には、もっと痩せるように言つて居りますが、仲々思うようにならず、苦勞して居るようです。

私が入院生活に入る直前に行なつた剃毛も、今では、すっかり、もとの姿に返っていました。今度のプレイは、縛りとパイプを併用しながらの浣腸とローソク責めの

二点に決め、特に蠟涙を垂らしながらのパイプ責めは効果的にテープに集録することが出来ました。

縛りで思い出すのは、一昨年、奇クにフォートを発表した後、編集部M氏より縛りとポーズの研究を指摘されたことです。にも拘らず、今回も又、恥かしながら数葉のフォートを同封しましたが、奇クに堂々と発表出来得るような素晴らしいフォートを研究するか、形式だけの、中途半端な事で終わらない、実のあるプレイに没するかを常時、悩み続けている私自身です。

この悩みを解決するには、もはや私個人では如何とも仕難く、誰方か、もう一人プレイに参加して頂くことによって何等かの道が開けるのではないかと思います。

そして汲めども尽きることのない泉の如く、恍惚の桃源境を三人共々味わいながらプレイに徹したい。これによって、新しいワンストップを得られることを信じながら、すっかり夕闇の迫った、古都の山々を背にして、帰途につきました。

(終)

舟 遊 び

「どうかね、チューインガムの味は。近頃、大分、馴れたと聞いているが……」

静かに一服の抹茶を喫し終わった有明が、茶碗を百合子の方に戻しながら何気なさそうに聞いたのが、ひどく彼女を狼狽させた。

「……………」

茶碗を取る手が乱れてコロコロと転がしてしまふ。それより早く、真っ白だった襟足まで赤くなって、赤い小紋のお召しの色と一瞬

区別が、つきにくくなったように思われた。待ちこがれていた有明が、やっとお成りになったというのに、いつものことながら、蛇に魅込まれた蛙のように、身じろぎさえも出来なくなってしまうのである。その上、有明は容赦もなく、彼女の一番、痛むところを突いてきた。

今朝、有明のお成りが触れられて、東館は上は上臈から、下はお三まで、斎戒沐浴して全身を清め、それぞれに装いをこらして待ち受けたのだが、特にお目当ての百合子は、有明の内意もあって、筒型のゴム風船を装置し

たまま禪をかけられ、その上に着物を着るように命じられた。

正座していても、不快な刺戟が突きあげてどうにもならない。それを、彼女は歯を喰いしばって耐える他はない。

そのとき——百合子の意思とは、まるで関係なく、収約筋が反応を示した。

「ア……」

しまったと思うと、それより早く、「プウッ」

という不快感が出てしまった。



してやったりと、ニンマリとする有明の顔をチラリと見ただけで、百合子は身も世もあらぬといった恥じらいを全身で見せて、泣き伏したのである。ところが、それに追い打ちをかけるように一層、大きな音が響きわたった。前かがみになったため、腹部が圧迫されたからである。

「どうした、どうした。立派なところのお嬢様が、何というハシタない……」

囁いを含んだ有明の声が、どこか遠くの方で聞こえるようだった。半ば失神状態にあった百合子は、その声で、いやでも冷たい現実引き戻されてしまった。

「でも……」

蚊のなくような声で口ごもる百合子。

「でも——じゃないよ。君は商売女のように筋肉を動かしているじゃないか」

畳みかけるように有明が威した。

どうにもならない条件反射だった。そしてそれは、百合子が抑えようとすればする程、その意思に反して、滑稽な音色を奏でるのであった。

羞恥の畏に陥し入れられ、おどろおどろしい苦痛に呻吟しているとはいっても、外面は

それとはわからぬ。キッチンと着付けた和服は臍たけて衣紋すら、乱れていない。

有明の「魔手」は、彼女の想像を絶していた。はじめ、百合子は他の女と同じように力づくで裸に剥かれ、荒々しく肉体を奪われる日が来るのを怖れと期待とを交錯させながら想いめぐらしていた。ところが、いつまで経っても、そんなカラストロフは来ない。平凡といってもよい程の日々が、うんざりする程つながっていた。稀に来る有明にしても、彼女に指一つ、触れようともしない。そして、ジクジクと虫歯の傷むような凌辱だけが、少しずつ、しかも根気よく、つけ加えられて行くのだ。

このような偽りの装いを、かなぐり棄てて暴風のように、有明にぶつかって行きたいとさえ、近頃は思い始めている百合子だった。

茶室の外に、明石の局が近づいて、おそるおそる、舟の用意が調ったことを伝えた。

「今日は船遊びに連れて行きたい。いいね」
否^{いな}とはいわせないくせに、と思ひながら、かすかに、うなずくと、それより早く、有明は身軽に立ち上がっていた。

泉水の端に庭木戸があつて、いつも厳重に

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は各々の材質に応じて五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。原潜ネプチューン号によるF号作戦の最大の収穫は何といっても山本代議士の愛嬢、才媛の誉れ高い二十才の美女百合子だった。一等扱いの彼女は惨烈な屈辱拷問を受けることもなく、ストリートに宮殿の奥深く東館（日本館）に収容された。そこでは高価な衣服を許され好きな茶道三昧に日を送ることが出来た。有明は暴力で女を支配することをせず、徐々に相手が屈服する時を待つのであった。

錠がかけてあるのに気づいていたけれども、今日は明石の局が、その保管している鍵で八文字に開いてくれた。しかし、その明石の局でも許しなく木戸の外に出る権利はない。

百合子を従えた有明はスタスタと闇の中に踏み込んで行った。泉水から出る水が小さな溪流をつくっている。それに沿って山道が曲がりくねっていた。

しばらく行くと、流れが大きな池につながって、そこで道が途切れた。

そこに、ちよつとした船着き場があつて、

一艘の小舟が、ひっそりと舫^{もや}っていた。
丁度、ベニスのゴンドラ舟のようなシルエ
ットだった。

うながされて乗り込むと、席は二人がけの
豪華な皮クッションになっている。

漕ぎ手もないのに舟は静かに岸を離れて
暗い水面を這るように動き出した。エンジン

の音も聞こえないし有明
が漕ぐ様子もない。ただ
何かがリズムカルに水を
掻くような感じが伝わる
だけである。

——どうして動くのだろ
うか。

ふと背後に息使いも荒
く、もがくような人の気
配に気づいた百合子が、
ギョッとなって振り向く
と、闇に馴れた目は、今
まで飾りものだと思っ
ていたトルソーが実は生身
の裸女で、それが下肢を
水に浸して両足で水を掻
き、舟を進めているらし



い。そして、今まで凝然と息をつめていたら
しいこの裸女も、はげしい運動で、こらえ切
れずに息をはずませはじめたのであろう。

ふと、有明の手が肩にかかった。

動揺する心は、あたかも素肌に触れられた
ような錯覚を覚えて、思わず身を固くする。

「この舟の動力に気がついたようだね」

うす笑いを含んだような有明の声が耳元近

くに聞こえた。

「この海に浮かぶ舟は全部、人力、つまり女
体を動力にしている。君も、おいおい判って
行くと私が私の国には地上における意味で
の人格の平等は認められない。私が『人間』
として認めた者だけが人権を与えられ、その
他は家畜とか、家具としてしか、見做されな

い。君も教えられたと思うが、
五段七階級は、それを更に細分
化したものだ。君は、この国に
一等扱いで連れて来られたのだ
から一般の女囚達の受けた様々
の受難凌辱は想像するしか、な
いだろう。それは、とても君の
ような、ひとの考え及ぶところ
ではないのだよ。だが、みんな
一步一步、骨身を削るようにし
て、私の氣に入られるように努
力している。この国では、私の
氣に入られるということが、す
べてなのだから。フランスとは
わたしである——といったルイ
十四世のようなものさ。ところ
で、この漕ぎ女どもはウマ（畜

位女囚―輓畜のこと）の中から選んで持って来ているのだから、脚力は相当なものだ。その上、足鎖の代りに、脚力に応じた鰭を取りつけてある。だから結構、早くも走れるのだよ。ホラ……」

右舷寄りに坐った有明の右手は、自然に手すりの先についた小さな把手に触れていた。その把手を前に倒すと前進アクセルになり、手前にひくと後進、右に倒せば右、左に倒せば舟は左に廻る。実際、二人をのせた小舟は有明の指の動き一つで、あるいは静かに、あるいは猛然と波を蹴立てて、自由自在に水面を走った。

二本の指で、つまめる位の小さな把手だった――こんな小さな棒の動きで、どうして命令が動力となった裸女に伝わるのだろうか。こんな百合子の素朴な疑問を見透かしたかのように有明が言った。

「把手を左右に倒すと、夫々ピアノ線を通じて、左右の乳首を引っぱることになる。又、前後に倒すことは、予めウマのVに装置してあるロットを前後させることを意味し、女体に命令の内容を適確に伝えるのだ」

いつの間にか舟はトンネルのようになった

狭い水路に這入り込んでいて、その壁に取りつけられた間接照明が、暗さに馴れた目をギラギラと射た。

思わず振りかえった百合子の目に、今度は見間違ふこともない生きた肉体が、豊かなボインを打ち振りながら、両足を交互に、せわしなく動かして足を蹴っている姿が映った。軸に突き出した直径五センチばかりの丸パイプを跨ぐようにした美囚は後手錠の上半身を、まっすぐに立てたまま、ひたすらに腿を上下させていた。彼女の脊部には、その跨いだパイプから、更に垂直に立ったパイプが取り付けられていて、それが首輪を吊り、否応なく彼女の上半身を垂直に固定する役割を果たしていたのである。

激しい下肢の水掻き運動で、女体の上半身も淋漓とした汗に濡れ、その呼吸も一段と切なげに迫って来たと思った頃、水路が終わって舟は音もなく鋼鉄の水門に這り込んだ。

水門がしまると、水面が次第に下がり始める。すべて、有明の持った小型の送信器の指示でリモートコントロールされ、有明の肉声だけをチェックして反応する仕組みだった。

前方に、もう一つの水門が現われてきた。

その水門に白ペンキで書いてある水位線で水のエレベーターはピタリと止まった。重そうな鉄扉が内側に徐々に開き始める。

パツと射る様な昼光色が躍り込んできた。それは全く躍り込んできたとしか言いようのない程、光の氾濫だった。くらやみに馴れた目は、眩しさのあまり四囲を識別する能力を失ってしまったかのようであった。事実、百合子は思わず知らず、目をつぶってしまったらしい。

突然、美しい合唱の声が聞こえはじめた。リゴレットだった。

「サア、乗りかえるのだよ」

やさしい有明の声がして、右手首を軽く、つかまれた感じ、ハッと氣をとり直して目をあけると、舟はもう明るい水面に出ていた。すき透るような青さを、たたえた、水であった。しかも、おどろいたことに、どういう仕掛けになっているのだろうか、水中まで照明が完備していて、水底に敷きつめた白砂がキラキラ輝いてみえる。

目と鼻のところに、ドッシリした双胴船が浮かんでいた。

全長、巾ともに十メートルばかりであろう

か。ピカピカに磨き上げられた金色の船体はまるで鏡のように、接近する有明と百合子を乗せた小舟を映し出している。

舷側に数名のアマゾン女兵が直立していたが、振り返って、こちらを向いた一人は侍従武官の高橋淑恵だった。百合子が誘拐されたF号作戦では、原子力潜水艦ネプチューン号の副長として活躍していたから、百合子にも面識があった。そして、このオペレーション中の功績によって、二品の大佐に昇進し、侍従武官に任ぜられたのは、ごく最近のことである。

「お待ちしておりました」

にこやかに開股跪坐の礼をしながら高橋侍従が言った。部下のアマゾン女兵が二人、鉤のついた竿で有明の小舟を前後から本船に引きつける。

簡単な着流しで足袋だけの有明は身軽に船上に、とび移った。しかし、お召しをキツチリと着つけた百合子の方は、裾さばきさえ容易でなく、高橋侍従に手をとってもらって、引きずられるように辛うじて垂直のタラップを昇った。それやこれやで、不意に又、例のあのいまわしい音が、

「ブウーッ」

とばかり、鳴り出したのである。

勿論、百合子のうろたえ振りには、いうまでもなく、それを聞いた高橋侍従の方も真っ赤になってしまったことである。

それより、十メートル四方もある平甲板に目をうつした百合子は、たった今の羞恥心も忘れたかのように、

「アッ——」

と声を吞んで、棒立ちになってしまった。

V・ロツク

王宮のレベルは、地底のことでハッキリ判らないようにしてあったが、事實は海水面より、かなり高いところに位置していた。

自然、洞窟を利用して建設したポートエリアの水面は、連通官の原理で、外の海面レベルと全く等しいのだが、パレスエリアも実際は海拔より若干、高いところ、つまり、ポートエリアもパレスエリアも大体において同一レベルの上に建設されている。これは大仕掛けのトリックだった。レセプションを受ける女囚たちは、長い距離を落下、又は滑降させられた体験から、とんでもなく深い地の底に閉じ込められたように錯覚している。それは

心理的效果をねらった有明の深謀遠慮以外の何ものでもなかった。確かに、一時は地底深く海拔下、百メートル以下のところまで落とされる。そこにレセプション施設が作られてあるからである。その上、ポートエリアでも女囚を追い落とす位置は、はるか高いところからなされるから、これを加えると落差は、ほぼ百五十メートルにも及ぶ。こうして、女囚たちは、海拔下、百メートルの地底から、徐々に、目立たないように高いレベルに移動して行って、自らそれと気づかないうちに、いつの間にか海拔面にある大部分のパレスエリアでの生活に入る。そして、いつまでも、深い深い地底にいて、とても逃げ出せないのだという認識を持ちつづけるのである。

構造物の大部分を海拔面以上に位置せしめるということは、洪水、その他、予測されない事故に、対処するため、絶対に必要であった。もしそうでなければ、工事は莫大な規模になってしまったであろう。

くどくどしく説明した理由は、パレスエリアの中で、王宮は更に一段と高い位置にあり数箇の自然洞窟を結合して作られたものであることを理解して貰いたかったからである。

したがって、東館の池に続く水面はパレスエリアの所謂「海」よりは余程、高くなっている、リフトを使わなければ連絡出来ない。王宮の池は「華清湖」と呼ばれている。これは楊貴妃が秦の始皇から賜った故事によって名づけられたのだという。東館から狭水路で接続されているだけで、有明と彼が許した者以外は入ることが出来ない。華清湖の水は、島の外部にある火口湖から引かれた淡水で、飲料にもなる位の清水である。

しかし、一段降下したところにある「海」は、前述のようにポートエリアの閉水面と同じく、外海の水と連続していて、言うまでもなく海水である。これは、もともとポートエリアと一つの湖を成していたのを、有明が仕切り壁を構築して、ポート側、パレス側を完全に両断してしまっただけから、パレス側に残された部分を「海」と名づけたのである。

「海」には生き物がいた。そして、有明の国で、これまで紹介してきた他の部分と同じく「海」の生きものは、やはり、かどわかされてきた美女たちの裸に剝かれた姿であった。

何度も述べてきた通り、この国では人種差別がハッキリしている。かつてニグロを蔑視

し虐待した南部地主達の姿が、この国の支配階級である有明と、一握りの美しい日本女性群のものであった。それは、とりも直さず白人娘は如何に教養に優れているとも、美事なプロポーションの持主だったとしても、彼女等の先祖によって加えられた黒人奴隷の、いやそれ以上の凌辱と苦痛に呻吟しなければならなかったのである。

ミス・フィリップピンだったペルラ・ティニオが「海」のけものたちの仲間入りをさせられたのは、きわめて単純な理由からだった。それは彼女がすぐれた泳ぎ手であり、大学時代、シンクロナイズスイマーとして鳴らしたという履歴が注目されたからに他ならない。スペインの血を濃く受け継いだ母と、殆ど白人と云ってよい父との間に生まれたペルラは、完全なフィリップピン娘でありながら、その容姿は、むしろ欧米系であった。ただ、漆黒の髪と黒曜石のような瞳。そして、やや低目の可愛らしい鼻が白人娘と異なっているだけである。

そういえば、彼女が捕まったときも、チャーター機が海上に不時着するというハプニングから始まっている。彼女の運命は水に縁が

あったのかも知れない。

この国へ来てから、彼女に襲いかかった責め苦は、ご多聞に洩れず悲惨の極みだった。

レセプションの判決はBCABFで、材質で奴位（銅のクラス）にさえランクされなかったのである。ミス・フィリップピンとも、ほめそやされた麗人が、どうして、こんなことになってしまったのであろうか。その理由も又、きわめて簡単なものであった。彼女の下腹部には盲腸をコジらせてしまったための深い手術痕が残されていたのである。それは到底、皮膚移植、その他の整形手術でゴマかせ程度ではなかったのだ。哀れにもペルラはキズモノとして扱われることになった。

顔や手足の傷は、捕獲する前にチェック出来るが、胴体、特に下半身のソレは、捕えて全裸に剥いてみてからでないと判らない場合がある。この国では、それらをキズモノと呼び、一格下に扱われる。

キズモノのペルラは、その傷痕故に魚にされてしまったのだ。彼女には両足がスッポリ入る魚のような尾鰭が装着され、金の鱗をつけた網が、腰までを被って、盲腸の手術痕をかくしてしまった。

海にはペルラと同じようなハンディキャップを持つ美女たちが、伝説の人魚そのままに金色の鱗をキラキラさせながら泳いでいる。

その数は凡そ二百尾もいたであろうか。

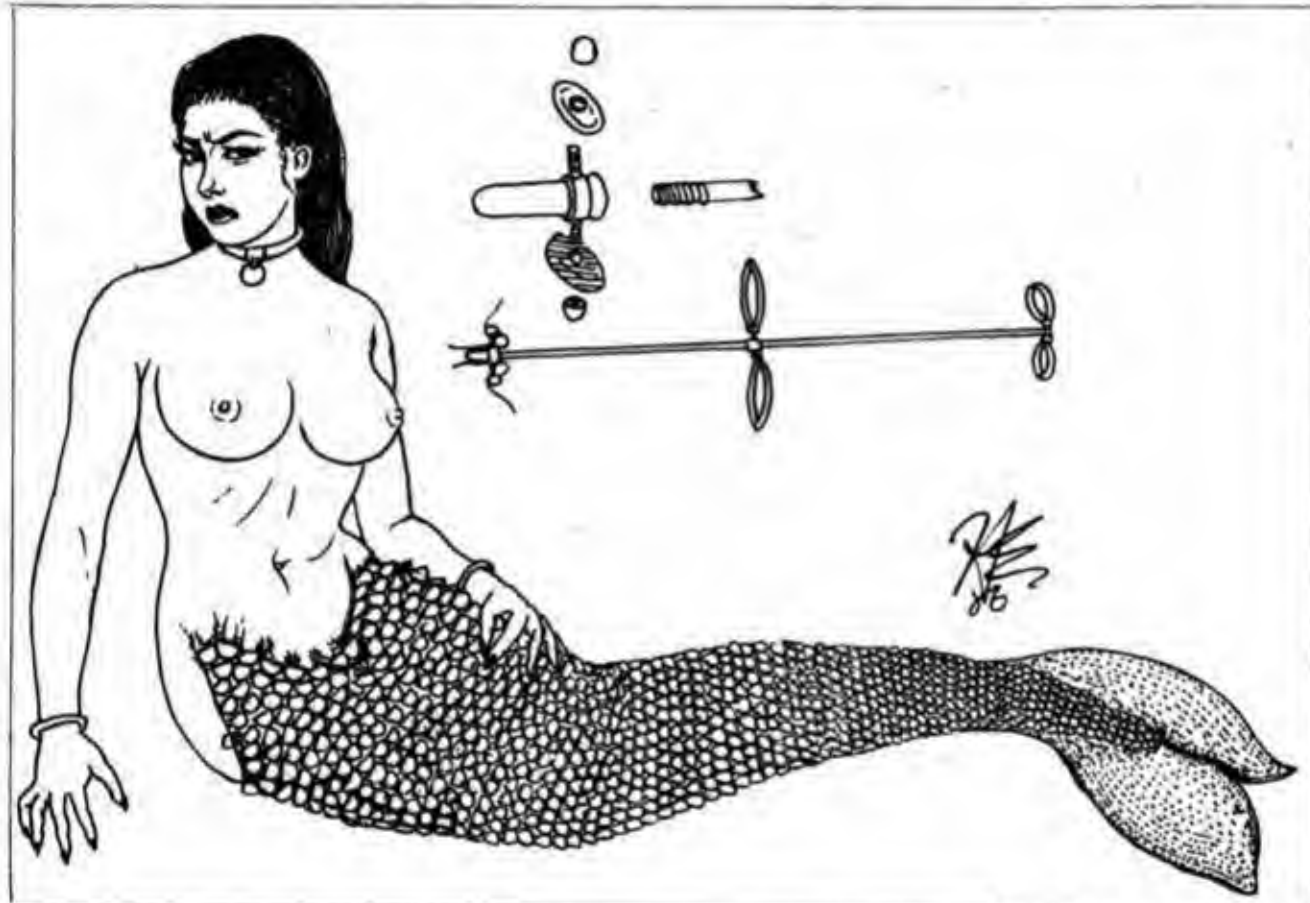
中には、あらゆる点で非の打ちどころもない麗質を持ちながら、たった一つ、小児麻痺による片足発育不全に悩んでいた女性もいる。交通事故で片足を切断した女性さえ、上半身の材質を見込まれて敢て拐かして来た実例もあった。

それだけに、脚部を除いた美しさは抜群である。普通なら畜位の女囚は何等かの方法で手を拘束されているのに、この人魚たちばかりは、水中を泳ぐ関係上、上体は全く自由だった。

それは、ペルラにとって、今想い出しでもゾッと鳥肌が立ってくるような恐怖だった。「海」に配属されてから、すぐに、アノおぞましい手術が施されたのである。

頭を床につけて、柱に逆さまに縛りつけられた。あまつさえ、両足は左右一ぱいに引っ張られて、床に固定された。丁度、デングリ返したとき、臀が一番上に

なった瞬間の姿勢で、ロックされたことになる。いやが応でも、最も恥かしい部分が、曝け出されてしまう。



羞恥と憤怒がゴチャゴチャに入り混じってペルラは大声で哭き叫んだ。しかし、ここでは、そんな悲鳴などは全くの日常茶飯事でしかない。哀れなペルラを無視したまま、作業はドンドン進められていった。

「ギャーッ、ギャーッ」

楚々とした麗人の声とは、おそろしく、かけ離れた絶叫だった。

麻酔もかけずに、羞恥部分が左右、別々にパンチされたのである。

進り出た鮮血が、下になったペルラの顔にまで降り注いだ。

ペルラは、〇（オー）嬢のように穿孔され、そこに金メッキをした特殊ソケットを、はめ込まれてしまったのである。それは入口を塞ぐようになって、万年筆のキャップの型をしたソケットが装置されたままになることを意味している。

畜位女囚（奴位の一部もそうであるが）には必ず何かの柵械が施される、しきたりだった。たとえば、輓畜は後手に永久ロックされていたし、愛玩畜は膝を折り曲げた恰好で永久ロックされている。

「海」に生棲させられる美女たちは、泳ぐ

とか漕ぐとかいう機能を温存する必要から、原則として手足を自由に動かせるようにしておかなければならない。

その代り、彼女達は、ここに述べた「V・ロック」の恥辱を甘受しなければならぬのであった。

東館から秘密の水門を通過して有明と百合子を運んで来た小舟のエンジンとなった裸女にしても、跨がされたパイプとソケットとを接続されていたのだ。首輪とV・ロックと、二カ所を固定すれば、たとえ、両手両足が自由だったとしても、屈辱に打ちひしがれた女体は完全に摺伏してしまふであろう。

「海」に棲むケモノは、このように二つの種類から成り立っていた。すなわち、マスターの観賞に供せられるサカナ（人魚）と、各種の船を漕ぐ動力としてのガリー（漕ぎ馬）である。前述（第54回）の畜位を大別した分類によれば、前者はブタ（愛畜）であり、後者はウマ（役畜）に属するけれど「海」に関する限り、双方とも共通しているのはV・ロックだった。

その上、サカナには金鱗を飾った特殊な網が両足に腿までスッポリかぶせられるのだが

その上端は、直接、腰の皮膚に縫いつけられるので、これが美畜たちを一層、悲しませることになる。細いステンレスの針金が、なさけ容赦もなく、プスリ、プスリと皮膚に突き立てられ、網の端が結び合わせられる。

ペルラのように下腹部に傷のあるサカナはそのあたりを隠すように縫合されるが、美しい臀部の曲線は露出したままに止めておく。

逆に臀部にキズのある女囚は、後のみをかくすようにする。いずれにしても用便、その他に不都合のないようにするわけだ。

傷の痛みに、うめいているペルラは、休む暇もなく海に投げ込まれた。

得意の筈の泳ぎが、そう簡単にはゆかないということを知って、ペルラは大いに、あわてた。それもその筈である。一本になった下半身は全く水を掻く役目を果たしてくれないのである。

ガブッー。

自由な手を必死にバタバタさせるけれどもそれでも、引き込まれて、したたか水を呑んだ。激痛が手術箇所を走った。V・ロックのソケットに丁度、足の長さだけの細い鋼パイプが、とりつけられ、それがペルラの両足を膝と踝のところで一本に、くくる役目を果たし

ていたからである。下半身を折り曲げることには、サカナには許されないことであった。わずかに出来ることは、腰をジョイントにして曲げることだけだった。膝は、いつもピンと伸ばしたままで、いなければならない。さもないと、結局、痛めつけられるのはV・ロックのあたり、最も敏感な神経だったのである。

それでも「馴れ」は、おそろしいもので、数週間も経つと、ペルラは僅かに動かすことの出来る足首（それには大きな尾鰭が、ついていた）を振動させて水中のバランスをとることを覚えた。

サカナの休み場所は、海に設けられた岩山と定められている。ゴツゴツした岩の上に、不自由な魚体の下半身を引きずり上げることだけでも大変なことであった。又、何とか睡眠のとれる姿勢を定めることも骨が折れた。その上、魚体を構成する特殊な網タイツは、それが乾燥してくるにつれて、ひどく縮む性質があった。カラカラに乾くまで岩上に、とどまっていると、縮んだ網の目は皮膚に喰い込んで締めつけ、大変な疼痛を与える。それを避けるために、彼女等は網が収縮しはじめる前に、再び水の中に飛び込むことに馴らされなければならない。

（未完）

<告白>

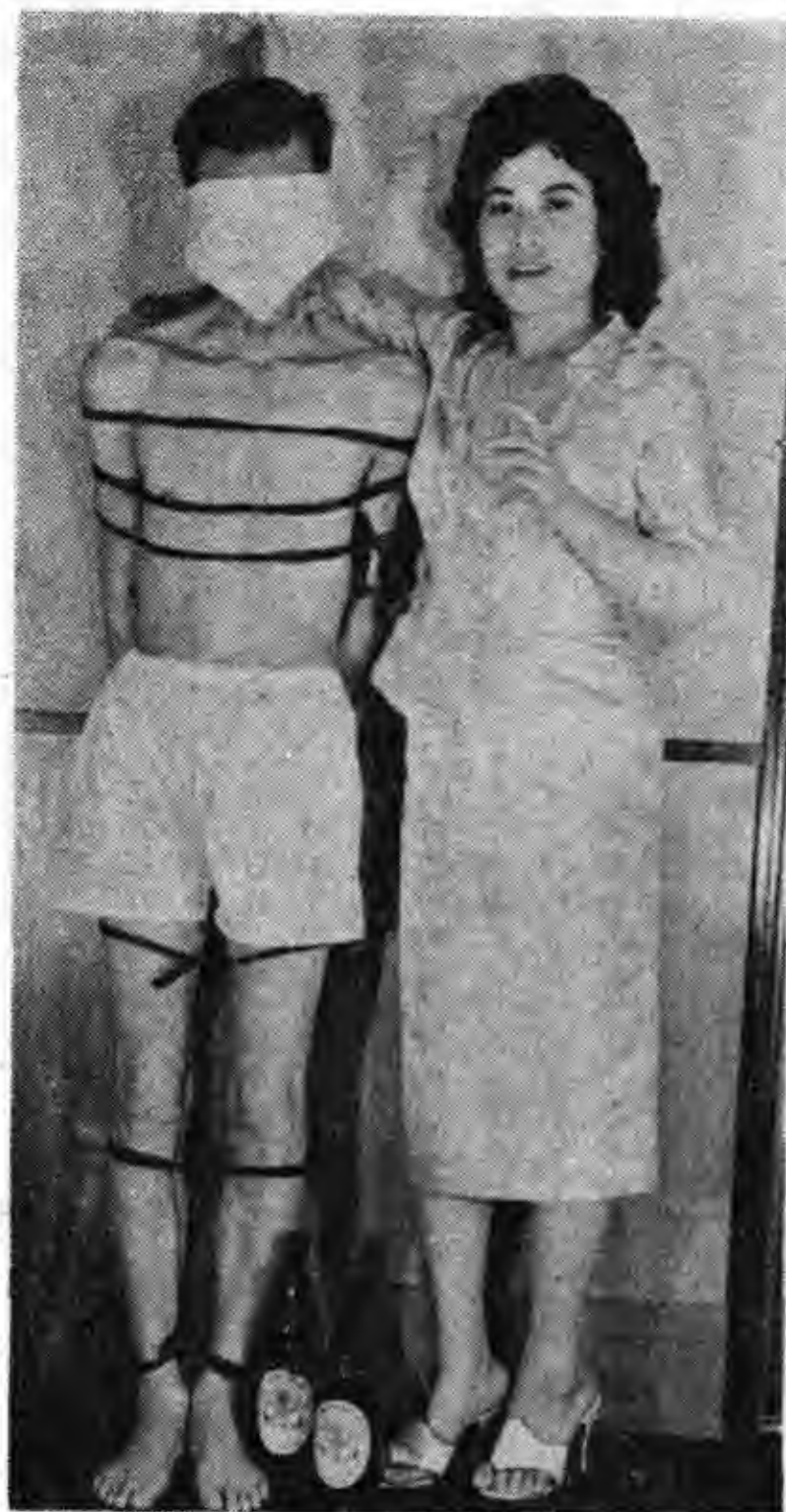
稀代のサジスチン春日ルミの体験談

私の尻の下になった男達

春^{かす}

日^が

ルミ



奇ク愛読者の皆さま、今日は。

ほんとうに長らく御無沙汰してしまつて、皆さまは、もう、とくに、私のことなんかお忘れになつてしまつたことでしょう。

でも私は、あれからも、ずっと奇クは、なつかしく拝見していました。

今は丁度、五月。もう何年前になりますかしら。私がはじめて奇クの編集部を訪ねました時も、五月の空が青く晴れわたつた日だったことを覚えております。

あの頃、私は奇クの編集部から、月にいくらかというギャラを保証されていましたから、専属のような形で、他に別にきまつた仕事を持たずに、男を責めることに専念しております。

した。いや、男ばかりではなく、伊吹真知子さんの例のように、女も責めました。

編集部で連れてこられた男性を、もう何人ぐらい責めたでしょうか。プライベートでプレイした人を含めて、三十人ほどになるでしょうか。

先日、阪急前の陸橋の上で、ばったりとその中の一人に出遭い、なつかしうに言葉をかけてこられたので、近くの喫茶店で五分ばかり一緒にお茶を飲みました。

その人のことは、「オトウ」と呼んでいただけで本名は知りませんでした。あの頃の思い出を、いろいろと話しているうち、もう一昔も前の出来事が、つい昨日のことのように思い出されてきて、なつかしく、こうして皆さまに、お便りを書く気持ちにさせてくれました。

自分が普通の人と少し変わっているのじゃないかと、気がついたのは、二十五才を過ぎたくらいの頃でした。

小麦色にひきしまつて、病氣一つしたことのない健康そのものの私は、人並みか、或は人並み以上の性欲を持っていると思っていました。婦人雑誌をはじめ、週刊誌や軟らかい雑誌、それに、そうしたことを書いた単行本

を読むのも好きでしたし、そうした知識は、人一倍、持っているつもりでした。

それなのに、実際に、異性と接触してみても、少しもよくはないのです。意欲は、人一倍強く持っているのに、いざ、その場になると、冷たくなってしまつて、砂をかむような味気なさで陥ってしまいます。

雑誌なんかで得た性知識によりますと、非常な快感を得ることが出来るものらしいのに、私は、いくら回を重ねても、一向に、そんなきざしは、見えないのでした。

女性も二十五才前後となりますれば、心も身体も完全に成熟しきつて、ミスからミセスに移りゆく、一番充実した時期なのですが、いくら努力しても、性欲は充分にありながら快感が、さっぱりないのです。

私は、あわてました。きっと、本によく書いてある、冷感症とか、不感症とかいうのではないかと、半ば、あきらめ気味にもなったものでした。

それから、そんなことを書いてある雑誌や本をあさつて、むさぼり読みました。

そんなとき、私は奇譚クラブという風変わりな雑誌を書店で見つけました。自分の心の中に靈感のようなものがピリピリッと感じた

のです。それが、何であつたのか、そのときは、何もわかりませんでした。

けれども、何かしら、自分が見えない、強い絆によって、引きつけられているような力を感じて、思わず手を出していました。

自分の探し求めていたのは、これだ、という気持ちが強くしました。私は、その雑誌を買い求めますと、わくわくする気持ちで読みふけりました。女が縛られている写真や、男が責められている画などが沢山ありました。

私は、読んでいるうちに古い雑誌も欲しくなつて、古本屋を探し求めて、十冊ばかりの旧号を手に入れました。

サドとか、マゾとか、フェチとかいう言葉を生まれて初めて知りました。この世の中にこんな変わった世界もあるのか、と、驚きましたし、また、こんな雑誌も、日本で発行されていたのかと驚きました。

それから、また、五冊ほどのバックナンバーを買い足して私は、むさぼり読みました。

自分の心の奥底に、深く眠っていたものが揺り起こされたような気持ちがしました。

男をいじめたり、責めたりしてみたい。してみたなら、どうだろう。と考えただけで、私の心は妖しく、ふるえました。



その頃、流行していた『女上位』という言葉葉にすら、自分の気持にぴったりするようには思えたのです。男性の前に立ちほだかって縄や鞭、くさりや手錠によって、その自由を奪い、自分の思いのままに翻弄することに、限りない愉悦を覚えるのでした。

小説や告白のなかに、男性が女性から辱か

しめられている場面がありますと、私は不思議と興奮している自分に気づきました。

私は、そんな自分の気持を手紙に書いて、奇譚クラブの編集部へ出したのでした。早速編集長から、お返事を頂き、一週間ほどして近鉄石切駅を降りて、少し山手へ歩いたところにある料亭でお逢いしました。

当時、私は生駒の新興住宅街に一人で住んでおりましたので、気軽に、いつでも外出できました。生駒駅からトンネルを一つ越しますと、そこは、もう石切駅です。

駅から料亭へ向かう道には夏草が生い茂っていて、もう昼前だというのに露が私の素足を、びっしょりと濡らしたことを、ほん、昨日のこのように覚えております。

俗塵をはなれた、のんびりとしたムードのお部屋で、私は編集長と語り合いました。

「愛読者の中には、貴女のような若い女性に いじめられたいという男性Mの人が沢山いますから、貴女の御希望は、きっとかなえられますよ」と言って下さいました。

その日から、私は、自分の手で、じかに男性を責める機会を持つことができたのです。

私の心のなかで、くすぶり続けていた、もやもやとした得体の知れない「男を痛い目にあわしたり、恥かしい目にあわしたい」という莫然とした願望が、実際に、この手で実行できるのだと思うと、甘ずっぱいような快感が身体中に、ひろがってくるのでした。

私が始めて責めた男性は、公務員とかいっていましたが、とても、そんな風には見えないうちで、小柄な男でした。もっとも、裸にし

てしまうと、世間で、どのような地位にある男でも、私の前では一匹の哀れな奴隷にすぎなくなるのですけれど……。

そのAと呼ぶ公務員の男は、ねっからのマゾのようでした。

私が革ムチを揮って、ピシッと床を叩き、「さあ、洋服を脱がないか」と、気合を掛けてやりますと、指をブルブルふるわせながら脱ごうとするのですが、シャツのボタンが、なかなか、はずせないのです。

「早くしないかッ」

更に一振りムチで床を叩きますと、彼はあわてふためいて、却って、まごまごします。

その時の優越感は、私の全身にジーンと、たまらない快感を呼び起こしました。今までに、こんな快い気持を味わったのは生まれて始めてでした。

生理的な快感は私を一層元気づけました。

私はムチで床を叩いて、ピシッ、ピシッという大きな音を立てては男を威し続けて、男に自分の手で洋服を脱がせました。

男がパンツ一枚になった時、私が、いくら床をムチで叩いて「そいつも脱がないか」と強制しても、もじもじ、しているのです。

パンツの上からでも、もう、はつきりと、

私の目にもわかる、男の兆候が、彼をして、パンツを脱ぐことを躊躇させていたのでしょうが、私には、命令違反としか、見えませんでした。

「脱げといったら、脱がないかッ」

今まで床ばかりを叩いていた私の手のムチが、始めて、その男の背中で炸裂しました。

一打、また一打。更に一打。

男の背に、忽ち、三筋のミミズ脹れが、赤黒く走りました。

その狼狽ぶりを見て、私の背筋には、たまらない快感が走りました。

男は、やっとパンツを脱ぎました。

おお、そこに、怒張したもの。もう、これ以上は、大きくはならないと思うほどに。

私は、既に立ってはいられないような優越感に、うっとりとしていました。

「レディの前に失礼じゃないの。こんなものを目の前にさらして……」

私は、パンプスの裏で、男のペシャンコのお腹や太股を踏みつけていました。

男の興奮状態は、女とは違って、外部からよくわかるのです。縄を一巻き、二巻きという風に縛ってゆきますと、グングンと、その興奮度が増してくるのが、私の目にも、はっ

きりとわかり、面白くもあり、また一面、張り合いもありました。

私がヒールの高い黒のパンプスで、机の上に挿し出した男の手首を、がっしりと踏みつけている写真は、たしか奇譚クラブの口絵に載ったと思います。あのパンプスは、心斎橋の靴店で私の足に合わせて編集部で買ったものです。

次に、私が責めたのは、Bという踊りの師匠をしているとかいう、色の白い、のっぺりとした顔立ちの男でした。ゴムが好きだとかで、数十種のゴム製品をコレクションしているとか言っていました。

例によって裸にさせますと、足や脛のウブ毛までも、きれいに剃ってしまつて、まるで女の肌のように、ブヨブヨしているのです。

露出症気味の癖があつて、私が強制するまでもなく、自分から、そんな生白い肌をさらして、私に見てもらいたがるのです。

その興奮状態をあらわす根源に、変わり型のゴム製品を、ちゃんとかぶせてあるのには驚きました。Aが筋肉質のタイプだったのに比べ、このBという二十才を少し出たばかりの生白い男は、ブヨブヨとした脂肪のかたまりのようなタイプでした。

縄を掛けてゆくと、「余り手荒なことはしないで——」と、女言葉みたいな、しなを作って甘えるので、思いきり、きつく縛って置いて、床の上へ蹴り倒しました。

顔も男性のモデルとしては、整っているようでしたので、編集部で写真は相当、撮ったようでしたが、私は生理的に、こんなタイプの男は好きになれず、彼もまた、私なんかより、逆に男性から虐められたいようでした。

男性Mといっても、いろんなタイプがあることが、この頃になって、やっと判り始め、私は、奇譚クラブを教科書のように、何度も何度も熟読するのです。

そのうち、Aが盛んに、私に手紙を寄こして、いじめて欲しいと懇願しました。

私のことを、女王様だとか、女御主人様だとか崇め、自分のことを奴隷だと蔑んで、それが、いかにも楽しそうに書いていたので、私も暇にまかせて返事を書いていううち、いつの間にか、私が女王様で、彼が奴隷という風になってしまい、次に二人っきりで会った時は、完全にそんな身分関係になっていました。

女王様と奴隷。

なんと魅力的な言葉でしょうか。



私はAに関する限り、完全に上位に立っているのままだに、好き放題のことがふるまえるのです。私は彼に関しては、生殺与奪の権を握った独裁者だったのです。

マゾといっても、Aの傾向は、一つの、特徴がありました。彼は縄で強く縛られることを、より好みました。血を流すとまではいか

なくとも、肉体を痛めつけることによって、例えば靴のヒールで、皮膚に穴があくくらい踏みつけたりすると、大変興奮しました。

私のことを女王様と言っておきながら、自分のアヌスに鉛筆やボールペンを挿し込んで責めることなどを求めました。

私はデパートで犬の首輪やくさり、それに



セパード調教用の革鞭なんかを買い求めてきて、手始めにAを責めてみました。

Aは、私の身体には指一本触れることはしませんでした。私が私の責めに対して悶え、喘ぎ、そして、果ては、私の見ている目の前でみじめな姿のまま、遂情してしまうのでした。私は、どちらかといえば、ムチとか、口

による威嚇で相手を屈伏させて、自分の思い通りにさせたいのでしたが、Aは、きつく縛ったり、蹴ったり踏んだりしてほしいらしく、浣腸にも興味を持っていたようでした。プレイが終わった翌日には、必ず長文の臣従書や誓約書を送ってきて、もっと、ひどく責め痛めつけて欲しいと願うのでした。

私は、端切れを買ってきては、家でミシンを踏んでは、ブラジャーやバタフライ、スキヤンティ、パンティなどを、自分の身体に寸法を合わせて何枚も作りました。ビキニの水着なんかも、いろんな型のものを布の柄を変えて数着、作りました。

幸い、学校時代から洋裁は好きで勉強していましたが、こうした簡単なものは、お手のものでした。

ブラジャーやバタフライ、スパンコールなど一つ一つ、つけてゆく手間な作業も、暇を持て余していたので苦になりませんでした。あとになって、こうした私の着用した下着類、殊にバタフライ、ブリーフ、パンティ、スキヤンティなどの下半身に、じかに着けたものを希望する人達が多くて、殆ど、編集部を通じて譲ってしまいました。

心斎橋や梅田新道の洋装店を歩いていて、気に入った黒のシミ目のシャツやストッキングがあったりしたら、すかさず買って帰り、それを着て、男性を責めるのでした。

そのうち、奇巧の編集部から回されてくるM男性は、C、D、E、Fと、次々と増えてきました。ある中小企業の経営者だというCは、今までの二人とは違って、六十近い年輩

でしたので、写真のモデルとしての価値は少なかったようですが、本人は、私に責められているところを、写真に撮ってほしいようなことを言っておりまして。

Cは、いつも、床に四つ這いになっていて立って歩くようなことはありませんでした。移動する時は、いざるようにして腹這いになり、私の素足にとりすがって唇を当てます。

「春日ルミ女王様。どうか、私奴に、お恵みを、お与え下さい。お願いします」

両手を合わせて、私を拝むようにするのです。私が無言で見下ろしていますと私の足の指を口に含んでチュウチュウと吸うのです。

如何にも、おいしそうに、一本一本、丹念に指を舐め、吸い、しゃぶってゆく有様を眺めて、私は、おかしさがこみあげてきて、思わず知らず、頬の筋肉が緩んでくるのです。

汚れた足の指を舐めさせている——いや、舐めさせているというよりも——、この世でこんな美味なものはないという風に、狂ったように、そんな作業を続けている男に対して憐憫の混じった優越感が、ひしひしと身体中に漲ってくる思いです。

自分こそは、女王様である。女主人様であるという自尊心が、気持としてばかりでなく

身体を通じて実感として味わうことが出来ました。それは、なんとも言えない一種の性的な快感でもありました。

ここで、八春日ルミVという名前について書いておきます。勿論、本名ではありませんが、この名前は私が自分が考えてつけたものです。先にも書きましたように、私は生駒に住んでおりましたが、両親は、もともと奈良の人間で、春日大社の近くで新薬師寺の裏に当たる町に住んでいました。それで、私も小さい時は、森の中を遊び場にして、春日さんへ、遊びに行ったものです。

そんなところから、つい、八春日Vという文字が私の頭に浮かんだのです。ルミというのは、私の本名を少しもじって、口調がよいので八春日ルミVとつけました。

Cは、年令の関係もあったでしょうが、もう既に、男性としての機能は、完全に駄目になっているようでした。若い元氣のある男性だったら、無理矢理、裸にしてしまうだけでした。その興奮度は、顕著なものでした。しかし、Cは、素裸にひんむいておいて、私が、その部分を爪先で蹴り上げて、もう、何の反応も示しませんでした。

それでいながら、私の肉体の汚いと思われ

る部分に対しては、執拗なまでの執着ぶりを示すのでした。足の指を舐めにきた彼の頭を踏んづけたり、蹴ったりして拒否すると、

「女王様、お願いです。どうか、この奴隷にその美しい御み足をお与え下さい」

哀れな声を出して私を伏し拝み、私が黙っている、すかさず足首にとりすがってくるのです。

ねばっこの唇や舌が、私の足の裏に這いまわってくると、私は、思わずゾクゾクとしてしまい、快感が脛から内股を伝って、身体の中心部へ貫いてくるのです。

でも、Cの願いは、それだけではなかったのです。足の指や足の裏から、次第に遡って足の甲から脛というところまでは、私も許していたのですが、更にエスカレートして、奴隷の分才としては、思いも寄らない大それた願いを口にした時は、私は激怒しました。

「バカ、なんという大それたことを、よくもこの女王様に、願い出たものだ。もう許さない。こうしてやる」

私は彼の頭を蹴って蹴って、蹴りまくりました。彼は頬を床につけて、私の鋭鋒をさけようとして腹這っています。私は、その背中へ、どしんとお尻をのせ、尻の下に敷いてや

り、彼がもぞもぞと、私のお尻の下でもがいて仰向けになった時は、私は彼の胸の上に、馬乗りに跨がった格好になっていました。

男を完全に、自分の尻の下に敷いた私は、たまらない愉悦に、思わず全身がふるえました。足を挙げて彼の顔面に、べったりと足の裏を当てて息苦しくさせると、彼はハアハア



と熱い息を吐きながら、ペロペロと足の裏を舐めはじめました。

足の裏の虫の這うような擦ったさ。私は、彼の舌をふり切って、足の拇指と中指とで、彼の鼻を摘みました。私は子供の頃から足の指の力が強くて器用で、机の上から落とした鉛筆や消ゴムなんかを足の拇指と中指とで挟

んで拾い上げ、よく母に叱られたものです。ですから、私の足の指で鼻の頭を摘まれたら強烈です。私は足の指で相手の肌を挟んでアザをつけたことがあるくらいですから。

その次に会った時、私は、このCに対して完全に心身共に屈服して、私に奴隷として仕えることを誓わせました。

いつも、床の上を這いまわるようにしているCに対して、私は余り、縛るといふようなことはしませんでした。時には興がのれば両方の手首だけを背後で括って、むきだしになった彼のしなびた物に意地の悪い悪戯を仕掛けたりすることがありましたが、殆どの場合そんな縛ったりなんかしなくても、私の前に出たら、いつも、畏れおののくといった風で小さくなっていました。

彼の一番の願いは、私の尊い個所に対する接吻で、これを果たさないことには完全に屈服したことはないと思っっているらしいのです。それと併せて、私の排泄物をも、直接、頂戴したいと、口にするようにしていました。

先ず、私がCに対して許したのは、浴室の中に於ける奉仕でしたが、これは専ら、足や手を洗うことや、濡れた身体を拭いたり、ス

リップを揃えたりすることで、仕方が下手だと叱って、スリッパを履いた足を彼の頭の上に載せて押えついたりしました。

そんな恥かしめに対しても、喜々としている彼に犬の首輪をはめて、くさりで繋いで引きまわし、スリッパで頬を踏みつけて、開いた口の中へ唾を吐きかけてやりました。

顔中を唾だらけにされながら舌を伸ばしてペロペロと、それを舐めているのは、まるで飼犬そっくりです。私は、彼が私の吐きかけた唾に異常なまでの歓喜の情をあらわすのを知って、これを御褒美として与えることによって、この飼犬を自分の好きなように仕込むと考えつきました。

首輪とくさりとでCの自由を完全に制しておいて、私は自分のやりたい放題のハレンチなことをやりました。奇譚クラブを十数冊も読んでいたことは、大変、役に立ちました。

その中から、自分の気に向いたものを選んでこの人間ならぬ飼犬に対して試みました。

パンティを、まくり上げておいて、人間の一番、汚い個所を、Cの口にべったりと押しつけてやった時は、ざまアみる……という痛快な気分が、頭を爽やかにしました。

「もう用便のあとで、トイレットペーパーな

んで、使わなくてもいいんだ。こいつの舌をペーパー代りに使ってやるだけで、こいつは底抜けに嬉しがるんだから……」

私を、そんな気持ちにさせました。実際、Cは自分で自慢するだけあって、舌の使い方はうまいものでした。男性の機能が、すっかり駄目な代りに、口や舌の方が異常なまでに発



達してしまっている、この人間犬Vは、私のセックスを愉しませる生き物として、極めて貴重な存在になってきました。

私は始めて、この人間犬Vに舌を用いて奉仕された時、今迄に味わったことのなかった絶頂感を味わったものでした。

「女王様の官能を満足させるには、どうすれ



「ばよいか、わかっているね？」

私が、その言葉を掛けると、この人間犬はクンクンと鼻を鳴らして私の足下にじゃれつき、長い舌をペロペロと出してくるのです。

気にいらぬ時は、私は、その鼻先を、足の踵で、ひょいと蹴ってやるのです。これは相当に痛いらしく、しゅんとして、勢いこん

だ顔を垂れてしまいます。

その頃、編集部から、伊吹真知子を責める役を、やってくれと依頼されました。

私の身体の中に眠っていた嗜虐の心は、この頃になって、ようやく目を覚ましたように、次第次第に燃えだしてきました。

奇譚クラブの誌上に、私が男性を責めてい

るところの写真が載り出したのも、大変励みになりましたし、また、それに対する読者の反響も私に自信を持たせてくれました。

自分の性の快楽のために、自分の思いのままに振舞っていた私ですが、自分の遊戯のためばかりではなく、雑誌の口絵に掲載される時の効果を考えて、同性である伊吹真佐子を責めることに踏みきりました。

伊吹真佐子は、身体こそ、むくむくと、はちきれそうに肥っていました。私よりは年が五つも下だったせいもあって、こうした知識は、私と比較して、うんと乏しいようでした。大人しくて、なんでも、「はい、はい」と素直によく言うことを聞く性質は、マゾ女性特有のものだったかもしれません。

枚岡公園や甘山池の附近で、野外の責め場を、伊吹真佐子を相手に行なったのも、今では、なつかしい思い出になっています。

室内での『浣腸責め』や『蠟燭責め』で、その隠しておくべき個所までも、私の目の前にさらけ出されて責められてからというもの、急速に、私に親しくなって、一緒にデパートへ買物に行ったりしました。

彼女にしても、同性である私に、そんな個所を責められるよりも、男性に責められる方

が嬉しかったのでしょうが、雑誌編集の都合からか、前後十数回に亘って、伊吹真佐子を縛る機会を持ちました。時には、坂口利子とか他の女性と一緒に時もありましたが、私には何故か彼女が一番責めよかったようです。

Dというのは、今までに、女主人に仕えて飼育された経験を持つという三十代の男で、髪をきれいに分けてポマードで整えて櫛目を入れていたといったオシャレで、背広のポケットに色物のハンカチを挟んでいるといった気どり屋でした。

私は、そのきれいに整えた髪を、いつもバラバラになるくらい乱暴に取り扱ってやるのでした。後手錠を掛けると、途端にムクムクときたので、「女王様の前で、失礼ではないか」と、さんざん答で（これは乗馬鞭の鋼線を抜いて私が作った手製のもの）ぶちのめしておいてから、くさりを通して後手錠と結んで錠を掛けてしまいました。

「ムチで叩かれるのには弱いんです。どうかそれだけは、お許し下さい」と哀願します。「それだったら、早く、これをしまってくださいわなにか」私は答の先でつつきます。

いくら私から叱られても、鎖で締めつけられていきますから、その怒張は、一向に納まり

そうにありません。

そんなわけで、Dは、私の罵倒と、足蹴と鞭打ちとで、床の上をごろごろと転がり回って悶えぬいた挙句、夥しいものを、そこらあたりに撒き散らして昇天してしまいました。

あとで、Dの語るところによりますと、あんなに素晴らしい責めにあったのは、あれが初めてだ、と言っていました。が、本当は、私の排泄物を口にしかかったのだ、と、告白していました。

数年、女と同棲していた経験があるらしくそのホステス上りの女との間のSとMの関係が、Mの素質のあった彼を、今のような男にしてしまったというのです。

男性のモデルになるというよりも、春日ルミという女性に責めて欲しいためにモデル志願してきたという、この男を、私は、遠慮会釈もなく責めて、自分の性の悦楽の餌食にしようと考えました。

Dは先に述べたCと違って、男性の機能の方は至極元気だったし、それに、道具の方も悪くはない方でした。

後手錠の首輪責め、それに、銀の細いさを掛けて締めつけ、後手錠に連繫するといふ地獄責めプレイは、もがけばもがく程、締

めつけられて、逃がれることの出来ない状態に陥ってしまいます。

私は、そんな状態のDを冷ややかに眺めながら、時折、罵声を浴びせかけます。そして結局は、女上位の優位の立場から、M男の屈伏と、サジスチンとしての春日ルミの性の満足達成するのでした。

私が、何物もかなぐり捨てて没我の境地にさまよい、のけぞりながら絶頂に到達するというのには、普通的手段では到底駄目なことが、自分でもよくわかりました。

男性を辱かしめ、罵倒し、いじめ、責めたあとに於て、はじめて、その行為に満足するという自分を発見したのです。

普通の人とは違って、それだけ、より複雑な手続きをしないことには、性の満足を得られない自分の性癖を、因果なものと思わざるを得ませんでした。なんという因果な星の下に生まれてきたのでしょうか。

奇譚クラブの誌上に、春日ルミの写真や記事が毎号掲載されるにつれて、数多くのファンレター（その殆どはM男性からのものですが）が、私の手元に届きました。そのいずれも熱狂的な春日ルミに対する讃美の言葉で満ち満ちていました。

その頃になって、私は夥しい数の責められることを希望するM男性と通信を交すよりも編集部から派遣されてくるMモデルを相手にSMプレイを展開する方が忙しくなっていました。それにつれて、私の着用した下着がほしいという読者も増えてきました。

マゾフォトの写真撮影に、一回着用しただ



けで、奪い合うようにして、それは読者の手に渡ってゆきました。写真にうつされているということが、私が実際に着用しているという証拠になり、私は、次々と新しい下着を替えてゆきました。

手製のビキニやスキャンティなんかは、逸早くなくなり、既製品で間に合わすようにな

ってしまいました。

何枚かの、私の下着を譲り受けたという男性が、平常、私の穿き古したパンティを欲しい、と言って私に便りを寄こしました。それも、三日も四日も、洗わずに穿き続けたものを送って欲しいというのです。

私は下着は毎日入浴の後で着替えるので、そんなに長い間、穿き続けたパンティなんかあるわけがないのですが、「自分のために、たつてのお願い」という言葉に、そんなに欲しいものなら、気持ちが悪いのを辛抱して、三日間、穿き続けたのを汚したまままでビニール袋に入れて送ってやりました。

そんなことから、このEという男性を知りました。数回の文通の結果、このEは、県庁所在地の地方都市に住む経理士で、年令は四十六才。現職の県会議員で、三つの会社の役員も兼ねている、この地方のボスの一人であることがわかりました。

このEのことにつきましては、私が、春日ルミとして、わざわざ彼の住む地方都市へ赴いて、数日に亘って責めるという経験を持った思い出の人物なので、筆を改めて書いてみたいと思います。

——(この項おわり)——

連 載 ・ 時 代 S 小 説

紫 蘭 の 門

(24)

風 流 極 道 軒

もしも、紫蘭の門の貴重さを
軽ろんじ賤しめることあらば
それは自らを業火に投げ入れ
救いなく厳しい神罰の降るを
冀うことと知るであらう。

淫らな瀬戸貝

斑猿の声を夢うつつのなかで聞いた豊香の
耳に、今度は、はっきりと黒馬の野太い嘲笑
がひびいた。

「豊香。亭主野郎のお出ましたとさ。これで
お前も俺たちも楽しみがふえたというものだ
ぜ、フッフッフッフ」

強い力で両脇腹を抱えこまれ、

「ア、ア……」

豊香は、ただひとつ自由になる顔を、襖の
ほうに向けた。

そこには斑猿に縄尻をひかれた男が突っ立
っていたが、それが夫の春田和泉であると確
認するのは、容易なことではなかった。

というのは、その男は、裸ひとつの裸で、
もう滅茶苦茶に、いもだわらでも縛りあげる
ように太い縄で縛りあげられている上に、顔
のなかばが隠れるほどの、厳しい猿ぐつわが
かまされていたのであった。

そのあまりの無残さに、わが身もまた一糸
まとわぬアカ裸であることも忘れて息をのん
だ豊香であったが、男の、怒りに赤く血走っ
た両眼は、夫のものにまぎれもなかった。

前号まで——小紫のお景奪回をめざし
て元禄屋の麻布別邸を襲撃した徳夜叉た
ちは百挺の火縄銃のために空しく敗退。
勝利を祝う鞭兵衛や工頭監物たちの前に
ひき出された春田豊香の裸身に、あて馬
遊びがくりひろげられ、その席に夫の
和泉がひき出されてきた。

「あ、あなた！」

おもわず叫んだ豊香は、ハッと臉を閉ざし
た。多勢の男たちのまんなかで、心ならずと
はいえ、惨めな姿態をさらされているという
羞恥心が、夫の出現によって、いよいよ油を
注がれて、頬から肩、乳房の谷までが、みる
みるうちに赤く、そまっていくな。

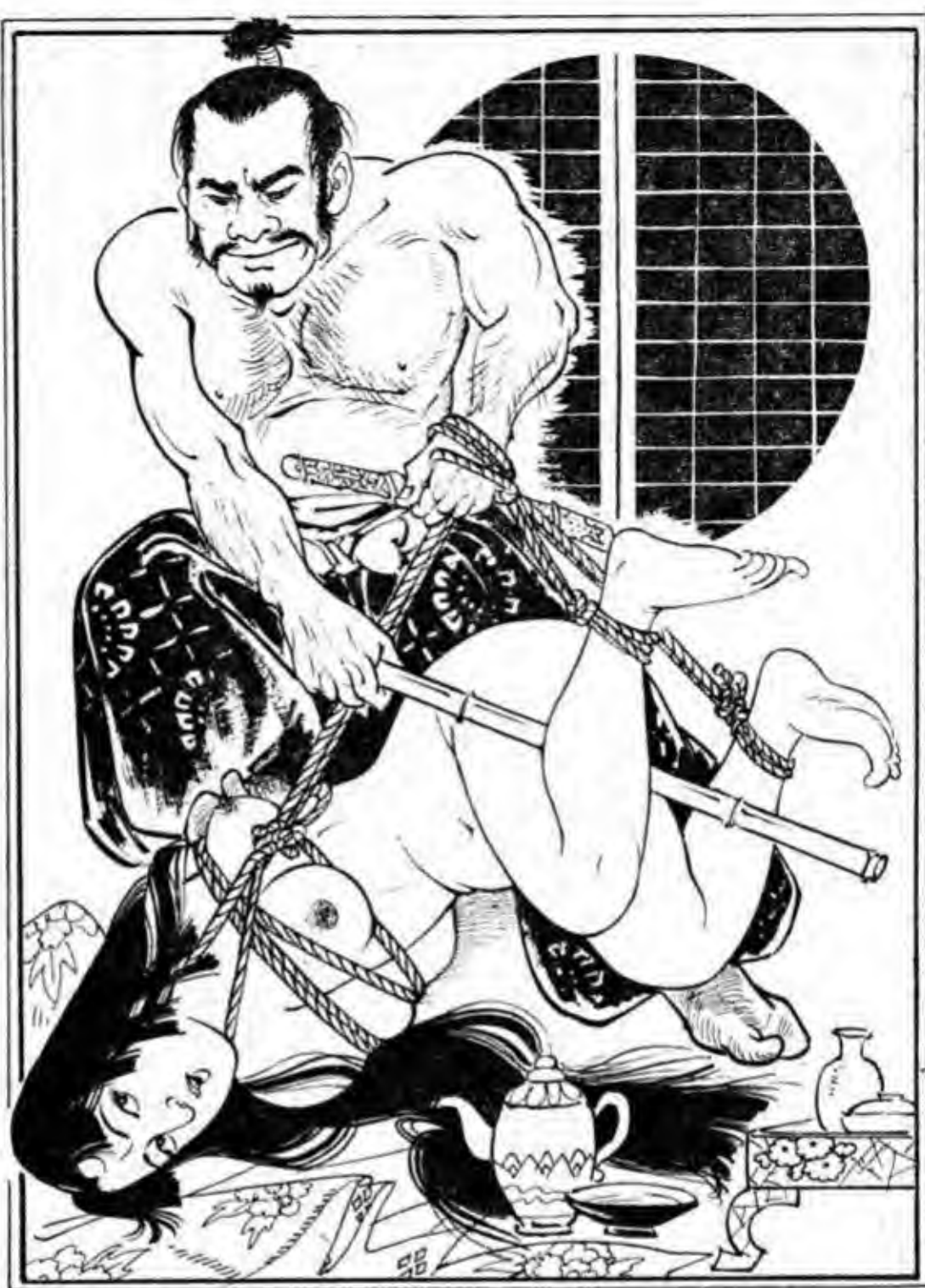
「これこれ、そんなに暴れるんじゃない。
ほら、静かにするんだ」

少しでも夫の眼から、のがれようとする妻
としての、いじましい気持が、豊香の五体を
締めさせるのであったが、文机と違い棚にか
け渡された棒から、捕えられた女狸のように
手足をひとつにして吊りさげられている身で
は、その努力も、はかない。

「御亭主さまヨ。よく御覧じろ。お前さん
の可愛い可愛い女房殿が、このとおり黒
馬の兄貴に楽しそうに抱かれていなさる。フ

ツフツフ……どうだい、もう少し、前にだしてやって、たつぷりと拝ませてやろうか」

斑猿が縄尻を、ひったくると、和泉の躰がもろくも、ななめ前へと転がる。みると、両足にも一尺ほどの長さで太縄が絡んでいた。それを抱きおこして無理矢理に、黒馬と豊



香の真横に、ひきずってきた斑猿は、「おめめをあけて。ほれほれ、よおくみるのだ。みればみるほど惚れ惚れするような瀬戸貝のささみじゃあねえか」

ささみとは、料理用語で鳥類の胸の肉をさし、貝類には、あてはまらない言葉であった

が、この場合は、なんとも云えない肉感的なひびきをもって男たちに迫ってきた。

一方——瀬戸貝は、これは、もうご存知のようにヒメガイのこと。正式には貽貝といい北は北海道から南は沖縄まで日本の海岸一帯でとれる、十五センチくらいの黒光りのする二枚貝。殻をとると、そのなかは、まさしくヒメガイ……肉は赤味がかった橙色で、黒い毛らしきものもあり、紫色の部分もあり、襲もある。漢字では「東海婦人」と書いてヒメガイとよませるが、誰があてたか、みやびやかなことである。

さてその瀬戸貝——つまり貽貝・ヒメガイは、酢のものによし、焼いてよし、お吸いものによしという。酢につけたり焼いたりしては、もったいない。ひとつ「吸いもの」にでもしてやろう。というのが、悠々と盃をあげている鬼与力・工頭監物の腹の中——それを知ってか知らずに、よこから白豚が、

「瀬戸貝のささみに、それ、いま、箸をつけて賞味しているところだぜ。公儀御用櫛師の春田さまヨ」

瀬戸貝は、たしかに美味であったが、黒馬は、ふと、別のことを考えていた。

衆人環視のなかで、亭主に、女房のあて馬

をやらせるのも悪くはねえ——と。

自分の女房を、よその男に抱かせるために亭主自身が、まずあて馬の役をつとめる——こんな話はまだ聞いたことがないだけに、そいつをこの夫婦にやらせてみたら、はたしてどんな顔をするのだらう。女房の恥かしさは、この上なく燃えあがるであらうし、屈辱にゆがむであらう亭主の顔も、さぞかし面白い、みものにちがいない。

豊香の熟れきった脇腹や乳房を、これみよがしにまさぐって和泉に見せつけていた黒馬は、そのままの姿勢で「親分、ちょっと」とよびかけると、ちかよってきた鞭兵衛の耳にひそひそと自分の計画を、うちあげた。

聞いているうちからニヤツと淫らな笑いをうかべた鞭兵衛が、工頭の耳に私語すると、これまたニタツと顔が、ゆがんだ。

眼の前で、いやがる夫婦に——これは、まさしく刺戟的な場面となるであらう。しかもいざという寸前に夫を、ひきはなし、自分がこれに代るといふのも、まだ体験したことがないだけに工頭の興味を、あおいたてるのであった。

「黒馬。お許しが出了。始めるぜ！」

「合点、承知！ 親分」

黒馬が、わが意を得たとばかりに、抱えこんでいた腕を解いたかとみると、「パシッ」と白い羊の肉を平板でも打ち叩いたような惱ましい音がして、豊香の裸身が、ぐらりと揺れ、

「アッ、アッ！……」

媚を含んだ喘ぎが、ひびいた。

「兄貴。どうしたんでさあ、突然に！」

くる、くると、狸吊りにされたまま回り始める豊香を、あわてて押える白豚に、

「あて馬は、あの男にきまったよ」

「な、なんですって、春田の野郎に」

「そうさ。さあ、今度は尻のほうを、そっちに向きな」

宙に浮いている女体の位置を、かえるのはわけもない。

斑猿に縄尻を、しっかりと、とられている夫のほうに、あからさまに下半身向けさせられた豊香は、

「お、おやめになって、おやめ下さい！ アッ！ アアアウ」

手足の痛みもさることながら、夫の目を意識して、五体がまるで、焰のように感じられる。

もちろん、多くの男たちに眺められるのも

恥かしいが、多くの男たちの見守る中で、愛し慕い尊敬する夫の目に、あさましい姿をさらすことは、もっと恥かしいことであった。

ピク、ピクッと裸身をふるわせながら、

「やめて、やめてちょうだい。やめてっ！」

叫びつづける豊香の、どこから滴りおちるのであらう、灯の光に照り映える一筋の糸が青畳に、おちて溜まった。

「フッフッフ。あて馬の役目は、もう結構、はたしているじゃあねえか、黒馬よ」

それをみた鞭兵衛は、小指の先で掬いあげると、豊香の鼻先に、つきつけた。

「やめてください——もないもんだぜ」

どっとあがる哄笑の中で、心では、いくらあらがっても——と豊香は、じいっと唇を噛む。

「フッフッフッフ……さあみやがれ！」

こきみよさそうに云った黒馬は、その間も必死に暴れまわる和泉を、両脇から押えつけている斑猿と白豚に向かってニヤツと、あごをしゃくってみせた。

始めろという合図である。

「合点、合点。承知のすけすけ、すけべえ。」

合点、合点、すけべえ！」

たのしそうな声とともに赤狐も加わって三

人がかりで和泉を豊香の前へと、引きずり出したが、

「ア、レレレッ、この野郎！」

白豚がスットン狂な声をあげた。

「まったく何という野郎だ。てめえの女房がこんな目にあっているというのに……」

白豚が指さすまでもなく一座の男たちは、がんじがらめに縛りあげられた縄のあいだから覗いている輝に気づいて笑い合った。

この没道義とも云える和泉の反応はやむを得ないことであつた。捕われて以来というのも、狭い土蔵の二階で食事だけを与えられて暮してきたのだが、その食事というのが、さすがは天下に鳴る豪商・元禄屋、栄養たっぷりの山海の珍味が盛られていたのである。

いつかは、誰かが救いにきてくれると、それだけを希望に生きていた——隣の土蔵の妻の豊香と千登世との連絡もつかないままにいる身では、久しぶりに妻の裸体をながめて、あたりまえの反応であつたろう。

男たちの嘲笑のなかで、和泉は、せめて彼等の意図している破廉恥な行為だけは拒否しよう、必死で両足を踏みしめる。

あと二、三寸も押し出されれば、いやでもおうでも、肌を触れ合うこととなるろう。

「ム、ムムムム……」

猿ぐつわの下から、瀕死のけだもののような呻きを洩らし、両眼を、はり裂けるほど見開いて三人の男に抵抗する夫の姿を、豊香はとも見えてはおられなかった。

「や、やめて、やめて下さいまし。妾が、妾が、なんなりとおいいつけに従いますゆえ、もう、お、おやめになつて下さいまし！ 鞭兵衛親分、黒、黒馬さん！」

叫ぶたびに、かっぶくのよい背が、ピンピンと、はね、そのたびに吊られている手首や足首が、ちぎれるほど痛んだ。

「工、工頭さま、おやめ下さいまし！ 妾なら、妾ひとりなら、どんなめにあおうと、いといませぬが、夫……夫にだけは、アアッ、もうほんとに、許して！ 夫を、帰して、夫をこの部屋から出して下さいまし！」

必死のおもいをこめて見あげる豊香の瞳に工頭の顔がのしかかっていたが、

「ア、アッ、工頭さま。妾が、何でもしますつたら！」

迫ってきた工頭の顔を避けようともせず、むしろ唇をつき出してみせる姿には、夫の身替りに殉ずる、けなげさが溢れていた。

が、そんな美德には、おかまいなしで工頭

は突き出された紅い唇に、酒臭い口をよせて吸いついていく。

「アッ！ ムウ、ムムムム……」

ふくよかな、あごを天井に向けている——つまり、逆さになっている顔の真上から、唇を激しく吸われる衝撃に、豊香が、われを忘れようとした。

と、同時に——恐れながらも覚悟していた嵐の襲来を豊香は感じた。

それは、もの狂おしいまでの瞬間であり、どんな悲鳴を自分が、いったい、あげたのかどんなに五体を悶えさせたのか、まったく覚えのない瞬間、瞬間であつた。

（夫だわ……夫に間違いはない！）

と、やっと豊香が思ったのは、それから、かなりあとのことであり、その頃には、もう無性に乳房が熱くなり、疼きが、こみあげていた。

「ア、アッ、ア、アッ……」

喘ぐたびに、吊られた五体が前に、後にと大きく揺れる。揺れるたびに斑猿たちの野卑な叫びがあがるらしい。周囲には、なにが、いったい起こっているのだろうか——。

練絹の様な肌が、しっとりと汗ばみ、伊勢白粉のかわりに、なんとも云えない、なまめ

いた匂いが部屋中にたちこめ、実りきった桜桃の様な乳首が上へ下へと波立ちつつける。

「あ、あ、あなた！ ア、アッ！」

豊香の唇から、遂に耐えきれないような夫への呼びかけがなされた。（か、かまうものですか、夫、夫なのですよ！）心のなかがわれ知らず口に、でたのだ。

鞭兵衛がニヤツと笑って、斑猿たちに、和泉の躰を一步、後退させたのは、そのときであつた。

「アアアア！ や、やめないでエ！ お、お願い！ あ、あなた！」

ふわりと、豊香は自分の躰が回転するのを覚えたが、それとともに、横に向けて、かすかに見開いた視線に、誰かが、仙台平の袴を脱ぎすてるのが、おぼろげに見えた。

一座の中で、袴をはいているものといえは工頭監物以外には、いない。

（工頭さまが……妾を、ア、アウ、とうとう、妾は……夫の目の前で……）

チラリと、そんな屈辱の思いが浮かびはしたものの、豊香の爛熟した肉体は、せきをきったような悦虐の悶えを惜しもうとは、しなかった。

広い額の生えぎわから垂れた黒髪が、青畳

の上で、さわさわと、何度も何度も波を打つて――。

消えていた、ひとつの結び灯台に気がついた斑猿が、油をそいだのは、それから小半刻も経ったところであつたろうか。

はや、どこかで、鶏が、威勢よく暁の訪れを告げていた。

大望ある身

――戊夜のロザリオは、どこに。

濃い紫色から次第に明けていく東の空に、ひとときわ燦めく暁の明星を眺めながら元禄屋は、考えつつづけていた。

怪盗・徳夜叉の襲撃をみごと撃退したとはいうものの、肝心の徳夜叉を、うち洩らしたとあっては、しかも、その行方がわからないとあっては、工頭監物や鞭兵衛たちのように勝利の酒を祝うわけにはいかぬ。

捕虜にした四天王の一人である杖舎の茶々丸たちを手枷足枷にして、小紫のお景を責めたてる方法もあるが、これはすでに大蔵の越中松で試みて失敗している。お景は、子分である越中松の見ている前で一糸まとわぬアカ裸にされ、穴沢流・穴焙りの拷問を、うけな

がら結局は、青梅街道・八王子――とだけ、隠れ家を口走ったにすぎず、越中松は、死を賭して口を開こうとはしなかった。

徳夜叉という男の影響・統率力は驚くべきものであり、それを考えれば、ここ当分は茶々丸や、お景を責めたてても所期の効果はあがりそうにもなかった。

「しばらく、のんびりするほかはあるまい。フッフッフ、待てば、海路の日和とか」

七尺ちかい巨軀を、やおら起こした元禄屋は、広い庭におりると、ひともの桜の大樹に身をよせて昇ってくる朝日を待った。

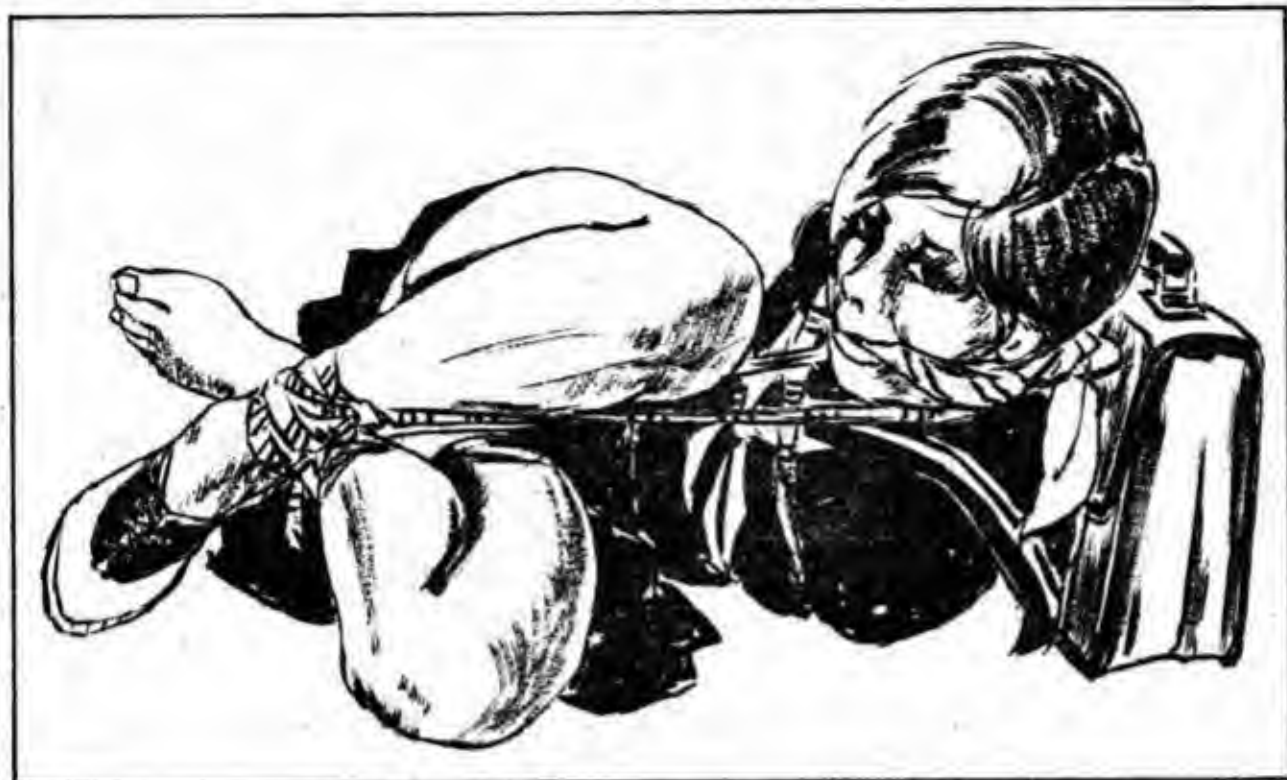
樹令五、六十年に、なろうか。逞しく根をおろし虚空に枝をはり、梢を中天に向かって雄々しく聳えさせている、この樹の幹に倚ると、なぜか気が、やすまる。

朝日が、きらりと山の端に、のぼった。恭々しく合掌した元禄屋は、ふと、あることを思い出した。

「元禄屋さん」

と、時の將軍・日本六十余州を動かしている徳川家齊の側近として権勢並ぶものなく、宴の席で、小指を挙げるだけで深川、吉原、日本橋、さらには、新宿・駒込と、女という女が靡こうという領田下野が、たずねたこと

イメージギャラリー 『かえりみち』 志 羽 利 也



があった。

「元禄屋さん、何のために、そのように金を

ためなさる。この世は、酒と、そして女と、フツフツフツ……権力だけであろうものを、なにを、あくせくと、そのように金を求めていなさる！」

老中・領田の間に、元禄屋は、さりげなく答えたことであった。

「リリコバの町を築いてみたいと存じておりますのじゃ。リリコバの町を」

リリコバの町——領田は始めてきく言葉であった。

「さて、どのような町であろうかのそなたほどの男が夢みるリリコバの町とは」

元禄屋は、笑って答えなかった。

領田もまた、それ以上、問いかけようとはしなかった。

颯々とした野分が、生いしげるすすきの原を吹きわたる、あれは、一昨年の、晩秋のころであったわい——。

山の端をのぼりきった朝日が、燦爛と輝く太陽となって、江戸城の大甍を照らし、江戸の町々の、どんな小さな路地裏にまで、なんのわけへ

だてなく、無限の愛情にみちた光を投げかけ始める。

「リリコバの町か、夢じゃわ。我が生涯を賭けての壮烈な夢。いつか、必ず、この手で美事に建設して見しようぞ」

チラッと元禄屋は、怪盗・徳夜叉のことを思いうかべ、さらにもう一人、大阪町奉行所の与力で、洗心洞なる塾をひらいて、「堯・舜・天照皇太神の御代には及ばなくても、中興の神武帝の御政道」実現を志していると伝えられる大塩平八郎中斉なる人物のことが頭にうかんだ。

「フツフツ、奴等も同じことを考えておるやも知れぬて」

清らかな笑いであった。

「どちらがさきになるか、面白い競走じゃろうて」

濡縁にもどった元禄屋は、しばし瞑想に入るかのように眼をとじたが、その朝の静けさは、そういつまでもは、つづかなかった。

「旦那さま。為永先生がお見えでござりまするが」

番頭の昭吉の声がきこえてきたのである。

為永種彦——どうせ、また吉原の帰りであろうと、

「いまは、どなたにもお逢いしとうない。おひきとりを願いなさい」

というまもなく、早くも本人が、長廊下のかどから姿をあらわして、

「これは、これは、元禄屋のお大尽さま」

と遠くから声を、はりあげ、

「寝呆け眼の番頭どもには用はない」

昭吉を押しつけた恰好は、瑠璃紺の唐棧のきものに緋縮緬の幅広の帯、三尺八寸の長羽織を、ぞろりと着ながしたところ、まさしく花街からの朝帰りと思えた。

「なにごとですか、種彦先生」

不気嫌そうにいう元禄屋に、

「どうもこうもって、昨日は、新吉原の秋葉祭り。日本堤を西に行き、左に一町、ひともと柳、これ、人よんで見返り柳。柳の下は、えもん坂、えもん下れば五十軒、五十軒茶屋を越えゆけば、あとは大門……新吉原につきにけり——と、まあ、そういうようなことになるわけでした、これから、小梅の利倉屋さんの寮で……」

とここまで、酔いのさめやらぬ口調でいった為永は、

「おっといけねえ。これからさきがかんじんなので」

廊下に坐りこみ、

「貴子姫か雅子姫か、どちらかをお借りしてこいとこの御一同の申し合わせにて候」

「貴子か……雅子を」

「さよう、鳥尾がひさしぶりで責め絵をかいてみたいと言ってましてね、場所は利倉屋さんの小梅の寮……ヘッヘッヘ、実はこの私も姫のはだかを拝むことで、新しい本を書いて見てえと野心を持っていますので」

鳥尾が高名な浮世絵師なら、この種彦は市村座の座付作者で、いま上演されている「鎖格子女元拷問」は、責められる女・お琴を演ずる沢村田之助の熱演ぶりもあって、遠く五代將軍綱吉公の頃、上方の竹村座で十七カ月の長期上演を誇った近松門左衛門の「国性爺合戦」の記録に迫ろうとしていた。種彦が、本というのは脚本のことであり、どうやら次回作を構想中であるらしい。

朝の清爽な大気の中で、久しぶりの孤独を楽しんでいた元禄屋は、この招かざる客の意外な要求に、いささか、苦々しいものを感じはしたが、そこは大望のある身、気分の転換が早かった。その上、

「勘定吟味役の佐渡刑部さまが、一達流捕縄術のいきなわざを見せてやろうとおっしゃっ

てましてね」

と種彦につけ加えられると、即座に腹がきまった。江戸幕府の財政を動かすのが勘定奉行の肥田若狭なら、その出納を監視し吟味するのが佐渡の役目。それにかねて昵懇の間柄とあっては無下に拒むことも出来まい。

「種彦さんや、雅子を連れて行きなされ。僕は、ちと所用があつてお伺いたしかねるがよろしく申しておつたと伝えて下されや」

すつくと起ち上がった姿には、さきほどまでの孤愁の影は、みじんもなかった。

昭吉に、雅子を駕籠で、種彦といっしょに小梅まで送りとどけることを命じると、朝餉の部屋に、もどった。

今日もまた御公儀金銀為替御用の元禄屋重右衛門の多忙な一日が、始まるのである。

浮世絵異聞

「な、なにをなされまする！ 御無体は許しませぬぞ！」

駕籠の垂れがあがつたかと思うと、左右から種彦と佐渡に、がっちり腕をつかまれた久我雅子は、烈しい抵抗の声をあげた。

建仁寺垣に囲まれた瀟洒な茶室風のため

のや、広い庭、築山、それに池のほとりに立っている石燈籠……番頭の昭吉に云われるまま駕籠にのった雅子ではあったが、ここが札差・利倉屋の小梅の寮であることは、すぐにわかった。

何カ月前になろうか。

雅子がまだ大蔵大輔柳原宗忠の妻であった頃から横恋慕していた葉室邦行が、勅使として江戸に下ってきたとき、この寮に送りこまれて、散々に弄ばれたものである。

今日も、また――

罵られることになるのであろうか。

覚悟してやってきたのではあったが、まだ正午をすぎたばかりだというのに、早くも暴力に訴えてくるとは。佐渡も、種彦も、何という、あつかましきであらう。

「佐渡さま」

と雅子は、右腕を捕えている幕府の要人におじることなく云った。

「女を、いたぶるおひまがございましたら、なぜ、政事に精をお出しなさいませぬのか。町々村々には飢えたる人々が食を求めてさまようていると噂されておりまするに」

「フッフッフ、よく存じておるのう。元禄屋の邸に閉じこもってばかりいると思ったに

陸奥、出羽の飢饉のことまで存じておるとはそなたくの一か、それとも九尾の狐か」

佐渡の手が、無遠慮に腰を撫でた。

「おやめなされませ！」

「気の強い女よ。だが、それもいまのうち。

その唇から、佐渡さま、も、もっと強う、お責めになって……必ず、そう云わせてみせるわ」

枝折戸をあけると、^{にじりぐち}蹴口が見えた。幅一尺九寸五分、高さ二尺二寸五分の茶室特有のこの狭い出入口は、わびとかさびとか清雅な別天地に没入するためのものであろうが、みかたを変えれば、これほど恰好の拷問部屋への入口は、ないとも云えよう。

左右から雅子の肩を押しつけて、馴りながら一歩、中に入ると、茶室風の外見とは、がらりと変わって薄暗い土間があり、牢格子があり、各種の責め道具が並んでいた。

前に連れてこられたときには、これほどではなかったに――と、菊五郎格子の太織上田のきもののしたで、雅子は、肌が鳥毛立つのを、おぼえるのであった。

それを、じろりつと眺めながら、

「利倉屋さんも、このころ本格的に責めに凝り始められてな。どうです、この三角木馬の

色艶のいいこと。こいつは木曾の桧でつくらせたものだという」

まだ真新しい木の香の漂っている木馬の背を撫でて種彦が、早くも唾をのみこんで、

「この伊豆石にしても、このそろばん台にしても……フッフッフ、雅子姫。ぞくぞくしてくるじゃありませんか」

長さ三尺、幅一尺、厚さ三寸――重さ十三貫と云われる伊豆石が不気味な光沢を見せていた。と、ちょうどその真上に、濃い紅の花をつけた、さざん花の一枝が飾られていた。

それに気づいた雅子は、ほうーっと、ひそめていた眉をもとにもどしたが、それもつかの間「さあ、まずは、あの部屋にて、お衣がえをなされませい！」と、四畳半ほど畳敷きの部屋へと追いつけられていくのであった。

つづいて入ってきた佐渡は、

「お衣がえ――と申しても、ここには女ものの衣裳としては、この囚衣ばかり」

ニヤリッと笑って片隅から浅黄木綿の囚衣と腰紐がわりの荒縄を抱えあげ、

「お召しかえをお願いいたします、姫君！」

慇懃無礼というよりも揶揄するような口調であった。

なんで妾が、けがらわしい囚衣などを着な

イメージギャラリー

『置き去り』

須坂

旭



ければならないのか!

「おことわり申しあげます!」

言下に答えて雅子は、唇を噛みしめた。

「いやと云われるか。フッフッフ、面白い。

人形のようになんでも云いつけに従う女よりも、反抗してくれるほうが、楽しみもなにか

と、ふえるというものじゃわ」

やにわに猿轡をのばした佐渡は、ひわ色無

地の繻珍の帯に手をかけた。

「無礼なさると許しませぬぞ!」

毅然とした声がとんだが、工頭はすこしも情容赦をしなかった。

角打ちの帯締めをむしりとると、繻珍の帯の吉弥結びに右手をかけて強く握り、力にまかせて振り廻すと、雅子の躰もまわり、

「ア、アッ、無体な! な、なにをなされまする!」

膝が崩れて横にころがる。そこを押えこみ荒々しく結び目を解いた帯のはしを、

「フッフッフ、廻れ、廻れ。くるくると廻れ!」

力いっぱい手もとにひくと、雅子の躰が青畳の上で、みじめに二回転して、太織上田の前が割れ、白い足首からふくらはぎのあたりで長襦袢の裏紅絹が妖しく花を開かせる。

「ほ、ほんとに、お止めなされませ!」

乱れた前を押えて上体をおこし、荒い呼吸を吐きながら、必死で、あとじさっていく雅子の背後から、今度は種彦がとびかかる。

「キャアアッ!」

強い力で両腕をうしろに羽交締めになされて悲鳴をあげたが、種彦の顔を振り返る隙もなく、前から迫ってきた佐渡が、ニタニタと腰紐を抜きとり、きものの襟をグイ、グイッと二つ動作で左右に、はねあげていく。

香合せ・十炷香のうち明石香の薫りと、元禄屋がほめたたえた雅子の体臭が、はやくも

佐渡の鼻を、くすぐる。

この香りは、ちょうど沈丁花のそれに似ているが、人工のものではなく、雅子の肌からたまたま自然の薫りであった。

「懐かしい香りじゃ……」

すでに一度、雅子をスッ裸に剥きあげたことのある佐渡は、その時のことを思い出し、
「あのときは老中の領田さまが居られたのでやはりなんと云っても遠慮しておったがの。今日は、容赦はいたさぬぞ。フッフッフ、種彦、もうよいから手を離せ」

「承知しました！」

羽交締めから解放された雅子は、すっと起ちあがり、のびてくる佐渡の腕の下を、かいくぐって逃げようとした。

が、それも三歩もすすまないうちに、太織上田のきものの裾をふんづけられて、綿紗の伊達巻や、縮緬のおびあげをはじめ小物類のちらばっている上に、惨めに坐りこんでしまふはかばかしくなっていた。

「佐渡さま。この様子では、やはり鈴をつけておく必要がありますね。逃げ出されたときの用心のために」

「さようさよう。ゆっくりと付けてとらせよう。が、その前に」

両手をついて、がっくりと、うなだれている雅子を見おろした二人は、やがて呼吸をあわせるように顔を見合わせた。次の瞬間、前と後から同時にとびつくと、暴れまわるのもかまわず、きものを剥ぎとり、梅松藍色の長襦袢を脱がせ、あらわれ出た白綸子の肌襦袢を、むしりとった。

それは、雅子が「アッ、アッ」と、ものの二回も、羞恥の喘ぎを洩らすか洩らさないかくらいの、またたくまの出来事であった。

「ついでに、この裾除も！」

長襦袢の下、湯文字の上に、裾除をつけるという流行は、文化文政頃に始まっていた。

乱れかけた深川鬘といい、長襦袢の裏紅絹といい、菊五郎格子の模様といい、すべては元禄屋の趣味のままの衣裳を身にまとわされている雅子にとって、この縮緬竜文の裾除とても例外ではなかった。

それを、むしりとろうとして、種彦の腕が無遠慮に、のびる。

「な、なにをなされまする！」

思わず私のけようとしたが、胸を抱いている両手をつかうわけにはいかず、からうじて腰をひねって、あとじさるだけ。抵抗ひとつできない女の身のくやしさがジーンと咽喉

もとに、こみあげてきて、

「……鬼！」

せいっぱいの罵りが、紅い唇から、とび出した。

「鬼——か。いいでしょうよ、姫。私たちは鬼だよ。そして、姫は、春婦だ。春をひさぐ女だ。女狐だ。どうです、そうでしょう。ねえ、姫」

種彦の酒ぐさいいきが首筋にかかり「け、け、けがらわしい！」と叫んだときには、裾除は、すでに下肢から離れて部屋のすみにと飛んでいった。

そして、雅子の身をまもるものとしては、京紫色の湯文字ひとつ——。

しっかりと両手で乳房をおおって、怒りに震えるその姿は、艶麗な一幅の浮世絵を、おもわせた。

「フッフッフ、姫。さあ、これを着るのじゃ。それとも、そのままでもいいのかな」

きらびやかな、きものや小物などを、ひとまとめにして隅に押しやった佐渡は、代りに浅黄木綿の囚衣を膝の上に投げかけた。

「早く着ないと、腋毛が見えますよ。腋毛だけじゃあない、脇腹も。それに」

と、畳に額をすりつけた種彦は、横ずわり

になっている雅子の湯文字のみだれた裾からなかを覗きこみ、クンクンと犬のように鼻を鳴らす。

「い、いや！」

かかとで畳を押して後退すると、頭上で、「いくらかくしても、それぞれ、指の間から乳首がのぞいてるぜ。珊瑚樹の実のような乳首がね」

ハッと身をかたくしたが、佐渡のいうとおり、とうてい両手で覆いかくせる乳房ではなく、なかば以上が、二人の眼にふれていることは雅子自身にも、よくわかった。

それだけに、

「なんなら、そちらの部屋で着てもいいのだぜ、姫」

と、佐渡に襖のほうを、さし示されたときには、さすがにホッとした気になり、

「ほ、ほんとですの……」

蒼ざめた顔に生気を蘇らせるのであった。

「武士の情……よく、お礼を申し上げなくちゃあね、雅子姫」

囚衣をとりあげた種彦が、早くも襖をひらいて中へ投げこんで云った。

チラッとみた、その部屋には、何の異常もみとめられない。

「ほ、ほんとなのでございますね」

いったん脱がせてしまった以上は、もとのきものを身につけることを許してくれる相手ではない。さりとて、このまま裸身をさらしていることは耐えられない羞恥である。もう囚衣でも何でも、ともかくも衣類の欲しい雅子は少しでも二人の眼をさけようと、そおつと身をおこすと、五体を縮めたままで内股にそろそろと、その部屋へと入っていった。

半分ほどひらかれた襖のあいだへ身を入れて、あとは燦めくような背中をこちらに見せた雅子が、囚衣にとびついたその時、

「キャアアッ！」

たまぎるような悲鳴が、ひびいた。

そこには、鳥尾がいた。自分はすこしも手を出さず、佐渡と種彦に裸にされていく雅子のありのままの姿を、襖のすきまから、次々に美濃紙に写しとっていたのである。

「姫。フッフッフッ、美しうございました。」

おかげでわれながら惚れ惚れする版下絵ができあがりました。これなら彫師も摺師も仕事にはりがでようというもの。フッフッフッ、江戸中の絵草紙屋の前が、押すな押すなの大繁昌となることでしょう」

誰もいないと思っていた、その部屋に、人

がいた。しかも浮世絵師が、いままでの自分のあられもない姿を描きつづけていた！

鳥尾とは顔見知りの間柄だけに、雅子の羞恥は、怒りとなって爆発し、手近にあった大判の美濃紙を拾いあげると、突如、ペリペリッと破り捨てた。と、

「な、なにをしゃがる！」

絵師が、自分の絵を眼の前で破り捨てられたのだから、鳥尾の顔がみるみる赤くなり、

「こ、この阿魔！」

野卑な嘲りとともに、雅子の頬に烈しい平手打ちが、とぶ。

「どうしました、鳥尾先生」

走りこんできた種彦は、二つに裂かれた美濃紙をみおろすと、

「ハッハッハッハ、これは、これは。姫君としては、なんともはや、はしたないことをなされましたな」

と、囚衣を胸に抱いて立ちすくんでいる雅子に、

「このぶんじゃあ、この囚衣を身につけることも鳥尾先生、お許しにならんじやろう。実は今日のところは、囚衣をつけたままで、この部屋にある拷問具をひととおり受けて頂こうと思っりましたが、フッフッフッ……ど

イメージギャラリー 『リ ン チ』 三鷹 I・O



「うやら公刑でなく私刑になりそうですね、この雲行きじゃあ」

「まったく……ひ、ひでえことをしやがる。」

このお返しは、きっと何倍にもしてもらうから、そう思いな」

佐渡と種彦に、梅松藍色の長襦袢をひっぱ

がされた一瞬を、みごとに捉えて描いている二つに裂かれた絵を継ぎ合わせながら、鳥尾の眼は、憎々しそうに雅子に注かれ、

「このじゃじゃ馬めッ！ やんどとなき姫だというので、ちよっと手加減をしてやるとこのさまだ！ 佐渡さまだるかと思う存分、責め鬨ってやっておくんなせえ。」伝馬町女牢・美艶十佳撰を描くつもりでござんしたが、この分じゃあ、フッフッフッ……「女責め・二十八佳撰」——たっぷりと筆を揮わせてもらうことになりましょう」

ジロジロと蛇のような眼で睨まれた雅子の胸に、かすかに後悔のおもいが、うかぶ。

あまりのことに、ついカーツとなってしまうものの、たしかに、はしたない行為であった。

「お、お許し下さい……ませ。妾が、悪うございました」

「詫びてもろうても、もう遅い。これでは彫師のもとへ出すこともできぬわ」

御存知のように、浮世絵には肉筆と版画があるが、一般にいう浮世絵は、後者つまり版画を指し、鳥尾のような画師が版下絵を描きそれを彫師に廻す。山桜の版材の上へそれを糊づけにした彫師は、大小の小刀、間鋏、駒鋏、円のみ、角のみ、木槌などをつかって、一枚の墨板と何枚かの色板に彫りあげ、摺師の手に届けるという手順。

破れた版下画などを、とうてい、彫師は、うけつけまい。

「お許し下さいませ……」

と詫げる雅子を、なおも睨みつける鳥尾であったが、そのとき種彦が、

「悪いとわかったら姫、土下座してあやまることさ。そうすりゃあ鳥尾さんも許して下さるかも知れないね」

と、助け舟を、だした。

雅子はその言葉にさからわなかった。その場に崩れるように坐りこむと、ふかぶかと頭を下げて、許しを請うた。と、

「そんな挨拶のしかたというのはないだろうぜ。のう、姫さま」

左手は胸にあてた囚衣を押えなければいけない雅子が、右手の三つ指だけを畳につけるのを見て佐渡が皮肉たっぷりに云った。

「そのとおり、佐渡さまのおっしゃるとおりだ。それに、女が詫びるときには、スッ裸になつてからと、きまつているのじゃあなかったのかね」

「な、なんでございますって！」

「フッフッフ。スッ裸になつてから詫びを入れるのが、この江戸のならわしだといったのさ。京都市育ちのお前さんには、わからねえらしいから、教えてやっているのさ」

「どうやら、さきほどから、なにか、おかしい——と思つていたのだが、結局は、妾を裸にさせるための口実だったのだろうか——」。

キツと、真剣な表情をうかべて、三人の男を見上げた雅子は、

「お勵りなされまするか！」

「べつに」と言下に種彦が、うそぶく。

「なら、妾が心からお詫び申し上げておりますものを、なぜ……」

「は、ほほう。それが心からの詫びだと申さるのか。すぐ、怒りをうかべるその顔が、心から謝っている顔だと云われるのか、姫」
虚をつかれて雅子の顔が、みるまに蒼ざめていくのを、小気味よさそうに見おろした佐渡は、

「どうやら時間のむだのようじゃ。どりゃ、参りましょうか、種彦先生！」

逞しい腕が、サアーツとのびると浅黄木綿の囚衣を取りさり、

(やはり……罵られていたのだわ、妾！)

こみあげてくる屈辱に雅子が、力いっぱい佐渡に体当りをくわせて部屋の外へ、とび出そうとしたが、どっこい、佐渡に体をかわされて、タッタタッタと、たたらを踏んだ。

と、そこへ、よこざまから種彦の手がのびたかとみると、

——ピリ、ピリ、ピリッ！

鋭い、ひびきが、あがった。

京紫の湯文字のあわせ目をつかまれて、それが、前につんのめる雅子のはずみで、縦に裂けた音であった。

「ア、アレッ！」

悲鳴をあげるよりも早く、佐渡の懷から真白い五尋半の捕縄が、獲物を狙う蛇のように追いつが、

「じたばた、するない」

右手が、つづいて左手が背後にねじりあげられたかとおもうと華奢な手首に、グイグイツと二巻き、されてしまう。

「な、なにをなされまする！ お、お止めになつて！ や、やめて！ ア、アレッ！」

一達流捕縄術の達者と自他ともに許す佐渡の腕は、手首から左の高手、乳房の下、左のの高手——と寸分の乱れもなく雅子の upper body に捕縄を、からませていく。

縛るのは佐渡にまかせた種彦が、床の間におかれた文箱の中から、とり出したのは、鈴であつた。

「鳥尾さん。さあ、この鈴をつかつて私たちが姫を骨の髄まで責めあげますから、あなたは、心ゆくまで絵筆を揮つて下さい」

つづいて一つ、もう一つ、二つ……と、色

とりどりの十箇ばかりの鈴を取り出した。

『風流從然草』や『色道禁秘抄』などによると、由来、鈴は、男性自身の異称である。

これらの鈴を、いったい、どこへ、どのようにして使用しようというのであろうか。骨

の髓まで颯り抜くという種彦の言葉から察するに、雅子の肌に、いや、肌だけでは許されるはずもなからう。

なかでも、種彦がニヤリと笑って取りあげた鈴は、なみの鈴ではなく、大きな鈴を中心に、七つの小鈴がその周辺にとりつけられているという精巧なものであった。

縄をかけるのが、いたましいような手首から左の高手、乳房の上と下、そして左のふくよかな二の腕と、何度、佐渡が、同じ動作を繰り返したのであろう。

太い——というよりも、重々しい——と形容したいほど量感に溢れる乳房の上下を、それぞれ、三条の捕縄が走り、鎖骨に沿って首縄までかけられた雅子の妖しい美しさを漂わせる緊縛姿を見おろした種彦は、

「佐渡さま。さあ、ぼちぼちと、この鈴を推参させましょう」

と雅子の左側で中腰になって、二の腕のつけねから、はみ出している艶々しい腋毛を、小指の先で、もてあそぶ。

「あせるな、種彦。まずは、スッ裸にしてしまおうじゃあないか」

佐渡が、そういったとき、
「待っておくんなせえ」

といったのは、熱心に絵筆を走らせていた鳥尾であった。

「そのまま、そのまま。その裂けた湯文字が、なんとも云えない風情でして」

「フッフッフ、なるほどのう。よからう。じゃあ、このままで鈴をつかわせてもらうとするか」

含み笑いをうかべた佐渡は、雅子の縄尻の一端を牢格子にかけてグイ、グイと引く。

「ア、アッ、アアア……」

縛りつけられた両手首にかかる激しい痛みが、雅子をよろよると、たちあがらせ、後退させ、ついには牢格子に、びったりと背中をくっつけさせる。

そこで、すかさず、止め縄をした佐渡は、
「股をひらかせて縛りつけておくほうが、仕事がいやしやすいのだな、種彦」

「そのようでございますな。鈴をつかおうとして鈴を蹴られたのじゃあ話になりません」
意味あり気にこたえて、囚衣の帯にするつもりでいた荒縄を拾いあげると、

「八の字開きにするよりも、片脚吊りがよかあござんすまいか。いくらか上に向いてくれるほうが、なにかと都合のようで」

鈴をつかうとか、推参させるとか云ってい

た種彦の言葉が、どういう意味なのか想像できることだけに、雅子は、全身の血が逆流するのをおぼえて、

(な、なんという恥知らずなことを！)

鬢はもちろんだぼも崩れて、いきな深川鬚のおもかげはなくなったが、それだけに、いっそう妖艶さを加えた黒髪が大きく乱れて、垂れた一房を頬のあたりになびかせながら、雅子は、唇を血のにじむほど噛みしめるのであった。

掛燭の光をうけるその肌は、極上の美酒のように琥珀色をおびて輝き、沈丁花の香りが馥郁と、ただよい始めていた。

と、右足首に、荒縄のからみつく感触がして、はてって桜貝のように紅くなった耳もとで、

——リ、リーン、リン、リン、リーン

鈴の音が、ひびく。

それを雅子は、羞恥地獄への合図のように聞く。

そして、その澄んだ音色は、部屋から土間へ、淫らな拷問道具のひとつひとつへと、伝わっていった。

——(つづく)——



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

女の鼻に関する八章

斉 藤 香 根 雄

..... (写真は本誌写真部撮影のもの)

第一章 最初の鼻つまみ

世の中には、私ばかりでなく、鼻マニアの人が、かなりいるものだ、奇クを読んでいて感じた。心強い限りである。男性の方が圧倒的に多いが、女性も大橋美代子さんはじめ、何人か、おられるようである。

そこで私の「鼻」についてのレポートというか、今まで女性二十人の鼻をつまんだ自称鼻つまみ日本一の経験者として、一文を記してみたいと思うが、分かり易くするため、いくつかの章に分けて述べたいと思う。

生まれて初めて女性の鼻をつまんだ経験は十三才の時、相手は母なのである。

母は若い頃は村一番の美人だったとかで、四十代から五十前半までは色気がたっぷり、三十代にしか見えなかった位である。

体は、いわゆる鳩胸、出っ尻で、小柄ながら、なかなか魅力的な均斉のとれた体を、しており（現在、六十を過ぎても、その裸体は昔を、ほうふつさせるものがある）その顔は全体が、すごい脂性で

化粧は化粧水とコールド、パニシング、口紅くらいなのだが、春から夏にかけては、化粧しても、すぐギラギラしてしまって、殊に鼻などは、すぐ脂ぎってしまい、閉口していた。

母の鼻は、すぐ肉が厚く、小鼻が、くっきりと丸く心持ち、ふくらんでいて、鼻全体に、丁度イチゴのブツブツみたいな脂肪のかたまり（皮脂線が太く、脂肪が多量に出るらしい）が無数にあるのだ。私には、それが、すぐく珍しく又、たまらない魅力であった。

それからというもの、そういうブツブツのある女性を探したりしたのだが、五人位しか発見できず、その中の一人は母のより巨大であったが、母のは、かなり大きい方であった。殊に日光が当たるとあざやかに光るのを見ると、たまらない気持になる。

私は、なんとかして、その母の鼻をつまみたいと思い焦れるようになり、悶々の日々を送りつつあった初夏のある日、母が鏡台に向かって、シュミーズ一枚で化粧をしていた。私は、母の手が母の鼻に触れ、クリームを塗りつけるにつれて、高く肉の厚い鼻がコンニャクのように曲がったり、つぶれたりして変形するのを、わきで体中に、ほてりを感じながら、まばたきもしないで見つめた。

母は私に気づき、艶然と笑って、

「なアに？ こわい顔で見て」

と言った。私が十五、母が三十八位の時だったと思う。私はドギマギして唾を飲んで

「お母さんが、あまりきれいだから」

「あら、お世辞なんか言って。お小遣い、貰いたいの。ふふふ。でも、眼尻に、こんなシワが……ホラ、こっちへ来て見て」

母が目を閉じて、あごを突き出すようにして仰向いたので、その

シワを指で撫でると、目を閉じたまま、私にいじられながら、「ふっ、ふっ、ふっ、ふ」と笑う、その笑い方が母独特のもので、すぐコケテツシュなのである。

私は、母が目を閉じているのを幸に、そのあこがれていた母の、高く脂が一面に浮いている鼻を、いきなり、つまんだのだ。

クリームを塗ってあったせいもあって、ヌルツとした母の鼻の柔らかかったこと。いきなり鼻をつままれて、母はびっくりしたらし、つまんだ私の手をはなそうと、もがき

「何を……いきなり。ねえ、ふっ、ふっ、ふ」

と声を挙げ、顔を左右に振って逃がれようと必死だが、私は離さなかった。母は、あきらめたように手を下に、だらりと落として、苦しうに口を開けるその表情に、私は更に肉をもむようにしてから、ようやく離すと、私をにらんで、つままれた鼻を手で押えて、

「ああ、痛い。いきなり、いやねえ。お化粧が落ちちゃったわ」

と、又、クリームを鼻に塗り直しながら、横目でにらみ、

「鼻なんて初めて、つままれたわ」

怒ったように言ったのだが、私の心には、いつまでも、母の鼻の柔らかさが残り、指についたクリームの匂いを嗅ぎながら、これから、何回でも、つまもうと決意したのである。

事実、それから数え切れない位、母の鼻を、つまんだ。その上、もの事は、すべてエスカレートするもので、それから三、四年たった時には、母を緊縛して鼻を自由にするようになったのである。

最初、母を押し倒して、必死に抵抗する母に馬乗りになり、手足をしばり目かくしをした時は、感激でヒザがふるえた。母は、もしかすると息子に、とんでもないことをされるのでは……と思った



しく、泣き出したのだが、私の目的が鼻だけにあると分かってからは、なすがままであった。

ただ、この母の、激闘のあとを物語るように乳房まで、はだけた姿で、私に鼻をつままれている姿を写真に撮ろうとシャッターを切ったところを母に感づかれ、

「ガシャッて音がしたわ。写真、撮ったのね。いや、はずかしい」と、すねたが、かまわず目かくし、さるぐつわと撮り、母が五十

三、四になり、こっちも三十になっても、いろいろな機会に母の鼻を、つまんだ。それは、ただ鼻だけ、つまんだこともあったが、ひもや、なわをポケットにしまって、夕食の支度をしている母を襲ったり、母に私をからかわせるように、しむけたりして、母を縛り、思いのままに鼻を自由にすることも、かなりあったのである。

母も女性である。初めは縛られることを、いやがっていたが、又鼻をつままれるのを逃がれようとして抵抗していたが、だんだん、

「つまませて」

と言うと、目を閉じて顔を近づけるようになり、押し倒して手を、しばらくすると、両手を揃えて出したり、自分から畳の上に大の字に伸びてしまい（どうにでもして）というようになり、父がいない時など、母子のプレイを楽しんだものである。それで分かったのだが、母はMだったのである。

母の鼻は五百回つまみ、プレイも三十回はしているだろう。いずれ、その時のことは書いてみたいと思っているのだが……

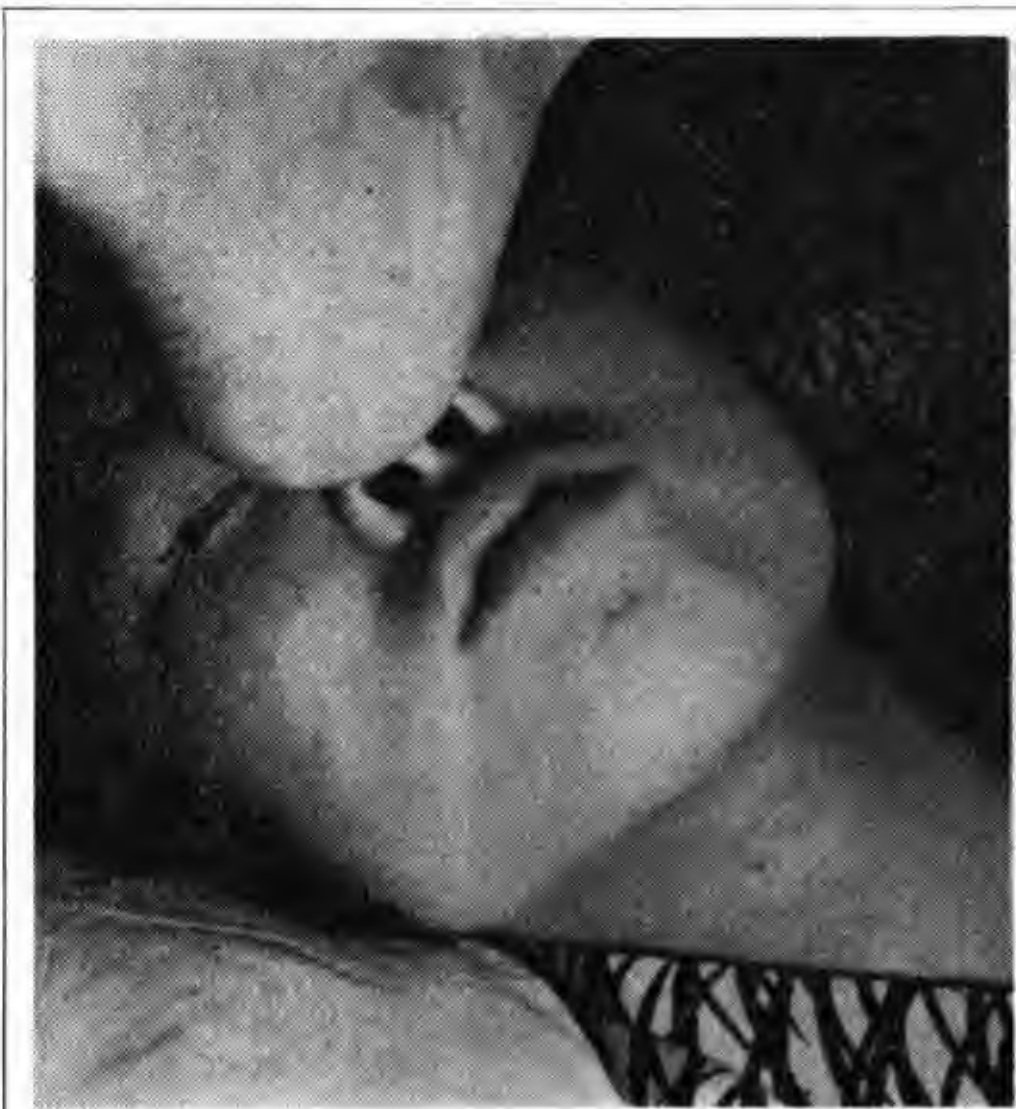
第二章 鼻摘みの方法

さて、母だけで満足出来るはずもない私であるが、ガールハントも、奥様ハントも、鼻に魅力がないと駄目で、ハントした女性には必ず鼻をつまむ。しかし、プレイまでは、いかなるのが大半で残念なのだが、鼻を一度でもつまめば、一応の満足はする。

じゃ、どうして、つまむか。

先ず、女に言う。

「君がバージンか、どうか（又は真面目かどうか）当てようか」「うん。いいわよ。当ててみて」



大抵の女は、こう答える。そこでだ。

「先ず、君の体の中で、それが分かるところが三カ所ある。第一は歩く時の腰の振り方。第二は足。第三は、だな……」

（第三は、鼻をつまんでみて、鼻頭が割れて感じられたら、もう済んでいるというアレである）

「うん、第三は？ ねえ、どこなのよオ」

と、女が乗って来たらシメたもの。軽い口調で目を閉じるように

言うのである。中には、唇でも奪われるのかと、なかなか目を閉じ

ないのがいるが、然し、そういうのにも、如何にも下心あるようにではなく、軽い口調で言う不安ながらも目を閉じるものである。

その時、素早く、だが落着いて鼻を、つまむのだ。

「ああッ」とか「なに？」とか、驚いて声を出す、いきなり手で払ったりは大抵しない。丁度、手相見に手を握られても、いきなり手を引っ込めたりはしない、あの心理で、テストされているという気持なのであろう。

よく鼻の味を味わってから「君は真面目である」とか何とか言え、大抵ニッコリするのである。

第三章 鼻女二千人を斬る

道を歩いていたり、デパートの中、或は電車の中などで、素敵な鼻の女（つまり鼻女）に会うことがある。

そういう場合、鼻マニアなら（ああ、この鼻を思う存分！）と思ひ、それが出来ない口惜しさ、もどかしさに歯ざしりすることだろう。私も、そういう経験を何回、いや、何十回と味わったものだ。

しかし、何とか機会を捉え、又、おツムを働かせて、実に二千人の鼻女を斬ったのである。

最初に他人の女性の鼻をつまんだのは、昭和二十八年二月十六日だった。東京の地下鉄の日本橋で、目の前に横顔を見せている二十歳前後の女性の鼻が、あまり魅力的だったので、夢中でつまんでしまったのだ。その女性は、持っていた風呂敷包み（その当時は男女とも、まだ、かなり風呂敷を使っていた）を下に落とし

て、後に倒れそうになり、目を閉じて口を開き、手は宙に、もがいた。

その鼻の味の、なんと、よかったことか。

それ以来、二十年間で二千人。恐らく日本一であろうと自負している。(もちろん、床屋さんとか、美容師さんとか、女の顔に触れるのを職業としている人は除いて)

殊に、電車の中でドアに近い、はじの席の鼻女は逃がさない。眠



っていけば、なおさら確率は高くなる。はじが、いいのは、すぐ降りられるのと、人目につきにくいからである。中頃の座席では仲々つまみにくい。むしろ、吊り皮に立っている方が、やり易い。真横から人の手が伸びて、鼻をつままれるとは誰も想像すら、してないからである。大抵、いとも簡単に仕止めることが出来る。つまむと先が、ぶっくりと、もり上がって、あまりの突然のハプニングに、果然自失、なすすべを知らず、じっとつままれている女の図なんぞあ、実際たまらないものだ。

降りてから、指を嗅いでみると、たまらなく、いい匂いがあることが多い。その指をかねて用意してあるホワイトペーパー(これは手帳の中の何も印刷してない、真白のところを使っている。大学ノートでは、ごつ過ぎてアカン。私は、いつもそれを用意してある)に、両面から、さっき鼻をつまんだ要領で、紙をつまむようにしてみると、脂肪が多い、見た目でも、はっきり分かる鼻の場合は、紙が透きとおってしまう位、脂が着く。見た目では、あまり脂肪のないような鼻でも、指のあとが、くっきり着くことがある。

私は、それをかなりコレクションしているが、つまむ時、余った指が唇をつついてしまい、べっとりと口紅がつくこともある。それらも、あとになってみると、楽しいものである。希望者があり、機会があれば、ぜひ、お見せしたいものだ。

第四章 イエスカノーカ

では、鼻をつままれた時、女性はどういう態度に出るものだろうか。つまり、反応である。そこが、読者にとっては、最も興味



があり、且、知りたところであろう。

眠っている場合、大抵、目は閉じたままで、楽につまませてください。中には、つままれながら口を開き、はなしても、まだ口を開いたまま、眠りつづけていた女性も、いた。さも、ねむそうな目をあけて、私を見るものもある。

だが、目を開いてると、そうはいかない。私の手から逃がれようと、頭を後ろに引いた途端、ゴツンと窓ガラスに頭部をぶつけたり

(これが全体の二%位いた。つまり四〇人である) 恐ろしげに私を見詰める女性、何か声を出す女性。ごくまれだが、吹き出したのもいた。全体の一%程、私を叩いた女がいる。

二千人の中には、同じ車内で三回乃至五回、同じ女性の鼻を、つまんだのがある。つまり、女からすれば、つづけて三回乃至五回、私に鼻を、つままれたわけである。

どうして、つづけての被害? に女は抵抗しなかったのか、という当然の疑問に答えよう。女というものは、しおらしく出来ているのか、テレかくしなのか、つままれたあと、目を閉じてしまうのが多い。だから、再び近づいて、つまみ、はなして、すばやく又、つまむのである。近づいても、ちっとも逃げないで(どうぞつまんで)というように目を閉じていたり、私が近づいたのを知っていても、無抵抗で、つまませてくれた女性も三人程、いたのである。

ここで、次の表を、ご覧いただきたい。つままれた女の態度を大別して、イエスとノーに表わしたものである。

イエスは、おとなしく、つまませてくれたか、多少の抵抗。ノーは、叩いたりして怒った場合。

	YES	NO
10代	168	1
20代	1,456	5
30代	329	0
40代	136	0
50代	5	0
60代	2	0

上の表でお分かりのように、殆どの女性はおとなしかったのである。

これが接吻だったらどうだろう。他のワイセツ行為(車内の痴漢行為)だったら、もっと大事件として、こ

の表の数字は逆転するだろう。鼻をつままれることは、女性にとって、それほど大事件ではないようなのである。

第五章 形、味。

とにかく、肉の薄い小さな鼻は私の鼻責めの対象にはならない。失格である。責めてみても面白くも、おかしくもない。つまんだ指から肉が、はみ出す位、たっぷりと肉の豊かについた鼻を責める時



は、私はすべてを忘れる。

形が良いと一般に言われている鼻は、往々にして、肉の薄いもの（日本的美人など）だが、形も直線的に高く、鼻頭、小ばなの部分に、たっぷり肉のついた、理想的な鼻もある。これが私の一番、好きな鼻で、責めても写真に撮っても一番よく、つまんだ味も抜群である。

又、形の悪いといわれているものでも、肉が厚くて脂が乗り、味が抜群なのもある。鼻孔のまわりに肉が厚くついていて、しかも柔らかいのだ。分かり易くするために、タレント、歌手などの中で、私の好みの鼻を挙げてみると、先ず、キングレコード専属の高田恭子。彼女の鼻は全く見事なものだ。鼻柱が、すっと通っていて、さっき書いたように、小鼻の部分に、たっぷり、肉がついている。あの鼻を責めたら、さぞかし満足できることだろう。

歌手の朱里エイ子も、いい。肉の着き具合が何ともいえない。あの鼻をつまむと、きつと口を半開きにして喘ぐだろう。大きく口を開けるタイプではない。柔らかさは、上の中位。百点満点で九十点というところだろう。

ピンク映画では美矢かおるであろう。もう三十歳位の年増だが肉体のポリウムと共に、その見事な鼻は「鼻の大きいピンク女優」で通っている位である。その彼女が全身をしばらく、ムチ打たれて、のた打ち、はげしい声を出すシーンは全く絶品だが、あの鼻が一度も責められないのは、全くもったいない。私が演出すれば、あの鼻を思う存分、私自身が責め上げてやるのに……と思う。一度、美矢かおるを、一日、鼻責めで歓喜させてあげたいものだ。



以上、大きな鼻、肉の厚い鼻だけを書いたが、普通サイズでも、つまんでみると、びっくりする程、いい味だったという場合も何回もあった。でも、それは貧弱な鼻ではなく、普通か、小さめであっても、肉が程よく、ついているからである。反対に、大きくても、肉が堅く突っ張っているような鼻は案外、味は、よくない。それは長年のキャリアで、私には一目、見ただけで分かるのである。それは奇クに掲載されたモデルさんでは、絹川文代さん、梨花悠紀子さ

ん、深田菊子さん、マダム英美代さん（彼女は鼻を責められるのが好きらしい）前田真知子さん等、一度、鼻責めをしてみたい。機会が欲しい。そして、鼻責めって、こんなに、いいものとは知らなかったわ、と言わしめたものだ。もちろん、他の責めも御要望に応えて、やらせていただく。私が鼻責めしか出来ないと思われるのは心外なので、念のため。

第六章 表情、言葉

先ず表情から言うと、大抵、目を閉じる。

母のことからいえば、鼻でなくても、額でもあごでも、耳でもいじろうとすると、すぐ目を閉じて「ぶっふふふふ」と吹き出す。テレビているのか、嬉しいのか、その笑いが又、すぐくセクシ—なのである。

他の女性も、笑った子は一人。それは二十九才の和子さん「いやアねえ、いきなり。ふっふっふ」と。あとは目を閉じて、口を大きく開けたまま……。ついでに言うが、口ってものは、大きく開けるより、半開きに、いかにも苦しそうにパァーと開く方が、数段セクシーである。私は半開きの方が、より相手を苦しめているという実感が強く湧いて、興奮するのである。

母の時は「目を開いて」と命令し、鏡台の前に連れて行ったり寝かせたまま手鏡を見せたりして、「どんな気持？」などと、からかって聞いたり（言葉のプレイを楽しむのだ）すると母が「おかしい形になってるね」と言って、つままれながら笑ったりすると、たまらなく燃えるのである。

電車の中で眠っていない女の鼻をつまんだ時は、目を閉じるものおどろいた目で私を見詰めるもの、半々である。手を動かして、もがくのは一割位。声を出したのも、全体の一割だろう。

声だが、車内などでは「痛い」というのと「いやン」というのが全体の一割。人妻で「あ、だれ？」と言ったのが、いた。「わあ、びっくりした」と私を見て、「鼻がハレるわ」と言ったのは、最近つまんだ、丸く肉の厚い鼻の二十九歳の女性。



「失礼ね」と言ったのが、五人位。たった一人「ギャーッ」と叫んだのが、いる。三十八歳位の人妻。ホステスでは「風邪引いてるのよ」と、つままれながら言い、はなすと、大きくすすって「ハナ、出たわ」と言った、かわい子ちゃん。女子高校生の、絶品といっていいほど形の整った鼻をつまんで（電車内で）やったら、とたんに多量の水ばなが、とび出したこともあった。

三年前、私の会社に入社して来た、すぐく肉の厚い、例のブツブツが無数にある、全くすばらしい鼻の持ち主の十九歳の子。私と二人だけしかオフィスにいない時、第二章で書いた方法で、いきなり鼻をつまもうとすると、はげしく抵抗され、それでもかまわずソファに押し倒し、遂につまんだところ「鼻は、いや。鼻はやめて」と、なおも泣き声を出して、あばれ、それでも、はなさなないで揉むようにして、つまみつけ（又、その鼻肉の味の、よかったこと。柔らかく、脂のブツブツの感触が指に、よく感じられて、孔がタテに密着し、口を半開きになっている彼女の表情は写真に撮っておきたい位だった）てやったのだが、急に彼女が、だらりとなったのには、おどろいた。失神してしまったのだ。いそいで彼女を抱き起こし、人工呼吸を、ほどこすやら、揺すってみるやら、大騒ぎ。何より鼻を、いじられるのが、嫌いなんだそう。その鼻を存分につまんだのだから、私の得意は、はかり知れないものがある。

母の言葉を書いてみよう。

「苦しいよ」「鼻が痛いよ」「ハナが出るよ」「もう少し、つまんでると、きたないゾ（ハナが出る。これを、とてもセクシーに言うのである。いかにも楽しそうに）」「鼻が、もげそうよオン（き



つく、つまんでる時」

歯医者に毎日、母が行っている時、手足をしばって、鼻をつまむと「毎日、歯医者に行つて口あき通しだから平気よ」と言つて、ぐったり口をあいて笑っているのを、たまらなくセクシーに感じたこともあった。

「はなして」「許してエ」外出するため、きれいな着物を着ている母の鼻をつまもうとすると「帰つて来たら。ね、帰つて来てから」

というのを強引につまみ、はなして、又つまみ、それをくり返すると、おとなしく目を閉じて、つままれながら「もう、よござんしよ」と言った。そのていねいな言い方に、かえつて、いつもと違った欲びを感じたし、その日は母が帰つて来るのを待ちかねて、思う存分、鼻を責め、母も、かなり応じてくれたものだ。

言葉つて、緊縛プレイの場合、とても重要である。

「ごめん、ごめん」

いつか、母があまり私を挑発したので怒ると、笑いながら、部屋中を母は逃げ廻り、とうとう部屋のスミの方で、しゃがんでしまった母に襲いかかるとき、母が言った言葉である。

馬のりになって、手足をしばり、目かくしをすると、

「こんなことされたら、何も出来ないわ。洗濯も食事の支度も」

という母の鼻をつまみ、

「とうとう、目的をとげたぞ」

と征服した喜びに、声をふるわせると、

「だから、もういいでしょう。許して」

と言つた母の表情が、いかにも夢みているようなので、つい調子に乗つて、子供らしからぬ考えを起こしかけた時、明らかに母も欲情している様子を知つて、かえつてハツとなり、プレイを止めて手足の縛しめをほどくと、母はすばやく起き上がるなり、私をにらんでピシヤリと手を叩き、

「悪いと思つたの？ いきなり、やめて……」

母は髪を、なでつけて鏡台の前に行き、鼻をなでてから、急いでトイレに入つて行つた。大きな音がして、しばらく経つて出て来ると、又、なんともいえない目付きで私を睨み、言つた言葉は

「いやな子！」

それから、母の方から「だめよ」といいながらも、その姿勢になつてしまうこともあり、母と息子で、こんなことをしては、いけないと思ひながらも、母とのプレイは最高だった。

「だれかに見られると、はずかしいよ」とか「パパが帰ってくる時間よ」といいながらも、きつくしぼったり、鼻を上げしく責めると声を出して私に伝えてくれた母であつた。

第七章 だ い ご 味

鼻責めの醍醐味は、顔の中で一番、柔らかいところだし、呼吸をするものなので、それをつまむことによつて、女が苦悶する表情がたまらなくSの血を、かき立てるところにあると思う。つまみながら何か、しゃべらせると、ハナ声で、しかも、苦しみながらしゃべるのが、全く楽しい。とにかく、まだ鼻を責められたことのない女性は、ぜひ、思う存分、責めてもらったら……と思うのだ。

いや、この私に、その機会を与えてもらいたい。

よく床屋さんなんかで、顔を剃られている女性を見ると、実に気持よさそうで、鼻を、さんざん、つままれている時の表情は、天国に行っているみたいな顔をしているのがある。

この間、近所の床屋さんに行き、丁度すぐ鼻の高くて肉の厚い女性が顔を剃られているのを、はじめから終わりまで、すぐ近くで観察するチャンスに恵まれた。タテ長の孔を様々な形にさせられて完全につままれたり、曲げられたりして、数えていたら、実に六十回も鼻だけを、いじられていた。その時の彼女の恍惚とした表情は見せたい位であつた。

口を半開きにして、目は、かるく閉じ、時々太いため息をついていた。その上、終わってから彼女は何と言つたか。

「もう終わってしまったの？ つまらない」

さて、だいたい味の章であるので、も一つ、醍醐味について述べよう。

それは今も書いたが、鼻孔責めである。この鼻孔ぐらい、人によつて形が違ふところも少ない。

人種によつても、かなり違ふようである。一般に白人はタテ長、黒人はヨコ広とされているが、東南アジア、殊に日本人のように混血人種（大昔の頃に血が混じつた）は、顔を見ても世界各国の顔が少しずつ入っているような気がする。

だから、鼻も全く種類が多く、鼻孔もバラエティに富んでいる。それを、つぶしたり、ななめにしたり、つまんで、丸いのをタテ長にしてみたり、様々な遊んで楽しむことが出来る。これも鼻責めの醍醐味である。

第八章 結

ひ

私の鼻狂いは、恐らく死ぬまで、おさまらないだろう。バカは死ななきゃ治らないのと同じである。

ある意味では、セックスよりも好きだ。

私のセックスは、鼻責めなしには考えられない。必ず鼻を責め、それによつて、私自身が燃えて、セックスまで行くのである。

だから、はじめての女は何故、自分が鼻をつままれたりするのかわからないらしい。

鼻をつまみながら、いろいろなことを、しゃべらせ、女がハナ声

で、苦しげに、しゃべるのを聞いて燃えるのである。

先日、はじめての女と交渉を持った時、その肉の厚い鼻をつまみ、女がつままれながら、口をあけないので、

「苦しくないのか。ほら、口をあける。どんな気持だ。話すのだ」と興奮して言うと、パーと口を開けて

「どうして、そんなこといって、からかうの」と目を閉じながら言うのである。

「冗談、言うな。俺は、からかってなんか、いないぞ。本気だ。本気で真面目に、こうしているのだ」

私は怒ったように言ったので、彼女は「ごめんなさい。でも、こんなことされたの、初めてだったの」と言い、つままれながら、私を薄目でみて、

「苦しいわ。お願い、鼻がハレちゃう」と言った。その言い方が、妙なアクセントと甘さがあって、大いにハッスルすることが出来たのである。

丸い鼻の孔より、片仮名のハの字にタテ長から斜めになったのが好きである。目を閉じて、ぐったり伸びている女の鼻にタテに長い孔があいているのを見ただけで私は、えらく興奮する。セクシーなのである。

だから、鼻の貧弱な女性と交渉を持とうとしても失敗に終わるだろう。その気にならないし、その気にならないければ、ハッスル出来ないからである。

ついでに言うておくが、私は写真が趣味である。鼻の大きい、魅力的な女性を何人、撮ったか知れない。撮る場所は決まっている。

東京駅のお堀の近くに、人も殆ど来ない、全くおあつらえ向きの所

がある。そこで撮る時、必ず私は、女を仰向かせて目を閉じさせて撮る。仰向くまでは素直にやるが、目を閉じて、というと、必ず、

「え？ 目を閉じるの？」

と聞く。目を閉じさせてから、顔の向きは、ぼくが、なおすからと言って、彼女の鼻を曲げて、というより、片方の小鼻を押して、自由に角度を変える。片方の鼻孔が、つぶれるのを見て、

「これで動かないで」

女はカメラマンには全く素直である。鼻孔をつぶされても、別に何とも思わないように、こっちの言いなりに従う。口を開かせることもある。口を開けるのが下手な女のこには、

「鼻をつままれた時に思わず開く、あの口の感じだよ」

と言っても、大抵の女は

「そんなこと言われても分からないわ。つままれたことないもの」ここで、おもむろにつまんでも、例外なく笑うだけで、じっとして苦しげに口を開く。

「そこで、じっとして。そのままの口」

女って、こっちの持っていく方で、全く従順である。こうして書いている明日も一人、前記の場所で肉の厚い鼻の女の写真を撮ることになっている。晴れてくれれば、いい。今日は快晴。おそらく大丈夫だろう。以前、三回、鼻をつまんだことのある女である。

脂肪の多い鼻なので、天気が良い方が楽しい。仰向かせて、目を閉じさせ、口をあかせて、いい写真が撮れるだろうか。

何回やっても、心配なものである。しかし、俺って、どうして、こんなに鼻が好きなのだろう。あ、そうそう。そういえば、俺の誕生日は八月七日（鼻の日）なのだ。道理で……。 （おわり）



(一)、オシメ思想の現況

オシメは赤ちゃんの必需品でなくて、文明社会の必需品です。文明社会は一般に汚されると困るようになってきているからです。汚されて困るのは赤ちゃんでなくて大人たちです。オシメは大人たちの代表として母親が自分の赤ちゃんに対して使うものです。赤ちゃんはオシメに発言権も発言力も持ちません。すべては母親が、個人としてでなく風俗習慣の代表者として決定します。

母親たちが長いこと望んでいたのは『洩れない』カバーだったに違いありません。その

母親たちの願いは、今や抑圧されてしまいました。『洩れない』カバーを愛用することが何か不道德であるようなムードが、現代の母親たちにはあります。長い期間、使うことを自ら禁じようとするムードもあります。今やオシメカバーは通気性が第一だと説かれています。それは一理ありますが、何かおかしい点があるように思います。でも、今のムードの中で、『洩れない』ことが第一だと言いつける人が、どれだけあるでしょうか。あったとしたら『不道德』な人です。

理論で作ったオシメカバーや、芸術作品としてのオシメカバーを見飽きている私たちに

— ダメな子への幻想 —

不^ふ道^{どう}徳^{とく}

「オシメ学^{がく}」

への誘^{いざな}い

— 岩手信夫 —

とって、生活感覚から生まれたオシメカバーは何と新鮮に見えることでしょう。大正九年十一月号の婦人世界の広告(次章に引用)を見ると、今日のオシメカバー観が、いかに真実性から遠いものであるかが、わかります。

オシメは、現代のオシメカバー観を何らかの方法で超越しないと愛用者になれません。現代は『洩れる』カバーで母親をイライラさせ、不快感を赤ちゃんに印象付け、それらを基礎にして早期にオシメを終わらせようという思想に支配されていますから、愛用者は存在できないのです。この思想の超越が、ここで言う『不道德オシメ学』の目的です。

(二)、ゴムカバー懐古

私の手許にある雑誌は、大正九年十一月号の婦人世界で、これに広告が二件、載っています。一つは『ビクトリヤ月経帯』の大和ゴム製作所で、オシメカバーの商標は『イージーおしめ』です。一つは『ローヤル月経帯』の田中商店で、オシメカバーは『安全おしめカバー』です。活字の関係で原文そのままの引用はできませんが、できるだけ忠実に引用してみます。

大和ゴムの方は『柔軟ゴム製』で、特色は「大小便は決して洩れず、お子さんの衣服は常に清潔です。●伸縮自在のゴムにして、少しも窮屈の思ひなく、御運動は自由。●センタクは只サラサラと水をかけるばかりにて、キレイになり。●体裁頗る上品です。●着脱に手数がからず。●携帯保存に便利な罐容器附もあり」

田中商店の方は『最新優良ゴム布製』とありますが同じく総ゴムです。

「やはらかに伸縮自在でいか程多量の大小便でももれまたはしみ出る事なし、上品で具合よく衣服ふとんは常に清潔で気持よく、衛生上頗るよろし、洗濯に手数掛らず

久しき使用に耐へ病人用としてまた頗る好評なり」

大和ゴムの方は、大きさが三種類で、それぞれ並と特があり最低価は小並の六十五銭、最高は大特の一円八十銭です。田中商店の方は、大ききだけ三種類で八十銭から一円五十銭までです。

大和ゴムの小形は一、二歳用、中は二、三歳用、大は四、五歳用です。田中商店の方は二歳まで用、五歳まで用、大人用です。

これらの広告は誇大広告気味ですがオシメカバーに対する消費者の関心を反映しています。洩れない事が、いかに大切であるか、大量の大小便に耐える事が、いかに大切であるかを、誇大広告は図らずも強調しています。



伸縮自在のゴム製の価値は寝たきりの赤ちゃんや病気の大人の場合には大して評価されませんが、幼児の場合には極めて重要です。大量の大小便を長時間、放っておくことは本来は好ましいことではありませんが、当時の多くの母親は忙しかったので、普通は放っておいたのです。決して洩れないことは外出時におんぶする習慣や、お客さまに赤ちゃんを抱かせる習慣と関係があります。晴着が汚れると困るという配慮、晴着姿でも抱きたいという欲求がそうさせるのでしょう。赤ちゃんが大人と共に居る日本の習慣が、洩れないことを重視させるのです。

(三)、オシメに寄せる好意

本誌、昭和46年3月号の須田章氏の『甘い回顧』には、幼稚園にオシメを当てて通った話が見えます。ここでは氏の他にも同じような身仕度の子がいたとのことですから、昭和初期には幼児のオシメカバー使用は珍しくなかったことが分かります。私が前に引用した広告は、それを傍証するものと考えられます。

幼稚園に通う幼児にオシメを当てることは赤ちゃんとは異なる、きびしさがあります。途中で交換は

できませんし、トイレに行くこともできないので量は当然、多くなります。それと運動が激しいので伸縮性が絶対必要で、濡れたオシメが運動のたびに、ずれたのでは困るので体と一体になって動く必要があるわけで、ゴムの伸縮性が押えに必要なのです。

当時としても幼稚園にオシメを当てて通わせる話は多くなかったと思われます。オシメの要る幼児は、たぶん通わせなかったでしょうし、今のようには幼稚園が普及していませんでしたから別に問題はありません。また、幼稚園そのものが、子どもを躱ける思想から来ていますから、そこに子を通わせる親はオシメを終わらせる躱けをして早くオシメを終わらせていたかも知れません。

当時のオシメカバーが大量の大小便に耐えて洩れないことを要求されたのは、忙しい農村の母親たちに代表されるように、日本の庶民の母が今で言う共働きであったからです。今なら保育園にあずけるところですが、昔は朝、オシメを当てて夕方まで放っておくようなことを余儀なくさせられたのです。

今日の育児専門ママは考えも及ばないような苦しい生活が五十年前の中、上流階級向けの雑誌のオシメカバーの広告にも投影されています。今の子どもは親の強引な——息抜きもできない、ときには暴力的な——躱けによって早くからオシメを終わらされています。

昔は小便くさいと形容された幼児が今では小ぎれいな紳士になっています。

昔の子どもは躱けられずに大きくなり、自分でできるように、洩らさなくなるまでオシメが当てられました。親たちは、よその子がオシメを卒業していても、自分の子が洩らすうちはオシメを当ててやりました。よその人はそれを見て、あの子はまだ洩らすのだな、と知りましたが、今のようには、それを親の躱けの怠慢だと非難したり、当てられている子どもが気の毒だと同情したり、まして不具者などと思うことはありませんでした。みんなゴムカバーの素晴らしさに酔っていたに違いありません。親は親の立場で、子は子の立場でゴムカバーに安堵していたのでしょう。

須田氏の告白によると親たちがオシメに対して好意を抱いていたことが感じられます。洩らして仕方がないからオシメを当ててやるという発想は、ごく自然です。洩らす子を抱えた親にとって、オシメは元来、有難いものです。今日では洩らして仕方がない人が、オシメを敵視するのに驚かされます。しかも、その人にオシメを奨める人はいないので、一体、この五十年間に、どんな変化が起こったのでしょ。

(四)、育児評論家業の成立

昭和初期までの時代と現代との違いは育児

評論家の存在です。かれらの影響力が育児書によって全国各階層に渗透し、国民すべてが自分の感じよりも〇〇先生の御高説の方を信ずるようになったのが現代です。この育児評論家は有名医師や名士夫人ですから『権威』があります。かれらは母親たちがバカであるという前提で話をします。そこで、教育の高い母親は、バカだと思われたくないので、評論家の説を自分の考えに採用します。

評論家たちは母親が、のんびりすることを嫌います。一人の評論家が母親を、のんびりさせるような事を言うのと、以後、評論家の出る幕がなくなりますから、お互いに牽制合います。母親たちが育児ノイローゼになるように仕向けるのは悪意からでなく、評論家業者としての自衛本能のためです。一人の評論家の説に従った母親が行詰まると、別の評論家の説が売れるようになります。こうして評論家たちは互いに異なった説を出し合って母親たちを行き詰まらせて収入を得ています。このやり方は製薬業界と同じで、一旦くすりをを用い始めると、副作用を消すために次々と別の薬が必要になると同じ原理です。

名士夫人たちは自分が子を育てた経験から洩れないカバーが、いかに母親を、のんびりさせるものかという事実を知っています。そこで評論家として世に出る第一歩が洩れないカバーの追放宣言になります。

(五)、オシメ思想 の商品化

オシメ思想は元来、育児実務者たる母親と、その背景となる風俗から来るものです。それが、いつのまにか評論家たちの商品になってしまいました。私たちの思想も多くは、かれらの思想が、もたに なっています。それは評論家が職業として成立するように都合よく歪められています。

まずオシメ不快説を槍玉に上げましょう。かれらは「赤ちゃんの気持になって」不快さを強調します。しかし自分たちが不快だったという記憶がないので、さすがに気が引けるらしく温度や湿度で不快を立証しようとしません。気象庁発表の不快指数と同じ考えです。それをオシメカバー内に当ててみるとオシメは途方もなく不快だという結論になります。

見方を少し変えてみましょう。母の胎内で胎児は不快でしょうか。ここは不快指数で言えばオシメカバー内より一層、不快な状態です。しかし胎児が不快に喘いでいるとは思えません。とすると温度や湿度からオシメ不快説を立証するというのは、却ってオシメの不快を否定する結果になります。不快説の目的



は、オシメの交換回数を多くして母親の寝る時間をなくすことです。そして、オシメを早く終わらせる努力に、かり立てるためです。一部の評論家は不快説が作偽的であることをうっかり語ってしまいました。赤ちゃんが濡れたオシメを不快と感じるように教育するため、濡れたら、すぐ交換しなさい、というのは不快説の目的を問わず語りしています。

不快説の功績はバイ菌だらけのオシメを使っても何とかなることでしょう。しかしこれが却ってオシメの進歩を妨げています。濡れたまま長時間、放っておいても、かぶれない

ようにする研究が、できないからです。通気性至上主義は不快説から来るものですが、これは「洩れる」カバーを婉曲に推奨するのが真意で、これによって母親は、いつも不安です。この不安は評論家が職業として成立するために必要なものです。母親はオシメの気苦労から早く逃げたいと思う様になり、その方法を評論家に仰ぐようになります。

洩れないカバーを用いる母親は不安がありませんのでオシメを否定する気持になりません。オシメは便利なので長期化しても平気です。評論家にとり、困った母親たちです。そこで夜尿症で迫ります。早くオシメを打ち切らないと夜尿症になるぞ、と脅迫しそれでも平気にいる母親があると自分たちの影響力が疑われますから母親同志で監視し合うようにオシメ使用期間の標準を作ります。

かくてオシメは使用期間ゼロを目指して育児競争の指標になります。オシメは育児の必要悪だと見なされるに至ります。不快説を信じてオシメの濡れを放っておくことに罪悪感を覚え、通気性の洩れるカバーで心が休まらずオシメを外すために子どもに振り回される母親と、その影響下でイライラした子どもが多くなることです。



カット・岡たかし

グラマーな猛女

連載・M派交友録 (41)

鬼 山 絢 策

植座たき子の巻 (4)

悪いこととは思わない

植座たき子は湯上がりのヌードを姿見の鏡に写して身体全体を仔細に眺めていた。

何だか太ったようだわ……。

六十七キロあったも、鏡から、はみ出すような大きな身体だけに、デブという感じは、なかったのだが、今こうして見ると、上半身は変わりないが、腰の周りや太腿などが、太くなっている感じである。

——運動不足のせいかしら。それとも……

たき子は、もう一つの原因を想像して、ファンと鏡に向かって笑った。

花井ゆう子が、言っていた。

——男との交渉が多くなると腰周りが太くな

るのよ。そりゃまあ、当然だわね。

橋本宇吉とは、この頃、まともな営みは殆ど、なくなっている。このマンションに移った当座は張りきっていたようで、若い者に負けないくらいのハッスル振りだったが、それも半年ぐらいでガツタリ落ちた。

何しろ六十八才では無理である。だが橋本は「年だから無理もない」と言う考え方は極度に避けていた。人に「お年ですから、お大事に」などと言われると凄く腹を立てた。

たき子は、それを知っていたから「この頃衰えたわね」などと言う言葉は、絶対に使わなかった。橋本は他の者なら、ともかく、たき子に言われるのが一番、辛いに相違ないからだ。

たき子は絵の学校を卒業すると急に生活が単調になって、退屈になった。

それが安井安芸雄と知り合い、雑誌のカットや挿絵などの仕事を手伝うようになって救われた。そして、いつからともなく安井とセックスを楽しむようになった。

三十五才の安井は、セックスは強い方だった。大男で、たき子と並んでも見劣りしないくらいで、ガッシリした体格だった。

たき子は学生達や、二十代の若者と、よく

つき合ったが、いずれも砂を噛むような思いで、瞬間的な快感はあっても、愛情が伴わないから、それほど感激はなかった。

それが橋本宇吉によって開眼された。確かに、たき子は橋本宇吉を愛した。

老人の豊かな経済力が一番の魅力だったがそれよりも老人が真剣に愛し、若き日の想い出の、初恋の人、サリーの面影を、たき子にうつして、老人としては一生のうちに、かつてない青春を味わっているのだ。その誠意に衝たれて、たき子も宇吉を愛したのだ。

だが、それも現在では、かなり変化した。老人の男としての機能が殆ど、だめになると、何となく情熱が、さめてきているのを、ふと反省することがあるのだ。

「だって、お爺いちゃん、あの方、ダメなんでしょ」と花井ゆう子に言われた時「とんでもない。若い者より元気だわ」と自慢気に反撥していたのが、いつの間にか、だめになってしまっている。

宇吉は、たき子の愛を失うまいと、懸命に努力した。

たっぷりサービスして、たき子の御気嫌をとった。最初は下手だった宇吉の舌のテクニクも、この頃は非常にうまくなった。たき

子が遠慮なく勘どころへ導いたせいもある。

舌だけでは物足りなかったが、そう思うことは宇吉に対して済まないと思った。それには満足する方法を自分から見出すよりないと思ひ、いろいろな方法を宇吉に命じた。

宇吉は、たき子が喜ぶなら、どんなことでも喜んで応じた。たき子が身体をふるわせるのを肌で感じると、何とも言えぬ幸福感を感じるのだった。

安井安芸雄とは極めて自然に、何ということなく、肌を合わせてしまった。

宇吉に済まない……

という気は余り、しなかった。

花井ゆう子が鈴木頭取の悪口を言ってる中で「だって浮気しては、いけないなんて、契約の中に入ってたもん。若いんだから浮気するのは当然よ」と言っていた時、共感を感じたが、その反面「それでは義理が悪いわ」と思ったが、今、自分の身に移して見れば、ゆう子の立場と全く同じだと思った。

宇吉の懸命な愛に対して、少しは後ろめたい気もしたが、

——だって、この頃ダメになったんだもの。その方だけ、ほかへ吐け口を求めるのは、しやうがないじゃないの……

と自分の良心に言いわけした。

——パパはパパで愛してるわよ。安井さんは安井さん。分けて考えれば、それでいいんだわ。パパだって、そのくらいは分かってくれるわよ……

そう考えていたものの、二度三度と安井と寝るうち、だんだん、安井が好きになっていく自分を反省して、たき子は、ちょっと、とまどった。

安井もたき子を好ましく迎えているが、まだ恋愛とまでは行っていない。肉体の方が精神的な結びつきより先行してしまったのだ。

インターホーン

だが、何と言いわけしても、たき子の心の中には橋本宇吉の存在が、いつも、わだかまっていた。

安井の部屋に居る時、もし宇吉がやって来たら、どうしよう？ ということが気になって、しやうがなかった。

安井には、橋本宇吉との関係を既に打ち明けている。

で、そのことを相談すると、
「それなら、インターホーンをつければいい

じゃないか。インターホーンも、いろいろあるけれどね、目立たぬように、つけた方がいいな」

「目立たぬどころじゃないわよ。絶対、見つからないような方法でないと困るわよ」

「なあに、できるさ」

「でも、あたしの部屋から、ここまで線を引っ張るんですよ。管理人に見つかったら文句を言われるわ」

「そこは君が、うまく管理人に話をつけておけばいい。いくらか攔ませるんだな」

「だって工事が大変でしょ」

「あんなもの、ぼくだって、できるよ。どれ君の部屋を見てみよう」

安井という男は行動に移ると躊躇がなかった。たき子の部屋へ入り、あちこちを見廻していたが、寝室と居間の境の上方に冷暖房の送風器がある。

「ああ、あそこがいい。あすこなら両方の部屋の音が入るからね」

位置が決まると、もうインターホーンを買いにたび出して行く安井の男らしさが、たき子には頼もしく思えた。

男性的な人間というのは、見かけが男っぽく見えるだけではアテにならない。真の男ら

しさというのは決断力に富んでいて、こうと決めたら、直ちに行動することにある。そして途中で意志を変えたり、挫けたりしないのが、ほんとうの男と、いうものである。

たき子が見てきた男性は、口先だけは一人前のことを言うが実行力がない。イザ動き出しても少し困難なことにぶつかると、すぐ投げ出してしまう。その投げ出しも自己の挫折をタナにあげて、いかにもやむをえないというような理由をつけて正当化しようとする。

要するに弱い男達ばかりを見てきたのである。それでも通っていくところを見ると、それが普通の人間なのかもしれない。世の中は弱い男や女達が羊のようにウヨウヨうごめいている中で、強い意志と行動力と才能を持った人間だけが抜け出して行くのである。

たき子は管理人に話をすると、電池でやるなら構わないという返事だった。家の配線に結びつけると漏電の恐れがあるからだろう。

安井はスピーカーの小さなのを選んで買ってくる、どこから潜り込んだのか天井裏へ入って、4芯コードを、みごとに配線してしまった。『親』の方を、たき子の部屋にとりつけ、

「サア、テストして見よう」

スイッチを入れて見ると、たき子が普通の声でしゃべるのが手にとるように聞こえた。扉を閉める音は、もちろん、サラサラと衣ずれの音まで、はっきり聞こえる。たき子と安井が部屋をチェンジしてみても、たき子は、それを確かめた。

「これなら、安心だわ。あのひとが来れば、この部屋に居て、すぐ分かるわ」

それから、ますます安井の部屋に入り浸るようになった。

包装紙に包んだままの買い物包みを、いつも安井の部屋に置いておいて、橋本宇吉が訪れたことが分かったと、その買物包みを持って自分の部屋へ戻るのだ。いかにも買物して帰ったように見える。

たき子はカットや挿絵を描いているのは橋本に対して隠さなかった。橋本宇吉も趣味と実益を兼ねた、この仕事には快く賛成してくれた。ただ、その蔭に安井安芸雄という指導者が居ることだけは伏せていた。すべて、たき子自身で雑誌社に売り込んだように見せかけてあるのだった。

たき子の絵は、二、三の雑誌社で使ってくれた。いずれも専門誌で、一流雑誌ではなかったが、カット一つ、描いて五百円ぐらいに

は、なった。

「編集者というのは飽きっぽいからね。最初は珍しいものの好きで使ってくれるが、そのうちマンネリ化すると変えられちゃうからね。そこを、うまくつなぐのがカット屋の世渡りというもんだよ」

と安井は教えてくれた。

「それには、どうしたら、いいの？」

「やっぱり勉強する事だな。向こうの注文にはまるような絵を描くことだね。しかし、君は女だからね。女の特性を活かすのも、一つの手じゃないかな」

「いやだわ、そんなの」

「イヤ別に君が、お色気サービスまでしなくたって、いいんだよ。ただ、何となく色っぽく見せるだけで、いいんだよ。例えばホラ、あの鬼山さん。あれ、オッカナイような顔して、存外、女の子に、あまいんだよ。だから、君の絵を二つ返事で使ったんだよ」

「そうかしら。そんな風に見えないけどね」

「結構、スケベエなんだ」

「フーン、じゃ、あたしに気があるのかな」

「そういうんじゃないんだ。あの先生は、一寸、変わっていてね。いまヌードの撮影に凝ってるんだよ。君がヌードになってやれば

喜ぶぜ」

「イヤだわ。そんなの屈辱だわ」

「でも、罪がないじゃないか。君でなくてもいいんだ。誰かヌードのモデルになる人、紹介してやれよ。一万円、くれるそうだよ」

「ヘーじや、ゆう子に話して見ようかな。」

あの子なら、何でもダボハゼみたいにな、とびつくんだから」

「何でもグラマーな子が、いいらしいな。君ならピッタリなんだけど。君だって昔はモデル、やったことがあるんだろ」

「いまは、そんな気、ないわよ。あんた、わたしにモデルをさせる気なの」

「モデルは別に何でもないだろう。まあ、やりたくないや、無理にすることもないがね」

花芯の秘密

橋本宇吉はベッドに横たわる、たき子の腰を抱いて太腿へ唇を当てていた。

「君、この頃、少し太ったようだね」

「そうお？ イヤだわ、この上、太っちゃ」

「いや、いいんだよ。もっと太ったって、ちっとも君の肉体美は衰えないよ。ちよっと、こっちの足をあげておくれ」

ナミオM画廊 『鼻柱に注意!』 春川 ナミオ



たき子は片足をあげて、いつものように宇吉の顔を、はさんだ。

——やっぱり、あたしの太ったのが分かるんだわ。顔なんか、ちっとも変わらないのに。腰のまわりと足が少し太っただけなんだけど

始終、抱いてるから、分かるのね……。

宇吉の舌が触れた時、たき子は複雑な快感が、はしるのだった。

それは安井と、つきあうようになってから感じるようになったものだった。

いまの先まで安井と抱き合っていたのだ。安井は心も身体も男らしい。彼の身体は、絵描きのくせにスポーツ選手のように筋肉が発達している。

目もくらむような陶酔に、二人は抱き合ったまま、お互いの肌の汗ばんだ感触を楽しんでいる時、

「おい、電話だぜ」

安井が注意した。たき子は全く聞こえなかったのだが、言われてみると、インターホンから電話のベルが聞こえてくる。

ガバと、はね起きて、ワンピースを頭からひっかぶり、ソツと廊下を見まわして人気がないのを確かめると、はだしのまま、泥棒猫のように足音をぬすんで自分の部屋へかけもどった。宇吉が来るというので、風呂を急いで沸かして入念に身体を洗った。安井の体臭を、きれいに洗い流して宇吉を迎えるのだがそれでも宇吉の舌に触れられると、いまさっきの安井との情事を思い出してしまうのだった。

宇吉の舌は、この頃、微妙な動きをしめすようになってきている。どうやったら、たき子を喜ばせることができるか、敏捷な動きと細かい部分への刺戟で、宇吉は、たき子にサ

ービスをするように務めているのである。

そういう心掛けが、たき子には、よく分かる。分かっているだけに、この老人を、いとおしく思っている。

老人の口にするものを、他のものによって汚すことは、老人に対して済まない――

という気が、しないでもなかった。だからこそ、よく洗って、先人のあとを清めてから老人に接しているのだった。

他人と接しても、あとを、よく洗っておけば、清浄ではないか。

たき子は、そんな風に考えていた。

物理的には、それで解決がつくかもしれないが、精神的な面では、どうだろう。それも宇吉の妻というわけではないし、近頃は団地の細君の浮気などは当たり前、という世の中だ。まして年の違う女と男で、男が不能なら仕方がない。

と、そう割りきってはいるのだが、今日も「あの洋服にこの指輪が似合うと思ってね」とメキシコオパールの変わり玉を見つけてきてくれた。「君と離れていても、いつも君のことを想い出しているのだよ」と、青年の恋のように、一途に愛してくれる宇吉を思うと、たき子は安井との関係を、

――わたしは何も悪いことはしていない。

と割り切っている。何か引かかるものがあるのだ。

たき子が横に寝て、その下になった太い腿を枕にして、宇吉が向き合っている。

上になった方の足は、やわらかく宇吉の顔を包んでやったり、またサッと足をひらいて垂直に膝を立てたりする。この姿勢が双方ともに楽で、一番長続きのするのだった。

時々宇吉はゴロンと起き上がり、ベッドの上に膝を揃えて坐ることがある。

そういう時は、たき子は仰向けに寝たまま、片足を上げて宇吉の肩へ、ふくら脛をかけてやることにしている。

宇吉は、肩にかついだ太い足を大切そうに両手で抱え、弾力のあるスベスベした太腿の内側に唇をつけ、そこら中を舐めまわす。

頃合いを見計らって、もう一方の足を肩に乗せて、仰向けのまま、膝のちよつと上のあたりで宇吉の両頬を、はさんでやる。

すると宇吉の方で、だんだん、おじぎをするように頭を下げてくる。それに応じて、たき子は股をひろげてやるのである。

グイグイと頬を擦りつけながら、腿と腿の狭い間を宇吉の顔が目標に向かって進んでく

る。だが、たき子が寝たままでは、宇吉は、かなり身体を折り曲げないと到着できないのだ。

そういう時は、たき子の方で尻を浮かせて「おむかえ」に行くのだった。

ふたつの舌

たき子は安井とのキスを想い出した。

彼は遠慮なく、唇へキスしてくる。

だが、橋本宇吉は、この頃、滅多に、たき子の唇にはキスをしない。下半身ばかりだが少し上がって、お臍の穴をペチョペチョと、ほじくるように舐めてくることもある。

「くすぐったい、やめてえ」

と言っても、なおしばらく、舐めほじくっている。

「アハハハ、アハハハ。くすぐったいってばあ、パパ。イヤよう」

たき子は堪えられなくなると、宇吉の頭を手をかけてグイと下の方へ押し下げてしまうのだった。

宇吉の舌と、安井の舌とが合致するところは乳首だった。

安井は、それより下には行かないし、宇吉

は、それより上には行かない。

——安井には何となく肌を許してしまったけど、その割りに彼は、あたしに熱をあげて来ない。ほんとに、あたしを好きなのかしら？ そうだ。こんどは安井にも、舐めさせてやろう。ほんとに、あたしが好きなら、舐めるはずだわ。愛している人の身体なら、どこでも汚くないって言うじゃない……。

たき子は下から宇吉の首へ両の太股を巻きつけながら、そう考えていた。

宇吉は両手で、たき子の巨大な尻を重そうに抱えて、西瓜でもパクつくような恰好をしていたが、ふと首を持ち上げて、たべていたものを、ジッと見つめた。

その顔には、何かを疑うような色がチラと見えた……。

と、たき子には感じられたのである。

——何か異変を感じたのかしら？

たき子はドキリとした。

——こんな風にして眺めることが、いままでにあったかしら？

たき子は宇吉の顔色から何かを読みとろうとし、一方で必死に頭を回転していた。

——あるわ。時々こうして見ることに、あったじゃない。誰だって、おいしいくだものを食

べる時、ときどき見つめることが、あるじゃない。アレと同じよ。心配することは何もないわ。よく洗い落としてあるんだから……匂いだって、いつもと変わりないはずだわ。味も……。

宇吉と、たき子の視線がパツタリ合った。

その時はもう、たき子の方で自信を、とり戻していたので、たき子も微笑を浮かべて老人を見上げる余裕が、できていた。

いつも、おしゃれで、キチンと髪を整えているのが、いまは半白の毛髪が、だらしなく乱れている。たき子の微笑を見ると、目をトロンとさせて笑い返した。

口のまわりをベタベタにひかせて、何とも、だらしない人相である。

——年よりに、なにが分かるものか！

「イヤよう、そんなに見つめちゃア。恥かしいわア」

そろそろ、かったるくなつたので、たき子は横に大きく下半身を倒した。もちろん、首をはさんだままである。

ベッドは普通のダブルベッドより更に大振りにできている。大きな、たき子が縦横に暴れ廻るだけの広さは十分あった。

そのまま、宇吉の方に馬乗りに跨がった。

——変な目で見た罰だよ……。

少し重しをかけてやれと、老人の苦しむ顔を想像しながら、

——あたしの此処、少し大きくなったのかしら？

たき子は、まだ宇吉がジッと見つめていた時の目つきに、こだわっていた。

——やっぱり、いつまでも気にしているということは、あたし悪いことしてるのかしら？ そう思うと、苦しめてやれと思った太腿の力も弛んでしまうのだった。

——面倒くさい！ そんなことをウジウジ考えるより、いまは、このひとときを楽しむことだわ。その方が、おじいちゃんも喜んでくれることだし——

宇吉も、いまは何もかも忘れてるように見える。

——これだけ、あたしを愛してくれる人は、この人しか、いない。安井なんか、抱いてても絵のこと、考えているんじゃないかしら。イヤに冷静なところがあって、さっきだって、

「オイ、電話だよ」と言われた時は、ほんとにビックリしちゃった。電話のベルも聞こえないくらい熱中してほしいのに、癪だわ。考えれば考えるほど、癪にさわる。こんど寝た

ら、きっと、こういう風にしてやる！　こうやってやる！　ざま見ろ！

「ウウ、ウウ」

思わず尻に力が入って、重圧に堪えかねた字吉が、苦しさにSOSのサインをあげていた。

女の勘

「ねえ、あたし、太った？　ねえ」

たき子は久し振りに訪ねて来た花井ゆう子を見るなり、聞いた。

ゆう子は、たき子の身体を見ずに目の中をのぞくようにして、

「フッフ。あんた、いいひと、できたのね」

「なに言ってるのよ。いいひとったらパパだけよ」

「うそ、おっしゃい。まあ、言いたくなくちゃ、言わなかったって、いいけどね」

さすがに、ゆう子は炯眼だと、たき子は思った。「太った？」と聞いただけでピンとくるとは、勘がいいのに驚いた。

「それはそうと、何かいい話、ない？」

「ウン、モデルの口があるわよ」

「モデルなら、あんたじゃないの」

「もう、あたしはモデルには、なりたくないのよ。あたしは絵のモデルならいいけど、こんどのは写真のモデルなのよ」

「写真か。いくら、くれるの？」

「一万円」

「時間は？」

「ああ、時間は聞いてなかったけど、一時間か二時間ぐらいじゃない？　絵と違って写真は早いからね」

「フーン、どんな人なの？　スポンサーは」

「ある雑誌の編集長よ」

「ええ？　雑誌に使うの？」

「そうじゃなくて道楽らしいのよ」

「カメラマンは大勢なの？」

「サア、それ聞いてなかったけど、ちよいちよい来るから、また聞いとくけど、やってくれるなら紹介するわよ」

たき子は、また驚いた。こんなにスラスラと質問が出来るのは、ゆう子は既にカメラのモデルの経験があるのではないかと思った。

「あら、変な本が、あるじゃないの」

「ウン、その雑誌のカット描いてるのよ」

「ああ、この雑誌の編集長なのね」

「うん、まあね」

「まあねとは、どういうことよ。おかしい人

ね。あんた、この頃、秘密が多くなったみたいだよ。どうもアヤしい。恋人ができたな」

「フッフ、想像力が逞しいのね」

「恋人ができること万事、秘密主義になるのよ

「経験者は語る、か」

「おぼこだと思ってたけど、あんたも、だんだん、おとなになったわ」

「このヤロウ、舐めんな！」

「オッ、オッ。パパにもその調子でやるの」

「パパの話は、よして頂戴。あんたなんか理解できる人じゃないんだから」

「さっきの話さ。その編集長に会ってもいいわ」

冗談を言い合ってるうちにも、ゆう子の頭はクルクル廻転してるようだった。話の中途にパッと別の話が、とび出すのは、近頃の若い娘の通有性であろうか。

「そう。じゃ、電話してみるわ」

近所の喫茶店で会いたいと言うと、鬼山は喜んで、とんで来た。

たき子は安井には知らせなかった。ゆう子が、あまりにも、よく見通すので、安井の顔を見れば、ひと目で、たき子の恋人と見抜かれてしまう。部屋が、あまりにも接近してい

るし、彼の部屋へ押しかけて来られたりしたら迷惑だからだった。

「あたしのお友達のエレクトーン演奏家の花井ゆう子さんです」

ゆう子は鈴木頭取と別れてから、元の店のコルベールに行くのも頭を下げるようでイヤなので、レストランのエレクトーンなどひいているが、ブラブラしている身だった。

「ああ、エレクトーンは私も大好きです。失礼ですが、何級ですか」

「3級です」

ほんとは4級だが、いま3級のテストを受けているので、サバをよんだ。

「ホウ、そりゃ大したもんですな」

「ねえ、先生。こんど秋の臨時増刊が出るんですってね。その表紙を描くひと、決まりまして？」

「エ？ ああ、あれは、まだです。内容は決まったのですが題名が、まだ決まらないのです」

「その表紙、描かしてくれませんか？」

「そうですね、担当の浜田と相談してみましよう」

「うれしい！ あたし、ぜひ表紙を描いて見たかったんですよ」

たき子は強引に押してきた。たき子と鬼山が仕事の話をしている間、鬼山は、ゆう子を観察し、ゆう子も鬼山を観察していた。

「ああ、ところで、こんどは先生の御道楽のおはなし。先生、モデルさんを探してらっしゃるといふことでしたけど、この、ゆう子さんは、いかが？ ゆう子さんはバニーガールをやったくらいだから身体は、いい線をいってますわよ」

「ああ、こんな綺麗な方になって頂ければ最高ですな。どうですか？ 晩飯を、つき合って頂けますか」

「先生はね、夕食おごり病という病気があるのよ。人の顔を見ると、飯をつき合えって言うんだから。看病してあげなさいよ」

「植座さんも、どうぞ」

「あたし、今日はダメ。じゃ、これで失礼します。増刊のこと、よろしく御願ひしますわ先生」

鼻の穴半分の呼吸

橋本宇吉は滅多に泊まって行く事はなかった。十二時過ぎても車を拾って帰って行く。橋本が帰ったあとは、たき子にとって一番

解放された時間である。安心して安井の部屋へ行けるからだった。

「行くわよ」

とインターホーンで呼びかけると、

「ホイきた」

と返事が返ってくる。

部屋へ入るなり、安井は待ち構えたようにたき子を抱きしめ、強いキスを何度もした。

「今夜はバカに熱烈ねえ」

「あのじいさん、相当しつこいんだなあ」

「フッフ、パパの話は、しつこなし」

「そんなら、スイッチ切っておけよ。ヘンな声、聞かされて気になって仕事ができやしないよ」

「あら、スイッチ入れっぱなしだったのね。イヤだあ」

「イヤだあ、はないだろう。ひどいめにあったぜ」

「そんならスイッチ切れればいいのに。ひとのプライバシーを盗み聞くもんじゃないわよ」

「何言ってるやがんだい。てめえで頼むから、ほこりまみれになって、つけてやったんじゃないか。切ろうと思ったけど、気になって切

れなかったよ。やっぱり俺、君に惚れてんのかな」

「あら、それ本気にしているの？ そんならあたしにも考えがあるわよ」
 「まあまあ、そうムキにならないで。今夜はともかく楽しもうじゃないか」
 「あんた、あたしを遊びの相手だけとして、

つき合ってるの？」
 「よく分からないよ、まだね。お互いに、もう少し、時間が欲しいんじゃないか」
 「イヤだ、そんなの。あたし、おもちゃにされるのなんか、ごめんだわ」



イメージギャラリー

『白豚の寝床』

岡

たかし

「誰が、おもちゃにすると聞いた。大体、仕掛けたのは君の方からじゃないか」
 「イヤだ。あたし、今夜は帰るわ」
 と、すねて見せたが、安井にそう言われて見れば、確かに、たき子の方から安井を誘ったのだ。

「まあ、そう、つむじをまげないでくれよ。ぼくは齒の浮くようなお世辞は言えない、たちだからね。現在の心境を、ありのままに言っただけだよ」

と、やさしく肩を抱かれると、たき子は、そのまま向き直って、安井を抱いてしまうのだった。

「お風呂、入って来たかい」

「もちろんよ」

「爺さんのあと、そのままじゃ、いやだぜ」

「フフフ、もうあの方、ダメなのよ」

「じゃ何で、あんな声、出すんだ？」

「フフフ、そんなことまで、あたしに言わせるの。イヤだなあ、聞かれちゃったのね」

「ほんとにダメなの、全然？」

「この頃は、もう全然よ」

「フーン。とすると、老人のセックスってのは、ああいう風なのかなあ」

「よしとよ。パパの話は、言いつこなし。恥

かしいわ」

「大体、想像は、つくがね」

二人は真っ裸になってベッドに入った。

たき子は安井に、いじめられ通しなのが頼にさわっていた。

「ねえ、ひとのものを盗むのって、いいもんでしょ」

「俺は別に盗んでなんかいないよ。君の方で押しかけて来たんじゃないか」

「でも盗んでることになるわよ。あんた、あたしのこと全部、知っちゃってるんだもん」

「そう言や、そうだな」

「あんた、人妻や人の恋人を盗んだことあるの、あたしのほかに」

「冗談じゃない。俺は、そんな性悪じゃないぜ。仕事に追われてて、そんな暇ないよ」

「でも、いま盗んでるじゃないの」

ジワジワと、たき子が責め返してきた。

安井は、たき子が足を掘げないので、太股の間に手を入れて掘げさせようとしたが、たき子はその手をキュッと挟んでしまった。

「どうしたの？」

「今日はバカに急いでるじゃないの。早く済ませて仕事しようっての？」

「イヤ、仕事は、もうしない。明日だ」

「あの年寄とあたしが、どんなことをしてるか、教えてあげましようか」

「いいよ。それより……」

安井は、はさまれた手を、ねじろうとしたが、たき子の足に力が入ると、それもできなかった。

「だってスイッチを切らなかったのは、知りたかったからでしょ」

「わかったよ。手を放してくれよ」

たき子は突然ガバと起き上がった。かぶさっていた布団が勢いよく、はねのけられた。

安井の両手を手でおさえつけておいて、それを膝に踏み代え、両腕を膝で踏んで、首の上に馬乗りに跨がった。

「な、なにをするんだよ」

「あたしとパパのセックスを教えてあげるわよ」

「いいよ、そんなの」

安井は激しい抗議の目で見上げた。

「こうするのよ」

ひらいていた膝をジワジワと、すぼめて、

安井の両頬を太股の内側で締めて行った。

「分かってるよ、そんなこと」

「サ、キスしてよ、キスしなさいよ」

「おい、苦しいよ」

「パパは、こうしてやると、喜んでキスしてくるわよ」

「俺に年寄のまねをしろ、と言うのかい」

「あんたが、あたしを好きなら、キスぐらいできるはずだわ」

「こんなことで俺の愛情テストをしようってのか」

ムンムンと女体の匂いが降りかかってくるので、安井は困惑したように眉をしかめた。

「どうなの？ イヤなの？」

「イヤだね。キスしてもいいが、こんな強制的な方法するのはイヤだ」

「何言ってるのよ」

たき子は見せつけていたもので安井の口をふさいだ。

「あんたに愛情がないことが分かったわ。そんなら、なおのこと、こうしてやるわ」

グッと上から体重をかける。安井は苦しがつて、自由になった両手で、たき子の太い足に指をかけて、振り倒そうとした。だが、たき子が両足に力を入れると身ゆるぎもせず、安井の力では到底、不可能だった。

「イヤなの？ イヤなら、あたしを、どかしてごらんなさいよ。あんた、男でしょ」

安井はムキになって腕に力を入れるが、ま

るで、むなしい努力であり、かえって息苦しさを増すだけだった。

「アッハハハ。意気地がないのねえ。ホラ、早く、どかさないと窒息するわよ。フフフ、どうなの？」

安井の呼吸は、鼻の穴の片方のみで、していた。それも半分は、ふさがれている。

この跨がり方は、橋本老人を相手に、いつしか、たき子が身につけたテクニクの一つなのだ。息抜きの、ほんの狭い道だけをあけておいてやる方法である。

その僅かな抜け穴を、ふさごうと思えば、いつでも塞げるのである。

男を、こういう風に組み敷いてしまえば、生殺与奪の権利は、すべて、たき子にある。たき子の女体自身にあるのである。

安井の口は、すでに体重の重石に堪えかねて開かれています。腕に力を入れた時、少しでも呼吸を楽にしようと、口を大きく開いたがそれは徒労で、開かれた分だけ、たき子に肉を詰め込まれてしまうのだった。

舌がいやでも詰めこまれたものにふれる。しかも上の方から麻醉薬のように流れてくる液体が、安井の舌を、しびれさせてしまうのだった。

こうなれば、もう、たき子のものだった。自由自在に舌を導くことができるのだ。

たき子は橋本宇吉の時とは違った、快感に酔いしれることができた。

安井の頭の上の方に、たき子は両手をついて、苦悶する安井の顔を見ながら、思う存分に、なぶり責めしてやることができた。

——さあみる。タダで盗んでれば、この位の苦しみは味あわなければならぬんだ。

安井はベッドをバタバタ叩いた。

降参の合図である。

だが、たき子は許さなかった。

——まだまだ、もう少し苦しみ。あたしは、いい気持。あたしは、もっと楽しむのよ……

長い舌

ゆう子は、あれきり、やって来ない。モデルをやったのかどうか、聞いてみたかったがゆう子のアパートに一度、電話を入れてみたが留守だった。呼び出したので何度もかけるのは気がひけたし、そのままにしていると、十日ぐらいたって、ゆう子の方から電話が来て、ヒョッコリと、やってきた。

「どしたのよう。何も報告がないから、どう

したのかと心配してたのよ」

「あら、鬼山さんから聞かなかった？」

「会ってないわよ、あれから」

「フーン、すまないけど鬼山さんそこへ電話してくんないかなあ」

「それより、どうしたの？ 撮影やったの？」

「うん、もう写真できた頃なんだ。ちょっとかけてみて」

たき子はダイヤルを回したが、鬼山は留守だった。

「ちょっと、その電話番号、教えて」

ゆう子は小さな赤い手帖に書きとめた。

「どうだったの。お金、ちゃんとくれた？」

「うん、その方は間違いないんだけどね」

ゆう子は含み笑いしながら煙草に火をつけた。

「なによう、何かあったの？ あの人、何か変なこと、したの？」

「そんなんじゃないんだけどね、ちょっと人には言えないような写真、撮られちゃったんだ。フフフ」

「当たり前よ、あんた。絵のモデルと違って写真のモデルは、みんな、そんなもんよ」

「そりゃ分かってるわよ。その位のこととは覚悟して行ったんだけどね。あたし、前にも写

ナミオM画廊 『今日はガスだけ?』 春川ナミオ



真のモデルは一度、やったことがあるからね
裸見せるぐらいはヘッチャラよ。ところが違
うんだ、あの人のほ

「どうせ、あの人が話すわね。男の人と二人
で撮ったのよ」
「え? ジャセックスのあれ? そのものズ
バリやったの?」

「バカねえ、いくら何でも、そんなのなら、
蹴っちゃうわよ」
「じゃ、その男のモデルって、なにしたの。
どんな男だったの」
「何かね、髪の毛をモジャモジャにした小さ
な瘡せた男だったね。無口でね、殆ど口を、
きかないの。啞かと思ったね」
「フーン、いくつ位の人?」
「そうね、三十五、六かな。なんか絵描きみ
たいな人。小説でも書くようなタイプかな。
それがね、ポカンと口を開けて、馬鹿を装っ
てるのよ。あんたの知ってる人じゃない」
「サアね、そんな人、知らないわ。名前、何
て言った?」
「黒田とか言ったね。どうせ、偽名でしょう
けど」
「知らないわ。で、その人が、どんなこと、
やったの」
「ううん、その人は別に、何もしないのよ」
「じゃ何のためにモデルになったのよ」
「いえね、最初、鬼山さんが、あなたは美の
女王だとか何とか盛んに持ち上げるのよ。そ
いでアクセサリーが必要だと言うの。アクセ
サリーを、そばにおいても、いいかって言う
から、もちろんOKしたわよ。アクセサリー

と言っても静物でなく、生きたアクセサリーの方が面白いって言うのよ。で、その黒田って男はアクセサリーになったわけ」

「何だかサッパリわからないわよ」

「アハハハ、ズバリ言うかね、あの鬼山さんて人、変態なのよ」

「変態って、どんな風な変態なの」

「マゾよ、マゾ」

「ヘエーえ、そんな風には全然、見えないけどねえ」

「ところが、その黒田って男もマゾなのよ」

「フーン、じゃ、その男、縛って、ぶん殴るような場面、撮ったの」

「ううん、そんなのは撮らなかつたけどね、何しろアクセサリーだから。腰掛けになつたり、敷物になつたりするのよ」

「フーン、面白いじゃない」

「静物のアクセサリーから、だんだん動くアクセサリーに変化して行つてね。奴隷になつたりしたわ」

「そいじゃ、あんたのおハコじゃない。あんたサジストだもん。女のサジストだから」

「バカねえ、女のサジストはサジスチンて言うのよ」

「ヘエ、チンがないのにサジスチンとは、こ

れいかに」

「アッハハハ、チンをいじめるからサジスチン。アハハハハ」

たき子は話をしながらウイスキーと氷を持って来て、オンザロックをつくった。

ゆう子は酒が入ると、しゃべり方が早口になり、声にハリが出て来た。

「鞭なんか、使わなかつたの」

「ウン、そういうことは、しないわね。せいぜい、頭を蹴とばしてやるくらい。一度、その男の喉のところに、おなかのところへ足を

かけて乗ったことがあつたわ。やせっぽちのくせに、よく我慢してるわ。あたしだから我慢できたけど、あんたが乗つかつてやつたら、どうかしらね。潰れちゃうわ」

「だけど、そんな写真、撮って、どこが面白いのかね。ナンセンスだわ」

「結構、面白いわよ。それに鬼山さん、写真を撮る時は、すごく真剣なのよ。大きなライトを二つも、つけてさ。光線のあたり具合を神経質に、あちこち変えるのよ。顔の表情とか、手の位置とかが、うるさいのよ。プレー

というより、何か仕事してるみたいになるわね。ああ言うのも、なにか意義があるみたいだわ。考えてみれば世の中、何だって、

くだらないわよ。何の趣味だって、それに興味の無い人から見ればナンセンスよ。そんなもんじゃない？」

「そのモデルになつた人が一番バカね」

「うん、でも、そのバカになつてるのが楽しいんじゃないの。おとなしいもんよ。何されても従ってくるんだから。ほんとにアクセサ

リーの役目を忠実に果たしたわ。ああ、だけどね、あの時だけは猛烈に、ハッスルしてたわ」

「なあに。あの時って」

「ホラ、あんただってパパにやってやるでしよう、アレよ」

「そこまで撮つたの？」

「口の上にソツと、おっつけてやったのよ。そしたらニョロツと舌を出してきて、それがとても長いよ。よく動くの、あんなのあた

しはじめて出くわしたわ。昂奮しちゃった」

「ヘエ、生まれつきなのかしらね」

「とにかく長いわね。伸ばすと、あごの先まで舐められるくらい。それが微妙に動くのよ感じるわあ」

たき子の目が好色に、うるむ。たき子も橋本の舌を想い出して何かウズウズした気分になつてきた。

「なんてのかしらねえ。こうショコシヨコッて、あちこちを、さわってみるのよね。それで感じるところを専門に舐めてくるって感じね。女は顔へ出さなくても急所へふれられると、敏感に応じちゃうのね。それで分かっちゃうのよ。あたしも、いろんな男に舐めさしてやったけど、あんなのはじめてだわ」

「じゃ、そのひとも、よっぽど大勢の女の人なめてるわねえ」

「そう、その道のベテランよ、あれは」

「そこんどこまで撮ったわけ」

「ああ、そう言えば撮ってたわ。あたし、あん時は、カメラもライトも意識しなくなっちゃったんだけどね。鬼山さんも最初のうちはいろんな注文、出してたけど、あの時は黙ってモデル達の自由にさせていたからね。カメラマンの存在も忘れちゃったわ」

「よっぽどポーツとなっちゃったのね」

「アハハハ、世の中には面白い人も居るもんね」

ゆう子はスカートを捲くって大きく足を組んだ。男の居ない女同士の部屋では奔放なスタイルが平気でできる。たき子は、ゆう子の太腿の奥まで覗ける足を見て、この足で、その男の首をはさんだのかと想像した。あまり

太くはないが弾力があって、相当、惨酷そうに見えた。

かつて、この部屋でコルベールのボーイ達と乱痴気騒ぎをやった時に、次々にボーイの顔へ跨がった、ゆう子の姿が目に見えた。

「あの爺いだって、あの位の舌のテクニックをもってたら、あたし捨てたりなんかしたわ。へたくそだもん。年寄のくせに」

——フン、何を言ってるんだ。捨てられたくせに、自分から捨てたという。女の見栄か。

たき子は、ゆう子を軽べつした。

——鈴木頭取の援助さえ受けていれば、そんなモデルになんかならなくても済むものを、バカだわ、このひと……。

「その写真が、もうできてるはずなんだけどねえ。あんた、まさか見ないでしょ」

「見るわけないじゃないの。鬼山さんと会ってないんだもん」

「鬼山さんはね、絶対、人には見せないからって言うのよ。それだけは約束しますって言うのよ」

ゆう子の顔に不安のかげが、やどした。

「人に見られたらイヤ？」

「フン、平気だけども。でも、まさか、あの写真を売ったりなんかしないでしょうね」

「鬼山さんは、そんな人じゃないわよ」

「うん、そんなことは、しらないと思うけど、人に見せないってのは、どうかなあ。あたしの知らない人に見せるんなら、いいけどさ。知ってる人に見られるのはイヤよ」

ゆう子はウイスキーをグイと飲みほした。

「そうだ。あんた今度、鬼山さんに会ったらね、いづれ写真の話は、するでしょ」

「そりゃ、あたしが紹介したんだもん。あんたを、ほんとに気に入ったかどうか、撮影がうまく行ったかどうか、その位のことは聞くわよ」

「その時ね、その写真、見せて頂戴って言うて見てくんない？ それで、あんたに見せるようだったら、あの人、約束を破ったことになるわね」

「そうね。だけど鬼山さんが見せてくれたら見ても、いいの？」

「仕方がないわ。あんたなら、実物さえ見せちゃってるんだから。ねえ、頼むわ」

「分かったわ。聞いて見るわ」

「あの人ね、グラマーなひとが好きらしいのよ。ほんとに、あたしより、あんたをモデルにしたいらしいのよ」

「イヤなこった。あたしは、ごめんよ。パパ

にでも見つかったら破滅だわ」

「だから、あんたが見せてくれって言ったら
見せるかもしれないわよ、きっと」

そこへ、橋本宇吉から「これから行く」と

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇円	(送共)
三月分	3冊	一二〇〇円	(送共)
半年分	6冊	二四〇〇円	(送共)
一年分	12冊	四八〇〇円	(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか、
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたらという御要望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願い致します。毎月製本完
成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには
大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社
社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお
払込みの上、何年何月号より何力年分と御指
定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代など
は、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為
替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替
(大阪四二七八三番)』のいずれかをご利用

電話がかかってきた。

「あら、パパが来るの? じゃ、あたし帰る
わ」

「うん、でもちょっと待っててよ。パパが来

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法
ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇
〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂
ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方
の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何力月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何
月号からとお書きにならないときは、重複や
欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れまじしたときは、封筒の上に
△本号にて前金切の判を捺印致しますから
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎年二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際にお
取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とをお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから数日後その局で御受領願います。
局での留置期間は十日間でその間にお受取り
にならないときは、発送人に返戻されます。

るまで」

「どうして?」

「あたし、お酒、飲んだの分かるでしょ。誰
と飲んでたのか、証人になってほしいのよ。

この頃、やきもちやきになって、疑い深くな
ってるからね」

「それは、あんたが悪いことしてるからよ。
アッハハハハ」

ゆう子の、こういうところの勘は凄い。パ
カな女だと軽べつはしたが、頭の廻転が早い
ところと、男と女の関係については経験から
くる勘がよい点では自分より上だと思った。

「悪いことなんか、してないわよ。だけど、
もしもよ、あたしが恋人なんか他につくた
ら、それは悪いことなの」

「ううん、別に悪いことじゃないわ。あんた
は悪くはないけど、橋本さんの方では悪いこ
とのように思うかもしれないわね」

「あんたは悪くないって、あたしに言ったこ
とがあるわね」

「言ったわよ。言ったどころじゃない。あた
しは実行したんだもん。アハハハ」

鈴木頭取と別かれたことに未練があるのか
もしれないが、あまり愚痴をこぼさず、サバ
サバしたところが好きだった。(続く)



肥満体狂崇者の手記

思い出の＜私好みの＞名記事

須 渾 朔

切り抜きマニアである身にとり奇クこそ貴重なるしろもの。沼正三氏の『手帖』や真砂十四郎氏作『二百字讃歌』の如く、すばらしいの一語につける名作の他にも、私好みの貴重な記事が数々あって以下のものなどは、一体何度読んでは胸をときめかしたことが。

(1)

——私の母の義母にあたる玉子未亡人は、その名の如く煮ぬき卵のような肌の美しい肥満型の婦人で真夏は洋服だと云って半裸によくなられたし、錦絵に見る横綱、大関の風格がそなわっていたので、子供の私に対しては、よく土俵入りの真似をして、四股を踏んで見せて下さったものだ。——
(奇ク一九五七年七月号、土俵四股平「女斗美遍路」より)
海野美津男、奮斗士好太両氏の

△女相撲もの△は、奇クならではの好読物だが、その先駆でもある土俵四股平氏の、「女斗美研究遍路」は文献的価値、大と思った。前掲の文は、とりわけ私にとって、実にうらやましいと思ひながら、自分勝手な空想をこしらえては、何度も読んだものだ。

この何とも潤達な性格の持主の堂々たる肥満美女の家来、下僕となり、正に、そのふんどしかつぎ的奉仕を強いられることが、私の願ひであった。

「これ、お前。ご主人さまの、おみ足を、おなめ」とか、色々と彼女になぐさみものにされることを空想したわけである。

肥満体狂崇者であり、切り抜きマニアでもある私は、以前、相撲雑誌の古いやつなんかをあさって角力とりの、とりわけ私好みので

ぶちんの写真を集めたものだ。その中で秀逸なのは、肥体のすこかったKが、正に河馬がねそべっている如く巨体を横たえて、取り的達に太い足をもませているのや、浴室で陰部の所に桶をあてがって太鼓腹をつき出しふんぞりかえっていて、それを取り的達数人がかりで一心にお洗い申し上げているなんていうのがあった。

これなんか、私にとっては、正にシゲキ的であったが、Kにかえるに、肥満美女、玉子女王様を以てし、私は勿論ふんどしかつぎという、私にとり世にも素敵なイメージは、長い間、私というバカバカしい男の脳裡を占領したものであった。

肥満体そのものが、私好みなのは勿論なのだが、肥満故に、厠の後始末に少なからず難渋するた

めに、便利なお伴が必要になってくるといふ筋書きは、私にとっていつまでたっても亢奮を禁じ得ない空想である。

「さあ、けいこをつけてやるからどこからでも掛かっておいで！」相撲がいこが趣味の彼女は堂々と、うそぶくので、かかってゆくが、簡単に首根っ子をおさえつけられて、彼女の股の下に、のびてしまったり、はねとばされてしまい、すかさず彼女は、ご立派な巨尻で、ぎゅっと私を押しつぶしてしまい「アップ、アップ」と、私は哀願するばかりである。

「弱い奴ねえ」と、弱すぎる罰として、馬にされて這いまわる。やっとな、その重々しく、神々しい玉体をのつけて這いまわる重労働にも馴れたころ、今度は馬作業と厠奉仕とが、容易に合成されて、トイレへのお伴は、玉子女王様の玉体を背に乗せる馬として、お運び申し上げ、次いで、後始末も、お命じになり「今日は紙なんか使わないわよ」と、舌奉仕まで命じられるとしたら、私としては、最高というほかはない。

(2)

我が貴重な文献誌奇クの「読者通信」こそ、興味深い頁の筆頭

である。時には、本文にもないような面白さがあつたりで、文献的価値も極めて高いのではないか。

ずっと以前は「切腹通信」「流腸通信」などと分類してあつたところがあつて、それにしても「切腹通信」とは、何とユーモラスなひびきだろうかと、何となく感心したものだつた。「読者通信」中、私にとり、一番シゲキ的で、印象に残っているもののうち、一つをあげてみよう。

——マゾ画にては豊富な肢体のグラマー女性、心身ともに劣れるマゾ男を、馬乗りにまたがって組み敷いているのも、アイデアとしてはヘビー級女子レスラー対フライ級男子レスラーの対戦にて両肩口の上に正馬乗り。太腿の間に首をはさみこんでのヘッドロック等ノミの夫婦げんか。ストリッパと道具方。有閑マダムと下男。巴御前と雑兵。海女と都会から疎開してきた色白な青年。グラマーウエイトレスと酔客。グラマー女アソビと鼻下長客。等々、何れも何れかのいきさつがあつて体力のすぐれた女性が、仰向けに押し倒した男の胸、又は肩口の上玉の上に馬乗りに跨がって痛めつけているもの、まだ外に多々ありますが

……。(奇ク一九六六年三月号「読者通信」M氏)

——(3)——

「では、これから私は、あなたの主人で、あなたは私の家来になるのよ。だから、これからは、あなたを『お前』と呼びすてにするわよ。お前は、私のことを、ご主人さまと呼ぶの。わかつて？」

「ハイ」

「じゃ、そう申しますって、私の足元に、ひれ伏して誓いなさい」

私が、ぐずぐずしていると、

「さ、何をぼやぼやしているの」と云つて私の襟首をつかんで引き倒し、私の頭を床の上にすりつけさせ、その上を、その美しい足をつつんだハイヒールで押えつけました。

「ハッ、ハイ、奥様、ご主人さまと申し上げます」——(奇ク一九六六年三月号、泉恵輔作「女社長様と私」より)

典型的なマゾ小説だが、谷崎潤一郎作品中のあるものや、真砂十郎氏の傑作「二百字讃歌」的、三者関係的、又逆転趣味が色濃く画かれていたのが、とても印象的という他なかった。その上、女王様のすばらしく力強い巨臂の下であえいでいる哀れな男という、マ

ソング的なステキなカットがあつて実にたのしかった。

——(4)——

キクに捧ぐ、私のアイデア集大成(編集部の皆様にV(佐々木ツトム)。(奇ク一九五七年七月号)

(一)、泥田の女斗地獄図絵

映画「苦い米」の中で、出稼ぎの女達が集団で水田の中で泥ンこになって、凄惨な格闘を演じているシーンがありました。以来、女の集団斗争シーンに、なみなみならぬ魅力を感じています。あれからヒントを得て、日本の女と白人の女の集団斗争を、頭にえがいてみました。画には、ならないでしょうか。

——というところで、実に克明に色々なシチュエーションが空想されているので、実は私はゲラゲラ笑いながら、何度も繰り返して、楽しく読んだものだ。こういう記事は全く奇クならでは、実に奔放にして自由なファンタジーではないだろうか。

その中から、二、三、抜粋してみよう。

(1)、体の大きな豚のように肥った白人の女が、よろよろ起き上がつて、日本の女の首を右腕で抱きこみ、泥の中に押し込めている。

泥の中に顔を突っ込んで息も絶え絶えの日本の娘は、お尻がむき出しになり、汗まみれの肌に日光が映えている。

(2)、ゴジラのような顔になって取っ組み合っている立業の二人は、次の場面では、やはり体の大きな白人の女が有利な体勢をしめ、相手を押し倒して組みついていて、くみしいた相手の肩にゴジラのような歯が、くいこんでいる。日本の女は、両手を空にひろげて苦痛の叫びをあげている。

(3)、白人の女の泥足を頭にのせられた日本の女は、それをはずして、両足にかじりついて持ち上げようとするが、逆にのりかえられて、今度は首を両足の間に、はさみつけられる。

——流石に奇クのこと「女対女」ものは、女斗美、女相撲ものの他に、西田仁氏の作品のようなものまであつて、うれしかったが、この佐々木ツトム氏のイメージは、白人女対日本人女という所にも異色があつた。

私は日本人女性のかわりに、マゾ男たる私をおきかえて(勿論、白人女が優位の所だけだが)いつでも亢奮を禁じ得ないのであつた。

〔夫婦 S M プ レ イ〕 ― 通 信 ―



『猿ぐつわ』と『縛り』の伴ったSEX責め

青 木 順

一

前略。

再々お便り差し上げ、恐縮でございます。
新緑の頃ともなれば、Sの感度も、ひとしお
昂まり、押え切れずに、ああでもない、こ
うでもないと思案しておりましたが、遂に意を
決して、ここに変わった形で投稿させて頂い
た次第です。

小生も年輩の故か、好みと致しましては、
平素は貞淑でプライドもあり、而も見識もあ
る——夫人といったような上品な女性が、抵
抗する方法を封じられて、無理矢理、SMプ
レイを強要されるといった趣向に、いたく興
味を持ちます。

初めは強く抵抗し拒絶していたものが、次
第に、そのSEX責めにより自分を失い、遂
には、みだらな姿態と行為を強いられ、或は

縛られたりしての羞恥責めを甘受する様になるといった構想が何より好きです。

そして自分自身も、その夢想する構想のもとに、平素から第三者を交えてのSEX責め羞恥責め等、さまざまの夫婦プレイを行なっています。

申し遅れましたが、小生は最近たてつけに、お便り致して居ります青木順一でございます。既に先便で、たびたび申し上げました様に、小生の好みとしましては猿ぐつわに始まり、猿ぐつわに終わる責めを第一とするSマニアでございます。

その猿ぐつわの好きなことは貴誌6月号通信欄にもございました「猿ぐつわのない責めは、クリープのないコーヒ―」どころではなく、全く味も匂いもない水の様に感ずる程にて、而もその猿ぐつわは、口中に詰め物のあるゴムぐつわを好むゴム責めマニアでもございます。

従ってゴムの猿ぐつわと共に色々のゴム衣をつけさせての羞恥責めを、好んで行なっています。

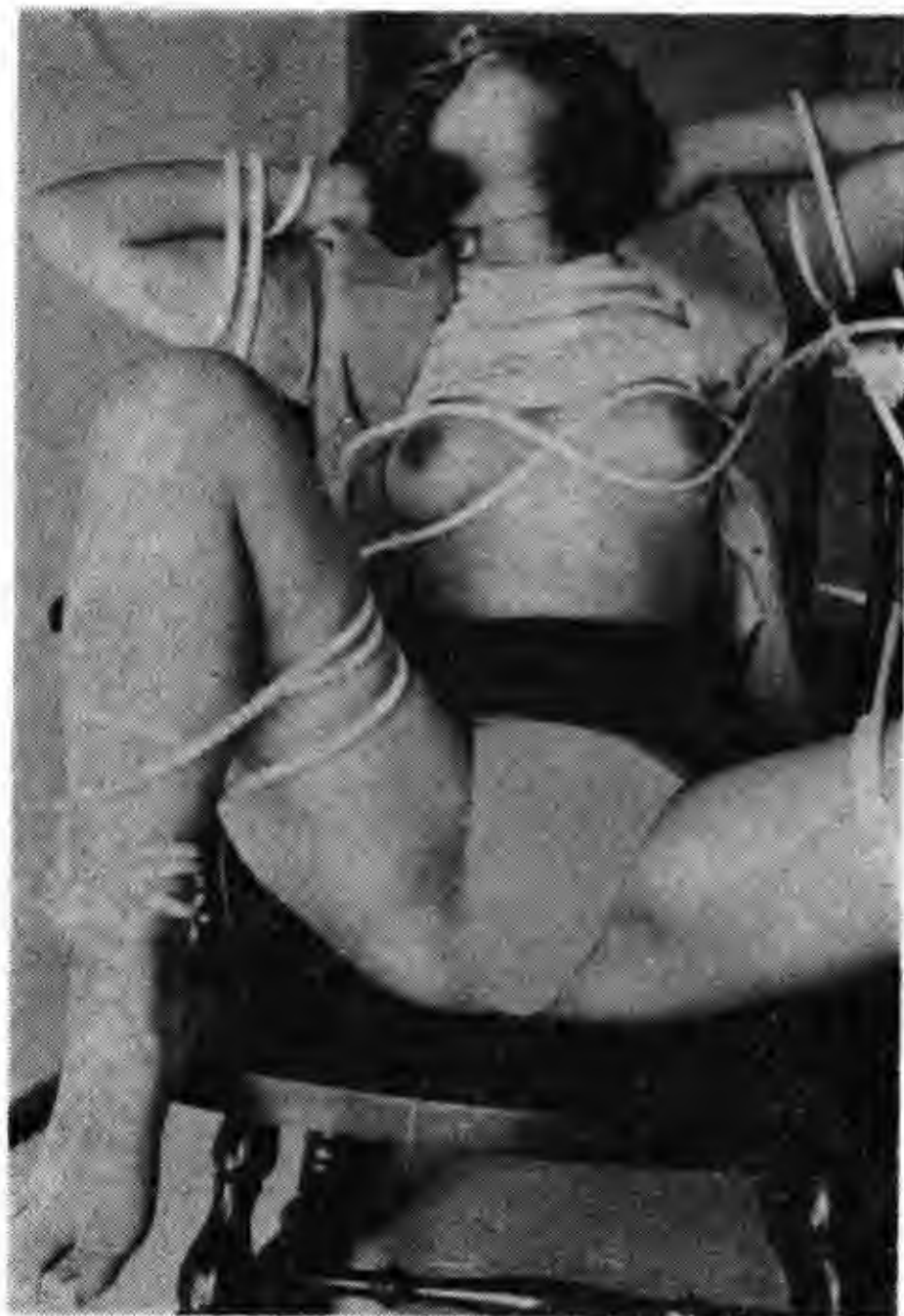
す。

と申しましても、小生自身は、どちらかといえば、ゴムが嫌いで、その自分の嫌いなゴムでもって、ゴムを厭がる相手をゴム責めにするのが大好きなのです。

横道にそれましたが、先に述べました様な構想のもとに、平素、信頼おける同僚に、ゴムの猿ぐつわを施した姿に縛り上げた家内をSEX責めにして貰って、妻のゴムぐつわか

ら洩れる悲鳴や呻き声を録音し、その姿態をフォトリに収めました。

此処に同封しましたものが、その最近の記録です。主として、その苦悶と悦楽の表情に重点を置いて撮影しましたため、余りにも素顔が露骨になるのを恐れて一部ぬりつぶした為、御参考資料に、なりかねるのではないかと思います。但し、誌上発表可能でしたら御使用下さい。



猿ぐつわマニアも多いでしょうが、此れ程本格的な猿ぐつわをされる方は少ないだろうと思っています。

口中には、マルゴ製の皮締具のついた大きな皮の玉（更にその上を小生好みにゴムチューブが被っている）がそれこそ口一杯につめ込まれてあり、更にその上から、鼻からの声を防ぐため、自転車のチューブで被ってあります。

成程、少し息苦しがりますがその感じが又、大いに刺激になるそうでした、一応種々のプレイの妨げにはなりません。もともとSEX責めの最中、オルガ近くなって苦しいと表現すればすぐ分かりますので、鼻だけ出すようにしておりますが、それが済めば又、自ら鼻を被うぐらいで、息苦しくて声が大きくならないということで、思い切った悲鳴を挙げられる事が、本人にとっては却って都合がよいようです。

小生が相手になって貰っている同僚のSEXの持続力の長い事は素晴しく延々一時間半から二時間に及びそのテクニックの巧みなことは抜群で、その間に家内は三乃至五度のアクメに達し、激しい時は完全に失神致す(約一分位)程です。その為、他の第三者、(過去に三人経験あり)介入の場合は、夫唱婦随で止むを得ず、しぶしぶ責めプレイに応じておりました家内も、この相手に対しては、小生と同じ職業であるという安心感も手伝って、その技巧の素



晴しさと相俟って、多少の抵抗だけで、小生の命に従って易々とSEX責めされるようになって居ります。

ところが、此処に私の一つの不満が生じて参りました。といいますのは、この相手の人物というのが、本来のSではなく(SSEX責めに関して)は全くSの資格はありますが(むしろSEXで相手を狂喜させ失神させる事に全力を尽すといったタイプであるからなので

す。言わばSEXの奉仕者とも言うべきでしょう。

縄を用いて色々な姿態を強制し、羞かしめるといふ事は、その姿勢がSEXの感度を昂めるのに邪魔になるからといって、初めは余り好みませんでした。(もっとも後には小生の要望で、多少は縛ったりもしましたが、余り気のりする様子ではなく、およそ縛りには縁遠いです)

家内は、小生の飼育よろしきを得て、縛りのある、SEX責めの方が好きであり、且、猿ぐつわがないと物足らないなどと申し、猿ぐつわをはめただけで、ぬれて参る程です。その他、羞恥度の強い責め程、感度は昂まる様です。

それから、此れはこの相手の時だけに限られた事ですが、小生の要求で、時にはこの相手の小水を無理矢理、飲まされる事がありま

すが、その時は、厭で厭で仕方がないのに、逆に興奮すると申しております。つまり、縛り要素が少ないと言う事と、次には同じ相手の繰返しでは、お互いに狎れるという事に依り、羞恥度が大いに減じて来ているという事です。

色々と、とりとめもなく書き、私が何を求めて居るか分からなくなりましたが、奇クの読者の中には、かかる「SMプレイ夫婦」を行なっている者もあるという事を御報告した次第です。

若し、この様な夫婦に対して、どなたか、「よし、それでは、俺が、その妻女を責めてやろう」と、言われる方がおられましたら、

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

是非、誌上にでも御一報を煩わしたく存じます。どなたでも、安心の出来る相手の方であれば、家内を提供して、とことんまで、猿ぐつわと縛りのあるSEX責めにして頂きたいものだと思っております。

理想としましては、何処の誰とも分からぬ行きずりの男性に、妻を縛って犯して頂けたらと空想しております。そんな事って、出来ないでしょうか。

例えば、誌上で打合せて、住所も名前もお互いに知らせないまま、或場所に落ち合い車で人里離れた山の中へ家内を連れて行って凌辱するのです。その場合は必ず、縛りと猿ぐつわを併用して下さい。家内はきっと、物凄く抵抗して、猿ぐつわをされた口で悲鳴を洩らすでしょうが、やがてSEX責めに入ったら、歓喜の呻き声を出して悶える事でしょう。

平素は至って貞淑な家内ですが、今までの長い間の訓練によって、そうなる様に仕込んでありますから、ご遠慮なさらずに、さんざん、色々な責め方で、いたぶった上で、思いっきりSEX責めに、かけてやって下さい。結局は、そうされるということの方が、家内も喜ぶのですから。

それから、野外では落着がなく、思う存分に出来ないと思われる方でしたら、家内を郊外のモーテルか、都会の安宿に連れ込んで下さっても構いません。

但し、安宿の場合は、家内が凄く抵抗して声を出す事も考えられますので、猿ぐつわと縛りとだけは、早く施して下さい。お願いします。

初めて見る男性に、宿の一室に連れこまれて縛り上げられた妻は、これから自分の素肌に加えられるであろう責めや、凌辱のことを察して、猿ぐつわの奥で泣き叫びながらも、その暴力を期待していることでしょう。

尚、同封しました写真は、いずれもSEX責めのクライマックスの状態でスナップしたものを、小生が適当にカットをしたものです。ご掲載の際は、更にご一考賜れば幸いです。何らかの参考資料にでもなればと思います。

つまらぬ事を永々と書きつらねましたが、よろしく御判読の程、お願い致します。

五月十五日

尾略

奇ク編集長殿

青木順一

連 載 ・ 奴 隷 妻 小 説

命 預 け ま す

＜ 拾の章 惜 別 の 歌 ＞

柴 利 好

39 永遠の別離

浩介は、彼等三人が、完全な精神的三角関係にある事を自覚した時から、この異常な関係が、いつまで続くものかを考え、いずれは解決をしなければならぬことを、とつおいつ思い患っていた。そうした矢先、彼は新吉から、春子の異常性の亢進や、健康上の相談を受けたのだったが、浩介は既にこの時、自分から進んで、解決のための重大決心を固めかけていた。

春子が久方振りに正常な妻の座に戻って、夫と枕を並べて就寝したその同じ夜、偶然にも浩介の見た夢の中に現われた春子は、盛んに浩介を、かき口説き、一緒に世帯を持ちたいと、せがむのであった。

「こりゃ、いかんぞ。間違いを起こしてしまつてからでは遅過ぎる」

目覚めてから浩介は、これ限り春子と別れてしまおうと固く心に決めた。そうする事が全てを円満に解決する最善の方法だと、信じたからである。

一方、新吉は今度の一件で春子が、門川医師の努力によって、かろうじて一命を取り止

めた事に心から感動した。仮に、あの時、博士が来診してくれなかったとしたら、恐らく春子は、三十才を一期として落命していたであらう、と思うのが当然過ぎる程、その時の春子の容態は最悪の状態であった。従って、彼等夫婦のSM生活に主治医の必要性を説き門川医師を紹介してくれた浩介に対して、新吉が卒直な感謝の念を抱いたのは至極もっともな事である。

その生理め事故の一部始終を手紙に認め、改めて謝意を表明した新吉の便りを浩介が読んだのは、それから三日ばかり経った後のことである。

それは浩介にとって勿論、思いも掛けない知らせであった。いくら別れる決心をしたとはいえ、事故の内容を知った以上、まさか、このままで放って置けない立場である。

「とにかく見舞にだけは行こう。そして、これを春子に会う最後としよう」

そう考えた彼は、眠れぬ一夜を悶々と過ごしたその翌日、彼等夫婦と秘かに別れを告げる決心で秋山家を訪れた。

通い慣れた道であった。見慣れた小川と並木道。そして、用水池の高い堤の風景が、そこに在った。しかし、これが見納めだと思う



と、連帯感が一時に胸に甦って、年に似合わず思わず感傷的にならざるを得ない純情な浩介なのであった。

折も折、新吉は、今後のSM生活と春子の健康管理方法などについての指示を仰ぐために、門川医院へ出向いていて、春子が独り、六畳の間で臥せていた。既に事故後、数日を経過してはいたが、出来るだけ安静に……という医師の指示に従っていたのである。

春子は浩介の姿を認めると、上体を起こして坐った。もう、いつもの裸ではなかった。

単衣物に腰紐、伊達締という、一般の主婦の寝所の姿であった。

「どうぞ、そのままに、寝ていて下さい。身体に障ると、いけませんから」遠慮からではなく、親身に春子を労わる浩介の言葉であった。

「いいんですの。もうボツボツ寝たり起きたりしていますもの」

ニッコリと美しい笑顔を見せて春子は改って正座した。

「このたびは、私のわがままから、ご心配お掛けして申し訳ございませんでした。良い先生を、ご紹介下さった、お蔭ですわ。あの時、もし先生が、い

らして下さらなかつたら、きっと私は、あのまま死んでしまっていたでしょう。貴方様のご恩は一生、忘れは致しません」

春子は、心からの、感謝をこめて頭を下げた。

「とんでもない。もう、済んでしまった事です。気になさらずに充分、養生して、早く元氣になって下さいよ」

浩介は大きく手を振って、丁寧におじぎする彼女を押し止めたのだが、春子の如何にも女らしい身のこなしに、なんともいえぬ、い

じらしさと美しさを感じて、思わず見惚れてしまう自分を意識して、何か話さなくてはとうろたえながら口を開いた。

「実は、こんなこと、今お話してよいかどうか分からないんですが……先達ての晩、奥さんの夢を見ましてねえ。……夢のことだから怒らないで下さいよ。その夢の中で貴女が、ぼくと一緒に他処かに行きたいといって聞かないんですよ。そのことが妙に気掛かりでした……」

「えッまあ！ そうでしたの。……驚きましたわねえ。……実は私も、それと同じ夢を見ておりましたもの」

二人して、お互いに相思うことは察しられていても、それを口にしたことのない男女が別々の場所に居ながら、同じ内容の夢を見ていた事実が、はしなくも確認された。これこそ、正しくテレパシーの神秘とでもいうべきだろう。

浩介と春子は互いに顔を見合わせて、今更のように二人の間に通い合う、神秘の系の不思議さに愕然としたのであった。

「主人は今、あいにく門川先生の処へ行っております。もう、おっつけ戻って参りましょうから、お待ち下さいませ。お目に掛かって

お礼申し上げたいでしょうから」

と春子が、気を取り直して話題を変えた。

「まあ、それはそれとして、これから先、奥さんは、どうなさる、おつもりですか。引き続いてプレイなさる、お考えですか？」

と、浩介が立ち入って尋ねると、

「はい。実は、そのことで先生に、ご相談に伺っているところなんです。先生が、なんとおっしゃるか分かりません。きっと、これを機会に止めるように、お諭しがあることでしょう。でも、私には私なりの生き方しか出来ません。私の本心を申しますと、これから先も、いつまでも奴隷妻、家畜妻として今まで同様に暮しとうございます。いいえ、止められても、止められても、必ず、そうなると思いますわ。それが、縛られるために生まれて来た私という女の、持って生まれた宿命だと諦めていますもの」

と臆せず答えると、春子は、それまで膝の上に揃えていた両手を、静かに後ろに回して腰の辺りで組み合わせて見せながら、寂し気な微笑を浩介に送った。

彼は、春子のこんななまでに、寂しい笑顔を見たのは初めてであった。長居は無用であった。これ以上、話し続けて、彼女の感情を刺

戟しては、回復期の健康に障る事も心配されたし、それよりも浩介自身が、春子の魅力に引き込まれてしまう危険性すら、あった。彼は咄嗟に、つまらない質問をしてしまった自分の軽率さと、愚かさを反省した。そして、この際は、やがて戻って来るであろう新吉を待たずに、彼女への未練心がつのらない内にこの家を辞するべきだと悟った。

「ちょっと所用もありますし、今日はこれで失礼します。どうぞ、お大事にね。ご主人によろしく。いずれまた、伺いますから……」

精一杯で自らの恋情を押さえて、そういい残すと浩介は、挨拶もそこそこに、逃げるようにして牧山家を出たのであった。この時、彼は、二度と再び、この家を訪れてはならないのだと、きっぱりした決心をしていた。しかし、これが永遠の別れだとは、春子に対して、はっきり言えなかったし、また、それは言っては、ならない言葉であるようにも思えた。

そんな彼の心の内を察してかどうか、春子は、浩介が辞去のために立ち上がった時も、両手を後ろ手に組み合わせたままの姿を崩さずに、じっと彼を見つめていた。それは、いつに変わらない可憐な、かんばせであったが

その円な両の瞳に、真珠のように光るものが輝いているのを、浩介は見逃がしはしなかった。そして、この別れの日の春子の美しい、かんばせを終生、忘れまいと心秘かに固く誓ったのであった。

その後、新吉からの手紙が、幾通か彼の手許に届けられて来た。しかし浩介は心を鬼にして、これらを総べて開封せずに返送手続きをとった。かたくなまでの、この拒絶態度こそが、彼等夫婦のために絶体、必要な事と信じたからである。そうすることが取りも直さず、春子をこれまでより以上に幸福にする所以であり、少なくとも二度と不幸を繰り返させない所以であると信じて疑わないのであった。そして更に、留守中に新吉らしい男が訪ねて来た事を知った浩介は、やがて思い切って転宅まで、してしまったのである。

しかし浩介は、彼の仲介によって、春子の一命を救って呉れた門川医師にだけは丁重な礼状を認めた。彼はその手紙の中で、彼がこの夫婦の生活に関与した役割を述べ、そして彼等の幸福を願って、今後一切、彼等から絶縁する旨の決意を披瀝した。そして、この浩介の決意は、牧山夫婦に、ぜひ内密にして欲しいと、くれぐれも付け加えたのであった。

40 往 時 茫 々

十一年の歳月が夢の間に過ぎた。浩介が春子を見染めて以来の一時期、彼の生活は乱れに乱れ勝ちであった。それがため、文章の方

面でも長いスランプが続いた。しかし春子との線をキツパリと断ち切り、元の文筆一筋の生活に精出したお蔭で、その努力が報いられて、このところ、ようやく苦境から脱出する事が出来たのであった。

とはいえ、浩介は春子を本当に忘れていた



イメージギャラリー

『敗者の休息』

志 羽 利 也

訳ではない。否、忘れようとしても、決して忘れられるものではなかった。実際に別れてみて、初めて今更のように思い知らされた彼女への思慕の情の深さであった。暑いにつけ寒いにつけ、照る日も、曇る日も、浩介は独り春子のことを、あれこれと思い続け、その幻影に悩み続けた、この十一年ではあった。既に五十路を超した浩介が、未だに定まった伴侶を求める気力もなく、昔ながらの独り身が続けているのは、ひとえに春子に対する純愛と、彼女と共に過ごした悦唐生活の楽しさが、彼の心の奥底に定着して離れなかったからなのである。

新吉夫婦のその後の消息は、元より杳として知れなかった。彼等と共に暮した思い出の家は、どうなっているだろうか。今でも彼等はその家に住んでいるのだろうか。晩春のある晴れた日の午後。不図、思い回らした浩介は、ついつて来る懐旧の情を抑え切れず、矢も盾も堪まらなくなった。それには別段、この期に及んで深い理由があつての事ではなかった。多分、折柄の爽やかな季節の風の、そよぎが、空虚な彼の魂の隙間に、感傷の甘い蜜を運び込んだからなのであろう。そして彼は常盤線の客となった。

十一年振りに見るK駅附近の景観は、当然の事ながら、驚くばかり変貌していた。嘗てチラホラしか見られなかった市街地の家並も立派に発展して、そこには大きなスーパーのビルさえも建っていた。浩介が好んだ小川は既に完全に埋め立てられ、その跡が可愛らしい小公園に変わっていた。桜並木だけが僅かに往時の面影を留めてはいたが、それも随分株数が減り、樹令のわりにその發育は香しくなかった。それでも季節の花は、今年も相違なく村々に咲き乱れ、最早、八重の盛りも過ぎて、葉桜になろうとしている。

用水池の堤を目標に、忘れられない面影を求めて、歩一步、懐かしい目的地へ近付いて行くに従って、浩介の心は波立ち始める。彼等牧山夫婦が、元の俣住んでいて欲しいと思う未練心と、既に何処かに転居しているだろう、寧ろそうであってもらいたいという諦観とが複雑に入り交った気持ちであった。しかしこうした錯綜した心の昂ぶりも、彼がその家近く迄辿り着いた時、はかなくも醒めざるを得なかった。というのは、折柄辿る恋路の前面一杯に、新設された高速道路が、高く長く彼の行手を遮っていた。そして新吉夫婦の住居の辺りと覚しい地点は、既に、その逞しい

橋脚の足下に踏み付けられていたのである。浩介は何故かホッとした思いで、それでも足速に、その辺りの地点まで行ってみた。しかし、長い年月、彼の思い出の中に生き続けて来た物は何一つ見当たらず、その悵さえ忍ぶよすがもないのであった。

陽は未だ高かったので、浩介はこの場から引き返して同じ沿線に住む門川博士に電話してみた。折りよく在宅していた博士は懐かしがって、すぐに来るようにと云ってくれた。

十一年前には貧弱な平屋だった門川医院は今では立派な、奥行のある二階建に改築され石塀のたたずまいからも、その繁昌振りが窺えた。既に初老に踏み入った白髪混じりの浩介と、今や働き盛りで立派に貫録さえ付いた門川博士とでは、妙な取り合わせという感じもあった。けれども二人はお互いの健康を喜び合い、懐旧談に花が咲いた。話は自然に、新吉夫婦のことに移って行った。

博士の話によると、あの事故があつて暫くして彼等の家が高速道路工事のため、取り払いになった事。転宅を強いられた彼等は、半年程、駅付近に間借り暮らしをした後、矢張り同じ沿線のTに移って行った事。それから以後は住所が定まらず転々として暮しているら

しいということであつたが、年に少なくとも二回か三回かは必ず便りをしてくるという。

これは、それ程二人がこの博士の恩誼に感じている証拠だった。と同時に、二人の人の良さも窺われて、浩介は心温まる思いであつたが、彼等の便りは、いつも「〇〇にて」とか「×××の宿より」と記されていて、定まった連絡場所は博士にも掴めないという。

このように発信場所が転々としているのは訳があつたのだ。彼等夫婦は、嘗てのS・M生活の貴重な体験に基づいて、春子のM性を生かしたショーを売りものに、各地を巡業して回っていたからなのである。

博士は言葉を次いで、

「あの奥さんは、もう、かれこれ四十に手が届いてるんじゃないでしょうか。しかし、あれだけ鍛えこんだ体だから、今でもきつと、まだまだ肉体的には若さを失つてはおられないと思いますよ」

と、感無量の面持ちであつた。浩介は頭をかきながら、

「それにしても、ご主人が漫画で、あれだけやって行けるまでになつていたんだから、何もそれをやめてまでも、旅回りの役者にならなくても、よさそうなものですのにねえ。牧

山さんの絵は、私もよく見せて貰いましたがとても素人上がりとは思えない腕前だし、作品のテーマを見てみると、その折々のプレイの仕方や奥さんのM性向の進み具合が、手に取るように分かる程でした。結局、あの一件で、極端なS・M生活を中止したことが、牧山さんの作品の素材とかアイディアにまで、影響したと解する事も出来るかも知れませんねえ」

と、思い付きの感想を述べると、医師もそれに同調して

「成る程。確かに、そういうこともいえましようねえ。結局、あの家が壊されて、S・M生活の根拠がなくなってしまったことが、お二人の暮らしを変えた根本原因だと私は思います。それに雀百迄踊り忘れずで、牧山さん達にとっては、なんとしても悦虐嗜好は棄て切れなかったんでしょう」

「全くその通りです。奥さんが、私は縛られる為に生まれて来た女だ、と云っていられた事を覚えていますが、それ位、縛られて虐められる事が、あの人の生活の中にしみ込んでいるんですよ」

と浩介も、昔を懐かしむ様子で応じる。

「そうでしたか。それで良く分かりました。」

これは噂で聞いただけで、私が実際にその舞台を見た訳じゃないんですが、お二人のショーは、縛ったり、縛られたりの残酷ショーだそうで、小道具に小さな檻を使うことも評判の一つになっているんだそうですよ」

医師は更に続けて

「あの時の調子で、プレイがエスカレートして行ったとしたら、幾ら奥さんが不死身の身体だといっても、とても続けられないと思います。そういう意味からいえば、そうした定型的ショー舞台の上に、お互いの幸せを見出したらしい現在のお二人の行き方の方が、反って奥さんの身体の良い結果をもたらしているのじゃないでしょうか。これも、いろいろと思案の揚句に到達された切実な生活の知恵だと思えます。今頃は確か、北陸一帯の小都市や温泉地を回っている筈ですよ。先月届いた便りに、そう書いてあった覚えがあります」

と、これまた懐かし気に話してから、医師は俄に態度を変えると

「そうそう。小道具といえば、大切な事を忘れるところでした」

と大仰な身振りで奥に引込んで、さも大事そうに持って来たのが、一つの紙包みであっ

た。

「実は、この品は貴方にお渡しするようにとあの奥さんから頼まれて、お預かりしていた物なんです。お二人は、私を引き合わされた貴方に、心底から感謝しておられました。その貴方が突然に姿を隠されたのですから、随分と探し廻られた様子でした。それで、いよいよ、あの土地を離れる時に、奥さんから、貴方と連絡がとれた時に、お渡しするようにと頼まれていた記念品なんです、何だと思えますか？」

包を開ける手を一寸、止めて、悪戯っぽく問い掛けた医師に、まるで子供のように、やきもきしながら浩介は答えた。

「さて……？ 皆目、見当も付きませんが、この私に記念品とは、本当にあの夫婦は義理堅い方達ですねえ」

実はこの時、これに引き続いて、彼が身を引かざるを得なかった事情を、正直に話そうかと思案したのだったが、浩介は遂に口には出さずに終わった。

やおら医師が取り出して見せた物は、なんと、見覚えのある春子の「胴鎖」なのであった。

「おお……これは」

その意外さに、年甲斐もなく胸詰まらせた浩介に、医師は、さり気なく言った。

「奥さんは、これと同じ様な物を他にも持っていたららしいんですよ。でも、よくもまあ、こんな小さなバンドを長い間、胴に嵌めて平気でいられたもんですね。はい、此処に鍵もあります。確かに、お渡ししますよ。やれやれ、これで漸く、十年ぶりの約束を果たせてホッとしました」

その言葉を上の空で聞き乍ら浩介は、差し出された胴鎖を、思わず震える手付で受け取ると、顔を近寄せて、つくづくと眺めた。

あれ程、何回も新吉宅に通い、春子に接していたにも拘らず、彼の前で一度も外された事のないその胴鎖は、いつも春子の細腰の肌深く埋もれていて、彼にはその実体の詳細を知る機会が全くなかったのであった。それが今初めて自分の物として、春子が残して呉れた唯一の思い出の品として、わが手にしっかりと持てることになったのである。浩介は、感謝の余り、息詰まる思いであった。

その鎖は長さが僅か四十センチ位しかなかった。鎖の構造は丁度、時計のバンドの様で一センチ巾の鎖の両縁が外側に緩く曲線を描いて反り返っていた。そしてその両端は、電

気器具の差し込みと同じような陰陽になっていて、鎖を丸めて、片方の二つの環に、他方の二本の小さな突起部分を噛み合わせると、簡単に「カチリ」と錠が掛かった。

「長い間お預り頂いて、有り難うございました。私にとっては何よりの物です。欲をいうと、この胴鎖を嵌めた美しい奥さんを見られないのが残念です。殊に、これを外した時の腰付がどんな風だったか、一度でも見て置き度いものでした」

と浩介が残念がるのを、医師は引き取って「そうでしたか。貴方はご覧にならなかったんですか。あの事故の後で、私が診察した時は外してありましたよ。その時の細腰の形と色は、全く酷いものでしたねえ。私は貴方とは反対に、胴鎖を嵌めている奥さんを見ていないんです。そういえば私にだって、残念に思う事がないでもありません。あの酷たらしい程の腰付を、写真に撮して置けば良かったと思います。殊に締め付けられた極限の状態それは外観だけではなく、レントゲン写真で内臓諸器官の圧迫や転位の状況なども欲しかったですねえ。あれほどの生体変形は、あの人以外には絶対に見られることはないでしょうから。惜しい事をしました」

と、やはり感に堪えない様子。浩介は、彼が春子との別れに際して彼女にせがめば、胴鎖を外した彼女の腰付の有り様を仔細に觀賞出来たであろうものをと、口惜しかったが、それも果敢ない繰り言であった。

こうして、医師から渡された胴鎖を手に、蒼惶として門川医院を辞した浩介は、再び春子に寄せる憐情の膚になっていた。

既に日は暮れようとしていたが、浩介は記念品の包みをしっかりと抱くようにして、またしてもK駅で降り、元の彼女達の愛の巢への路を辿っていた。行ってみたところで、詮ない事はよく分かっていた。が、当時のあの短かったけれども愉しかった、彼女との悦虐の日々の思い出が、彼の心に切なく甦って浩介は、すっかり感傷的になっていたのである。これも全ては、本当の恋の仕業なのであろう。

あの家の間取りは、隅々迄ありありと思いつける。幾つかの牢屋の責柱、風呂場の礎柱あ的小屋、そして三段平行棒……。今は全ての物が跡形もなくなっている其処に、彼の思い出の中だけに残っているそれらの責め具が一つ一つ再現しては消えてゆくのであった。薄墨色に暮れなずむその地表に、ひっそりと

佇む浩介の足許を夕風がソヨソヨと無心に吹き去って行くのであった。

駅前に引き返した浩介は、それでも尚この土地と、春子に対する情愛の絆に引かれて、直ぐには立ち帰る気にはなれなかった。不図

思い出した酒店。それは春子が、縄付姿の俤連れて行かれたあの酒店に寄ってみようと思いついた。幸い、その店は直ぐ分かった。未だに昔の俤、取り残されたように建っていたこの店は、いわば春子の思い出を宿す唯一つ



イメージギャラリー 『只今悦虐中』 マエダヒオミ

の家で、暖簾こそ出してはいたが、未だ時間が早いせいか他に客は無く、見覚えのある老夫婦が、口を揃えて彼を迎えた。

酔いが回ってくるにつれ、張り詰めていた情緒の糸が次第にはぐれて、堪まらない遺る瀬なさが、彼の胸を締めつけ始めた。その寂しさ。それは恋しい春子と永遠に別れようと誓った五十男の心に甦る、彼女への果無い思慕の情なのであった。

浩介は、春子が愛していた胴鎖を固く胸に抱き締めて、堪まらなくなつてカウンターの上に顔を伏せた。折柄、その彼の耳を、隣の店から流れてきた演歌が捉えた。多分、有線放送なのであろう。

若い女性歌手によって歌われる、その暗く寂しいメロディは、まるで春子の身の上を、その俤、歌い上げてでもいるかのように浩介には思え、しみじみと聞き乍ら、またしても彼女への切ない慕情を掻き立てられた浩介は不覚にも涙を流していたのであった。

命預けます 流れ流れて東京は

夜の新宿 花園で

やっと開いた 花一つ

こんな女で よかったら

命 預けます

(完)

ある男の灰色の青春

悪

の

弁

証

法

高 たか

原 はら

透 とおる

いったい、人間は、種々の欲望を持っているが、その中でも最も強烈なものは一体、何であろうか。

名誉欲とか色欲、等様々であるが、以下に述べるのは人を殺してみたいという欲求に駆られた男の話である。

殺人には止むを得ない事情から引き起こされる場合が殆どであるが、ここに述べる男―谷村龍一は色欲が変形して殺人欲に移行していったように思われる。

欲望のエネルギーは実に甚大なものであって、これを上手に制御しつつ生かせば、これほど便利なものはないのであるが、逆にこれ

を、ただ単に抑えつけようとする、その欲望が変貌を開始して、非常に奇怪な形をなすことがある。

色欲は正常に満たされていれば、特に犯罪と結びつくことはないが、過度に抑圧を加えられると普通の人間には想像を絶するような性犯罪に移行することがある。

☆

谷村龍一は東京へ中学卒業と同時に九州から集団就職した一人である。豊島区の自動車部品をつくっている町工場に務めていた。

龍一はとりたてて云うほどの才覚はなかったが、働きは真面目で決して人に迷惑をかけ

るようなことはなかった。とにかく十八歳になる頃までは良く働き、給料は少なすぎるということはなく、普通の工員としては恵まれていた方であった。しかし工場の仕事は実に単調で、しかも男ばかりの職場であり、異性というものに非常に縁の薄いという環境は、龍一を欲求不満にさせた。

☆

龍一が初めて犯罪をおかしたのは十八歳の誕生日が過ぎて間もなくのことである。

同じ工場に親分肌の二つ年上の男がいて、よく遊び歩くので評判がよくなかったが、それが日曜日にレンタカーでドライブに誘ってくれた。

その男は健二というのであるが、龍一は彼とは割りと相性が良いせいか、気持よく付合える男であった。二人で余り金のかからないサニ―の古い型のを借りた。龍一は単なるドライブであると思って疑わなかったが、健二は、

「今日は、ちょっと面白いものを見にいこうぜ。多摩川の方へな」

ニヤリと笑いながら云った。龍一は一瞬、

きよとんとしたが、何も、聞きかえさなかった。

三月とはいえ、未だ肌寒く感じられる日で龍一は、さほど気分が乗らないドライブではあったが、それでも工場で仕事をしている時と比較すれば文句なしに爽かであった。

「お前、女を知ってるか」

健二が突然、口を切った。龍一は健二の前にいると自然に自尊心も虚栄心もなくなってしまう、正直に知らない、と答える

「今日、知らせてやるよ」

大人っぽい口調で健二が云った。

☆

夕方になると多摩川べりに車でやって来る男女が増えてくる。健二が云うには、ここに来たカップルの男を縛りあげて、女を弄ぼうという計画だった。

若い男女というものは、たいてい人気のない所を選んで車を止めるので、こういった犯罪には好都合である。

健二は車であちらこちらを物色して適当なかもを捜してまわった。健二はボクサーにもなるうとした男であったから腕力には自信が

あり、そこいらの脆弱な青年などは問題にならない。新しいコロナに目をつけると健二はそのやや遠くに車を置いた。

「俺がうまくやるから、お前は、ただ一緒にいるだけでいいんだ」

健二は云って、コロナに近づいた。健二がドアの所で中の男に一寸、出て来いと手で合図すると、その若い男は怯えたような感じだった。

隣の女も今まで近くによりそっていたのを急に身を固くして真直に坐りなおした。髪の長い可愛い女であった。

健二はその男が不承々々ドアを開けて降りかけた時、おもいきり、そのドアを押し返して、男の手と足を、はさんだ。

男はぎゃつ、と云ったが、その声は車の中に封じこめられた。そしてもう一度ドアを開けて、まだもや力一杯、はさみこんだ。

男は痛みのために顔を醜くゆがめていたが、それを今度は引きずり出して首のうしろを空手のような型で殴った。男は気絶したようであった。

女は、今いったい何が起きているのかを

瞬時には悟りきれないで、恐怖の眼を見開いていた。声も出ないようだった。

健二は龍一に、その倒れている男を縛るように言いつけると、女に向かって

「静かにしていれば、別に非道いことはしないよ」

常套文句を云った。

☆

龍一は、その時、始めて女を知ったのだ。

あの時、健二は女を草むらに連れ込んで犯した。龍一は少し離れて見ていると、事を終えた健二が「今度はお前やれよ」と云った。

女は猿ぐつわをはめられ、手は背中で縛られていた。下半身は素裸で月光にさらされていた。

それを見ただけで龍一は、腹の下の方が極度に緊張し、脚も、わななくようであった。

健二が、うしろから、ぽんと肩をたたいて

「俺は見えないから、思い切りやれよ」

と云った。龍一は覚悟をきめて女に、むしやぶりついていった。女は気絶しているのか意識があるのか、解らなかった。

一度目は一分と、もたなかった。二度目は





もう少し長かった。二度目を終えると、その女を俯伏せにして尻を撫でた。

龍一は、ずっと前から女の肛門に石を詰め込む状況を想像しては自慰を行なってきたがそれを今、実現できるのだと思うと、興奮のあまり心臓が、ちぎれそうであった。

小石を近くから集めてきて押し込もうと思ったが、指先が震えて、うまくいかない。とにかく落ちつかなくて、と大きく深呼吸をして、もう一度、試みようとした。その時、

龍一は、またもや、強い衝動を感じて、頭がクラクラとなった。気がつくとは射精していた。そこへ健二がやってきて、

「その女を、そのままにしておいて、早く逃げようぜ」

と云ったので、龍一は、すばやく身づくろいをした。

帰りの車は、お互いに興奮がさめ切っていないせいか、黙りこくっていた。しかし街中に入ってから気が多くなってくると、やや気分がほっとして、健二は龍一に「今日は一緒に来てよかっただろう」と云ったりした。二人は別の下宿なので、先に龍一のところに行く

と、健二は、

「また、あした会おうぜ」

と云って去っていった。部屋で龍一は一人になると、敷きっぱなしの蒲団に横になって目を閉じた。手で顔をこしごしすると、指先から女の排泄物の匂いがした。そして、その指の匂いをかぎながら、もう一方の手で自慰をした。

☆

龍一は、その事件以後、徐々に内面の精神状態が変質してくるのを感じた。

龍一がもし普通に性交渉を持ったとすれば彼の欲望は正常なものとして固定され、決して異常なものへの嗜好は目覚めることはなかったであろう。

強姦という形で初体験をしたというだけでも、特異であるのに、その上に肛門にいたずらをしたということは、龍一の潜在的な異常——作者は異常という言葉を使用するのは単に通俗的、便宜上のものであり、真の意味では決して異常というのではなく、単に正常の一変形形態というべきものである——を表面化させ、妥当化させることにもなった。

肛門への執着はホモを連想させるおそれがあるが、龍一の場合はそうではない。フロイトが幼児期における性感帯は肛門にあるとしているが、龍一の場合も、おそらく、これに近いものである。

彼の性意識は、女性の前門に於けるよりも後門に於いて発達してきた。また肛門に物を挿入する趣味は、一種ネクロフィリーに通ずるところもあるらしい。

とにかく龍一は、この事件の前までは、内面は普通の青年と大きな差がなかったと考えられるが、いったん異常な形で性欲が処理されたとなると、これは、少し問題になってくる。

いくら異常で奇怪で残酷なことでも、頭の中だけの想像であるならば、文句なしに正常といわれる。しかし、その普通の意味からかけ離れた欲望が現実化、行動化されたとなると、純粋にその行動のみによってしか、欲望を満たすことができなくなる。

さて少し話題をかえてサディストとマゾヒストについて考えてみよう。両者は共に一般社会の観念からすると、異常と考えられてい

る。また実際マゾ行為はともかく、サド行為は刑法に抵触するに違いない。

『奇譚クラブ』の内容も、同好者たちの限られた枠の中でしか、それらの行為は許されていない。すなわち仲間同志の行為はプレイとよばれる。『奇譚クラブ』の読者たちの多くは、プレイを求めている健全な御仁であるがこれには、少し不満を筆者は感じているのである。

その中で書かれていることの多くは、事実無根の小説とか、夫婦間のままとプレイで占められている。『奇譚クラブ』に掲載される小説は大部分が現実感の稀薄なもので、これはまさにプレイ——遊びに過ぎない。

『奇譚クラブ』は真のサディストやマゾヒストを扱っていない。皆似非サディストであり似非マゾヒストである。『奇譚クラブ』の読者は異常の美名に酔っているのである。しかし、いったい真のサディストの悩みは、いかにばかりであろうか。真のサディストが真の行動にうつるとしたら、当然、犯罪になりうるのである。

その真の行動にうつせない屈辱的妥協が、

『奇譚クラブ』を形成しているものであり、通俗的で健全な一般大衆と何ら、その知性に於いて異なる所がない。筆者が云いたいことは読者諸兄が、ものの真実を見極めようとする気持があるならば『奇譚クラブ』は、もっともっと充実するであろうということである。

☆

龍一は当然のことながら第二の犯罪をおかすことになった。第一の犯罪は偶然のきっかけから実行されたものであったが、今度のは極めて綿密な計画を立てることになった。

犯罪という甘美な毒を一たび飲むと、その味を決して忘れることができずに、益々濃い味を求めて止まなくなってしまう。

龍一とても以前は警察を避ける必要のない善良な一市民であったのであるが、一たび悪のとりこになってしまうと本能的に警察を毛嫌いするようになるのである。しかし一面、犯罪は人を賢くするとも云われ、龍一は事件後、ずっと思索的になったかも知れない。

龍一は、いざというときに必要な体力、腕力をつくるために空手を習いに行くようになった。行動にとって必要条件是知力と体力で

あるが、龍一は犯罪を計画することによってしたたか賢くなり、空手によって、体力を拵えたのである。

とにかく、一つの悪事を働くのに備えて、半年も空手道場に通ったということは、おおいに見直されるべきことである。単なる、でき心からの犯罪は、犯罪の中で最も愚劣なものである。

悪事は、単なる電波が、複雑な配線の迷路をたどり、ブラウン管を通した後に、美を具現させると同じように、頭の中で練られた觀念が、肉体の行動を通して比類なき美を完成させるのである。

龍一は東横線沿線にある空手道場を初めて見にいった帰路に、電車に乗り合わせた長い髪の美しい女性に非常に強くひかれた。

普通の男性ならば、電車の中とか往来で見た女性などは、すぐに忘れてしまうであろうが、龍一は、すでに精神が変質を来たし始めていたので、そういった女性を犯すということを前提にして、さまざまな空想をするようになっていた。

——(この項終り)——





〔テレコで取材したマダム芙美代の告白〕

S
M

秘密クラブ

潜入記

福井桃子

皆さん、ご無沙汰しました。

気候がポカポカとよくなってきましたので私のからだも、なんだかホテッテしまつて、陽気に浮かれたように、じっとしておれなくなっていました。

それで、こうして、またまたテープレコーダーを持って来て頂いたってわけなんですけど、いつも変わった話はないかって私の顔を見たら、言われるでしょ。だから、今日は、とってお

きの変わった話を準備していますの。

そりゃネー私も、こんなお客商売、してるんですから、いろんな人とお酒飲んだり、お喋りしたりするんですけど、この前、言ったように、そんなに変わった人っていいいですわよ。ええ、私の方からもネ、そりゃ、話をその方に向けることは、よくありますよ。私しゃ、SもMも大好きなんですからね。

でも、関心のない人って仕方ないんですね。まあ、普通のエロ話やエッチな話なんかが多いですわね。ええ、そうなんですよ、それが一番、無難ですからね。

それはそうと、私の紹介してあげたキヨは好評なようで結構でしたわね。そう、まあ、元気にしてるわ。お化粧するようになってから、きれいになったわ。女は、やはり年頃にならなきゃダメね。最初は私がツケマツ毛を買ってきて、つけてやってただけど、この頃じゃ「姉さん、このぐらいじゃ、どうでしょうか？」って、長いのを鋏で切り揃えたりしてるのよ。

そりゃ、きれいになったから、それに、色気も出てきたのね。でも、最後に受けた浣腸には、こたえたようよ。恥かしかった、恥かしかったって、いつも言ってるもの。

縛りでも、浣腸でも、いわれたら、素直にやる子よ。キヨっていうのは、そんな子よ。次にはネ、吊りなんか、どうなの。本人は、五月には、お約束してあるって、楽しみに待ってる様子だったわ。

折角、マゾがかってきたんだから、一思いに、吊りをしてしまいなさいナ。なんだったら、私が手伝いに行ってもいいけど、私だったら、キヨが恥かしがって嫌がるかもね。女の子を責める手助けは、やっぱし、男の人がいいかもしれないわね。

あら、私自身のことを話せてですか。私

は、この通りピンピンしてて、ますます脂ぎった感じなの。ホラ、太ももなんか、こんなに肉がついてきたでしょ。

そりゃ、太平洋の荒浪と潮風できたえたんですもの、色こそ小麦色にやけてるけど、まだまだ、肌は艶があって、こんなに肢も、頭の上まで、あがるんですよ。何回も、こんな格好で縛られましたわね。背中やお尻、それ

に、内股まで、ミミズばれが出来るまで、ベルトで叩かれたことあったけど、あんなときのこと忘れられないだなんて、私も、ねっからのSM好きなのね。

身体がね、バラバラになるくらい、責められてみたいって、思うときが、時々あるの。こんなに陽気が良くなってくると、特に、そうなのよ。なんでもかんでも、刺戟がほし





いって、いう年頃なのね、私は。

そうね、素っ裸で縛られてところがされ、ムチで叩いて叩いて、叩きのめされたら、どんな気持がするだろうね。身体中、ムチあとだらけになって、泣き叫びながら床の上をころげまわるなんて素敵でしょうね、キット。

西条紀代になんか、そんなこと、まだ無理でしょうけど、私にだったら、面白いプレイが出来るんじゃない？。顔とか、着物の外へ出るとこは、困るけど、背中とか、お尻とかかくれてしまうところは、かまわないわ。思い

きり、ぶちのめしたって。

一度ね、半死半生のメに、合わせてほしいと思ってるの。それには、やはりムチで打たれるのが、一番いいと思ってるんだけど、他に、いい責め方があるかしら？

お腹の中へ、お湯をドンドン浣腸されるなんて、あれは苦しいばかりじゃない？。されてる気持って、私にも、よくわかるけど、やはり私は、物凄くきつく縛られたり、そう、身体を、こう形が変わってしまいうくらいに縛るのね。痛くされるのが好きみたい。

ロープを水に浸してぶたれるのも痛いわ。お尻とか、太股だったら、どんなに血がにじむ程ぶつてもいいのよ。私、皮膚は丈夫だから、破けはしないわ。血がにじむだけ。

そのぶたれたあとを、自分の指で押えるのが好きなのよ。ジーンと、鈍い痛みが、とても、たまらないわ。そうね、ムチで叩いてるところなんて、なかなか、写真にはならないわね。プレイとしては、面白いんだけど。

そうそう、その変わった話ってのを今日はお喋りするんでしたわね。

ぼつぼつ、おビールのおいしい季節になってきましたけど、お一つ、いかが。私も、ぐっと一杯あけさせてもらって、舌のまわりがよくなったところで、お話ししましょうか。

さあさあ、どうぞ。ろくなオツマミもありませんけど、おビールだけは、うんと冷えておりますから、ドンドンと、おあけ下さいましな。私も、おしょう伴しますから。

いえいえ、酔ったりなんか致しませんよ。おトイレへ行って、一度、シャーっと、してきますと、あとは、いくらでも、お相手致しますわ。ええ、私はね、おビールを飲むと、それはそれは、トイレが近くなって、どこにこんな水分があったのかと思うくらい、出

てしまうんですのよ。

アア、ほんとかしら？ そうしたら、私がおビールに酔わないのは、アルコール分がオシッコと一緒に、みんな出てしまうのかしらね。でも、考えてみれば、勿体ない話だわ。

さあさあ、もう一杯——。

ええと、なんでしたっけ？ ああ、そうそう。この話、場所だけは秘密にしないと下さいますね。他のことは正直に話しますけど、やはり迷惑がかかっては、いけませんから。場所は、或鉄道の沿線の大きな街って、いうことにしておいて下さいましね。

あんた、深夜の街の屋根って、見たことありますか。私のところ、少し高台になっていて寝静まった街の屋根瓦が、ずうーと、並んで見えるんです。そう、十二時か一時か、そんな頃、私、毎晩のように通るんですよ。

屋根瓦って、真黒でしょ。都会の深夜の屋根瓦なんて、ちょっと、うす気味悪いですわね。この屋根の下で、今、何が行なわれているかって、思ったら、不思議な気持ちね。

ああ、まぜかえさないで。そうね、今、丁度、何組の男女が——って、考えたら、不思議だわ。愛し合ってるでしょうね。きっと沢山の男女が。夫婦か、愛人同士か？ そり

や、いろんなカップルがあるでしょうね。

私が今、この石段を一步一步、登っているこの時にも、オルガに達している人がいるのだなんて思うと、変な気持ちになるわね。あらあら、そんな、望遠鏡だなんて、私には、そんな趣味はございませんわ。

そういえば、夏の夜なんか、暑いので、窓を開け放したままで……という家も多いらしいですわね。小高い所から双眼鏡なんかで覗いたら、面白いように見えるって、本当でしょうか。話には、よく聞きますけど。

そんな中には、いや、こんな広い何十万と人が住んでいる都会の屋根の下には、きっとSMプレイに耽っている二人も、いることでしょうね。二人だけの組ばかりじゃなしに、三人、四人。それに男女のカップルばかりじゃなしに、男同士、女同士という変わり種もいるかと思うと、ヘンな気持ちになりますわ。でも、そんな感傷的な気持ちで、都会の屋根を眺めてるんじゃないんです。都会には、もっともっと、強く人をひきつける享乐的で頹廢的な面があるものなのよ。





そうね。それが、都会の魅力の一つかもしれないわ。健康的なものばかりで、人間が生活を満足できるんだったら、それはそれで、いいんだけど、人間の生活のなかには、そんな^{ただ}爛れたような面もあるわけね。

駅前で、タクシーに乗って、運転手さんにどこか面白いところはないか、って、男の人はよく聞くそうね。そうなの、私の、これからお話するのは、そんなとこね。それも、普通とは一風変わったSMクラブなのよ。

と言ったら、大変大げさなんだけど、種をあかせば、食いつめた夫婦者の一芝居っていうわけなの。どうせ正式の夫婦じゃなし、内縁関係っていうことらしいから、そこは、すぐに相談がきまって早速、開店ってわけね。

男がポン引き兼責め役で、女がいじめられ役ってことで、役者は揃っているのよ。

私が何故、そんなことを知ってるかって？それは、前にもお話したことあるでしょ。

商売繁昌で、その女一人じゃ、どうにも、

手が回りかねて、私にも出演しないかって、口がかかってきたのよ。勿論、断わったけど見物客の中には、女にいじめて貰いたいって希望者も結構、現われて、そんな責め役の女も必要になってきたらしいわ。

だから、私に、その責め役をやらないかってわけよ。私のSM好きを知ってるのね。

場所と言ったら、その男の家賃をためた安アパートの一室なんだよ。たった一部屋しかないから、カーテンで仕切っただけで、見物人も出演者も、いっしょくたといった有様なんだけど、楽屋裏まるだしが、また面白いって人気があるらしいの。

なかに、常連になって通いつめて、「今夜は、もっと変わった責め方をやれっ」なんて注文する熱心な客もあるらしいのよ。

私が聞いた話は、そこまですなんよ。その男のアパートへは、二度ほど行ったことはあるけど、それは昼間のこと。見学がてら、見においで、見においで、って言ってたけど、うっかり見に行くと、人手不足だから、手伝ってくれなんて言われたら、オッチョコチョイの私のことだから、よし来た………という具合に、やりかねないものね。

それがね、やはりアパートというのは、は

たがうるさいでしょう。それに、なんといつても狭くて幾人ものお客が入れないし、とうとう、そこを引き払って、引っ越しちゃったんですよ。なんでも、ビルの地下にあるスナックの隣だとか言っていましたけど、彼ら夫婦が、そんなところに移るなんて、少しは儲けたナなんて、思っていましたの。

風の便りじゃ、仲間のポン引きも増やし、女の子も入れたって、話でしたわ。

話の途中だけど、ちょっと、トイレへ行かせて下さいましね。冷えたビールを頂くと、どうも、近くなっていけませんわ。

ご免遊ばせ。失礼しました。

あら、また注いで下さいますの。こんなに頂いたら、またすぐトイレへ通わなきゃなりませんわ。さて、どこまで、お話ししましたっけ。とにかく、SMブームも、ここまできたのかって、感じが致しますわね。以前でしたらね、お座敷ショーとか、実演とかいったらシロクロが殆どでしたものね。それが此の頃では、そんな秘密ショーでも、SMショーがかかってるんですから変わりましたわ。

先日、道歩いてたら電柱に、外人レス来たるって大きく書いた紙が貼ってあるのよ。外人のプロレスラーでも来るのかと思って、

よく読んでみたら、それがストリップ劇場の広告ビラなのよ。レズとかレスとかいう、あの、女が女を責めるショーなのよ。今、ストリップじゃ、あれが全盛らしいわね。お客さんが言っていたわ。

やっぱり、女の方が、女のツボをよく心得てるから、こつてりと責めるらしいのね。え

え、私だって、その気になりや、ネチネチと女の子を責めますわよ。でも、やっぱり、私には殿方の方が、相手には、いいかもしれないわね。どうかしら？

私のお店を暫く手伝ってた子がね、二十三とか言っていたけど、お座敷ショーで責め役をしてたんだって。口や手や足の身体を使うの



と、道具を使うのと二通りあるらしいのね。いろいろと話してたけど、やはり、見物のお客が顔を押しつけるように見ると、実演やっても、興奮するって言ってたわ。

やっぱり、ショーに出演する方が魅力があるらしいのね。うちのお店を暫く手伝ってたけど、十日ばかりで、また、ショーの方へ帰っていったしまったわ。そうそう、奇譚クラブも愛読してるって言ってたわ。

あら、お話が横道へばかり、それじゃって、ご免遊ばせ。その秘密クラブのことでしたわね。でも、お断わりしておきますけど、そんな大ゲサなもんじゃないんですよ。

先日の、そら、いやにムシムシした生暖かい晩のことでしたわ。お客さんの中で、そんなことが好きな人がいましたネ。ハイ、その見ることがなんですよ。話が、そんなところへゆきましてネ。これから、マダムを面白い所へ連れて行ってやるって、言うんですよ。

それで、お店を中途にして、出かけたんはいいんですけど、その行った先が、私の知っている例の男のクラブじゃありませんか。

表面は会員制でキークラブみたいになってるらしいんですけど、こんなところでSMショーをやってるんですわね。驚きましたわ。

奇クにも載ってましたわね。ローズ秋山とか忍耐子の残酷劇とかいうストリップ。ごらんになりました？ 私じゃ、見たことはないんですけど相当、はやってるそうね。

その晩、見ましたのは、やっぱり女を縄で縛っておいて叩いたり殴ったりしたあとで、道具なんか使っていたぶるんだけど、お芝居だとわかっていても、私、興奮したわ。

ええ、女のお客って、私一人ですよ。だから、隅で小さくなってたけど、その連れていってくれた人が、「マダム、どうだ？」って一々聞くものだから、思いつきり、太股を抓ってやったのよ。さあ、何回ぐらい抓ってやったかしら。でもネ、私がかんなこと、好きだからかも知れないけど、こう、なんだか身体中がムズムズしてくるくらいの、熱演ぶりだったわ。

やってるのはって？ それは私の知らない子だけど、丸顔の小柄で、まだあどけない感じの若い女の子でそれが、よく仕込まれてるのか、実





際に、そんなことが好きなのか責められて、物凄く悦ぶのよ。それがね、そんなに大げさじゃないんだけど、本当に喜んでるって風ね。

ええ、見物の方は椅子席で暗くしてあるのよ。下はカーペットを敷いてあるんだけど、舞台にしているところは、臨時に台を置いて高くしてあって、真上からライトを照らしてあるので、それは、それは、よく見えるのよ。

女の私でも、あれだけ胸が熱くなるんだから、男のお客さんは喜ぶ筈ね。

そうね、浣腸とかはなかったけど、コケシとかパイプとかはあったわ。私もね、あれから、夢の中で、あんなにして、責められてる場面を見て、さめてから、びっくりしたわ。なんだかさめてからも、甘い感じが残ってるのよ。自分も見物人の見ている前で、あんなにして責めら

れたっていう気持が、あるのかも知れないわ。

そうなの。椅子席には十人ぐらい、いてたけど、私しゃ一番うしろにいてたし、それに凄く暗いでしょ。だから、見つからなかったわ。見つかって、ゲストで出演しろって、言われたら、私、酔ってたから、フラフラと裸になって、出ていったかも知れないわ。

そりゃネ、責めと云ったって、天井から吊ったり、柱に宙縛りにしたりするのは、なかったわよ。そのかわり、殆どがセックス責めばかり。それに、クライマックスは、やっぱり本番のシロクロなのよ。でも、お客には、責めの方が受けてみたいよ。みんなが、乗りだして見てたもの。

それが、本番になった途端、腰を下ろして腕組みなんかしてるのよ。アレ、やっぱり、男の人って、嫉いてるのかしらネ。

そうね、私が行った時のお客って、みんな大人しかったわ。声をかけたり手を出したりする人は、一人もいなかったわ。只、黙って見てるって感じネ。会員制だったら、もっとお客の飛び入りなんかあって、わっと騒いだりしたら、面白いと思うんだけど、どうかしら。行きすぎかもね。

(おわり)



カット・紫葉円仁良

お目見得

そうこうする内に、玄関のホールのほうが騒がしくなり、緊張感が小波のように伝わってきて、とうとう岩崎親分の到着が知らされた。

親分位の大物になると、どこへ出歩くのも只一人という訳にはゆかず、普通は二、三人が蔭のように連れ添っているのである。今日は、眉のぐっと迫った、みるからに兇暴そうな用心棒が二人、つき従っている。

権田は、すっ飛ばようにエレベーターのところで出迎えると、

「どうも、すっかり遅くなりやして申し訳ありません。スケを連れてきましたので、見てやって頂きてえんで……」

親分は返事もせずじろりと権田に一べつをくれただけで履物を蹴とばすようにし、とつつきにある洋間に入って、すぐに酒の支度を命じる。

どんな種類の会合だったかは、わからないが、親分の気嫌がよろしくないことは、ただそれだけのことで皆に、よく分かるのだ。

連載・S大河小説

パロディ

花

と

蛇

山光

純

お伴の用心棒が、
「組長に挨拶をさせな。すぐ、ここへ連れてくるんだ」

高級な洋酒が並び、一同が口をつけたところへ、ドアがノックされ、すっかり緊張してこわ張った顔つきの朱美が現われた。

「ちえっ！ なんでえ、……こんな奴か」

と、間髪を入れず一人が、はきだすように言ったので、権田は、すっかり慌てた。

「と、とんでもない」

朱美に続いて桂子が視線を伏せたまま現われると、それでも流石に取巻きの間から、

「ほうー」

という溜息のようなものが、もれた。朱美は固い表情のまま、型通り、

「岩崎親分、ごぶさたをしております。後の皆さんも、どうかよろしくお願い申し上げます。あたいは朱美。このお嬢さんの飼育係りですの」

飼育係りなんていう変な呼名は勿論、男たちには聞きなれないもので、一同は怪訝な面白くもなさそうな表情で、トウモロコシのような朱美の髪と、桂子の美しく粧われた漆黒の髪を見較べるのである。

「飼育係り？」

「ええ、つまり、この子の取り扱い方を一通り皆さんに知って貰わなくっちゃと思って、森田組から——」

「たかが女一足の扱い方くらい、教えてもらわなくたっていいぜ——」

「いえ、なに……」

と朱美は口ごもりつつ、いかにも慌てた様子である。

「岩崎親分さん……この子を覚えて頂いていくかしら……若くて、この通りピチピチしているし、それに可愛い顔をしてるでしょ。皆さんに可愛がられて、きつといいペットにな

りますワ。ええ、ちゃんと行儀作法も一通り仕込んでありますから、きつと、お気に召すはずよ。ええ、きつと——」

ヤクザ達は、朱美の言っていることなんかまるで聞いていなかった。

胸の深くえぐられた超ミニのワンピースから、すらりと伸びた脚線美。胸の辺りの布が窮屈すぎる位パンと張った隆起にジロジロと視線を当て、いかにも娘々した美貌を撫でまわすように検査するのだ。

「おまえ、名は何というんや？ 年は、いくつか、言うてみい」

はじめて口をはさんだ岩崎親分の野太い声には、やはり不気嫌な、面白くもなさそうな響きが露骨だった。

それを聞く桂子は、蒼白になった可愛い顔をビクリと慄わせ、ルージュを塗った唇を、ひくひくさせる。

「それぞれ、親分さんが、あんなに仰言っ下さってるじゃないの。さあ、桂子、早くお答えするのよ」

朱美は面目を保とうと必死の様子である。低い鼻の頭に冷汗をかいている。

「け、けいこ、といいますの……は、はたちになったばかりですわ……」

「桂子か——若いだけが取柄という女やな。ワシは、あの静子たら言う、色っぱさの、したたるような年増が来ると思うてたんやぞ。あの年増を腰の抜けるまで絞って、飽きたら犬の相手させたる積りやったんや。——なんや、まるで小便くさい小娘やないか」

朱美は、口元を醜くひきつらせて、懸命にご気嫌をとり結ばうと、べらべら喋りはじめる。岩崎は、でっぷりと肥り、額には如何にも、ふてぶてしい脂ぎった筋が入っている、尊大で横柄な男である。彼が、いつ癪癪玉を破裂させるかとハラハラする朱美の口調が、つい早口に時に極めて露骨に、卑猥になるのも、やむを得なかった。

「お、親分さん。申しわけないんですけど、お話の静子は今、超大作のエロ映画に、かかりっ切りですの。だから、とりあえず、この桂子を、ご気嫌うかがいに寄越したって訳です。でも、静子は最近、使われ方が激しいしおまけに二十六という年でしょ——この桂子は静子の義理の娘だから、すっかり母親の指導で一人前ですわ。親分さんは桂子のことをよくご存知ないから……」

口をへの字に結んでしまった岩崎に代って権田が助け船を出す。

「まあ、そんなことを言ってるより、脱がすのが手っ取り早いじゃないか。桂子、何をボンヤリしている。脱ぎな」

「……ええ……」

かすかにうなづく仕草をみせた桂子は、極端な怖ろしさに動転しきって、ブルブルとわななきながら、背中のジッパーに後手を伸ばすが、うまくゆかない。指に力が入らず、旨く引手を、つまめないのだ。

男が気分にかけている時に、タイムिंगのよい媚態を見せるのが絶対に必要であることを、これまで何度も軀に叩き込まれてきた彼女は、周囲からの刺すような視線を感じ忽ち耳朶を赫く染めるのである。

「……ねえ、朱美さん……」

半ばヤケクソのようになった朱美は、房々とした、うなじの黒髪をかきわけ、ジッパーのつまみを見つめるなり、一気に腰まで引き下げたのだ。

自然にパツクリと割れるワンピースの下の衣装をみて、男たちの興味が一度に湧き起るのが分かった。

桂子は、奇怪に工夫された乳バンドで胸の隆起を締め上げられていた。

美しい容貌から受ける清純な感じとは、う

らはらに、いかにも若さに充ち張った裸身に喘みついていいる真黒な拘束帯が、それを始めて見る男共に、灼けつくようなアブチックな印象を与えた。

支えるもののないワンピースが、はらりと足元に落ちると、禁断の下半身には、さらに異様な黒皮革のT字帯がガッチリと柔肌に喰いこんでいるのだ。

T字帯がウエストのくびれを一巻きし、可愛い臍の下から強かに引き下げられ、股間をくぐって尻に喰い込んだ端が、臀部の少し上で留められている。真黒い、おどましくも倒錯的な枷である。

両の胸乳は、丸いリングで、くつきりと強調されて前に突き出し、加虐者の暴力の行使を待って、ただあえいでいる様が、こよなく哀れであった。乳房の頂上に、淡いピンクの乳首が、ぼちちりと火を灯している。

岩崎は、外出時に手離したことの無い太いステッキの象牙の握りに顎をのせたまま、
「ふん、年の割りに、ええカラダや」

それは彼にとって最大の、ほめ言葉のようだが、親分にそう言わせるために、特に千代が作らせた拘束具は、お目見得の際の奇抜さをねらったものであるが、これを桂子に装着

させる時の、朱美の容赦のない締め込み方も充分にプラスしたといわなければなるまい。

ウエストを存分に細くし、バストを誇張させて突き出させるのに、桂子の柔らかい美肉は、いつてみれば細工が、しやすいのだ。入浴をし、丹念に手入れされた肌はミルク色に滑らかに光り、たわなに充ち張った感じだ。

応接セットのある床に、じかに正座して、一度、深深と頭を垂れた桂子は、こぼれるような微笑を浮かべ、ちょうどファッションモデルのように、ゆっくりと衣裳と肉体を見せるため、ソファの間を、縫いあるきはじめるのだった。

そのセクシーな姿態を目で追う男たちをかきくどくように、朱美は懸命に喋っていた。
「どうでしょ。これ位の女はザラにいるなんて言う前に、はるばる遠くからやってきたこの女が、皆さんを、どんなに楽しませるかを考えて頂きたいの。つまり……」

「つまり、抱かせるのかよ」と用心棒の半畳が入る。

「勿論よ。何時だって、何だって、何回だってお相手させるわよ。皆さん方も、やたらムシャクシャすることがあるでしょう、そんな時に、お好きなように抱けばいいのよ。ち

ちゃんと、満足させるように仕込んでありますからね——おまけに、その辺の商売女なんかと違って、ぜんぜん骨惜しみ、したりはしませんからね。その度にタイミングを合わせてたつぷりと哭いちゃうんだから」

「あいにくと、遣り手婆アの口車に乗るような俺たちじゃねえんだ」

からかわれているとも分らず、カッとなつてしまった朱美は、

「だったら、すぐに素っ裸にさせるから口あけに試してみることね。これだけの若さで、美人で、純情で、その癖、男相手のテクニクは、その体で覚えこんでるんだから、抜群よ。さあ桂子、何をオロオロしてるんだい。こっちへ来るのよ」

満座の注視をあびている桂子は、白々と輝く剃きだしの臀部をモクモクとゆすりながらいやにソロソロと、朱美のほうへ、もどつてゆく。柔らかく弾んでいる、すべすべの腹部の上向きの臍が、息苦しさに耐えているかのように、しきりに上下している。どこもかしこも、たおやかな曲線を描いている生々しい肉体である。

長い睫毛の下の明眸は、朱美のあまりに非情な説明が飛び出すたびに、耐えようもなく

時々、フト閉じられる。

親分の気嫌が良くないことが、桂子にとっては、何という不運なことだったろう。お目見得の挨拶も、ろくに済まない内から、森田邸にいた頃より、もっと非人間的な扱いが彼女に加えられてくる予感が強い。

「それにしても、その衣裳は変わつてて仲々いいじゃねえか。何で、そんなスタイルにさせておくんだ」

「なにさ、分かつてるくせに……にもお客様に挨拶させるのに下着もつけていないなんて失礼じゃないですか。おまけに——」

朱美の紹介の仕方もあることながら、桂子の美肉に喰い入っている拘束バンドは、男たちの彼女を見る目に異様な輝きを与えつづけているらしい。

仮に、彼女が拘束されない全裸の姿で彼らの前に現われれば、森田邸の様子などを知らない岩崎組の連中には、桂子は精々ブルーフィルム of 女役か、より単純な手合いには、組長の新しい妾くらい第一印象しか与えない可能性はあったろう。だが、いきなり黒革バンドに緊めつけられて登場すると、あまりサドっ気のない男でも、普通のヌード女とは違った異様な重苦しさのようものを、感じる

はずである。

よく三文SM雑誌に類似のカラーグラビアが登場するが、爾来ニセモノというのは何と鼻白ませる存在なのだろう。千代が仮にそのアイデアを頂いたとしても、現実桂子にそれを着けさせたことで、千代の企みは、完全に本物になったといえよう。

朱美は、森田組の面目がかかっているような口調で、懸命だ。

「この子はね、単なる娼婦だなんて考えてもらっちゃ、とんでもない間違いよ。あたい達は向こうでセックス奴隷なんて呼んでいたんだけど、つまりどんな使い方をしてもいいわけよ……お客人の接待に使うのも、お座敷のショーやフィルムに出演させるのもよし。特技といったらセックスのことと、縛り浣腸くらいしかないけれど、着るものなど一切いらないし、食べ物だって残飯をあてがっておくだけでいいのよ。……あたい、こちらへ来る間に考えていたんだけど、一通りお馴染みになるまでベッドへ皮革で繋いでおけばいいと思うの。ただ一つだけは呉々も注意してちょうだい。どんなことがあっても、この女を逃がしたり、サツヘ知れたりするようなことだけは……」

イメージギャラリー 『奥（こしいれ）入』 岡 たかし



「ご念にはおよばねえよ。何か？ 手前、この岩崎組が——」

「いいえ、と、飛んでもない」

「それだけ喋くりやがったら、もういいだろう。こっちで拵えた、あの大仕掛な檻は、もう見たじゃねえか。じゃ、組長、何か？」

朱美と若い者たちの、やりとりを、むっつりした表情で聞き流していた岩崎は、ようやくステッキの握りから顎を放し、

「来な」

と、桂子に、顎をしゃくる。

オゾオゾとした可憐な表情で近づく半裸女

から、むっと女の匂いが吹きつけてくる。

「桂子か……」

といいつつ、平素は護身用に使っている太いステッキを、やおら取り直し、異様に、ひしゃがれて飛び出している乳房を突つくようにする。石突きで、桜いろに羞じらっている乳量を、ちょんちょんと、くすぐり、果ては腋の下のほうに延びている革ベルトの間にステッキを、さしこもうとするのだ。

だが、みっちり和白肌を締めつけている拘束具には、ステッキの入り込む余裕はない。しかし、岩崎は忽ち弱所をみつけた。

やはりステッキで桂子の肩を押さえ、上半身を傾ける恰好にさせると、乳房の谷間が目の位置にくる。

岩崎は、豊満に張りだしている滑らかな胸の谷間に、太身のステッキを、やや苦心して押しこむと、ぐいとばかり、握りを右にこじ上げたのだ。

「あ、あっ！ う……」

と身悶えて黒髪を振る女を見て、ニヤッと片頬をゆるめた彼は、二度、三度と繰り返して呻かせた後、今度はステッキの先を下半身に向ける。

チチチ……と家畜を追うように舌を鳴らし

て、すらりと見事な脚を開かせ、しばらく内腿の得も言われぬ曲線を、こすり上げる。

それから今度はステッキを逆に持ちかえたかと思うと、重く大きい象牙の握りで、まともにT字帯の中心部を、どんと突ついたのである。

静子夫人の体当たりのお色気サービスにヤニ下がった時の岩崎とは似ても似つかぬ尊大な態度で、ほんの気まぐれにやった事だったが、その瞬間、桂子が白い喉をのけぞらせて上げた悲鳴は、人間のメスだけが発することのできる、あまりに、はしたなく生々しい悲鳴であった。

「ひいっ」とか「ぐうっ」とか「ああっ」とか、下手なSM作家の立てさせる美女の叫びのような陳腐なものではなく、こういう種類の呻き声は、男なら脇腹に匕首を、ぶち込まれた時しか発さず、女の場合は背骨にまで通れというような、初めての洗礼を受けた、処女くらいでは、あるまいか。

だが、せいぜいステッキで皮革ごしに叩かれた程度である。大声ではなかったが、脳髓を、かき廻されたような呻きは、大げさではあるまいか。

「ふん、何でえ。突き破られたわけでもある

めえ。この女！」

と権田が、ののしったのは、男たちの意見を代表するものであった。

「違うのよ、権田さん。実は、この衣裳は、いろいろと使い方があってね。これから、それを皆さんに一通り説明しようと思っているところなの。首輪や足輪もセットになっている。て細い鎖でつなげるようになってるのよ」

「もうお前のお喋りは、いいぜ。本人に、そのあたりのところを後で、じっくり聞かせて貰うことにするから、お前はもう黙ってな」

朱美を頭ごなしに叱りつけるように用心棒の一人がわめくと、流石に朱美もすっかり氣押されてしまい、口惜しそうに口をつぐんでしまう。

「さて、桂子さんとやら。今も話がでたように、こちらとしては、お前を受け入れるために色々と飛んだお笑い草の大げさな用意をしたんだ。お前の調教師の姐ちゃんが何か、くどくどと喋ってたが、親分や俺たちには、お前が、どれほど、いい女なのか、もう一つピョンと来なくて、どうも面白くねえのよ。一つそいつを証明して見せな。まず、その邪魔っけなやつを取って素っ裸になって貰おうか」

やがては、そういう命令を受けることを覚

悟していたにせよ、拘束具に僅かに心の救いを求めていた桂子は、一段と異様な熱気を帯びだした全員の視線に、慄える睫毛を伏せ、ためらいながら、

「え、ええ。では、ハダカに……」

強く締めつけられた乳輪を、はずすには、朱美の助けを借りなければならなかった。ポチリ——と小さな音がして、背中中の尾錠がはずれると、奇妙な乳バンドは足元に落ちる。

とても二十歳のものとも思えない、たわわに張り出した胸乳はブルンと本来の形に戻ってツンと上を向いた乳首の、なだらかな曲線をえがき出して一同の卑猥な注視を集める。

羞かしさと侮蔑に必死に耐えている彼女は頬を染め、唇をヒクヒクさせている。

「ほほう。パール茜」なみだ。……だが、お前は、だいぶ、男に揉まれているな？」

桂子は知らなかったが、パール茜というのは関西でも有名なストリップパーで、身持ちがよいのでも知られていた。

「ご、ごめんなさい。あ、あたし、無理矢理に、いろんな男の人に……」

「そうか、森田組の連中も仲々やるじゃねえか。俺たちも、奴等に負けねえくらい穢らわしいことを、お前にさせるぜ。覚悟してな」

イメージギャラリー 『ある時間』 三鷹 I・O



「……」
「女が一疋、送られてくるといふから、どんなスレッカラシかと思ってたが、案外だな。だが、お前には彫り物がねえようだ。一つ、うんとエロなのを彫ってやろうか」

ここで朱美が慌てて口をはさみかけたが、お前は黙っている、と一喝されてしまう。
「そうだな、白粉彫りがいいだろう。それでお前が金輪際、まともな暮しができなくなるような図柄を考えてやろう」

酒を飲んだり、入浴したり、いきんだりすると、白粉彫りされた肌には鮮かな絵が浮かびあがる。平素は、よほど注意しても、この種の刺青は分らないという。

「あたし……あたし……皆さんが、そうお望みになるのですたら……でも、イレズミなんて、もう怖ろしくて……桂子を、めっちゃくちゃに、なさるおつもりですのね」

「さあ、それはお前次第だな。別に取って喰おうというんじゃないし、一通り用済みになれば、組の物好きな若い奴と世帯を持つことだって夢じゃないぜ」

と、ヤクザ共は口々に好き勝手なことを並べたのである。

さて、問題は下半身の露出であった。男達の質問に、蚊のなくような声で切れ切りに答えながら、ここまで従順にふるまってきた桂子が、次の手順として尻の上にあるT字帯の尾錠を朱美がはずそうとすると、懸命に首を振ってイヤイヤという素振りをみせるのである。

「おや、変な女だな。たった今、素っ裸になると自分で言ったじゃねえか。勿体をつけるんじゃないぞ」

桂子は、今テラテラと頬を真赤にし、瞳の

中まで赫く染まりながら、差しのべる朱美の手を、臀部を左右にくねらして除けようとするのである。

「桂子。どうしたのヨ？ フフフ……何なの羞かしいの？ あたいに言っでござらん」

「だって、だって……朱美さん、よく知ってるくせに……」

といいつつ、桂子は朱美の耳に唇を寄せ、困惑しきった美しい眉をひそめるのである。

朱美の耳もとで小声でしきりに哀願している桂子の姿態は、見ようによっては随分と滑稽でもある。人魚のように白々と剥きだした上半身。そいだように恰好のよい脚線をすっかりさらけだしておきながら、男共が等しく觀賞したがっている両脚の付け根のあたりにガッチリと黒いT字帯を喰いこませているのである。

とうとう権田がソファから立ち上がって実行力行使に出る。やにわに、きれいにセットされた大きなウエーブをつけた黒髪をガッシリと握み、ぐいと引き据え、

「何をボソボソやってやがる。さあ、身体のあるいたけを組長に見て頂くんのだ」

といいつつ、革帯の中央の辺りを手刀で、とんと叩いたのだ。

「——！」

またしても桂子は、前後を忘れたようなメス犬の悲鳴をあげる。

先に岩崎が、ステッキで突ついた時と同じ呻き方である。それで、一同は桂子と朱美だけが知っている何らかの秘密が、T字帯の黒いベルトの下にかくされていることを悟ったようだ。

「さあて面白くなってきた。ここに一体どんな細工があるんだ？ ごたくを並べずに、その邪魔っけなものを取っちまいな」

権田と、惑乱している裸の令嬢の取り組みでは、猫と鼠のように問題にならない。

権田は異様な目付きで鼻孔を大きくふくらませ、桂子の片手を後ろに、ねじ上げる。

彼女は喉で含み鳴きながら、ブルンと両乳を振り、「あっあっ……！」と、舌足らずに叫ぶ。

汗か涙かのどちらかがパラパラと床に散り、女の匂いが、むうんと鼻を搏つ。乳白色の女体は逆らう術もなく、両脚を上げたポーズで、岩崎のすぐ前に蠱惑的な肉体を引き据えられてしまった。

権田は焦っているのか、尾錠の位置が分かっているが、仲々T字帯が、はずれない。卑しい笑いを一杯に浮かべた朱美が、さり

げなく指を伸ばして留め金をはずしてやる。パチリ——と音がして、ほとんど弾けるように最後の腰のものが、はずれた。

○

「ふむ——」

流石の岩崎も、何をいっていいか分からならしい。

ステッキや掌で、T字帯の中心を突つかれた時、裸女が強い反応をみせたのも当然であった。しげしげと観察する岩崎たちには、なぜ彼女が男達の間を一巡する時、あんなにソロソロと歩かねばならなかったか、誇張されたようなモンローウォークにならなければならなかったかが、一遍に分かった。

最後の最後まで逡巡し、哀願し、火のような羞恥に悶えたかも分かった。——こういう姿を初対面の男達に一旦みせてしまうと、もう彼等は桂子に、どんな振舞いに及ぶ時も、少しのためらいをもみせなくなってしまいうに違いない。

両脚を上げて立ち上がった桂子の肉体の……には上からのT字帯の黒皮革の締め込みをするため、先端がようやくのぞいているのみの、責め具が認められたのである。

傍若無人のそれは、不気味な怪物のように

その存在を誇示し、それが数限りない奔放な空想をすることを観察者たちに要求しているようだ。

その責め具を、より一層猛々しく感じせしめるのは、なだらかで温かそうなカーブをえがいている美肌のせいである。極端な対比物の出現によってか、元の令嬢の皮膚は一段と白い輝きを増すかと思われる。

桂子はモミジのように耳朵を染め、瞑目したまま、ただ息を飲んでゐる。閉じた瞼のほしに泪がきらめき、神の裁きを待っている聖処女のようにすら見えた。ぐっと迫った乳房の谷間が濡れて光っている。

「ええ女や、なかなか、ええ」

と岩崎が、うなるように言った。

だが、朱美はあくまで現実的だった。今こそ自分の存在を認めてもらおうとする意図も露わに、

「どうです？ 親分——ちょっとばかり奇抜でしょう。あたいが命じさえすれば、このお嬢さんは、こんなに羞かしい恰好で人前にも出るのよ。そうよ、自分で……。ホホホ……ほんとうは、かなりきついらしいけれど、嫌だなんて言わせはしません。でも、このまま見せているだけじゃ面白くないわね。やらせ

ましようか？」

「何をやらせるんだ。こっちは、どうすればいいんだ？」

「皆さんは、ただそこに坐っているだけで結構よ。見物の人がいる時には、どんなに疲れていても、思いきり楽しんで頂けるように仕込んであるの。今日は大切なお目見得の日なんだから、たっぷりとやるように言い含めてありますわ。ホホ……ほんの座興に、ご覧遊ばせ、ホホホ……」

何ともいいようなない程、下品な不快な笑い方をする朱美の不器量な顔をみると、岩崎は忽ち、元の不気嫌さに戻り「なかなか、ええ女や」といってしまったことが癪にさわってきたのか、大きく舌打ちし、

「その売女、ほんなら思いきり、やって見せろ。ここで見てたる」

朱美が饒舌をふるっている間、素っ裸の桂子は明らかに動揺しはじめていた。乳白色のダッチワイフのようだった姿勢がくずれ、いかにも女っぽいナヨナヨとした身のくねらせ方で、喋っている朱美のほうに抗議の合図を送っている様子である。

黒い拘束具は相当、強く美肉を締めつけていたのだろう、喉元から盛り上がっている感

じの胸乳やウエストの周りには赤い跡がついている。無意識に桂子が、乳房のあたりを撫でると、柔らかな半球は微妙に形を変えた。

「早よやれ、言うてるやないか——」

声と同時に岩崎のステッキが風を切った。

ピシヤリ——

朱美の方に哀願するような視線を送っていた裸女の双臀が、したたか打ち据えられたのである。

岩崎に相当の嗜虐癖があるのは、子分ばかりか朱美も知っていたが、今の場合は、その性癖ばかりではあるまい。美しい女の体についている生々しい縛り跡が、急に彼の中にある男性一般の激情を、たかぶらせたにちがいなかった。

皓い糸切歯をみせて、「くうっ！」と、その痛みに耐える桂子は、身悶えするように目を閉じたが、やがて

「ご、ごめんなさい。……あまりに、はしたないと思って。でも、お笑いになったりしないで下さいネ……」

と澄んだ声で言い、けなげな微笑みをつくってみせる。白い頬に泪が伝わっており、彼女は、それを指で拭う。それから、たおやかに白い右手を、ゆっくりと降ろしていった。

イメージギャラリー 『皮革のバラード』 黒田 縛



白魚のような指先を、わが身を苛んでいる
責め具の端にかけながら、眩しそうな瞳を岩
崎に向け、気弱に、
「あたくし、朱美さんから、こんなことを教

わりましたの。このお道具で、自分で自分を
いじめる……いえ、楽しみますの。羞かしい
ワ。でも、この頃はカラダの感覚が、すっか
りするどくなつて、すごく感じるのです。は

じめてのご挨拶に、桂子の取り乱したところ
を見ていただけましたか？」

「大した芸でもねえだろうが、組長もやれと
いってなさるんだ。時間潰し位にやなるだろ
う」

桂子は一時にこみ上げてくる涙を、そっと
押さえ、含み泣くような声で、

「立ったままですと、なかなか気持が高ぶっ
てきませんの……すわってもよろしくて？」

「好きにしな。じっくり見てやるぜ」

丸裸の令嬢は、脚をひらいたまま、ゆっく
りと、ぼってりした双臀を床に着ける。する
と見物人が、とっくりと見ることできるポ
ーズが自然にでき上がるのだ。弱々しく睫毛
を伏せたままの桂子は湯上がりの時のように
ぼうと赫らんだ丸い肩をコクリと動かしたか
と思うと、瞠目した若い用心棒のすぐ前で、
ゆるゆると自らを苛みはじめたのである。

女の肉体の若さは、ピンと張った美しさ
と同義である。隆盛をきわめているといつても
岩崎組の息の掛かっている女^{スケ}どもの中で、こ
れ程若く、奇麗な肌の女は見当たるまい。化
粧を塗りたて、華美な服装をし、妖しいカク
テル光線の中にいる、年も分からぬホステス
などとは訳が、ちがうのだ。

岩崎親分もステッキに頸をのせ、桂子の仕草を凝視している。ゆるく左右に開いた女の内腿は、すき透るように白く静脈が、はつきりと浮いて見える。

桂子の、見ているだけで眩暈を感じるような、妖しく悩ましげな自虐行為に、取り巻く男たちは息を飲んでいるようであった。

柔肌に向かって、生あるもののように攻めかかる責め具から、キラリと光りながら床に垂れ落ちるものを男たちは見た。時々ピクピクと痙攣する美女を、快げに見下ろしながら権田が、からかいかける。

「お前、いつもそんなものを使ってるんじゃないめえ。男に責めてもらうほうが、よっぽど、いい筈だぜ」

「え、ええ……そうですわ……あたしも、そう思います……」

「そうよ、権田さん。すぐにも、試してみることね。これだけの体してんだから、少々ぐらい手荒く扱ったって構わないわよ」

「お前は黙ってる。なあ、桂子。そんなに、しょっ中、男のおもちゃになっていると、腹が大きくなっちゃうんじゃないのか」

桂子は時に大きくのけぞりながら、艶冶な自虐行為をやすめず、かすかに震えを帯びた

声で、

「で、ですから……そんな時にはピルを……ピルを飲むことになっていきますの……」

無知な男たちは一しきり経口避妊薬のことを聞きだそうとする一方で、次第に呼吸の荒くなってきた桂子に見惚れている。

「しかし、そんな外国製の薬じゃ、お前のカラダがどうにかなっちゃうんじゃないか。日本じゃ、売ってねえんだらう」

「そう、だと思えます。でも、朱美さんが、だいじょうぶだとおっしゃいますし……男の方も、あたくしをお楽しみになりたいでしょう……桂子は奴隷ですもの、どうなってもいいの」

「そうか、いい覚悟だ。こちらも大金を掛けて、お前を歓迎する用意をしてあるんだぜ」
権田はいまにも喰いつきそうな底光りのする目で、脂汗を流している裸女を見る。

「あなた……桂子、おねがいがあるの……」
彼女は瞳の中まで赫くなりながら、すがりつくように男を見上げる。ルージュを引いた唇を半開きにし、媚びる微笑をつくり、

「桂、桂子のオッパイを、捻じ上げるなりなんなりしていただきたいんですけれど……」
笑止なことに、スケコマシで名を売ったのは

ずの権田が思わず首をすくめて親分の方を見た程、美女の誘いはショックだったらしい。だが、流石に岩崎の逆鱗にふれたりすることを怖れたのだろうか「まあ、やめとこう」と一人ごとのように言い、のりだしていた身を引く。

「ダメですの？　じゃ、この次にね。……ねえ、朱美さん、おねがい……」

朱美は、わざと邪剣に、

「おかしいわね。いつもだと、自分でやるくせに。だが、まあ今日は特別よ」

と、丸く弾んでいる、はち切れんばかりの双乳を背後から、両掌で包む。二つの隆起は朱美の掌から、はみ出し、はたきよう巴旦杏のように熟れている。

「皆さん、この子のお乳はね、すごく敏感なの。ここぞという時の泣きどころの一つね」

朱美は心得きったように、桃色にちよっぴり突き出している乳首を、揉みこむように捻り上げる。

桂子は激しく、しかし、あくまで優美に大きくのけぞり、呻きに似た悲鳴を洩らす。

薄紙を震わすように、喉の奥でむせびながら、彼女はひたすらに破滅の淵をめざして突き進む。テラテラと輝く背筋をこんもりと丸

くし、浮かせた臀部がブルブル震えている。
「さあ、桂子。そろそろ、お得意の断末魔をお見せしてもいいよ」

「だまって……もうすぐ、ですから……」

言ったかと思うと、まるでうだり上がったように上気した喉元と、剥身の尻を、それぞれ逆の方向に振り、辛うじて瀬戸際をおさええているという感じである。

だが……次の瞬間、桂子は白い歯をのぞかせて、つんざくような悶え声をあげた。ビクビクと柔軟な美体が躍動し、きれいに揃ったウェーブの髪を、乱すばかりに首が振られた。朱美の言う断末魔であろうか、それは凄まじくも美しい妖しさなのだ。

切れ切れに、何やら悲鳴に近い声で叫ぶ裸女を、啞然とみつめる男たちを朱美は、さも得意気な顔付きをして見まわしていたが、こ

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫が有りますので、未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 出版株式会社へ。
略号「花」 定価五〇〇円(送共)

の若さの、この奇麗な娘が——と、ほとんど信じ難い面持ちの用心棒二人に、胸を張って解説しはじめるのだ。

「この子のカラダは、掻き鳴らせば掻き鳴らすほど音色のよくなる楽器のようなのだ。こんなになつたからって休ませずに、次から次へと追いたてるのがコツよ。さっきは、オッパイを責めたけれど、次は違うよ。どこだと思う?——お尻よ、ホホホ……アヌースというの」

まだ激しく肩で息をしながら、しきりにイヤヤをするように美貌を振る桂子を、せき立てて、朱美は容赦なく裸女のポーズを、かえさせる。

今度は自分の片膝を桂子の腿の下に、ねじ入れ、素早くアヌースを窺う。いつしか物の怪につかれたように全裸の令嬢は、またしても責め具による自虐を始めているのだ。

「まあまあ、すごいこと……」

などと言いながら、朱美はGパンのポケットからガーゼを取り出す。

初対面の男たちの前で浅間しい状態を見られてしまった羞かしさと、再び開始した自虐作用のため、ピンクの濃い霧の中を、さ迷い続ける桂子は、自らの意志を喪失したかのよ

うに瞑目したきりだ。

「感じやすい娘だから、余り方々を同時にやると、ほんとに失神しちゃうかもよ。旨くりードしてやってね。それと、もう一つ、とって置き秘密があるんだ」

今は、すっかり観念した官能美そのものの白い体を、ぐんぐん責め立てながら、朱美は得意気である。

桂子の唇から、別種の悶々の情をそのままに乗せた低いすすり泣きが洩れ、甘く熱く熟しきった体内に、ここを先途と狂う、どうしようもない錯乱の嵐に桂子は、ずたずたに引きさかれそうな懊悩と、それとは、まったく逆な女の軀が持っている底知れない程、幸せなものの方へと、近づきつつある自分を感じているのだろうか。

朱美は、あの鬼源秘蔵の強烈な媚薬を多量に使ったのにちがいない。桂子のこの狂乱ぶりが何よりもそれを証拠立てている。だが、それは朱美と桂子の二人しか知らない秘密である。調教師としての腕前を示す機会があれば、桂子が、もはや、どのように狂おうとも朱美は眉一つ、動かさない自信があった。

——(つづく)——